

32-3

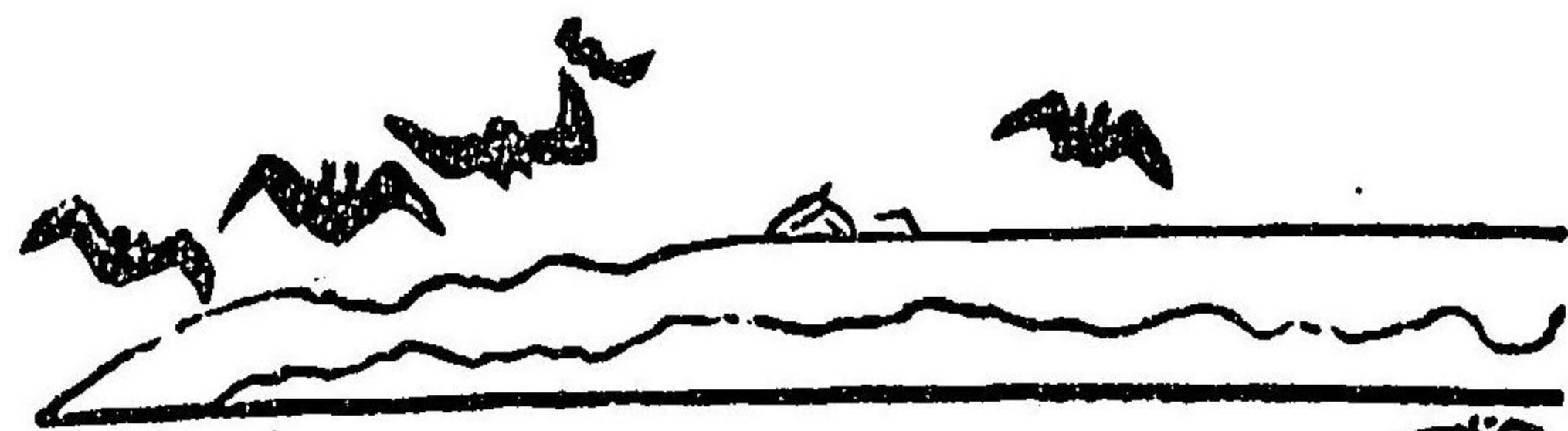
血笑記

アンブレールエフ作
ニ暮あさう譯

明治
41 8 10
内交

32-362

4



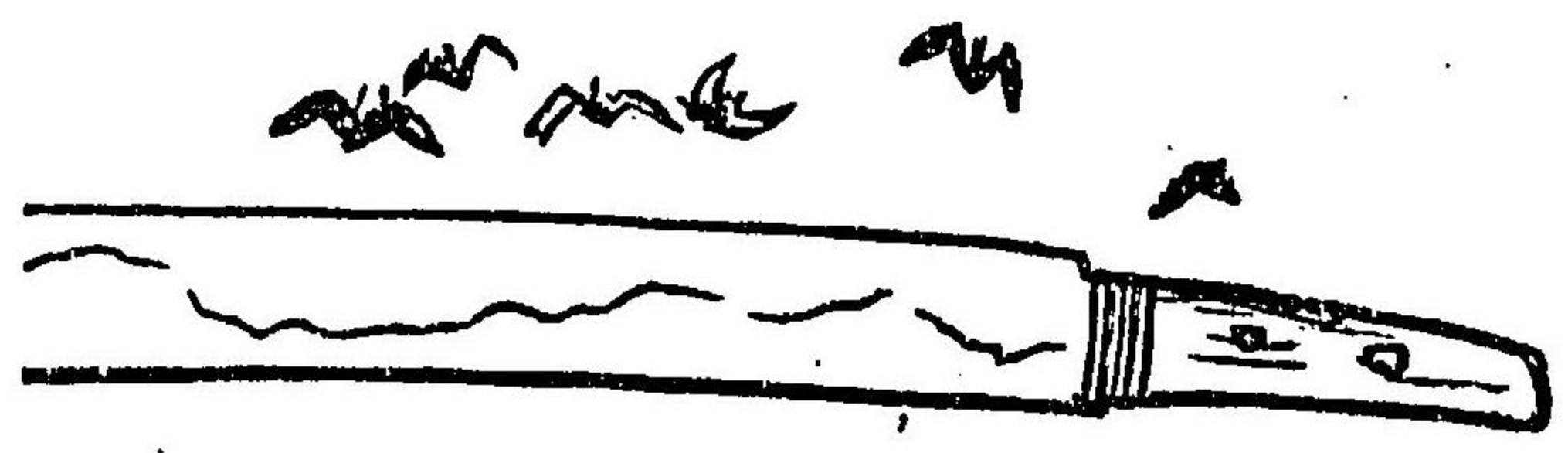
血笑記

(前編、斷篇第二)

二葉亭譯

：物狂ほしさと怖ろしさとだ。
 始めて之を感じたのは某街道を引上げる時であつた。もう十時間も歩き續けて、休憩もせず、歩調も緩めず、倒れる者は棄て、行く。敵は密集團となつて追撃して來るのだ。今附けた足跡も三四時間の後には敵の足跡に踏消されて了はう。暑かつ





た。何度であつたか、四十度、五十度、或は其以上であつたかも知れんが、唯もう不斷に蕩々と底も知れぬ暑さで、いつ涼しくなる目的もない。太陽は大きく、火の燃ゆるやうに、怕ろしげで、或は大地に近寄つて、用捨のない火氣に引包み、焼盡さむとするのかと危ぶまれた。眼を開いておられ、ばこそ。小さく、窄んだ、罌粟粒程の瞳孔が閉ぢた眼瞼の下に陰を求めても、陰はなく、日は薄皮を透して、血紅色の光線を疲れ切つた脳中へ送る。けれども、流石に目を閉ぢてゐれば樂なので、私は長い間、事に寄ると何時間といふ間、目

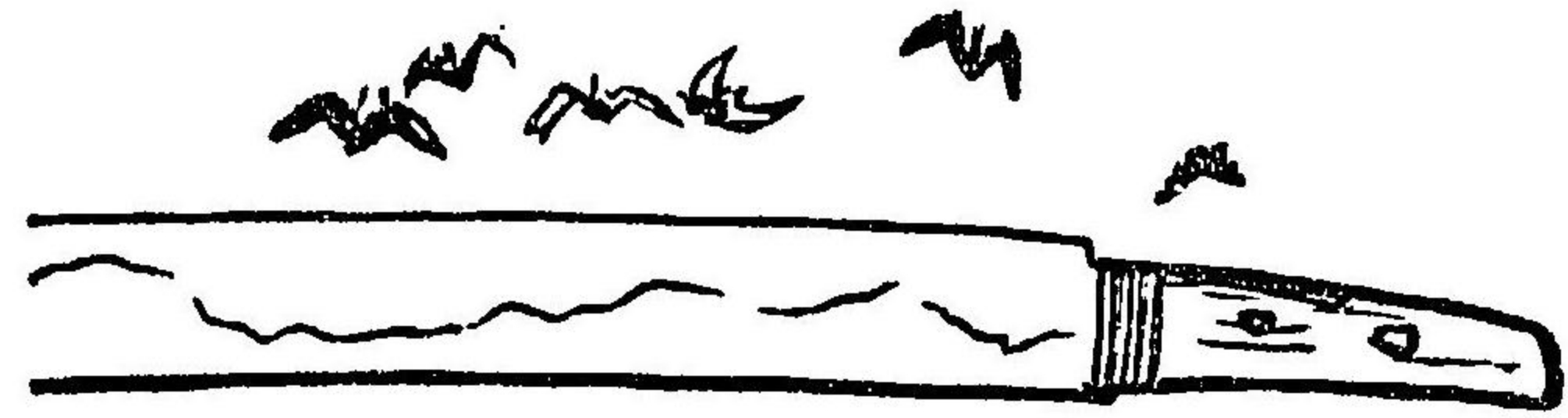
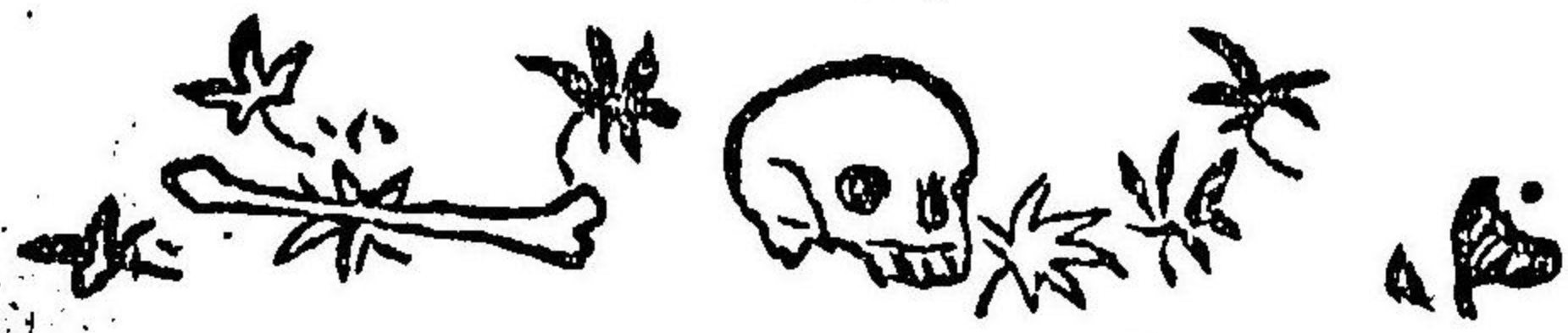


を閉ぢて、前後左右を引上げて行く物音を聴きながら行つた。人馬の重たげな揃はぬ足音、鐵の車輪の小石を引割る音、誰やらの苦し氣な精の盡きた溜息、燥いだ唇を鳴らす乾いた音などが聞える。皆黙つてゐる。啞者の軍の行くやうだ。皆倒れば黙つて倒れる。それに躓いて倒れる者も、黙つて起上つて、顧視もせずに行く。宛で啞者である上に目も耳も聳ひてるやうだ。私も幾度が躓いて倒れたが、其時は我にもなく目を開く——と、目に見える物は、人間離れした嘘らしい、此世が狂つて苦し氣に謔語をいふやうな光景だ。炎ゆるや



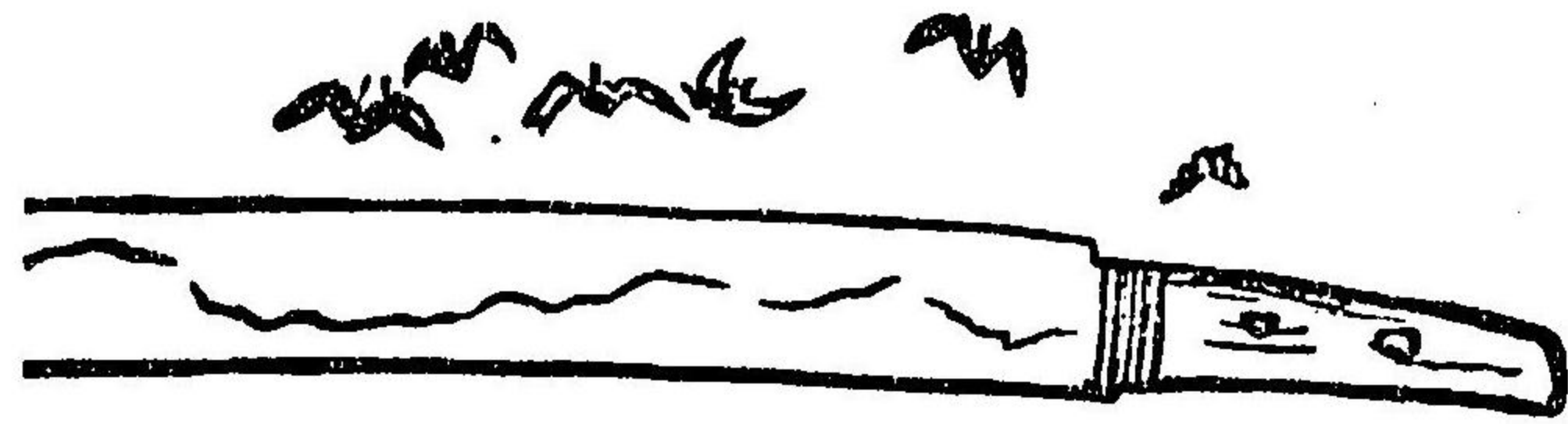


しては洞の上にぶらつくものは首ではなくて、何とも得體の知れぬ、重こいやうな、軽いやうな、圓い不思議な物であつて、どうやら自分の物ではないやうに思はれ、薄氣味悪くなることもある。と、其時、偶然我家が眼の前に浮ぶ。部屋の間で、水色の壁紙の片端が見えて、卓の上には、水の入つた壺が其儘手付ずに埃塗れになつてゐる。これは私の卓で、跋なので、短い方の脚の下には紙を丸めて敷つてある。隣室には、見えぬけれど妻も悴も居るらしい。若し聲が出せたら、大聲出して喚いたかも知れぬ——水色の壁紙の片端に、



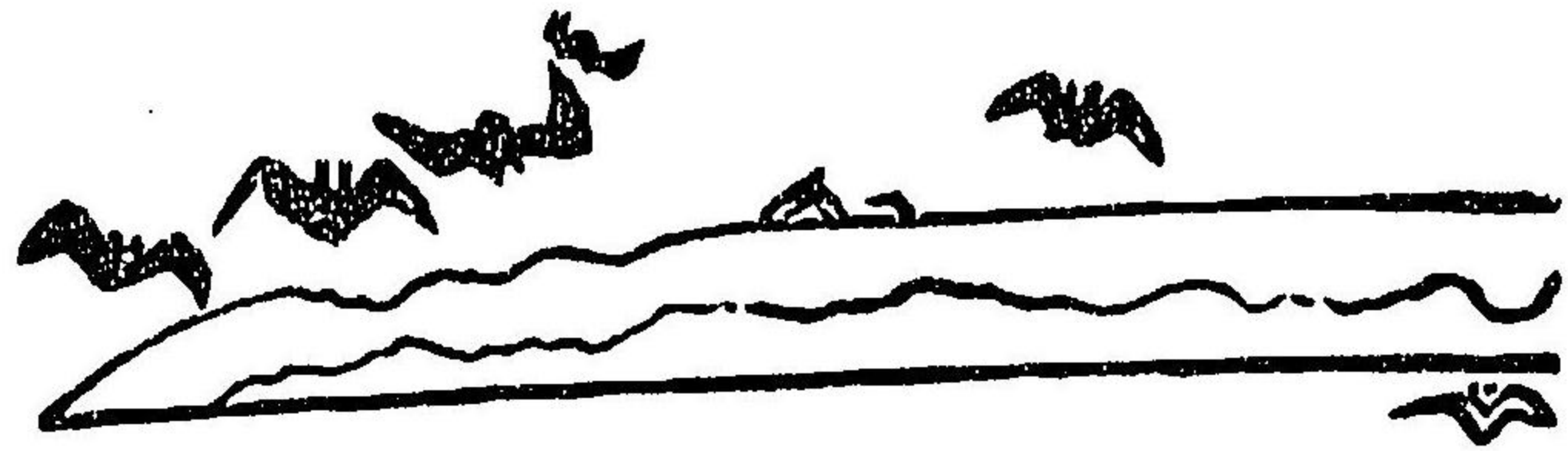
うな空氣が揺れ、湧けさうな石も黙つて搖ぎ、遙か向ふの曲角を曲る人の群も、大砲も、馬も、大地を離れて、音もなく、ジェリーのやうに震ひながら行く所は、生きた物とは見えないで、體は煙の幽靈のやうである。大きな怖ろしげな、ツイ鼻の先に見える太陽が、銃身に金具に光を宿して、小さな、無数の太陽を映出し、その眩しい光が横合からも、足元からも、眼に射込み、白い煙を噴いてピカ／＼と鋭いこと、宛然白熱した銃劍の切先を見るやうだ。焼立て／＼物を枯らさむとする暑熱は、身に沁み、骨に透り、髓に徹して、時と





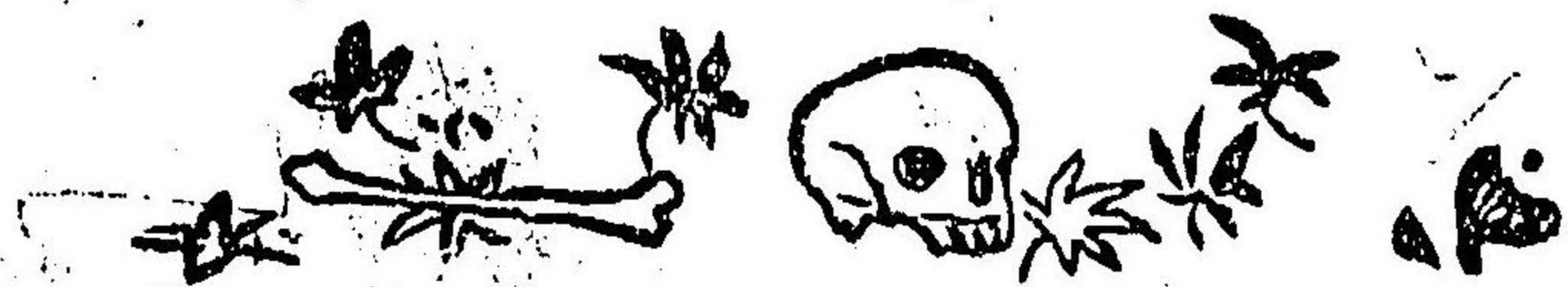
埃塗れの手附かすの塚と、見る所は尋常の、際立つた物ではないけれど、それに其程目を眩かされたのである。

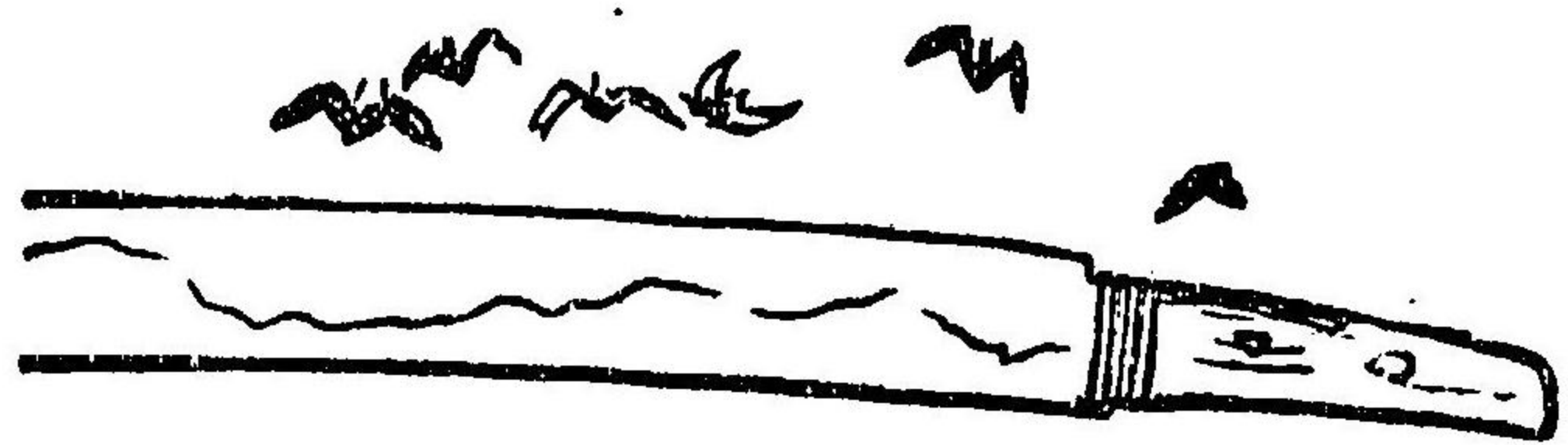
今だに憶えてゐるが、立止まつて兩手を舉げると、トンと誰かに背後から衝飛された。ツカくと前へ出る——と、もう其儘暑いことも草臥れたことも忘れて、惶惶しく、人を押分けて、何方ともなく進んで行つた。際限もない、無言の人の列の間を、右左に赤い炎えさうな頸窩を視て、グタリと下げた熱い銃劔と殆ど擦れく——に大分進んだ時、何を私は爲てゐるので、何處へ此様に急いで



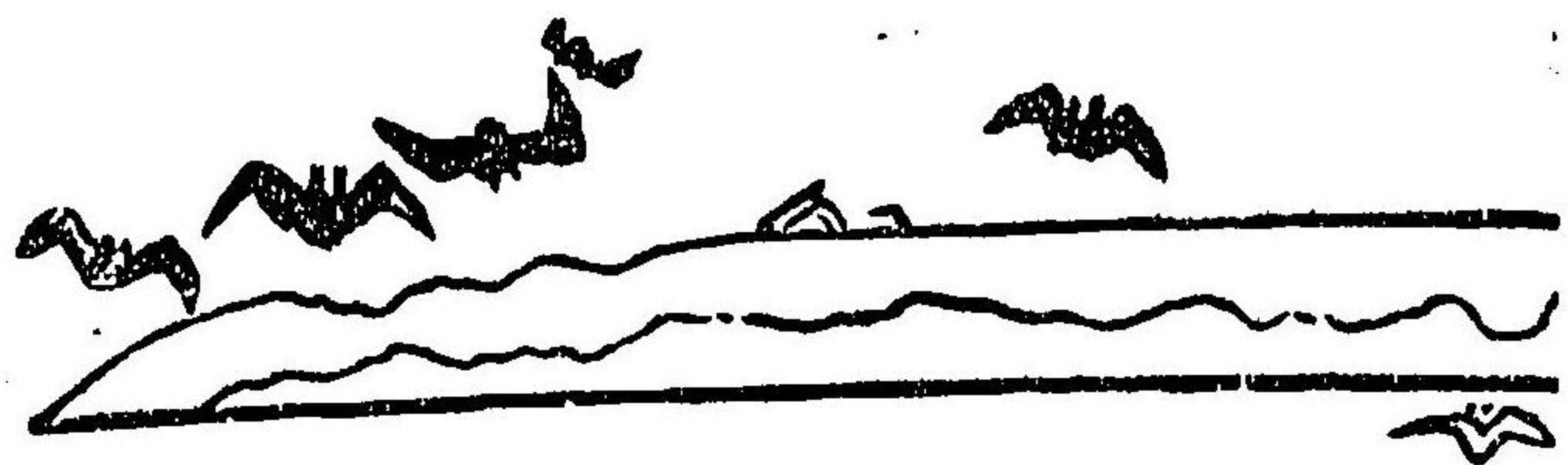
行くのだらうと、立止まつた。で、急いで向直つて、無理無體に列外へ出て、とある窪地を越え、其處の石の上に焦燥と腰を卸した所は、このざらざらの焼石を目的に、これまで藻掻いて来たやうであつた。

其時始めて氣が附いた。日光の惶つく中を、暑さに弱り、へトくに草臥れて、無言でふらふらと行つては倒れる者は、これは皆狂人だ。何處へ行くのか、何で日に照付けられるのか、誰も知らない、誰も何も知つてゐない。胴の上に在るのは首ではなくて、變な氣味の悪い物だ。と見ると一



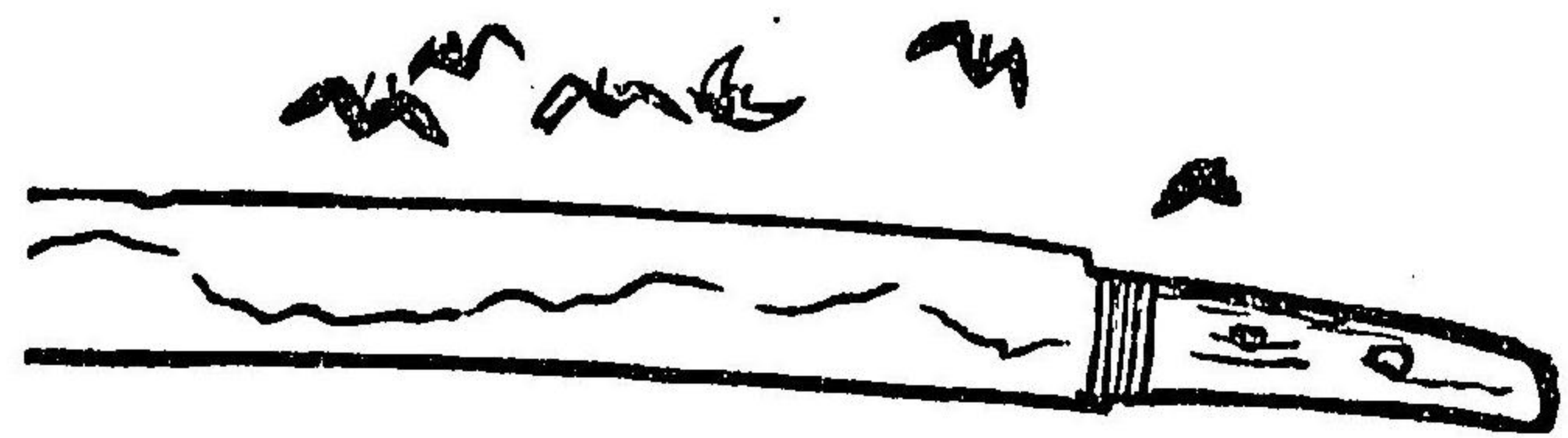


人、矢張り私のやうに、惶惶しく列外へ脱出して
 バタリと倒れる、續いて又一人、又一人、と、
 群がる人の頭の上に馬の首が見える。血走しつた
 物狂ほしい目色をして、齒齧まで露出した所は、
 不気味な奇怪な叫聲を立てゝゐるやうに見えたけ
 れど、其聲が聞えるでもなかつた。首が見えて、
 バタリと倒れると、其處に暫し人だかりがする。
 皆足を駐めて、皺噎れた牙えぬ聲で何やら喚くと
 ドンと一發銃聲が聞えて、又皆黙つて動出して、
 際限もなく續いて行く。私はやがて一時間も石の
 上に腰を掛けてゐたが、其間絶えず人影は眼前を

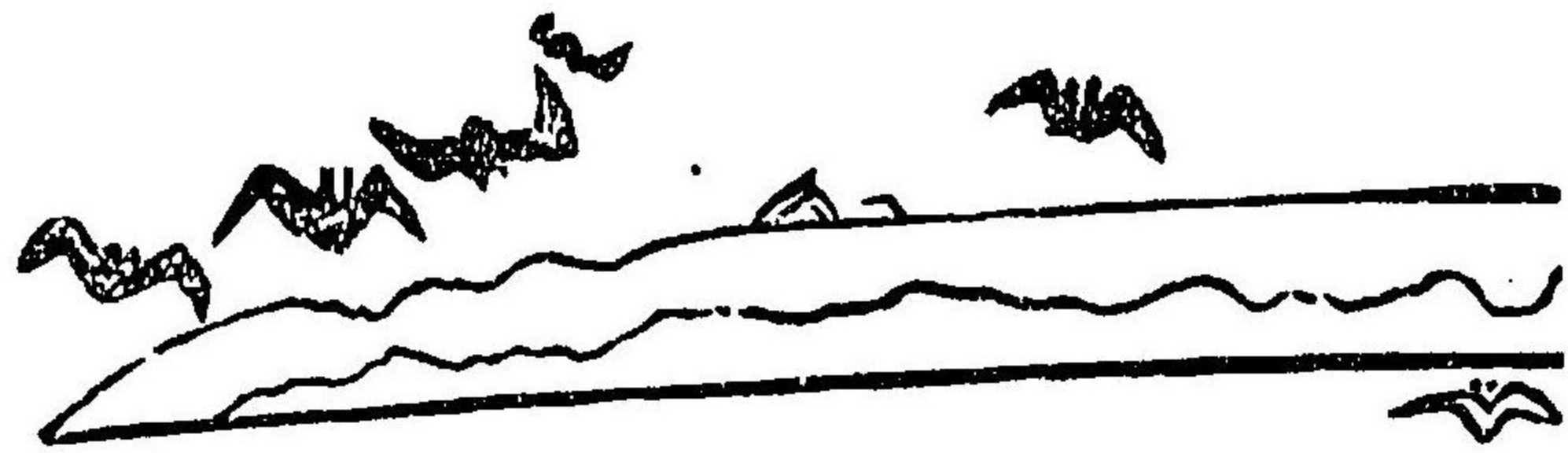


過ぎ行いて、空はゆすれ、地は搖ぎ、遠く幽靈の
 如くに行く隊伍の影は戦くやうに見えた。骨を枯
 さむとする暑さは更に肉に徹つて、瞥りと眼に映
 つた物は、直ぐ忘れて了ふ。眼前を過ぎ行く人影
 は暫くも絶えぬが、過ぎ行く人の誰だかは分らな
 い。一時間程前に此石に腰を掛けてゐたのは私一
 人だつたが、今は周圍に灰色の人が一塊り集まつ
 た。或者は地に伏して動かない。死んでゐるのか
 と思はれる。或者は私のやうに石に腰を掛けて、
 氣脱けしたやうな面をして、通る人を見てゐる。
 銃を持つてゐる者は兵士らしいが、丸裸に近い姿



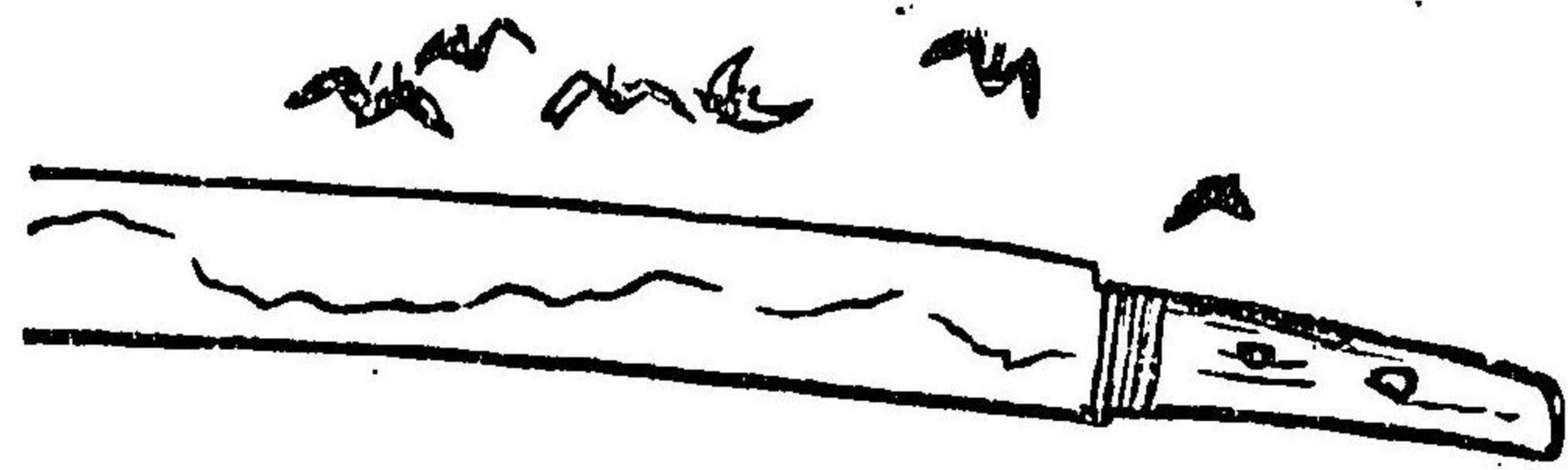


で、蘇枋染めの、見るも厭らしい色合の肌をした者もある。つい其處に誰だか素肌の背を上に向けて寝てゐる。稜立つた熱い石に面を伏せて平氣でゐるさへあるに、仰向けにした掌を見れば白いから、死人のやうであるけれど、背の色は生人のそれの如く赤い。唯燻肉のやうに聊か黄味を帯びてゐるので、此世の人でない事が知れる。私は此死骸の側を退きたかつたが、退く力が無かつたのでふらくししながら、矢張ふらくしと幽霊のやうに行く人の際限もなく續く列を見てゐた。今にも日射病に罹るのは頭の工合でも知れてゐたが、平氣



で其に罹るのを待つてゐた。宛で夢心地で、死といふものは、不思議な綾に絡むだ夢想の街道の立場か何ぞのやうに思はれた。と見ると、連を離れて思切つた體に此方を目蒐けて来る一人の兵がある。其姿がしばし窪みに隠れて、やがて又其を這出して来るのを見れば、危ない足取りで、手も足も頽然となりさうなのを、然うはさせまいと力むのが、もう精一杯の所らしい。正面に私を目蒐けて来るので、苦しい夢にもやもやと腦を閉ぢられさうな中でも、駭然として、「何だ？」

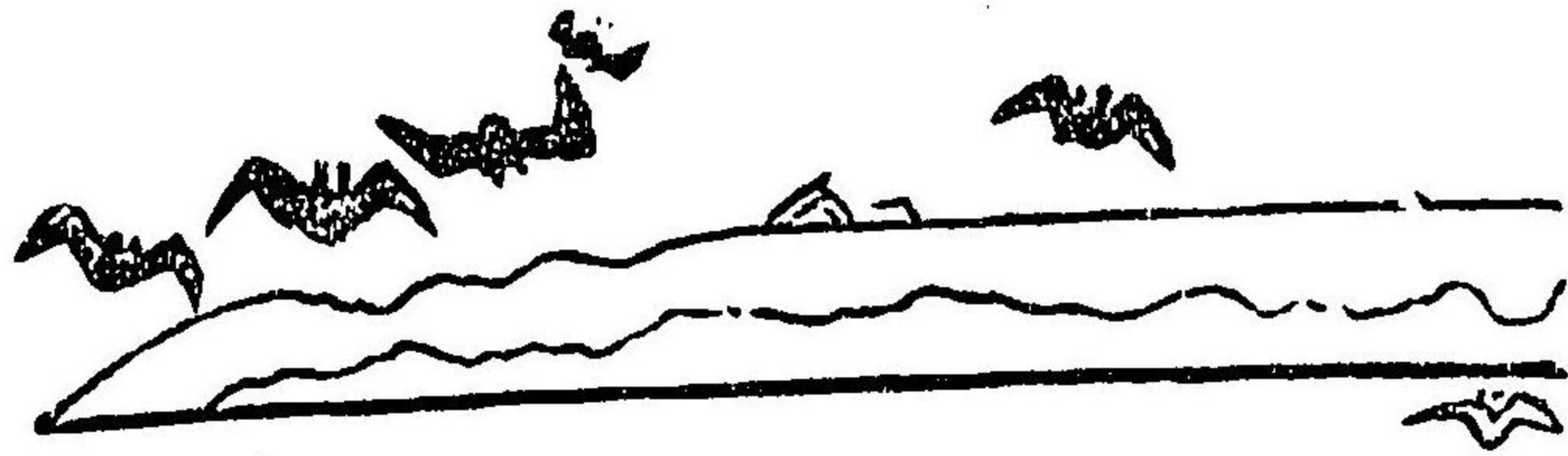




聲を掛けると、兵はビタリと立止まつた。聲の掛るのを待つてゐたのかと思はれる。指むしやの大男で、襟の裂けた服を着て、衝立つてゐる。銃を持つてゐなかつた。ズボンは一ツで支へてゐて、その綻びの切目から白い肌が見えて見える。手足が頹然とだらけるのを、だらけさすまいと氣を張つてゐるけれど、もう其も叶はぬ。一つに寄せた手が直ぐとダラリと左右へ垂れる。

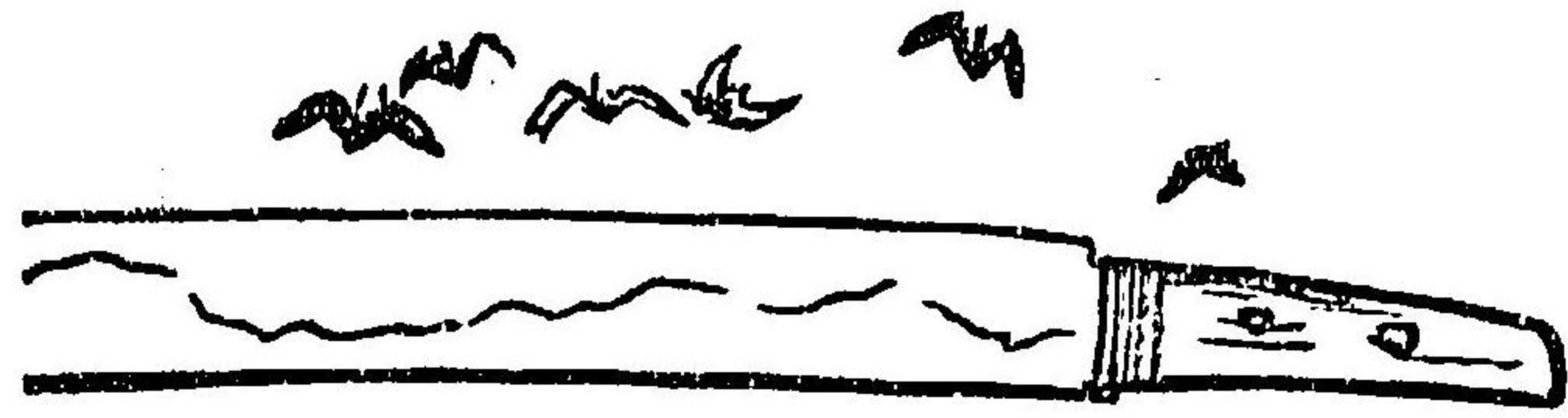
「貴様如何したのか？ まあ、坐れ。」

けれども兵は衝立つたまゝ、締めてもくいたらけながら、黙つて人の面を視てゐる。私も我知ら



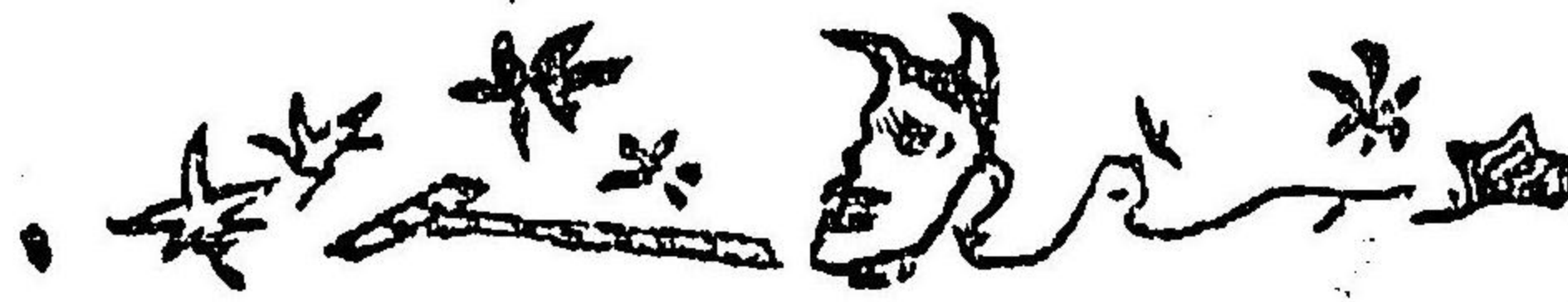
ず起上つた。よろ／＼しながら其眼を覗き込むと限りなき怖と狂つた氣が浮いて見える。誰の瞳も皆盛まつてゐるのに、これのばかりは眼一杯に擴がつてゐる。かうした大きい窓から覗いたら、外は嘘ぞ火の海のやうに見えやう。偶然としたら、これの眼色に浮んでゐるのが死の影ではあるまいかと思はれた。いや、さう思はれたばかりではない、それに相違なかつたのだ。この眞黒な、底も知れぬ、鳥のそののやうにオレンジ色の細い縁を取つた瞳には、死以上、死の恐怖以上のものが浮いてゐたのだ。





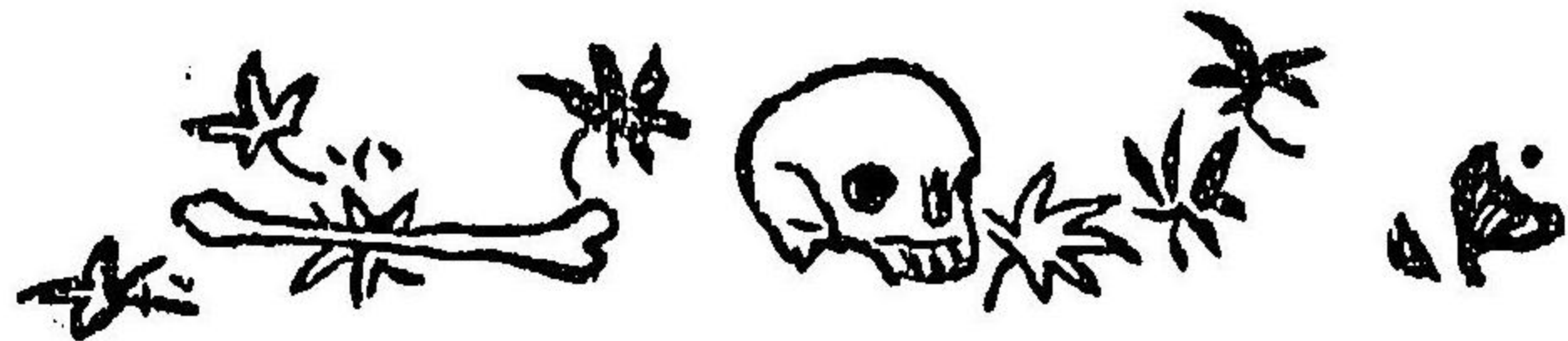
「彼方へ行け、彼方へ！」と一足退つて、私は喚いた。

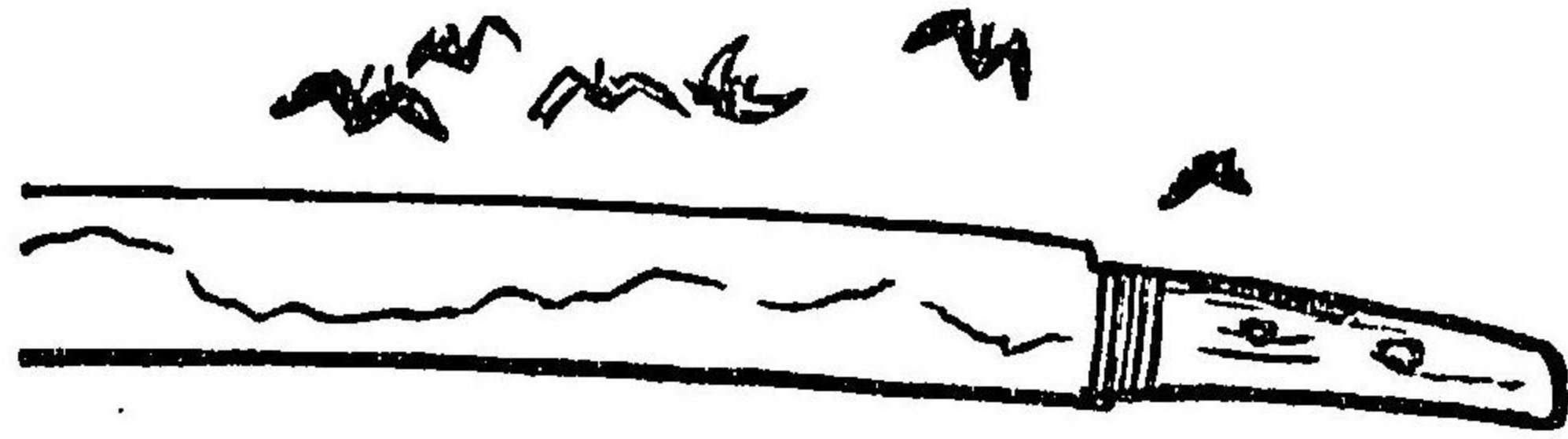
と、かう言ふのを待つてゐたやうに、其兵がバタリと私の上へ倒れ懸つた。頽然とした、物を言はぬ、大な奴に推倒されて、私も倒れた。わななきながら、壓付けられた足を引外して、跳起るや——もう方角も何も有つたものでない、唯人の居ぬ方へ、唯日光のちらつく遠方へ逃げやうとする時、右手の山の嶺でドンと一發鳴る。直ぐ其後から木魂のやうに續けざまにドンくと二發鳴る。と、何處か頭上を破裂彈が飛んで行く。其音に大



勢が喜び勇むで、喚き、叫び、哮るやうな聲が籠つて聞えた。

敵が迂廻した！
死にさうな暑さも、怖ろしさも、疲れも、さらりと忘れる。氣が判然する。思ふ所が顯かに浮上る。息せき切つて、走つて立直つた列に就かうとする時、晴やかな嬉しさうな面がちらく見え、皺唄れ聲で喚く聲が聞え、號令が聞え、無駄口叩く聲も聞えた。日は邪魔にならぬやうに競上りでもしたのか、朦朧となつて押鎖まる——と、又魔法使がキ、と叫ぶやうな音を立て、空を截つて



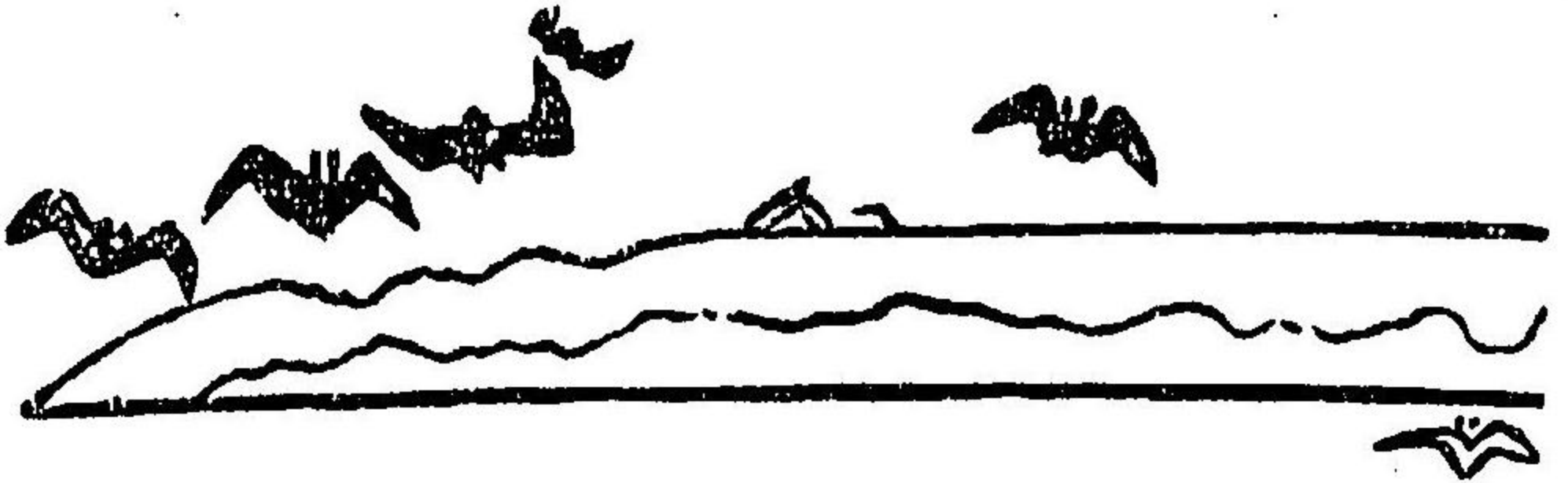


破裂彈が飛ぶ。

私は隊に近づいた：

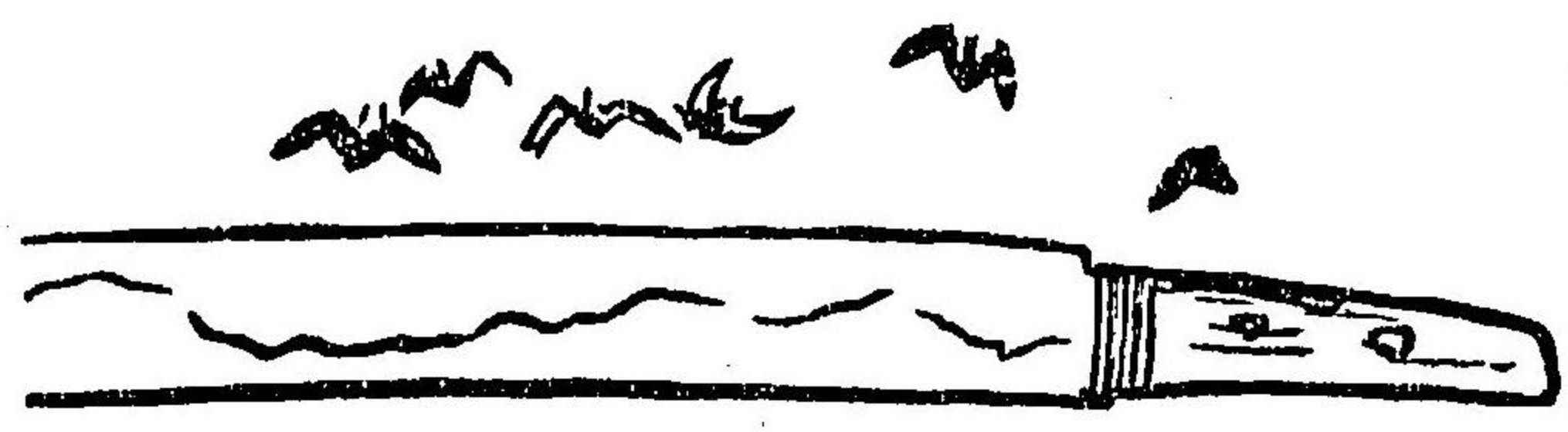
(断篇第二)

：馬も兵も皆戦死した。第八砲列も其通り。我
第十二砲列で、三日目の夕刻まで無事であつたの
は僅か砲三门と、——跡は皆壊されて了つたので、
——それに砲手六人に將校一人といふのが即ち私
だ。もう二十時間も一睡もせず、何も食はない。
三晝夜もサタンの礮めき哮る中に居たので、狂氣
の黒雲に引包まれて、地を離れ、空を離れ、味方

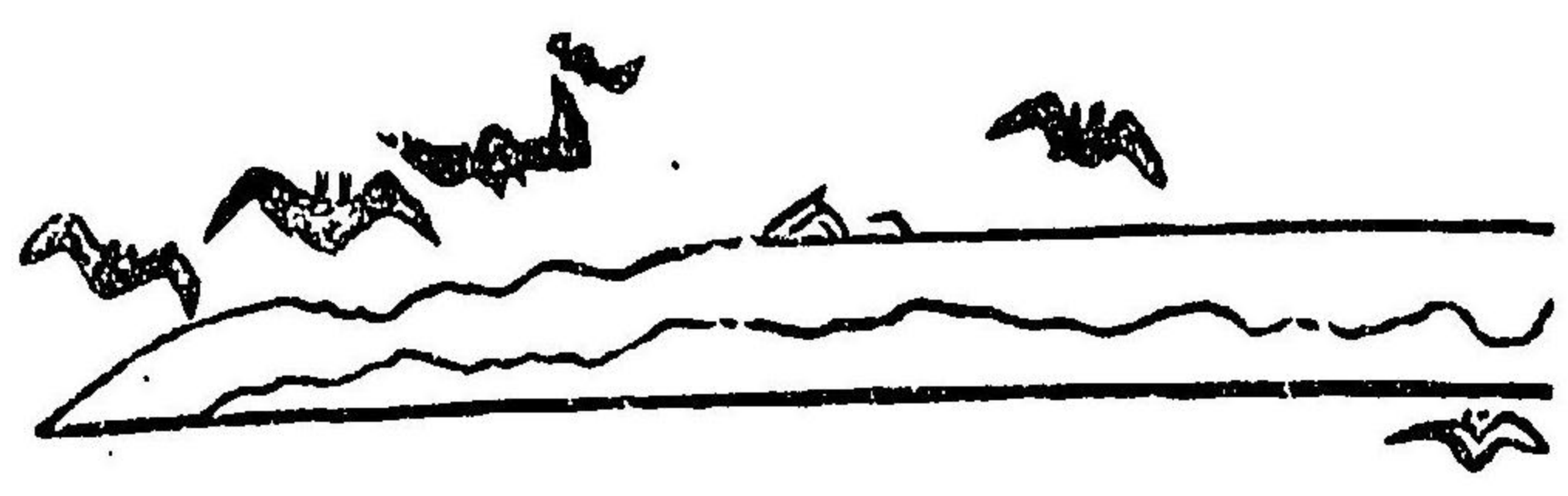


を離れて、生きながら狂人の如くに小迷ふ。死人
は静かに臥ても居るが、吾々はく〜と立働ら
いて、勤める所は勤め、物を言ひ、笑ひまでして、
——それでゐて宛然の狂人だ。危な氣なく活潑に
働いて、命令も明瞭下せば、又其を間違ひなく仕
遂げても行くが、それでゐて、若し突然誰かを捉
へて、お前は誰だと聞いたなら、うやむやの頭で
は、恐らく何と答へたものか、分らなかつたらう。
夢を見てゐるやうなもので、誰の顔も疾うからの
馴染らしく見え、何事が起つても、矢張り嘗て有
つた、覚えのある、知り抜いてゐる事のやうに思

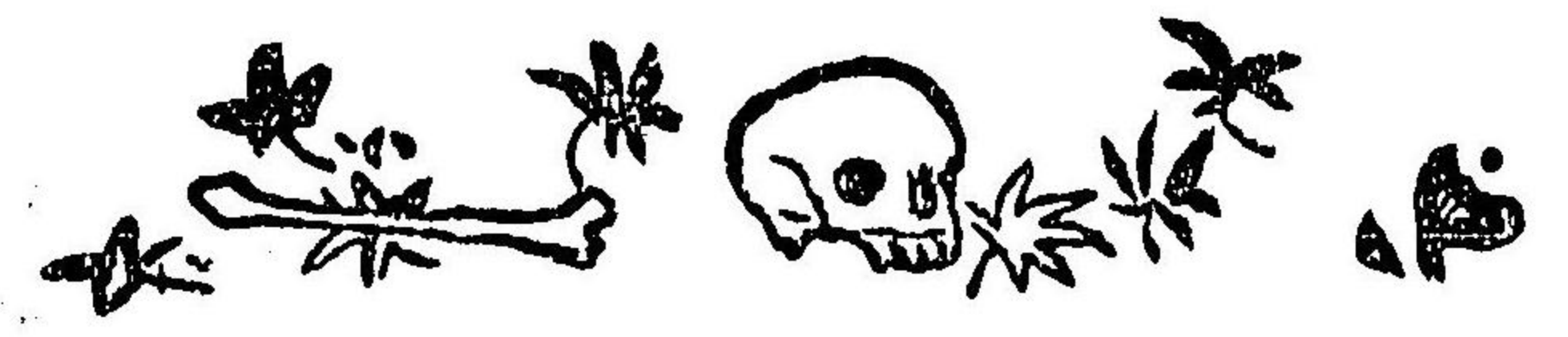


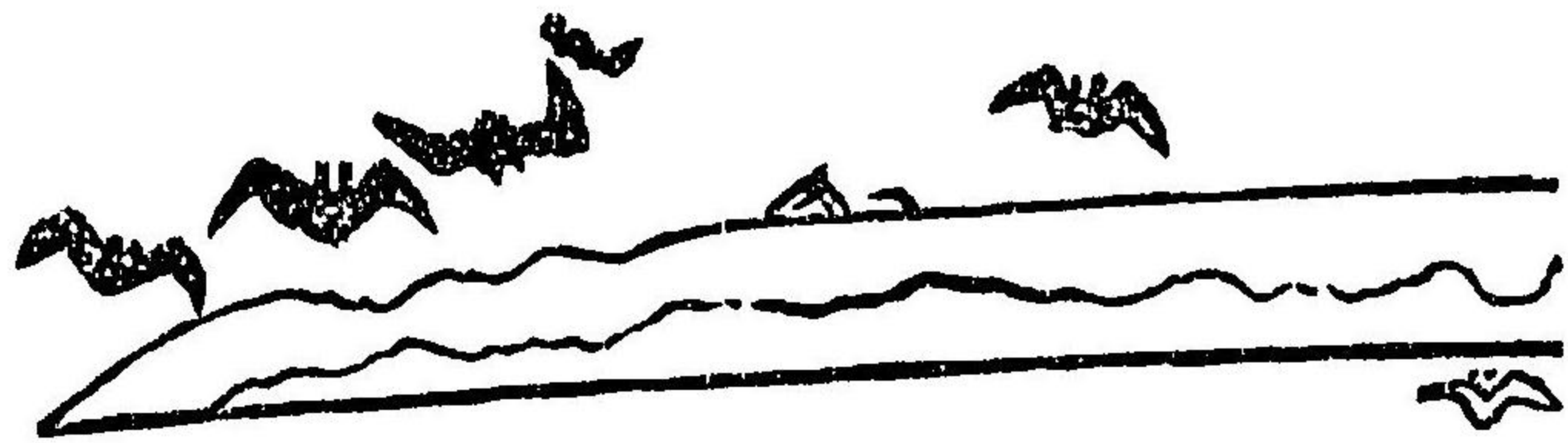


はれるが、其癖誰かの顔が砲を凝と視てゐると、或は砲聲に耳を傾けてゐると、どれもよく皆な目の覺める程珍らしくて、解いてもよく解き盡せぬ謎か何そのやうに思はれる。何時の間にか夜になる。それと氣が附いて、何處の隅から暗くなつて來たのかと怪しむ間さへなく、又頭の上で赫と日が照り出す。偶々餘處から來た者に聞いて、始めて戦闘も最う三日目と分るが、それも傍から直ぐ忘れて了ふ。如何やら暮れも明けもせぬ延たらの一日のやうで、暗い時もあるば、明るい時もあるが、何れにしても滅茶苦茶で、薩張譯が分らない。而



して誰も死を畏れない。死ぬといふのが如何な事だか、それも分らない。三日目だつたか、四日目だつたか、覺えがないが、一寸胸壁の蔭で横になつて眼を閉ぢると、忽ち例の馴染の、しかし不思議な物が見える。それは青色の壁紙が少しばかりと、私のと極めた小卓の上の埃塗れの手着かすの塚で、隣室には妻も作も居るやうだが、姿が見えぬ。唯此時は卓の上に綠色の笠を被たランプが點つてゐたから、宵か夜中だつたに違ひない。で、かうした所が眼前に留つて動かぬから、私は永いこと、心靜かに、ため

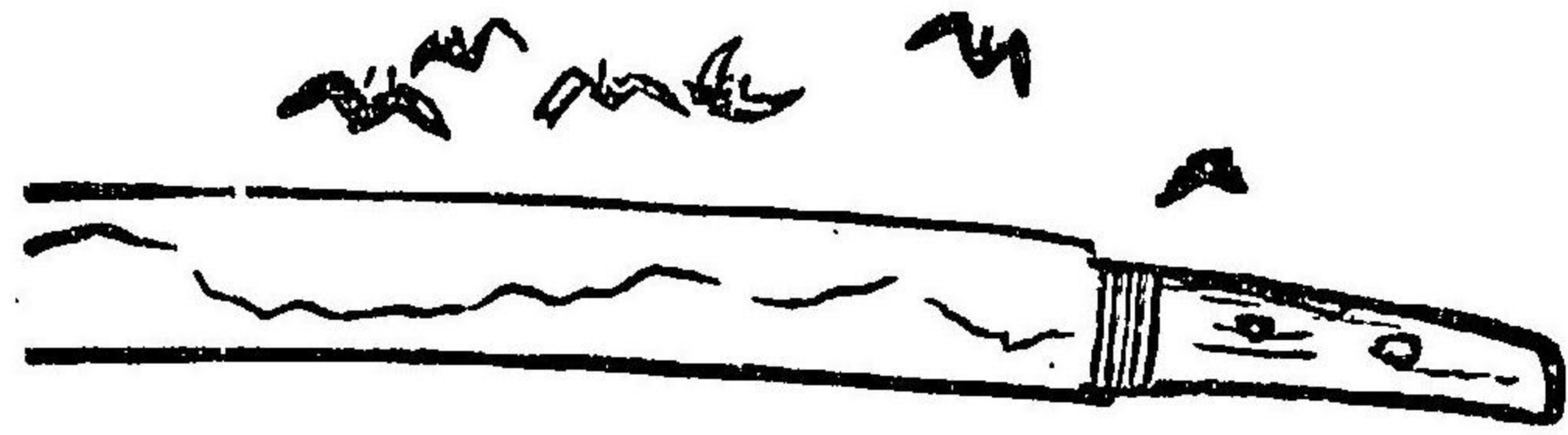
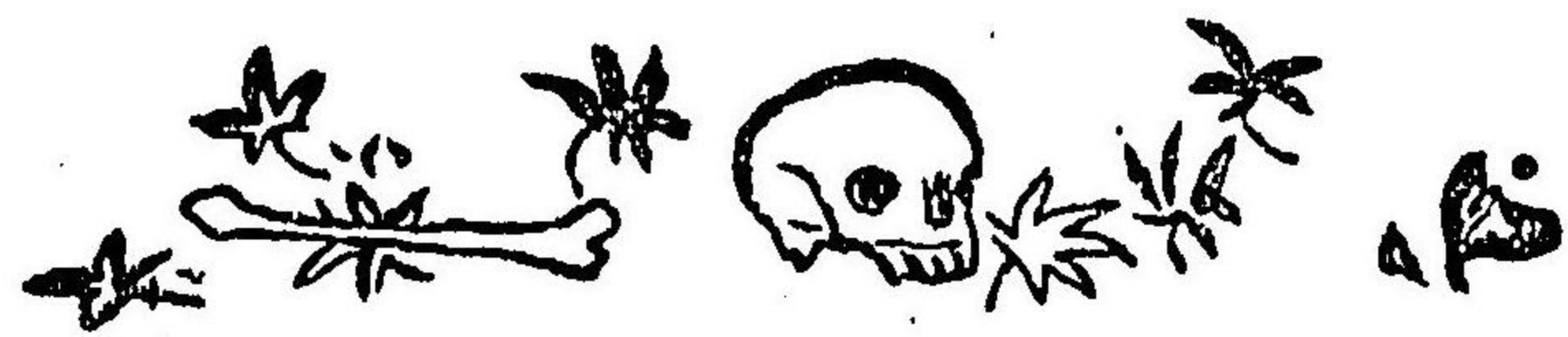




觸れたと思ふと、誰だか大聲で、砲彈の破裂した音よりも上手の聲で、ワッと叫んだ。誰か射られたなと思つたが、起上りもせんで、私は凝然とあからめもせず青色の壁紙と壇を眺めてゐた。

軈て起上つて、歩き廻り、指揮をしたり、人の顔を覗き込むたり、照準を極めたりしたが、心では矢張り、何故坊は寝ないのだらう、と思つてゐた。一度傳騎に其理由を聞いたら、永いこと何だか事細かに説明して呉れて、二人で點頭あつた。

傳騎は笑つた。其面を見ると、左の眉を釣上げて、背後の誰かに擦ぐツたい目交をしてゐたが、背後

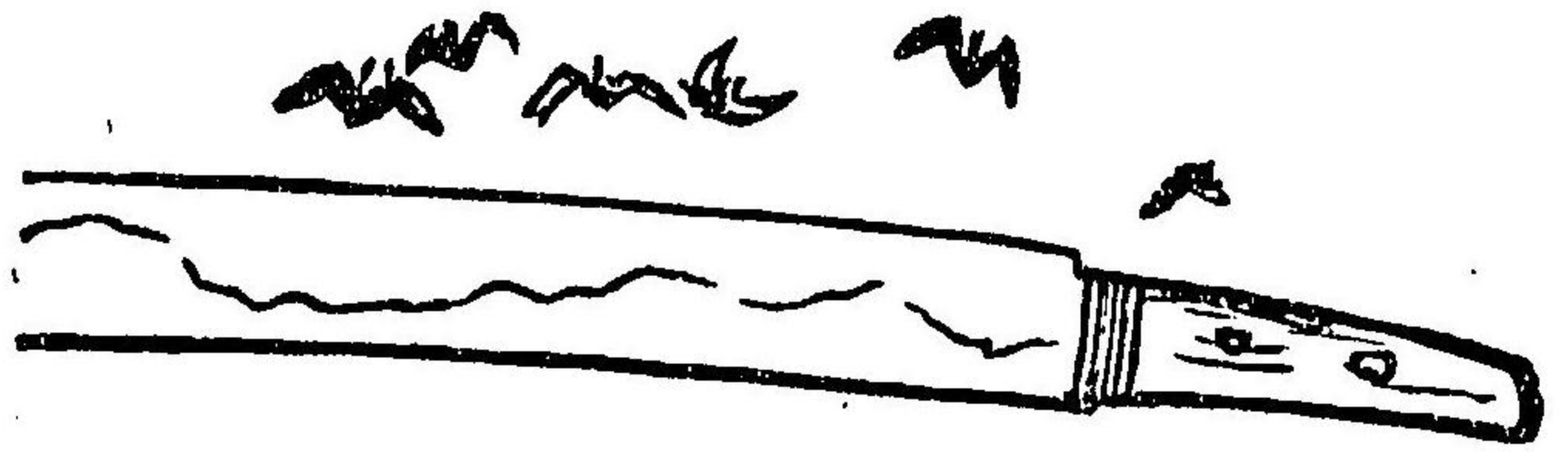


つすがめつ壇のグラスにちらつく火影を視、壁紙を眺めて、心の中で、もう夜だ、寝る時分なのに、何故坊は寝ないのだらうと思つてゐた。で、又壁紙を眺めて見ると、唐草に、銀色の花に、格子のやうな物に、管のやうな物と——や、我居間ながら、かうも能く見識つてゐるやうとは思ひ掛けなかつた。時々目を開いて、處々美しい明るい縞の入つた真黒な空を眺めては、又目を閉ちて、更に壁紙を視、壇の光るのを視て、もう夜だ、寝る時分なのに、何故坊は寝ないのだらうと思ふ。一度近くで砲彈が破裂した。其時何やら兩足にふわりと



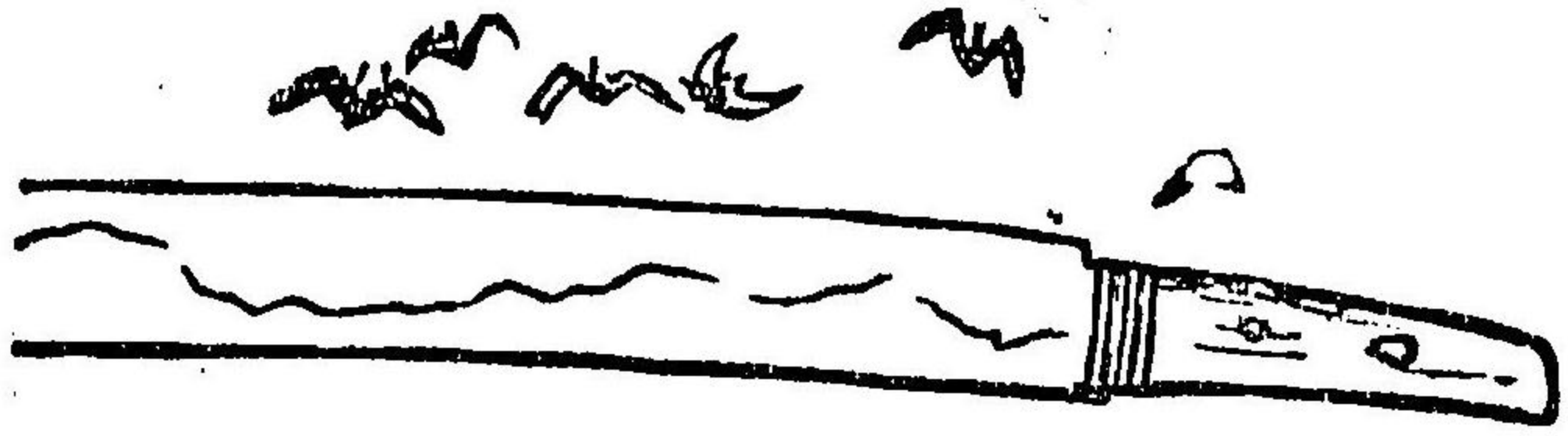


太った砲手は、何と思つてか、或る戦死者の服を
 剥ぎに掛つた。私は陣地を走り廻つて、蝙蝠傘だ
 か、外套だかを捜してゐた。蔽さる雲の中から雨
 の降り出したのは随分広い場面だったが、其場面
 全體にふつと妙に寂然となる。榴霰弾が一つ後馳
 にブンと飛んで来て、パッと破裂して、又寂然と
 なる。寂然となつたので、太った砲手の荒い鼻息
 が聞える。石塊や砲身を打つ雨の音も聞える。か
 う寂然とした中で、ぼらくといふ閑かな秋めか
 しい雨の音を聴き、濡土の香を嗅ぐと、淺ましい
 血癩い夢が瞬く間覺めたやうな氣がして、雨にき

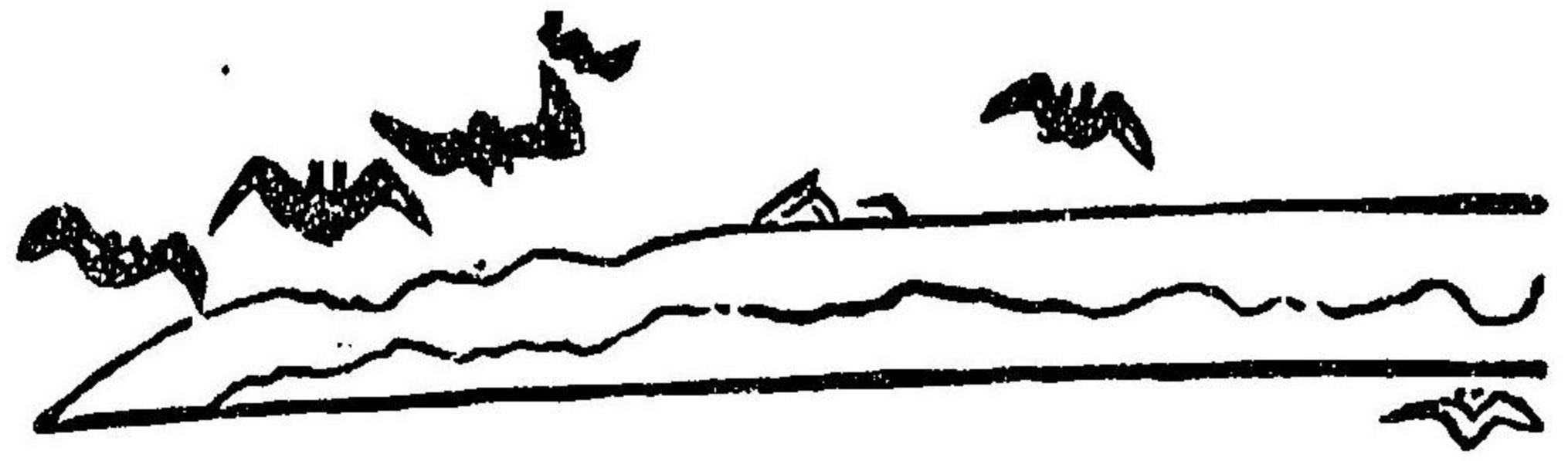


には誰かの足の裏が見えたばかりで、外には何も
 見えなかつた。
 此時四邊は最う明るくなつて居たが、不意にポ
 ッリと降つて来た。なに、雨と云つても矢張故郷
 で降るやうな雨で、ほんの詰らん点滴では有つた
 けれど、不意に、降らすもの時に降つて来たので、
 皆濡れるのを畏れて、狼狽して射撃を中止し、砲
 も何も放散かして置いて、やたら無性に其處らの
 物陰へ逃げ込むだ。只た今私と物を言つてゐた傳
 騎は、砲車の下へ潜り込むで身を縮めてゐたが、
 危ない、今にも壓潰されるかも知れないのに、





らつく砲身を見れば、幼い頃の事でもない、初恋でもない、しめやかに懐かしい何か、不思議にもふと想出される。此時遠方でドンと最初の一發が際立つて音高く鳴ると、一寸寂然としたのに魅せられてゐた氣味は去つて、皆隠れ場から這出す。逃込む時のやうに、這出す時も唐突だった。太つた砲手が誰かを叱り飛ばす。砲が鳴る、又鳴る——と散々惱まされ扱いた腦が又絳い霞に直と鎖される。雨は何時止んだか、誰も氣が附かなかつたが、砲手が戦死して其むくくと太つた顔の肉が落ちて黄ばむでも、尚ほ点滴が垂れてゐたのを今に覺



えてゐるから、何でも随分長いこと降つてゐたに違ひない。
 ……未だ生若い志願兵だったつが、私の前に直立して擧手の禮をしながら報告するのを聞くと、司令官から、其隊はもう二時間支ふべし、されば援兵を送るといふ命令ださうだ。私は何故坊はまだ寝ないのだらうと心では思ひながら、口では何時間でも支へてお目に掛けると答へた。さう答へた時、何故だか其志願兵の面がふと目に留まる。大方非常に蒼褪めてゐた所爲だったらう。是程蒼白い面を見た事がない。死人の面だつて、此程のない若

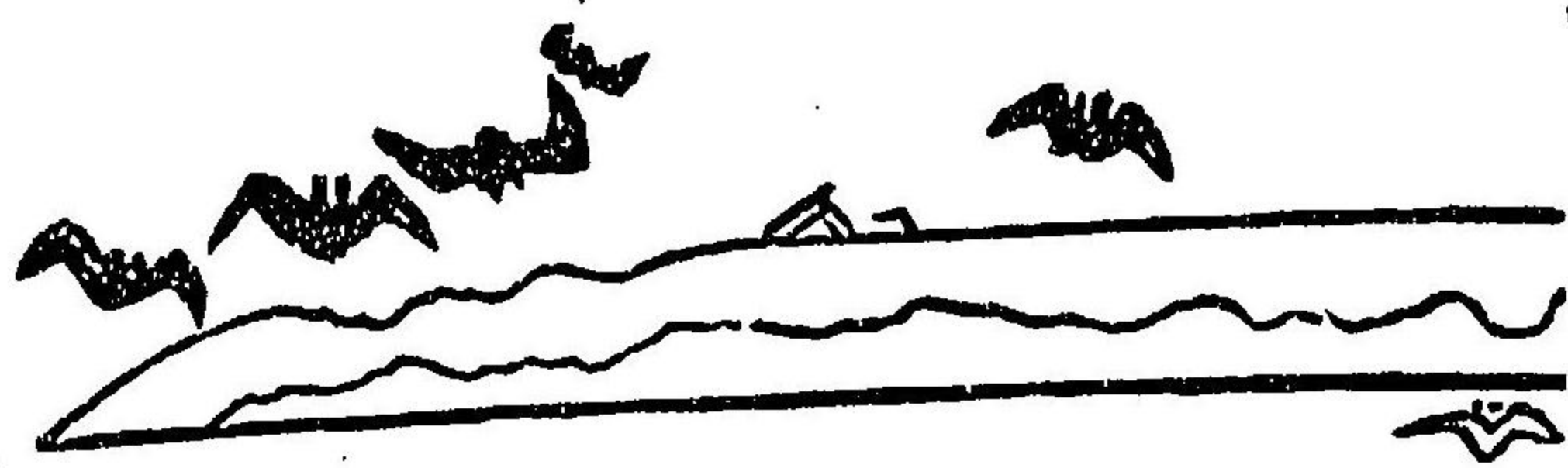




若しい面から見れば、まだ紅味がある。必ず途中で度膽を抜かれたのが未だ直らなかつたのに違ひない。目尻へ手を舉げてゐるのは、この慣れた無難な手振で、氣も漫ろになる程の怖ろしさを紛らさうとしてゐたのだらう。

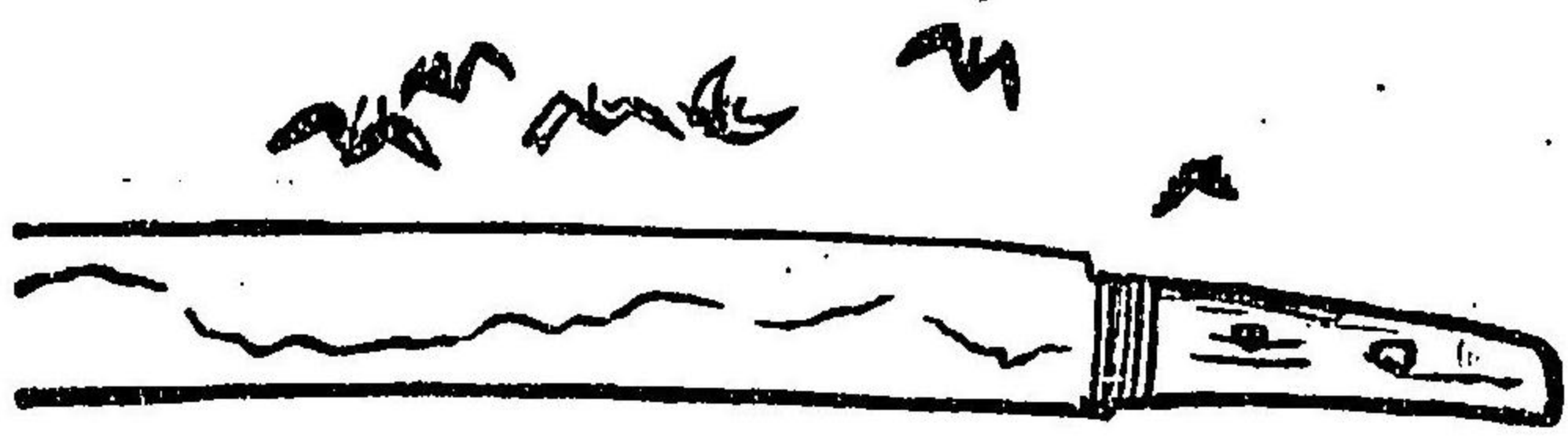
「怖ろしいのか？」といひながら其手に觸れて見ると、手は棒のやうに硬ばつてゐたが、當人は幽かに莞爾としたばかりで、何とも言はなかつた。

いや、寧ろ口元で微笑の眞似をしたばかりで、眼には唯初々しさ、怖ろしさが光るのみ、其外には何も無かつた。



「怖ろしいのか？」と私は又優しく言つて見た。志願兵が何か言はうとして口元を動かした時、不思議な、奇怪な、何とも合點の行かぬ事が起つた。右の頬へふわりと生濼い風が吹付けて、私はガクッとなつた——唯其丈だつたが、眼前には今迄若褪めた面の在つた處に、何だかプツリと丈の盛つた、眞紅な物が見えて、其處から鮮血が栓を抜いた壘の口からでも出るやうに、ドクくと流れてゐる所は、拙い繪看板に能く有る圖だ。で、そのプツリと切れた眞紅な物から血がドクくと流れる處に、齒の無い顔でニタリと笑つて赤い笑





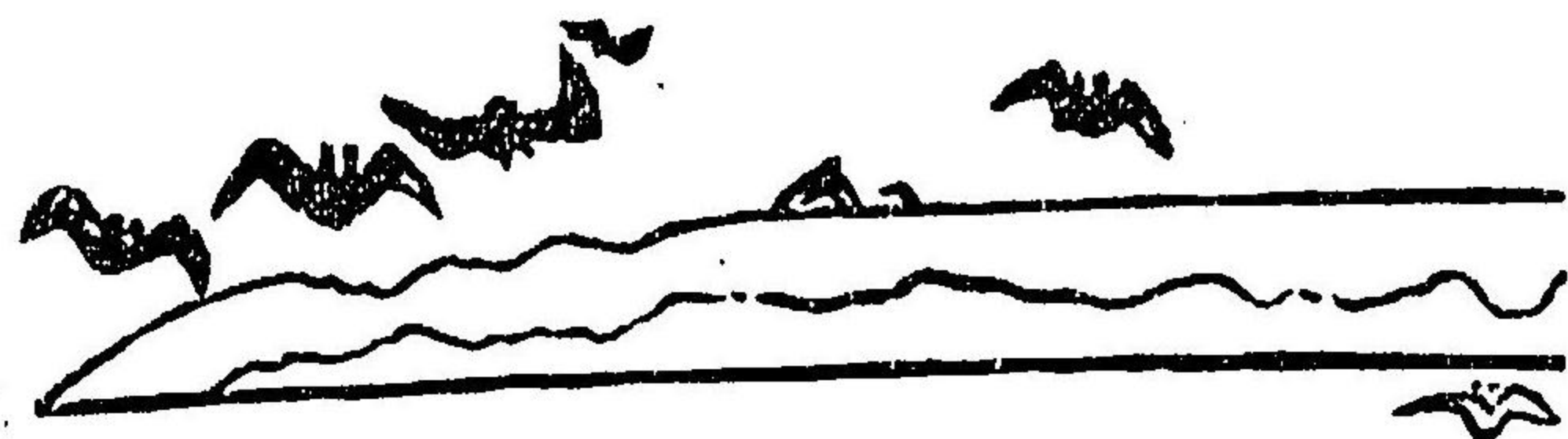
の名残が見える。

これには見覚えがある。之を尋ねて漸く尋ね常
てたのだ。其處らの手が挽げ、足が千切れ、微塵
になつた、奇怪な人體の上に浮いて見える物を何
かと思つたら、是だつた、赤い笑だつた。空にも
其が見える。太陽にも見える。今に此赤い笑が地
球全體に廣がるだらう。

皆もう平氣で瞭然と狂人のやうに：

(断篇第三)

：物狂ほしさと怖ろしさとだ。



風聞に據ると、敵にも味方にも精神病の患者は
夥しいものだと言ふ。我軍でも精神病舎が四棟出
來た。參謀部へ行つた時、副官が見せて呉れたが
：

(断篇第四)

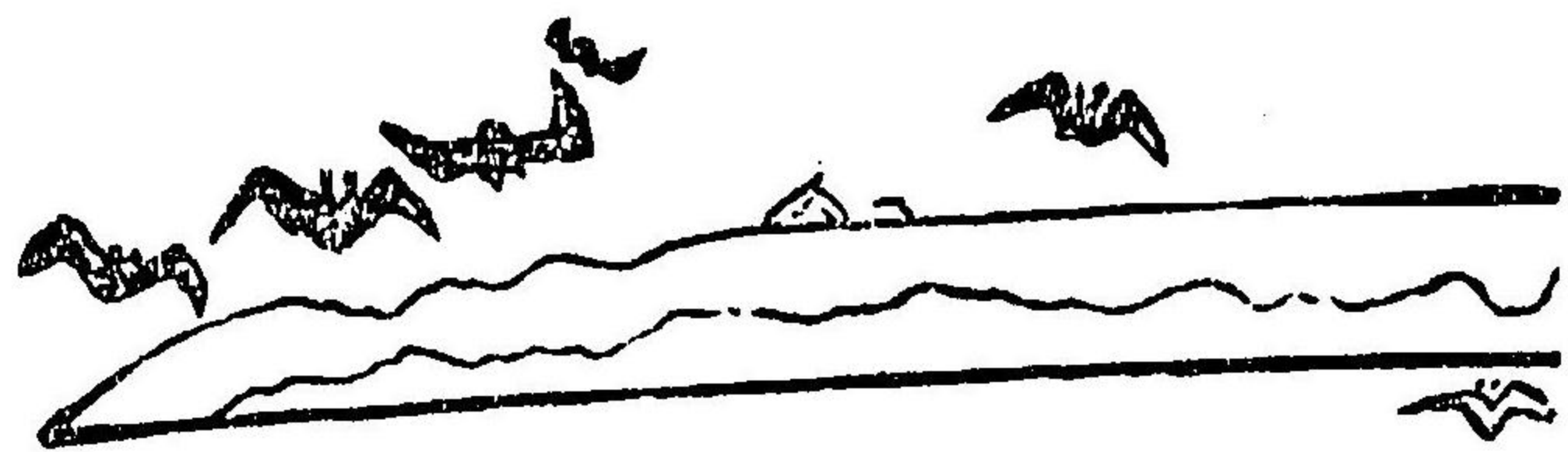
：蛇のやうに絡みつく。現に其友人が見て來て
の話に、鐵條網の一端がブツリと切れて、ピンと
跳返つて、クル〜と兵三人に絡み付いた。齒が
軍服を突抜いて肉に喰込むから、兵は悲鳴を揚げ
て、狂氣の如く轉げ廻つてゐる中に、一人は死ん





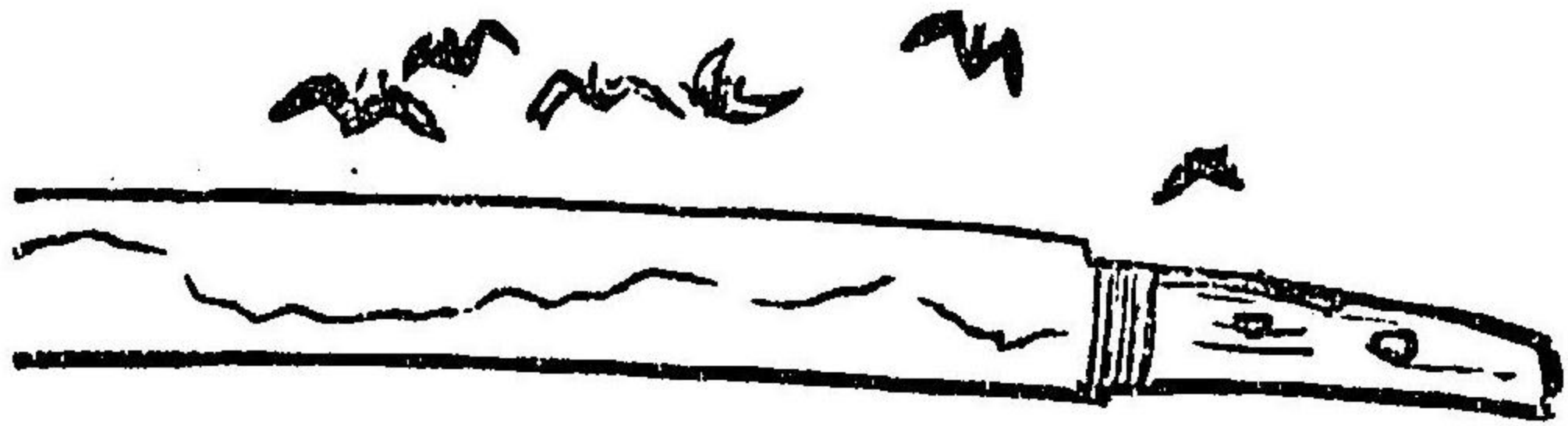
で了つたが、其死骸を跡の二人が引摺つて轉げ廻る。やがて生きてゐるのは一人となる。生残つたのが、二人の死骸を突離さうとするけれど、死骸は附纏つて来て、一緒に轉がり、三人の體が上になり下になりしてゐる中に、ふと一度にパタリと動かなくなつて了つたさうだ。

友の話だと、此鐵條網一つで二千からの戦死者を出したと云ふ。皆鐵條網を截らうとして、蛇に巻付かれたやうに、進退の自由を失つてゐる處を、大小の彈丸を雨の如く間斷なく浴せ蒐けられたのだ。怖ろしいとも何とも云様がない。若し逃げる



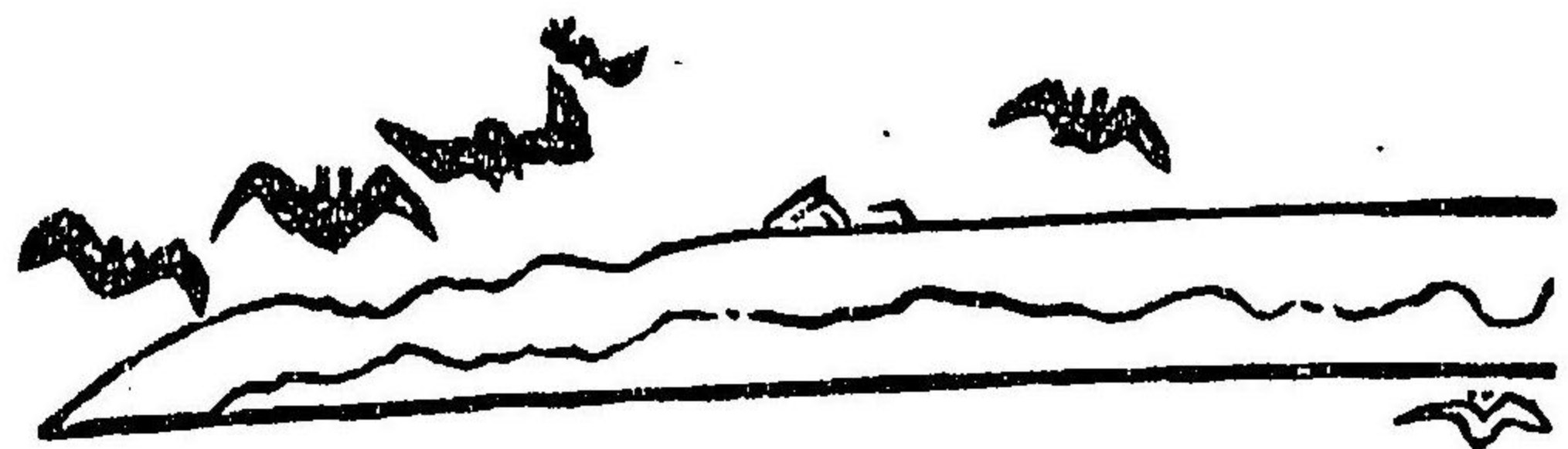
方角が分つてゐたら、臆病風に吹卷られて此時の攻撃は總崩れになつたらうが、何しろ十重二十重鐵條網を張渡してある。必死になつて其を破ると、今度は底に杭を打込んだ狼狽が幾つとなく掘つてあつて、是が又迷宮同様とあるから、皆度を失つて了つて、逃げる方角が附かなかつたのだと云ふ。或者は全く盲目のやうになつて、漏斗形した深い坑に踏ん込み、尖つた杭の先に芋刺になつて、虚空を掴むで藻掻く。宛然玩具の道化人形が踊るやうだ。其上へ又来ては突刺るから、まだ温味のある、或は冷え切つた、血塗の體がうよくと盛



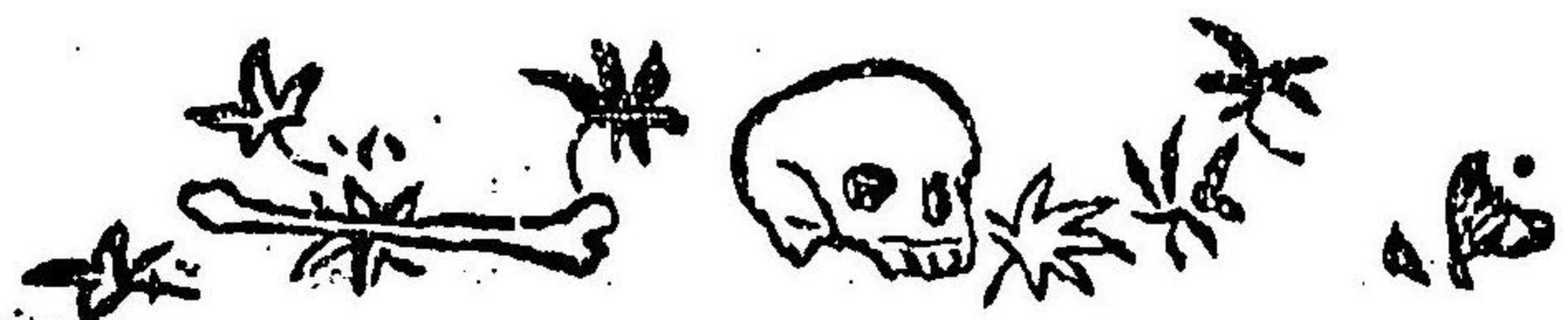


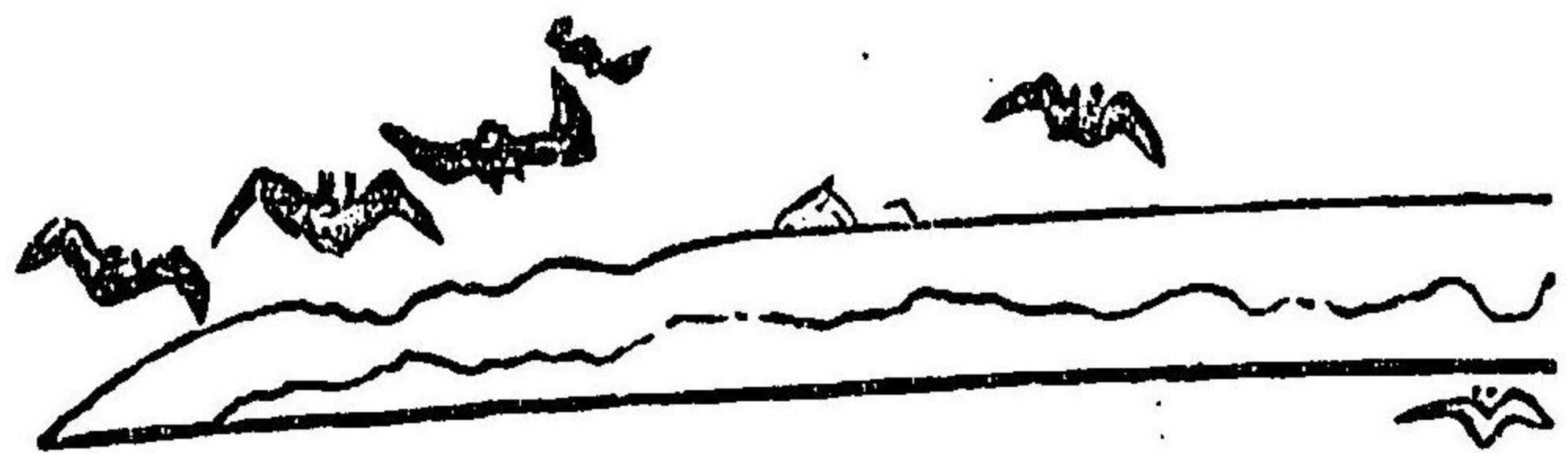
上つて、直き坑一杯になつて了ふ。其處にも此處にも腕が如龜々と突出てゐて、瘡癩を起してヒク／＼してゐる指先で何にでもしがみ付く。一度陥たら、最う出られない。剛ばつて蟹の鉄のやうになつた數百の指が、無性に足を引掴み、服を引掴み、己が上へと引倒して置いて、眼肉を抉り、首を締る。が、大抵は酒にでも酔つてるやうに、正面に鐵條網を目蒐けて馳出し、引掛つて喚き叫んでゐる中に、彈丸の中つて往生して了ふ。

さうはいふものゝ、醉漢のやうになるのは一般の事で、鐵條網に手や足を絡められれば、誰でも



大に罵つたり、或は笑つたりする。而して其儘死んで了ふ。この話をした男も、朝から飲まず食はずでゐたのださうだが、不思議な氣持で、怖ろしい怖ろしいで目が眩む最中に、一寸の間無性に愉快になる——怖ろしいのが愉快なのだ。誰だか隣りで歌を唄ひ出したから、一緒になつて唄つてゐると、頓て其處らの者が皆仲間へ入つて立派な合唱になる。拍子の中を好く揃ふ。何を唄つたか、覚えがないが、何でもかう愉快な舞踏歌のやうな物だつたと云ふ。で、唄つてゐると、其處らが血塗に眞紅になる。空まで眞紅に見えて、天地間に



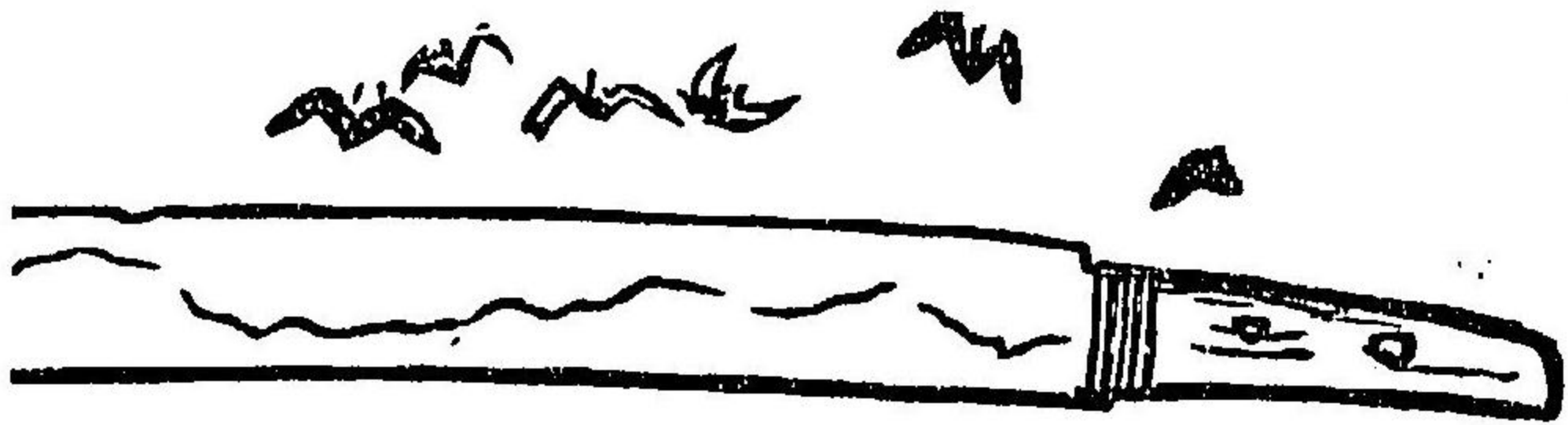
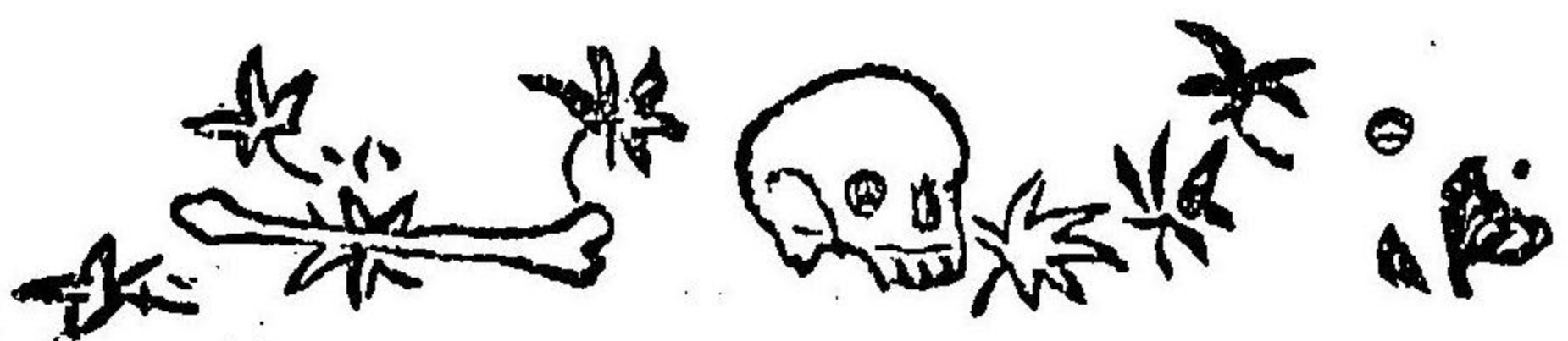


通創を受けて倒れてからも、失神する迄は、舞踏で誰かと足拍子を揃へるやうに、足をビク／＼と行つてたさうだ。今となつて此日の攻撃を憶出すと妙な氣持がして、怖ろしい事は怖ろしいが、最う一逼彼様な思をして見たいやうな氣もすると云ふ。

「而して又胸へ一發喰ひたいのか？」

と私がいふと、

「馬鹿言へ！ 出る度に彈丸を喰ふとは極つとりやせん。そんな事いふけど、君、目覺しい働さをしてさ、勳章貰ふのも悪くないぞ。」



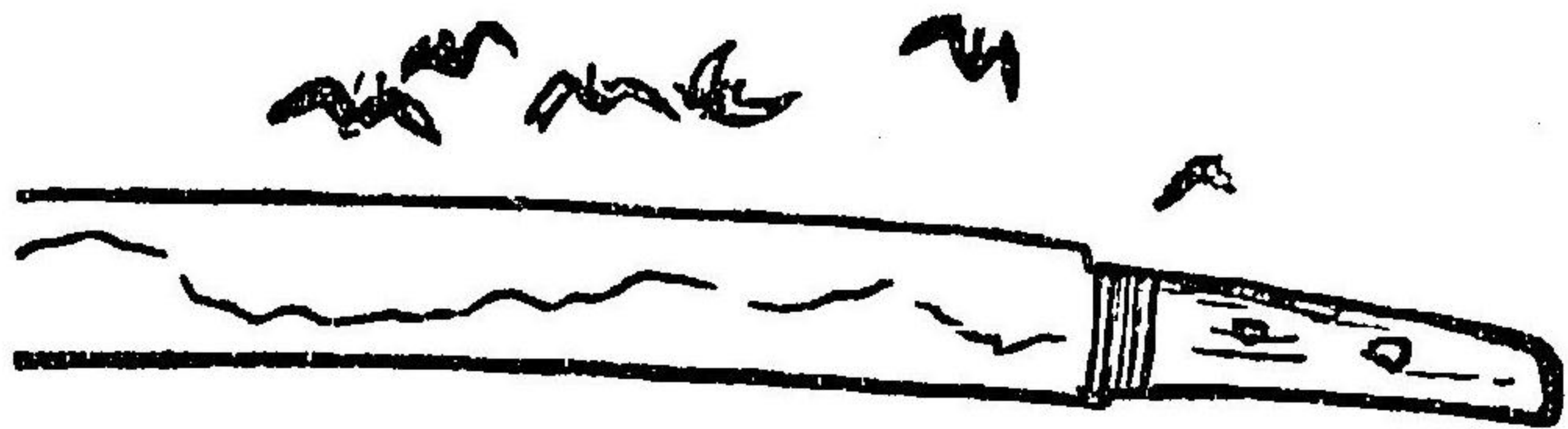
何か一大變異、奇怪な變化が起つたやうな氣勢で、物の綾色も分らなくなる。水色青などいふ穩かな目に慣れた色は消えて了つて、太陽が眞紅にベングラ色に炎える。

「赤い笑だ」

と私は言つたが、相手は其意味が了解んで、「さう、笑ひもした。今話した通りだ。宛然皆酒に酔つてるやうだつた。いや、舞踏も行つたらう。何でも何か行つた。少くも其三人の兵の藻掻く所は、宛然舞踏のやうだつた。」

今でも判然覺えてゐるさうだが、此男が胸に貫

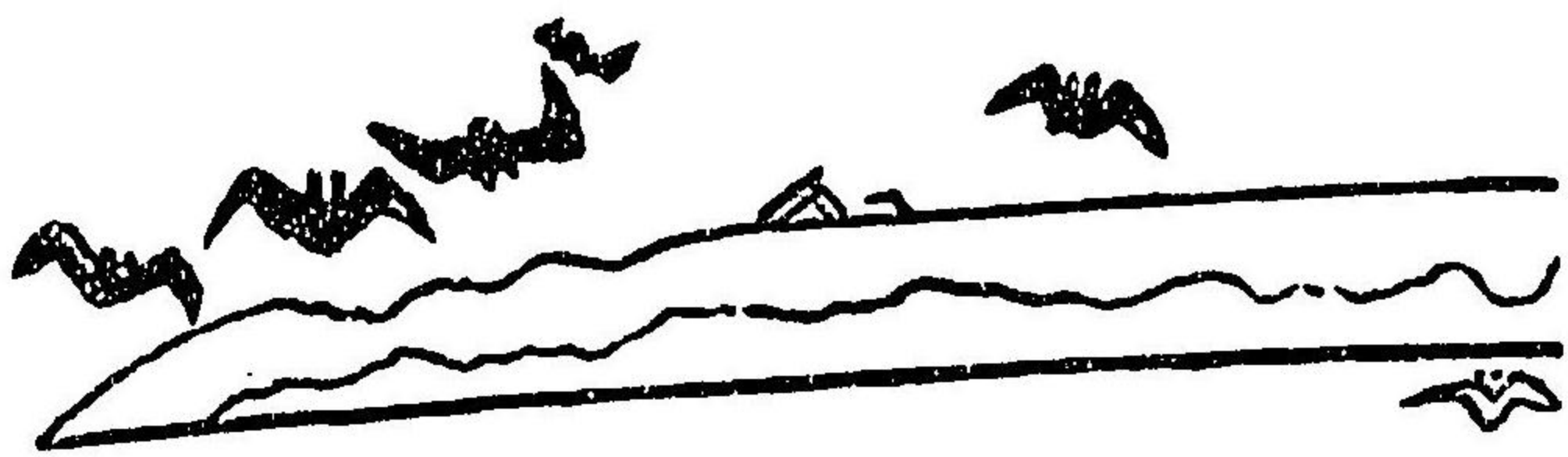




を待つてゐるのだ。待つてたつて、君、如何なるも
んか：國家の爲——其様な事は母にや分りやせず
さ。」

「赤い笑だ。」

「また！ 君は申藏ばかり言つてゐるけれど、僕は
眞面目だよ。如何にかして納得させたいけれど、
納得させやうがない。まあ、君、如何な事を言つ
て寄越すと思ふ？ そりや、實に氣の毒だ。手紙
の文句迄白髪だ。しかし、君も、と珍らしさうに
人の頭を眺めて、指差をして、急に笑ひ出した。
「君も禿げ出したなあ！ 知つてゐるか？」

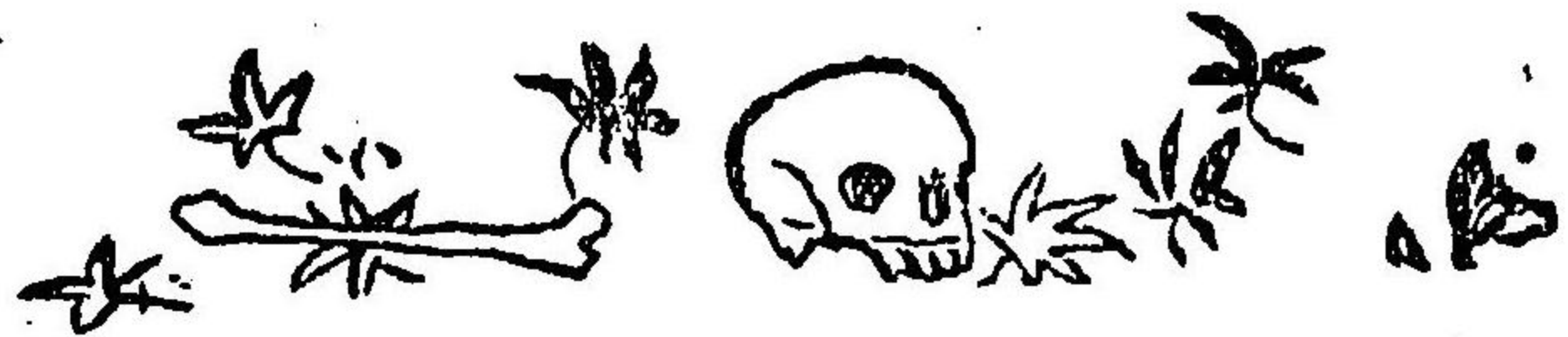


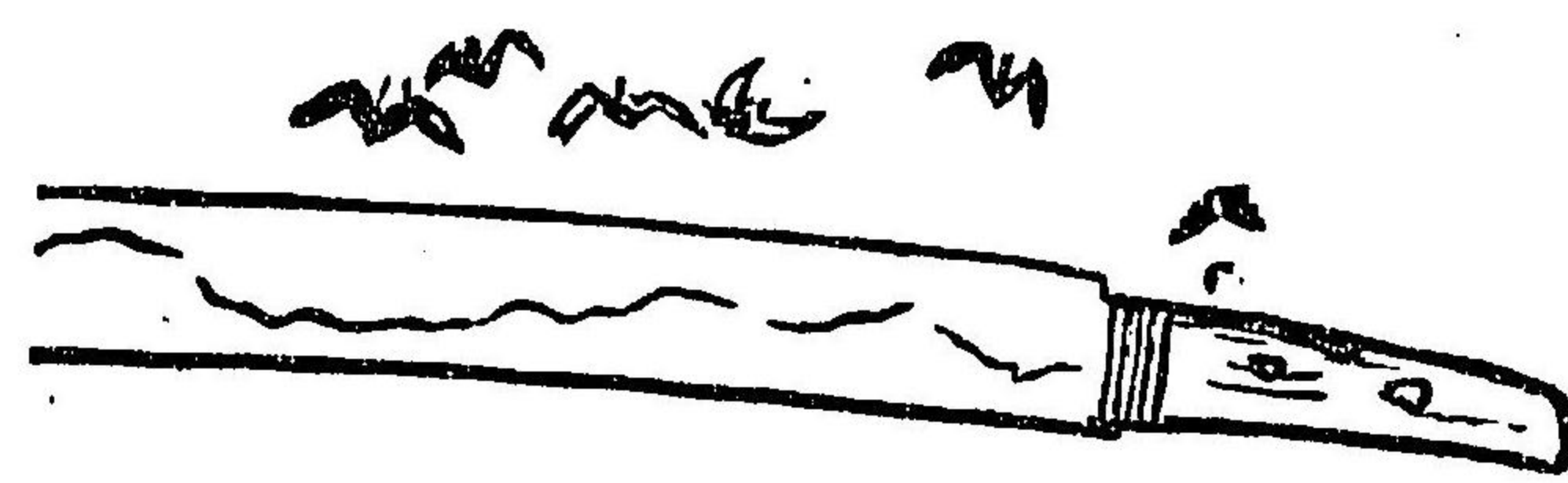
「鏡が無いもの。」

「いや、しかし、白髪になる奴や禿になる奴が大
分有るぞ。おい、鏡を貸して呉れ、鏡を！ あゝ、
僕も何だか白髪が生えて來さうでならん。鏡を貸
して呉れ。」

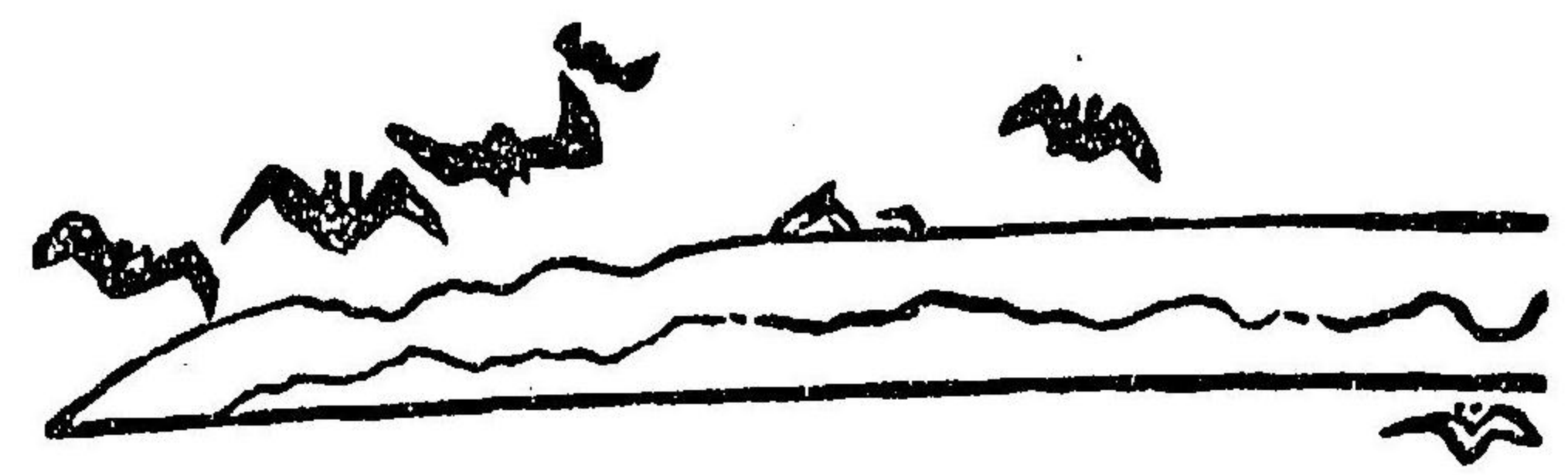
「譏語を言出して、泣いたり笑つたりする。私は
病舎を出て了つた。」

其夕方園遊會が開かれた。不思議な怪しい園遊
會で、來會者の中には死人の影も交つてゐた。國
でのピクニックの時のやうに、夕方集まつて茶を
喫む筈だつたので、湯沸の工面をして、レモンや

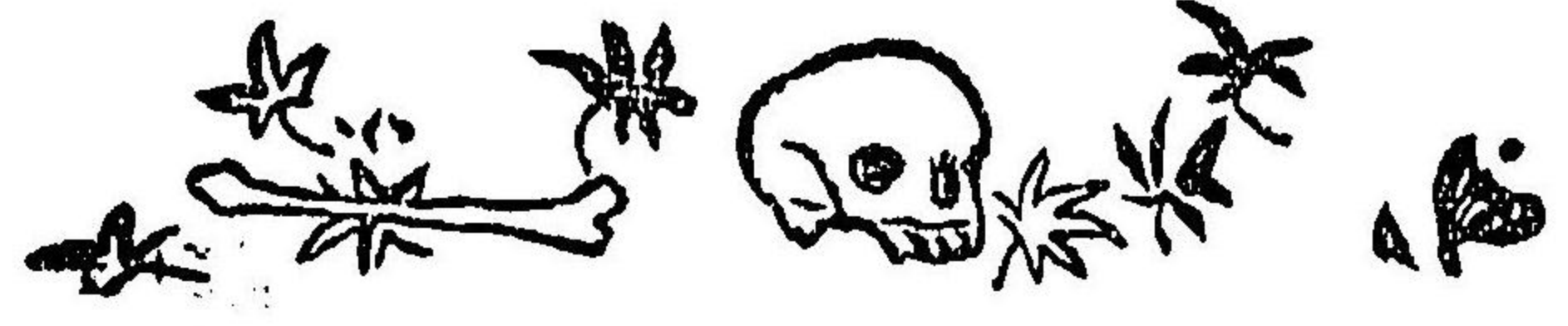




コップまで用意して、矢張りクニックの時のやうに、トある木の下を會場と極めた。で、一人づつ、又は二人三人連立つて、常談など言合つて話しながら、皆樂しみにして浮々と賑かに寄つて來たが、來ると直きに黙つて了つて、成るべく顔を見合せないやうにする。かうして生残つた者ばかり寄つて見ると、何となく無氣味だ。皆見るも淺ましい薄汚ない服装をして、悪性の疥癬でも病むでゐるやうに、身體中をぼり／＼搔く。髪も髭も延次第で、篋れ切つて、見慣れた昔の姿はないから、湯洲を中に、顔を合せて見ると、初めて逢つたやう

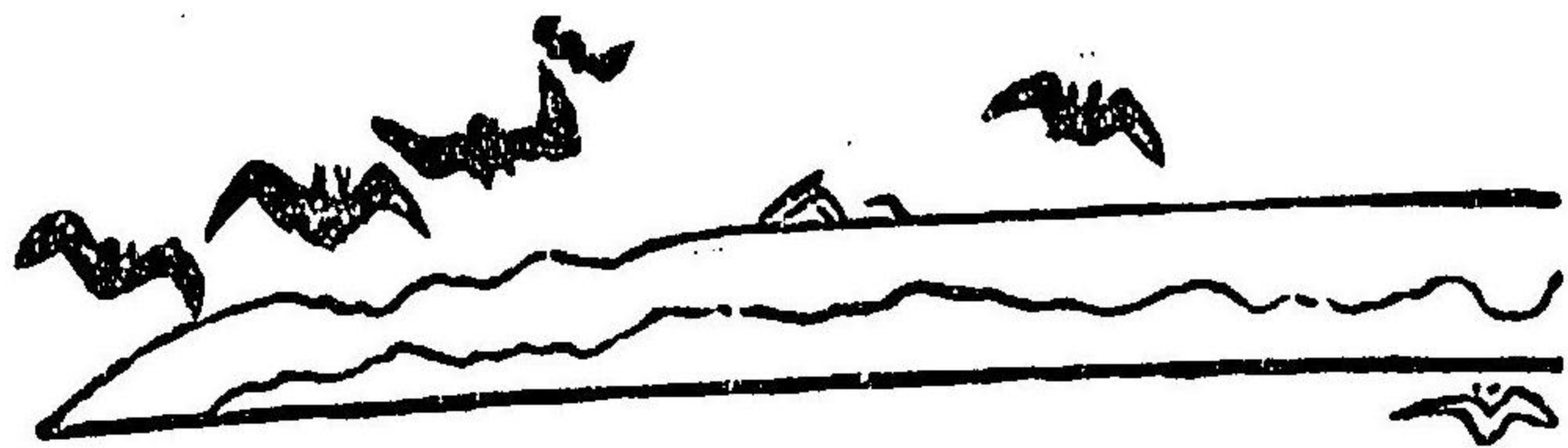


な氣持がして、愕然とする。度を失つてうろ／＼する此人々の中に、馴染の面はないかと尋ねて見たが、一人も無かつた。わく／＼として落着がなく、起居も荒く稜が有つて、一寸した音にも恟りとし、絶えず後を見ては何かに氣を附け、何處かポカンと、不思議な穴が明く、その穴を覗いて視るも無氣味なので、烈しい手眞似で之を塞がうとするなど、如何しても見も知らぬ餘所の人で、馴染がない。聲までが異つてゐる。激しく、稜立つて、えいやつと物を言ふそれが、動もすれば聲高になつたり、埒もない高笑になつて、制めやうにも制



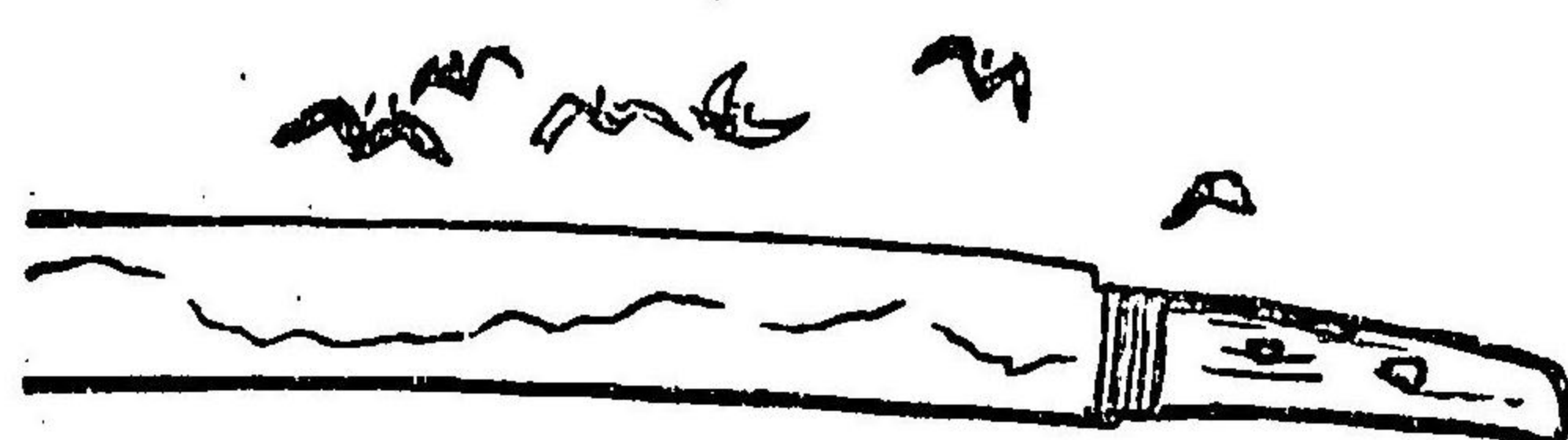


められぬ、といった調子。異つてゐるのは其ばかりでなく、木にも馴染がなく、入日にも馴染がなく、水も異臭異味を帯びた變つた水で、宛然死人と一緒に人の世を去つて、何處か別世界へでも来たやうに、眼に見える物が皆神秘で、怖ろし氣な影のやうな物が朦朧と其處らに満ちてゐる。入日の影は黄ばむで冷たく、何處に明味もない眞黒な雨雲が、凝つたやうに、重たさうに、其上から覆さつて、下には大地が黒々と、人の面も尋常ならぬ光を受けて黄ろく死人色に見える。皆湯沸を見てるたが、湯沸の火は消えて、腹には黄ろく凄



入日の光を反射し、陰々として此世の物ではないらしく、何だか本體の分らぬ、奇怪な湯沸であつた。
 「此處は何處だ？」と誰だか言つたが、恠々とした恐怖に満ちた聲だつた。誰だか溜息をした。と、わく／＼して指の骨を鳴らす者がある、笑ひ出す者がある、躍り上つてテーブルの周圍を急遽と廻り出す者もあつたが、此頃は能く斯うして急遽と殆ど駆け出さぬばかりに歩き廻る人を見掛ける。而して皆妙に黙つてゐる、物を言つても口の中で洩々言ふばかりだ。





「戦地さ」と高笑してゐたのが答へて、更に又笑ひ出したが、牙えぬ聲で、うふくと秩序なく笑ふ所は、何か咽喉に塞つたやうだ。

「何が可笑しいんだ？」と、誰だつたか、向腹を立て、「こら、止さんか！」

すると、笑つてゐたのが又更に咽喉に物が塞つたやうに、フと笑つて、而して大人しく黙つて了つた。段々に薄暗くなつて来て、雨雲は地を押し、黄ろく透徹るやうな互の面も辛と見分られる程になつた。誰だつたか、

「トキニ「大長靴」は何處へ行つたらう？」



「大長靴」と譚名を呼ばれたのは、小造りの癖に、大きな水浸ますの長靴を穿いてゐる士官だつた。

「只た今此處に居たツけが、大長靴、何處に居る？」

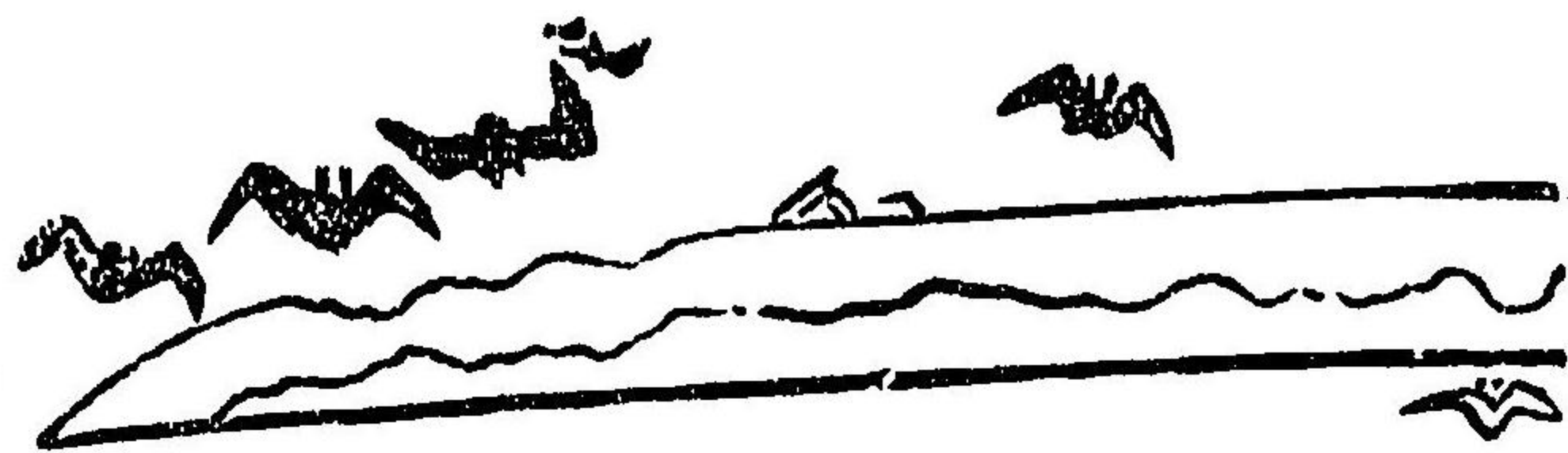
皆笑ひ出した。その笑聲がまだ止まぬ中に、暗黒から憤つたやうな尖り聲で、

「止せ！ 馬鹿な！ 大長靴は今朝偵察に出て討られたのを知らんか？」

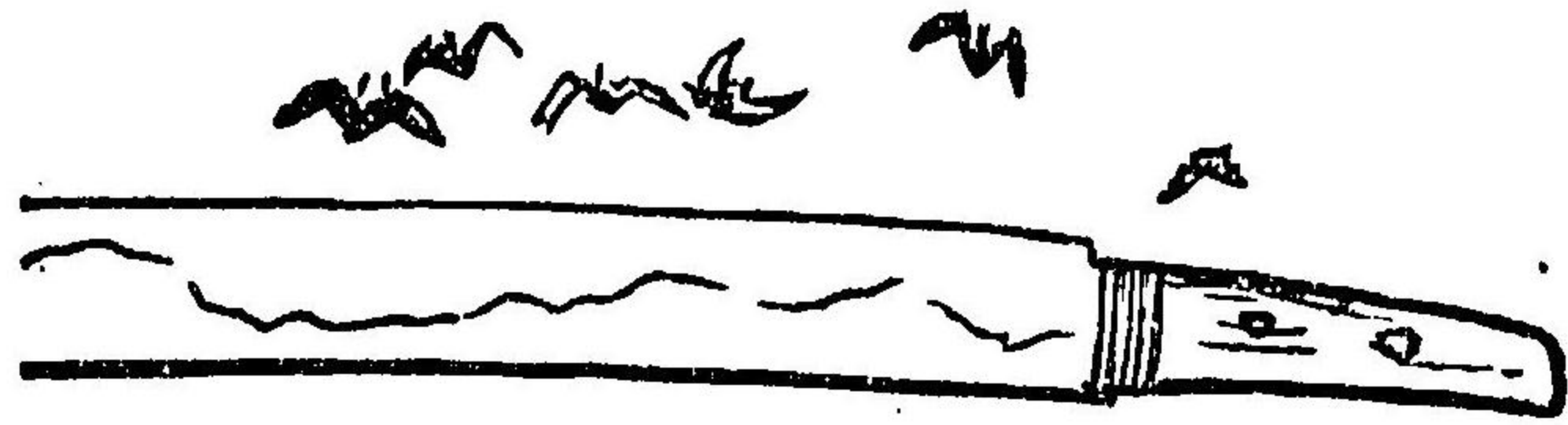
「そんな筈はない。只た今此處に居たんだもの。」

「そんな氣がしたんだ。おい、湯沸の側の先生、レモンを一つ切つて呉れんか。」

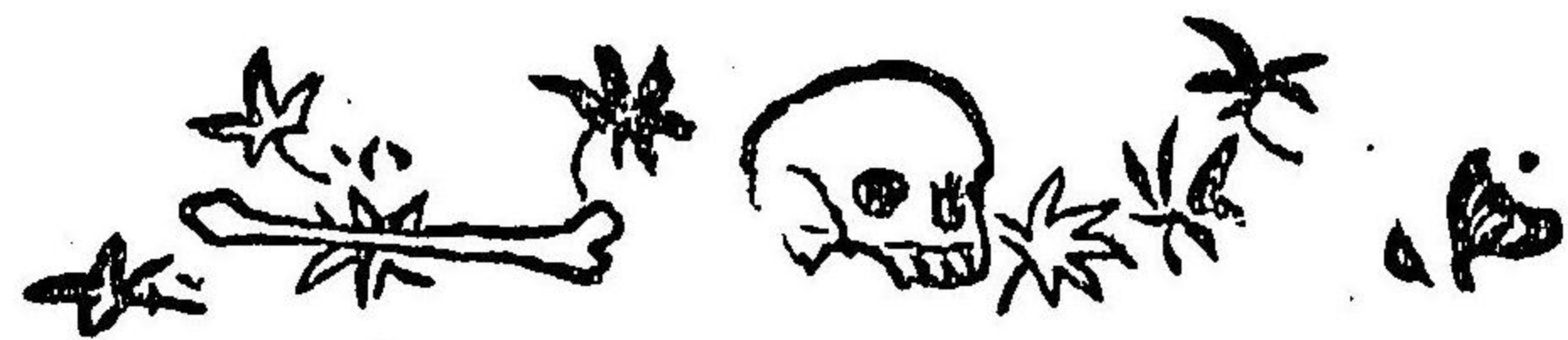


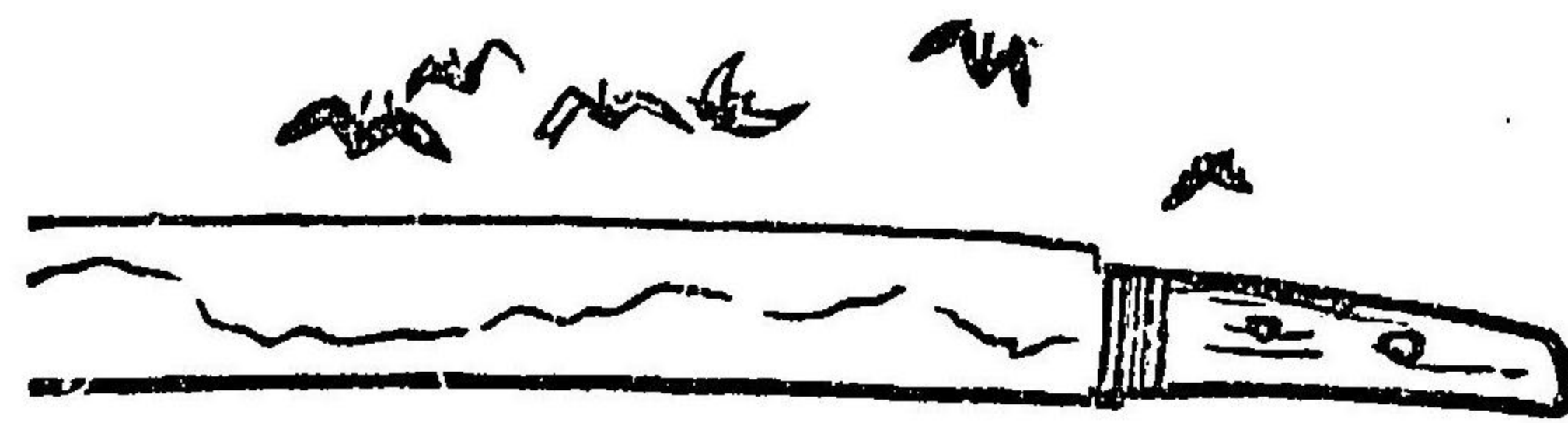


「僕にも！ 僕にも！」
 「レモンは悉になつた。」
 「そりや不都合だ」と忌々しさうに、情けなさうに、殆ど泣かぬばかりに、小聲に言つて、「レモンを樂しみにして来たんだのに。」
 例のが又冴えぬ聲で縮りなく笑ひ出したが、もう誰も止める者もなかつた。が、直きに笑ひ止んで、更に又フ、と笑つて——と、黙ると、誰だつたか、
 「明日は攻撃か。」
 すると、幾人かの聲で、忌々しさうに叱り付け



「止せ、そんな話は！ 攻撃も糞も有るもんか！」
 「だつて君達だつて知らん事はあるまい……」
 「止せてツたら、止せ！ 他に話が無いぢや有るまいし。何だ、そんな事！」
 入日の影は消えた。雨雲も浮き上つて、何處となく明るくなり、人の面も皆見覚えのある面になつた。今迄周囲をグル／＼廻つて居た男も落着いて、其處の椅子へ腰を卸して、
 「今ごろ國ぢや如何なだらう？」
 誰に言ふともなく言つたのだが、其聲に何か面

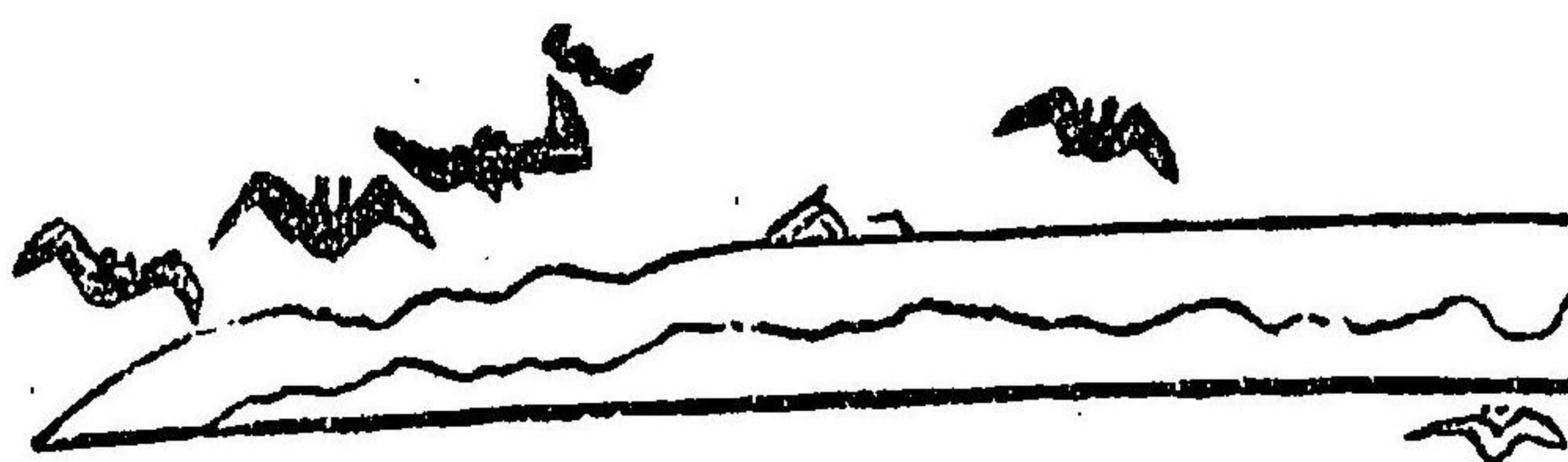




目なさうに微笑した響があつた。

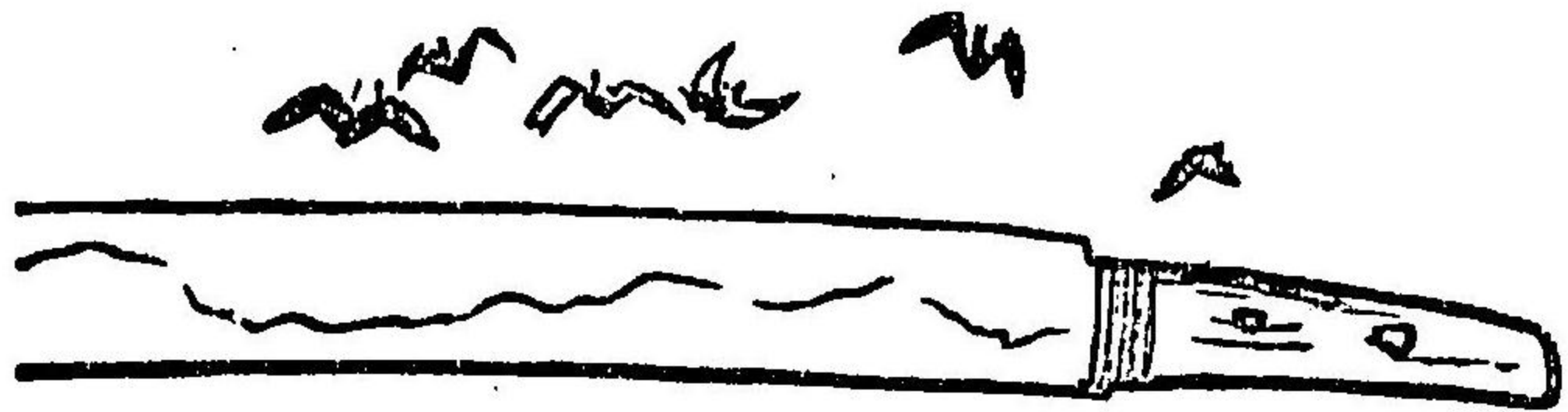
と、又薄氣味悪く合點の行かぬ光景になつて、其處らの物が悉く變に見えるから、皆堪らなく夢中になつて、一度にコップを推除け、互の肩、腕、膝に觸り合つて、饒舌り出し、喚き初め、暫く紛紛してゐたが、ふと又口を噤むで了つた。變な光景は矢張變でならぬ。

「國ちやア？」と誰だか暗黒から喚いた。國の噂が始まると、ハットして、忌々しくもなるし、胸もわく／＼するので、聲までが皺唄れた顔へ聲になる。で、饒舌り出したが、時々言葉に差支へる。

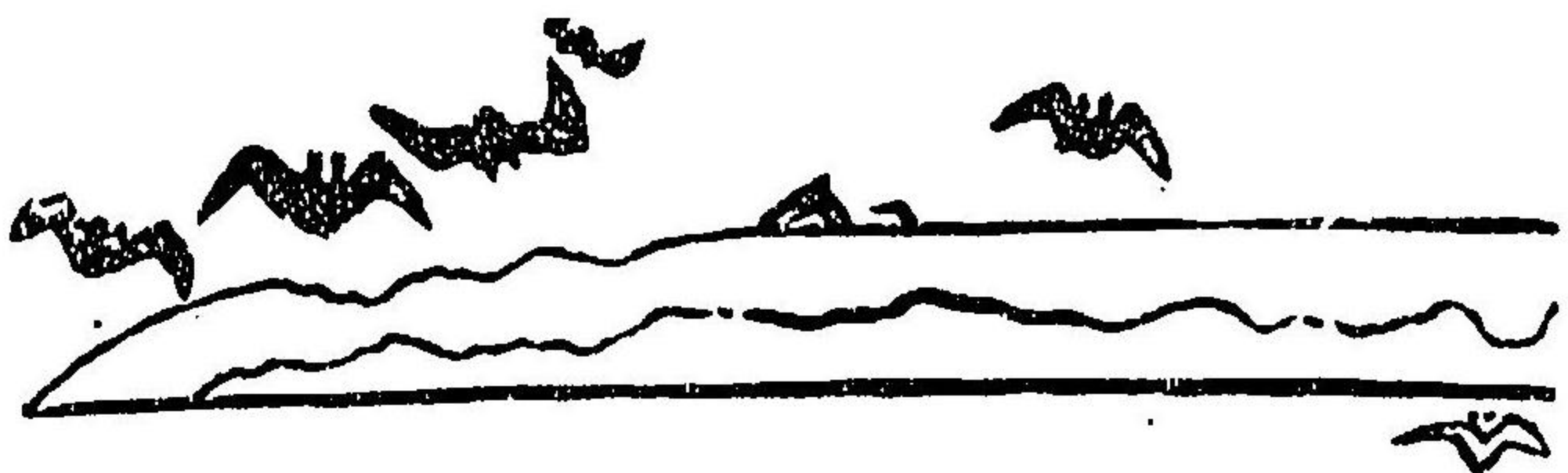


もう國言葉も忘れてゐるやうで。「國ちやア？國とは何だ？國が何處かに有るのか？人の物を言つてる中に口を出すな。出すと、打發すぞ。僕だつて、國に居る時分にや、毎日湯を沐つたもんだ——宜しいか、湯槽に湯を入れて——湯を一杯入れて沐つたもんだ。ところが今ちや毎日身も拭かんから、頭に雲脂が溜る。雲脂が溜つて、結痂のやうな物が出来て、身中何だか這ふやうで、むづ痒くツて——僕あ垢で氣狂ひになりさうだ。それなのに君は國の噂を始めたな？僕はもう畜生だ、自分ながら愛想が盡きる、自分とは思へん

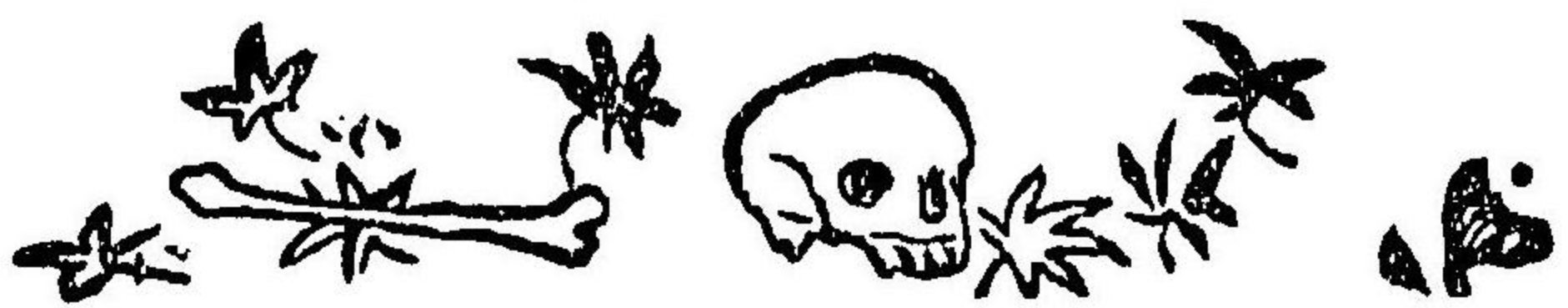


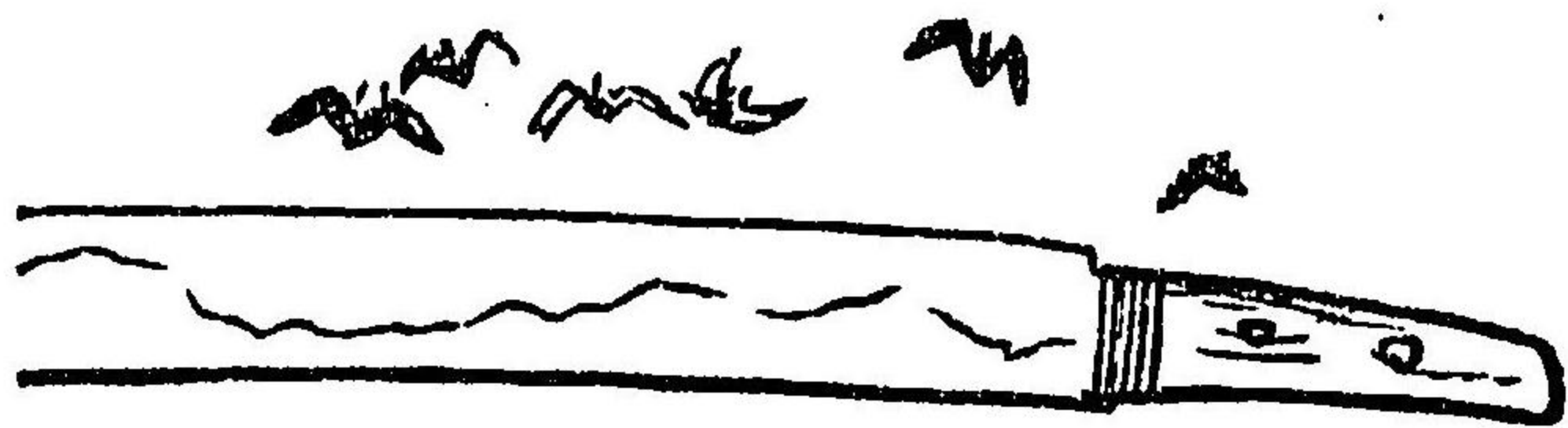


位だ。人間も斯うなると、もう死ぬのも其様なに
 快ろしくなくなる。それに君達が撃出す榴霰弾で
 頭が割れさうになるんだ、——頭が。何處へ向け
 て撃つたつて、皆僕の頭に當るんだから。それだ
 のに君は國の噂を始めたな？ 國とは何だ？ 矢
 張町が有つたり、家が有つたり、人が居たりする
 ンだらう？ 僕はもう戸外へ出るのも御免だ。見
 つともない！ 此處に湯沸が有るけど、湯沸を見
 るのも極りが悪い、——湯沸を見るのも。」
 例のが又笑ひ出した。誰だか大聲に、
 「聳ッ！ 僕も國へ歸る。」

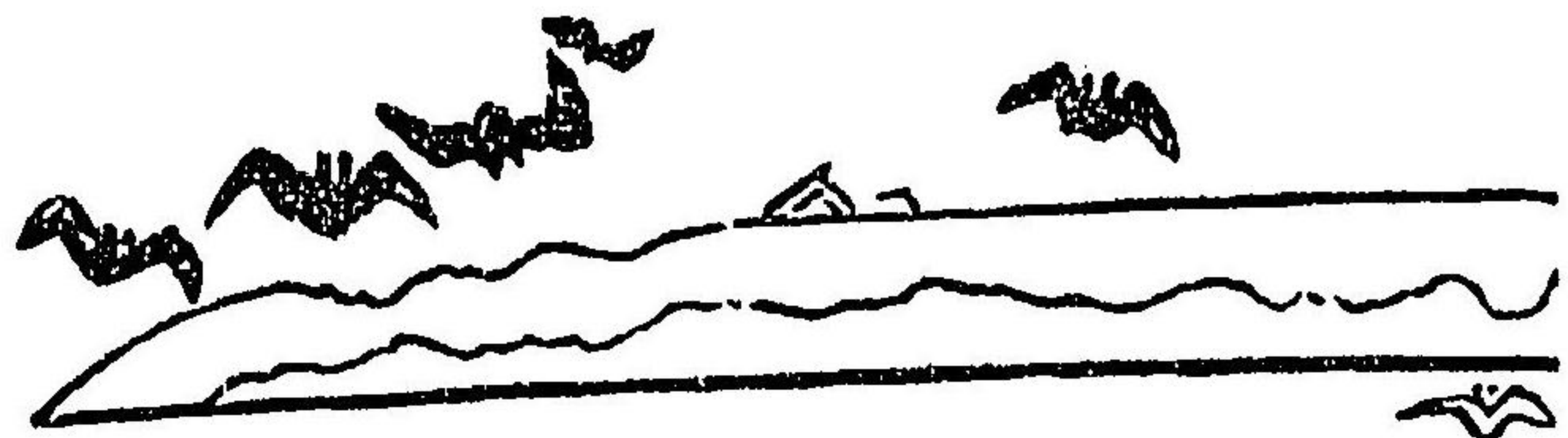


「國へ歸る？」
 「君は軍人の本分を忘れたな？……」
 「國へ歸る？ おい、——此處に國へ歸りたい者
 が一人出来たぞ。」
 皆ドット笑つた。無氣味な叫聲も聞えたが——
 又皆口を噤むで了つた。矢張變でならない。私ば
 かりぢやない、幾人居たか知らないが、其場に居
 合した者が皆さう感じた。その變な氣勢が、薄暗
 い奇怪な野から逼つて来る、岩の袂間に置忘れ
 て、死に瀕した者が有るかも知れぬ、陰々と眞黒
 な谷間からも立騰る、見も及ばぬ怪しの空からも



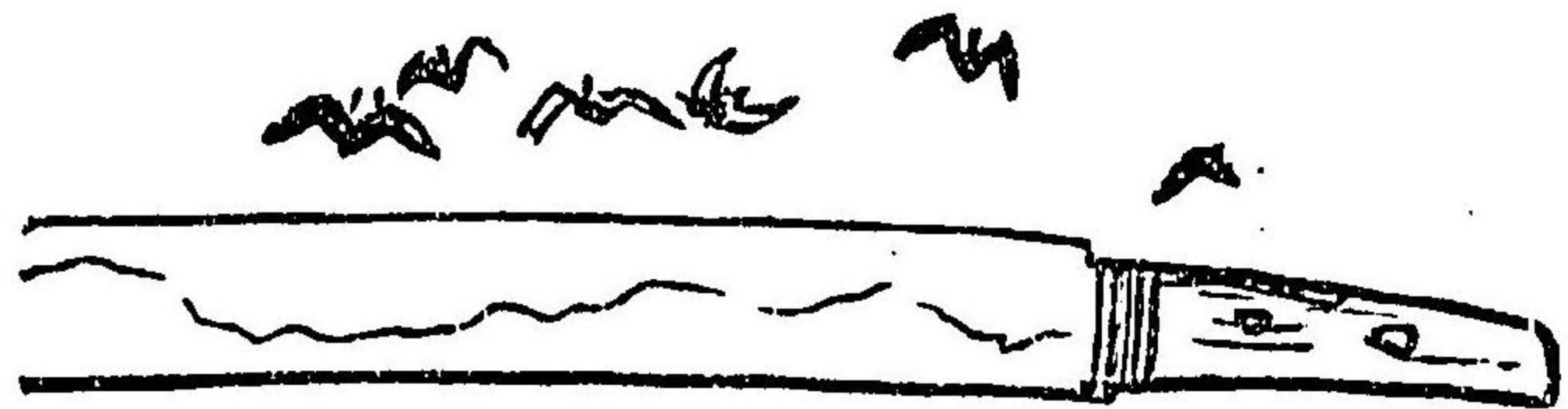


降りる。皆懐ろしさに生きた空はなく、黙つて火の消えた湯沸を圍むで立つてゐたが、頭の上には漫々と邊際もない黒い影が此世を壓して、慘として音もせぬ。と、忽ち、ツイ間近の、多分は聯隊長の宿舎あたりと思はれる處で、軍樂の彈奏が始まつて、無性に浮いた高調子の物の音色が夜の寂寥を破つて、火花のやうにパツと起る。餘り高過ぎ、餘り愉快過ぎる程の急な亂調子で、無性に競ひ立つて浮かれてゐる。大方彈奏者にも聴手にも、矢張吾々同様に、漫々と邊際もない黒い影の此世を壓するのが見えるのだらう。



そのオーケストラの中で喇叭を吹いてゐる者だけは、正しく自分に、自分の臍に、耳に、もうこの邊際もない無言の影を宿してゐるやうに思はれる。險しい破れたやうな喇叭の音が、駆巡り、躍上り、餘の音を離れて何處ともなく、懐ろしさに戦き、伴ふ物もなく獨り狂つて行く。他の樂器の音色は此喇叭の音を顧みて驚いたやうに、蹶きつ、倒れつ、起きつ、しどろもどろに見ともなく散つて行く。それが餘り高過ぎ、餘り愉快過ぎる程の調子で、これでは餘り眞闇黒の谷間にも接近し過ぎる、——岩の狭間に置忘られて死に瀕し





た者が有るかも知れぬのに。
私達は久らく火の消えた湯沸の周囲に立つて、
黙つてゐた。

(断篇第五)

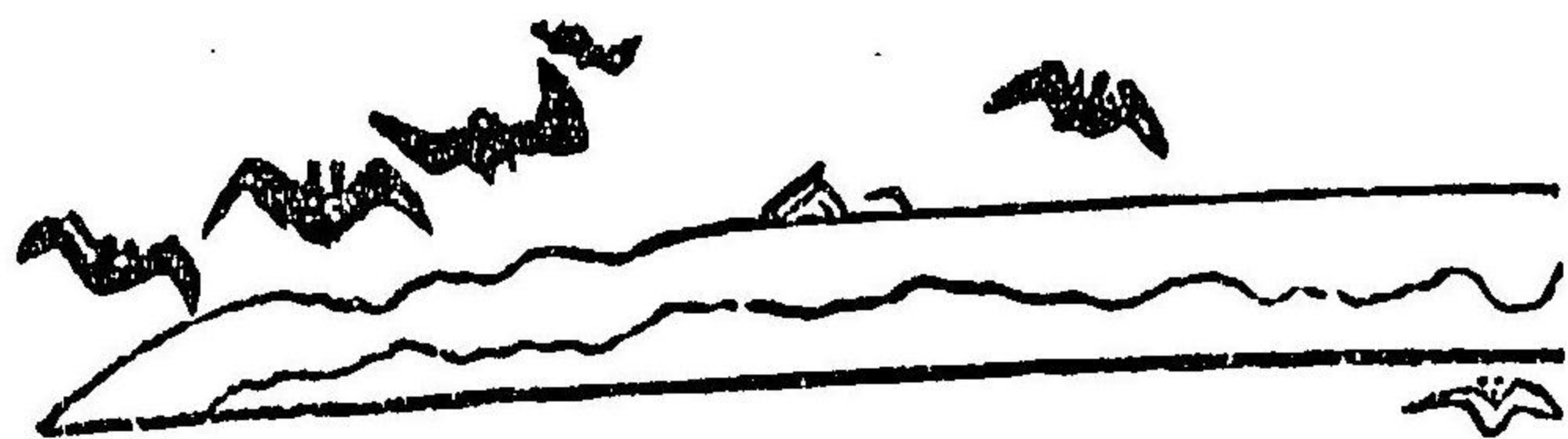
：もう眠つてゐたら、ドクトルが窃と突いて覺
すから、私は目を覺すが否、呀といつて跳起きた。
誰でも覺されると、斯う聲を立てたものだつた。
で、天幕の外へ駈出さうとする私の手を、ドクト
ルは確と執つて、而して謝罪をいふ。
「唐突に覺して濟ませんでした。お腫からうとは



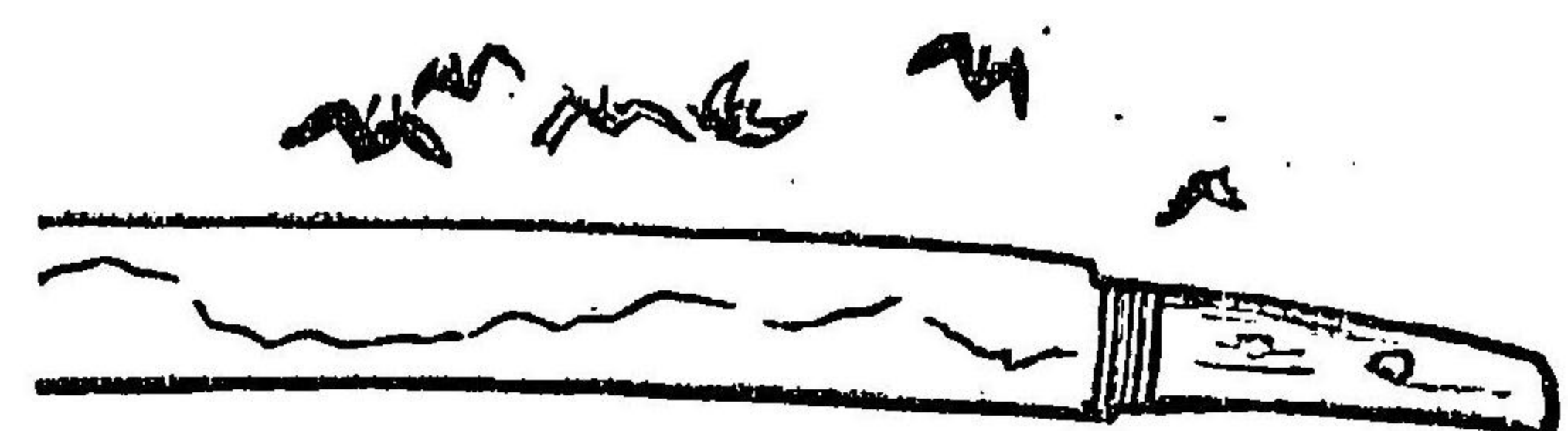
思つたが……

「何しても五晝夜になるンですもの……と、私は言
つたが、半分は夢で、其儘又昏々となつた。久ら
く眠てゐたやうだつたが、ドクトルが私の横腹や
足を窃と突き、又話し出す聲が耳に入る。
「しかし止むを得ないので。貴方もお辛からうが、
實際止むを得ないので。どうも私にや……安閑とし
て居れん。どうも私にやまだ負傷者が取残してあ
るやうに思はれて……」
「負傷者とは？ 今日一日收容してゐたぢやない
ですか？ 私を覺さんだつて好き、うなものだ。餘



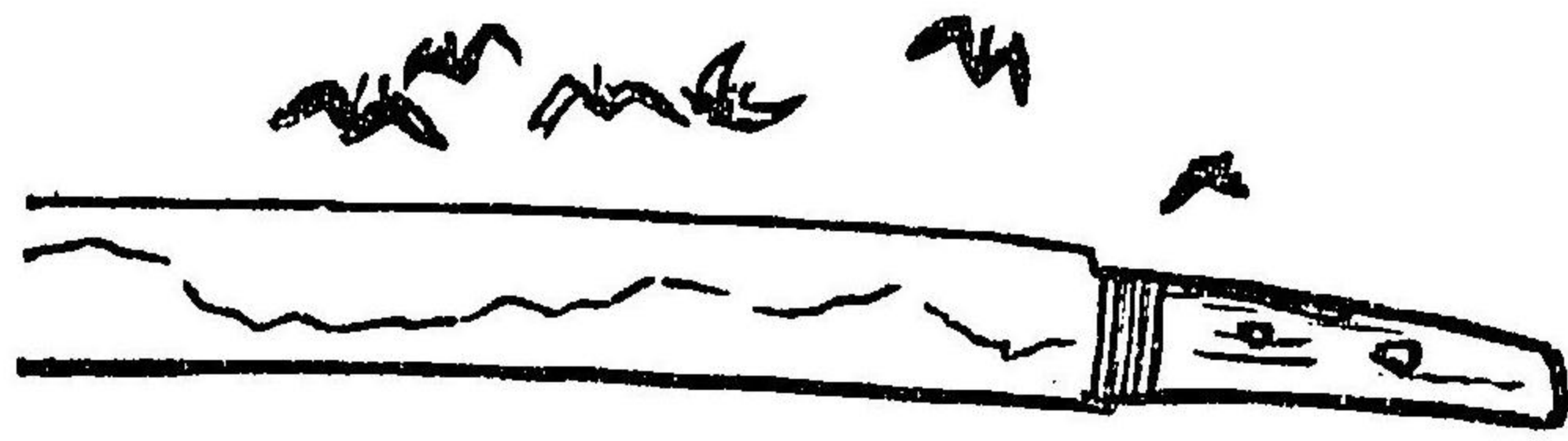


い、片一方の足から。そうく……」
 ドクトルは蒼褪めた顔をしてふらくしてゐる。
 一寸でも下に居たら、其儘何晝夜も打通しに寝か
 ねない様子だ。私も足に他愛がない。と、鼻の先
 に眞黒な物が一列見える。それが餘り突然で、意
 外で、地から湧いたやうだつたから、何でも歩き
 ながら昏々してゐたに違ひないが、その眞黒な物
 は汽車だつた。暗くて能くは見えなかつたが、其
 側をノソリくと黙つて彷徨いてゐる者がある。
 機関車にも車輛にも燈火が點いてゐなかつた。唯
 蓋をした火口から朦朧した火影が薄赤く線路へ落



り酷い！ 私は五晝夜も眠なかつたのだ。」
 「まあ、然う憤つたものでない」とドクトルは口
 の中で言つて、無器用な手附で私の頭へ帽を冠せ
 てから、「皆寐込んで了つて、幾ら覺しても、起
 さんのですもの。機関車の車輛が七臺用意してあ
 るのだが、乗つて行手がない。そりや私も察し
 ；が、何卒、まあ、行つて下さい。皆寐込んで了
 つて、如何しても行かうと言はん。私だつてコ
 クリとなりさうで仕方がないのだ。何日寝たつけ
 か、もう覺えがない位のもので、そろく幻覺が
 始まりさうな氣がする。まあ、瘴臺をお降りなさ





ちてゐたのみで。

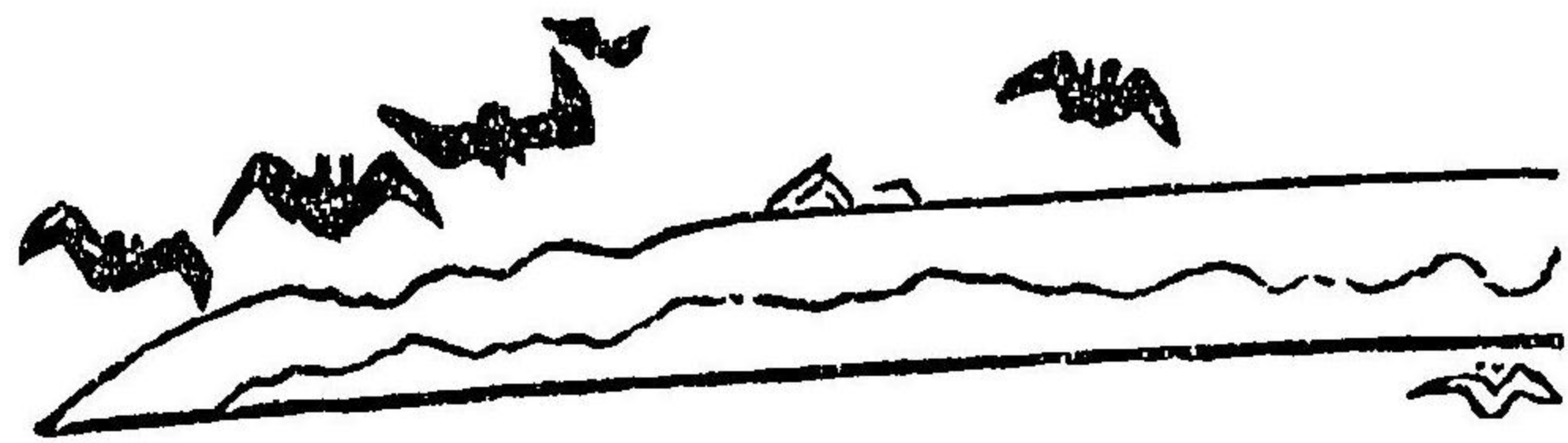
「何ですか、これは？」と私は逡巡をした。

「汽車で行くのです、汽車で。今の話をもう忘れ
ましたか？」とドクトルがいふ。

寒い晩でドクトルは震へてゐる。私もそれを見
ると、身體中を攪られるやうな氣持で、矢張りガタ
ガタ震へる。

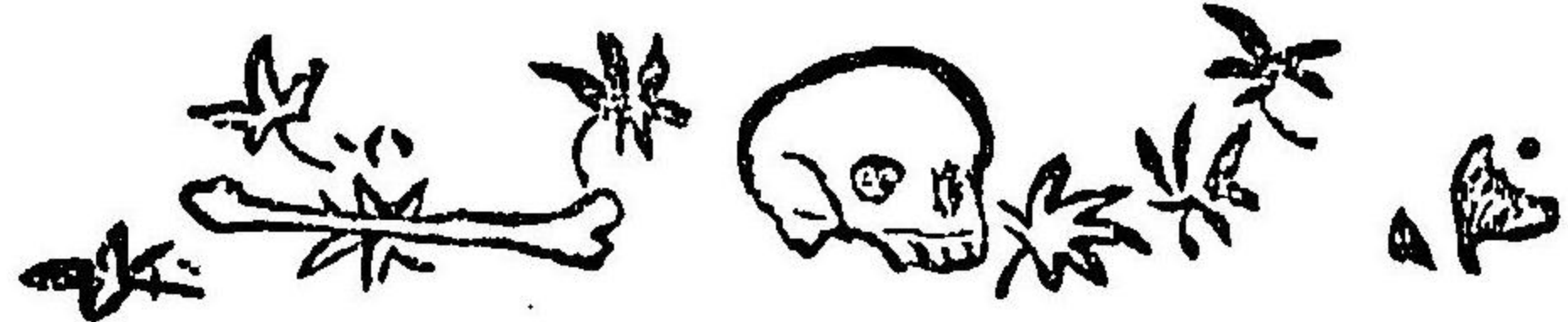
「酷いなあ！私を見立つて連れて行くのは酷い、
と私は大聲にいふと、

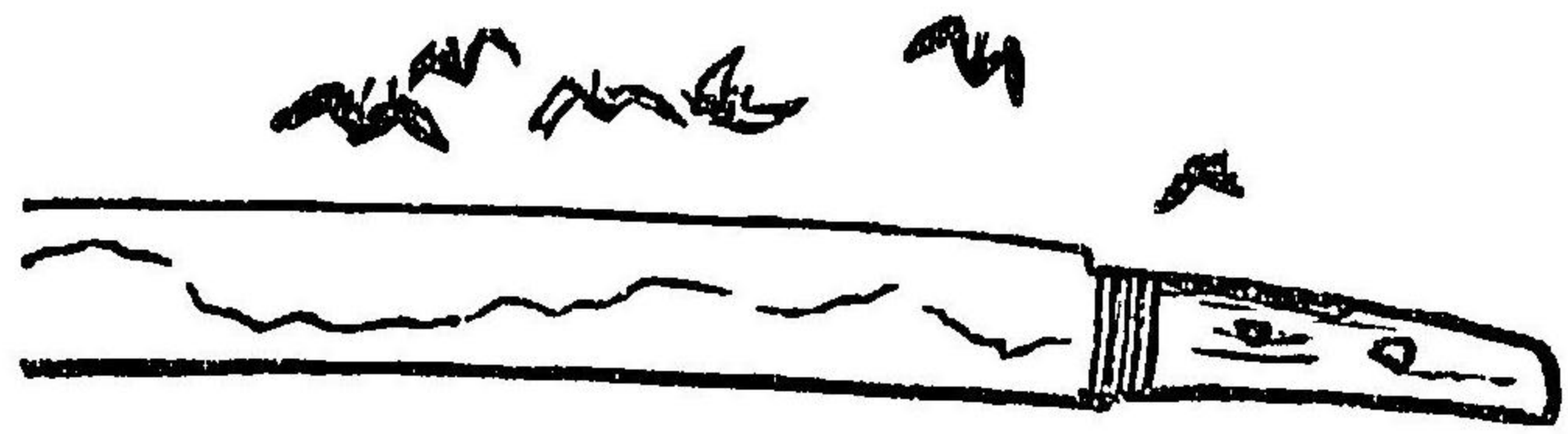
「静かに、静かに」とドクトルは私の腕を抑へた。
誰だか暗黒から、



「此鹽梅ちや有ッ次の砲で一斉射撃をやつたつて、
皆ビクともしないな。敵も矢張り寝込んでゐるだら
うて。今なら側へ行つて片端から引括れる。己は
今哨兵の側を通つて來たのだが、先生一寸人の面
を見たばかりで、何とも言はん。凝然としてゐた。
屹度矢張り眠てゐたんだらう。能くつんのめらない
で居たものさ。」

と斯う言つて欠びをした。で、さらくと服の
擦れる音のしたのは、大方伸をしたのだらう。私
は車輛へ攀ち登らうとして胸を其端に掛けると一
忽ち夢に入つて了つた。誰だか後から持上げる





やうにして載せて呉れたが、私は其人を蹴飛ばして、又寐こけた。と、夢の中にこんな話が断續に聞える。

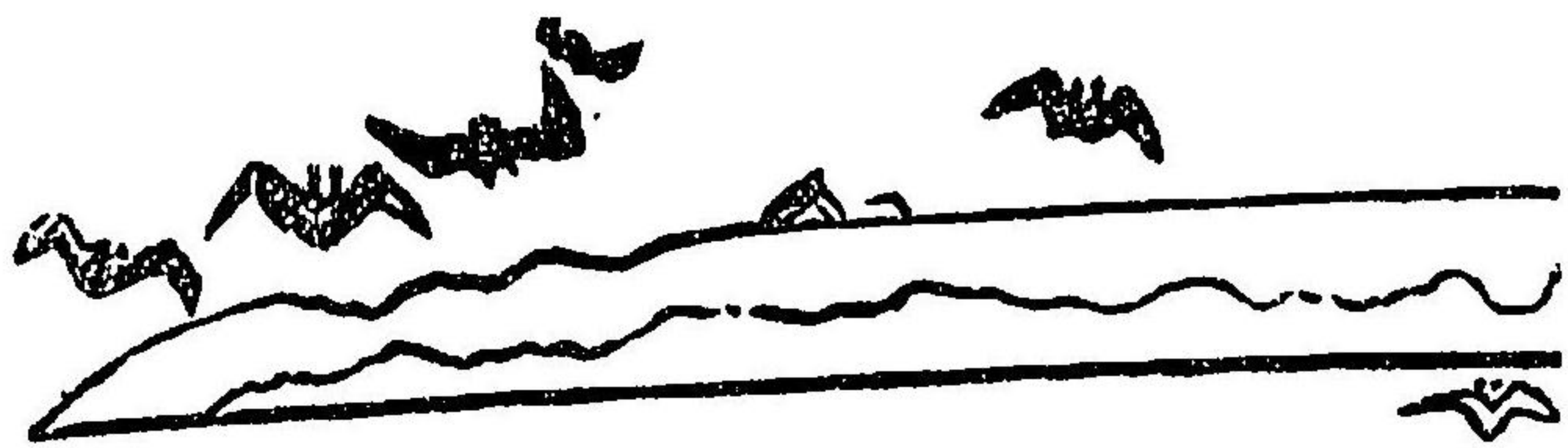
「六ツエルスト行つてからだ。」

「忘れたのかランプを？」

「いや、彼奴は行くまい。」

「此處へ寄越せ。少し後へ退却させた。さうだ。」

汽車が居去る、何かガタ／＼と鳴る。安樂に横になつて斯ういふ音を聴いてゐると、私は次第に目が覺めて来たが、ドクトルは反て寢入つてゐる。其手を握つて見ると、死人の其のやうに頽然とし



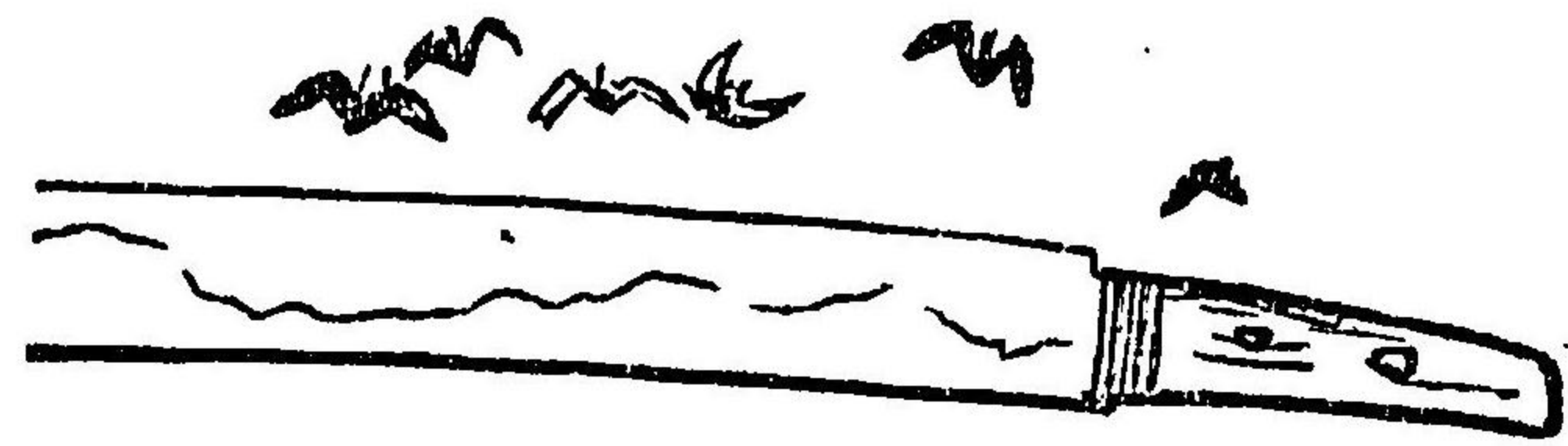
て重たい。汽車はもう動き出して、心持ち震動しながら、探足で行くやうに、用心しつゝ徐々と進む。看護手の醫學生がランプに火を點すと、其光に車室の羽目や戸の黒い孔が照し出された。憤々怒りながら、醫學生が、

「馬鹿々々しい！ 今時分行つたつて仕様がなない。」

貴方、先生が寢込まない中に覺して下さらんか？ 寢込んだら、もう駄目です。僕も覺えがある。」

二人して搖覺したら、ドクトルは起直つて不思議さうにキヨロ／＼して又寢倒けやうとするのを、





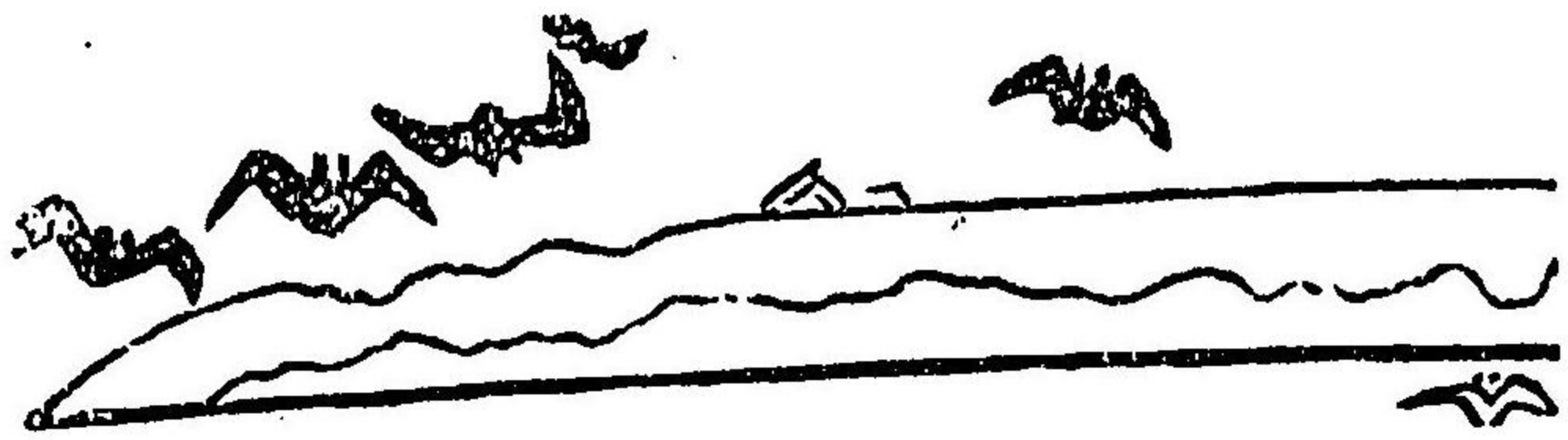
どっこい、然うはさせなかつた。

「今頃ウオットカを一杯キユウと引懸けるなんぞは悪くないな」と醫學生がいふ。

で、コニヤクを一口づ、飲むたら、睡氣は奇麗に去れて了つた。黒々と大きい四角な戸が薄赤くなり、終に赤々と點し出されて、小山の向ふの空一杯に火影が深々と映る。宛然真夜中に日が出たやうだ。

「あれは遠方ですな。二十ウエルストも離れた處だ。」

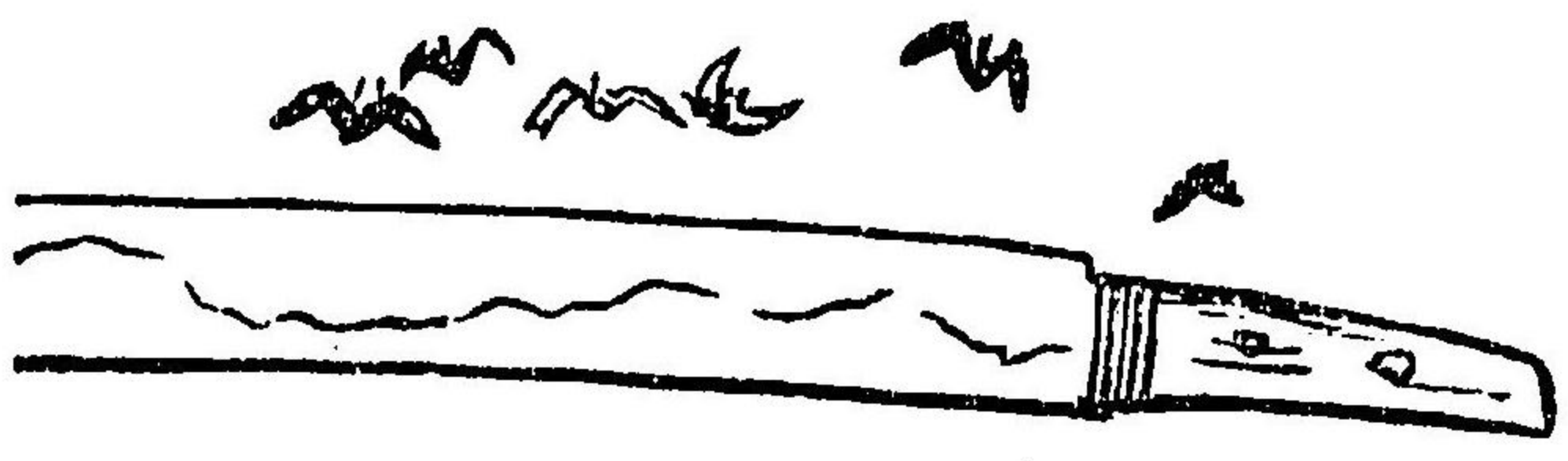
「寒い」といつてドクトルは齒を切つた。



學生は一寸戸の外を覗いて私を塵くから、覗いて見たら、地平線の處々微と赤く音もさせず鎮まり返つてゐる兵火の映りが、其から其へと連続して、宛然數十の太陽が一度に出るやうで、もう左程暗くもない。遠方の山々は黒々と浪のうねつたやうに起伏して劃然浮出し、近くの物は皆しんめりとした寂かな光を受けて赤々と見える。學生の面を見ても、矢張り血に染つたやうに赤く、此世の人の色でない。血が飛散して空氣となり光となつたやうに思はれる。

「負傷者は餘程有りますか？」





と聞くと、學生は手を擲つて、
 「狂人が多いのです。負傷者より狂人の方が多い
 のです。」

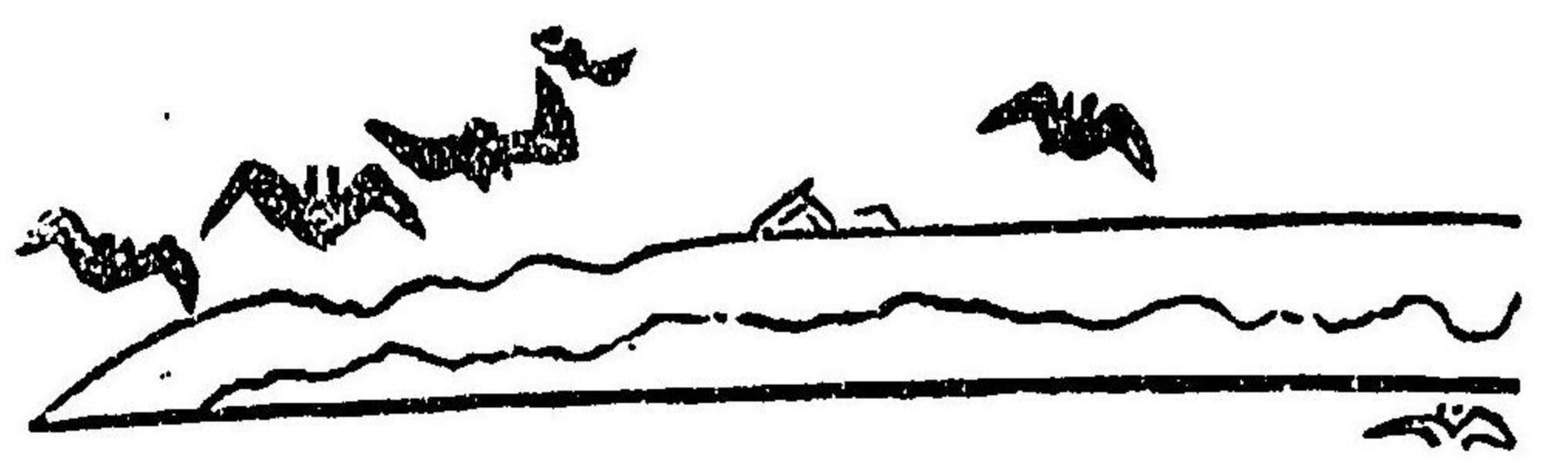
「本當の狂人が？」

「假の狂人といふのも無いでせう。」

と此方を振向いた學生の目差は凝然と据つて、
 物凄く、冷たい恐怖に充ちて、例の日射病で瘥れ
 た兵の目差其儘であつた。

「好加減な事を」と面を反けると、

「其様な事言つて、ドクトルも矢張り狂つてます
 ぞ。まあ、一寸御覽。」



ドクトルには私達の話が聞えないやうだつた。
 土耳其人のやうに箕踞をかいて、ふら／＼しなが
 ら、唇と指先を音もさせず頰はせてゐる其目差は
 矢張り凝と据り、茫然と鈍く腑が脱けたやうだつ
 たが、

「寒い」といつて微笑した。

「貴方がたは實に酷い人達だ！」と私は大聲に言
 つて車室の隅へ行き、「何だつて私を引張り出した
 んです？」

誰も何とも言はなかつた。空は深々と益々赤く
 なつて行く、それを學生は眺めてゐる。頸窩の毛





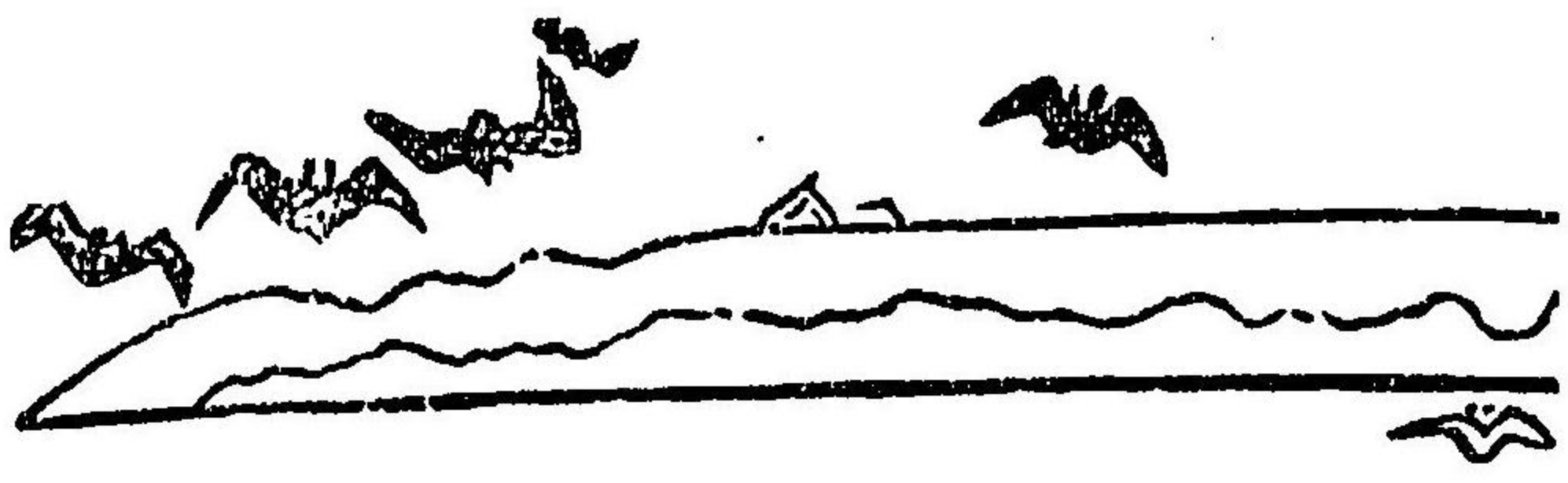
の縮れてゐるのも若々しい。之を觀てゐると、何故か繊細い女の手が此毛を弄つてゐるやうに思はれてならぬ。それが又癩に觸つて、遂に學生迄が小面憎くなつて来て、面を見ると、胸がもかつく。「君は何歳です？」といつても返答をしない、振り向きもしない。

ドクトルはふらくししながら、

「悪い！」

學生は餘所を向いたまゝで、

「僕は何だ、僕は此世の何處かに町や家や大學が有ると思ふと……」



ぶつりと言葉尻を切つて、これと言ひたい事を皆言ひ盡したやうに黙つて了ふ。ふと唐突に汽車が止つたので、私は羽目に衝突つた。がやくと人聲がする。皆急いで外へ出て見た。

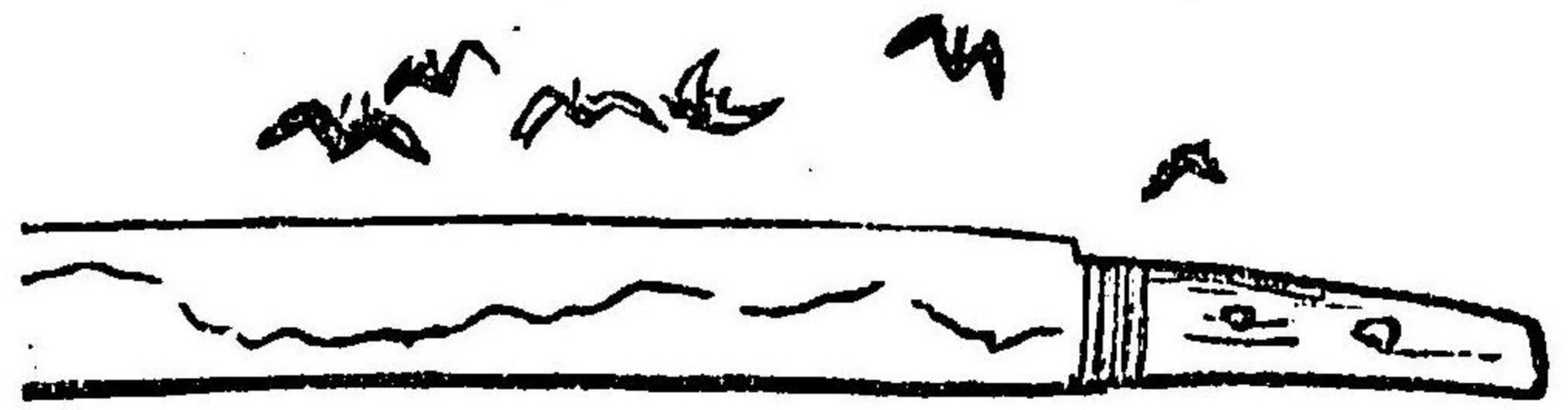
機關車の直ぐ前の線路の上に何か横つてゐる。

大して大きな物でもなかつたが、それからユツと足が一本出でてゐた。

「負傷者ですか？」

「いや、戦死者です。首無しだ。しかし、こりや如何しても前の燈火を點けずにや居られん。これぢや轢潰す。」





足を突張つた物を線路外へ投げ出したら、虚空
を踏むで駈出してもするやうに、一寸宙で踏反つ
て、ボンと眞暗な溝の中へ陥つて了つた。燈火が
点く——と、もう機關車が眞黒に見える。
「おっ、い！」と誰だか小聲で如何にも氣疎さうに
呼ぶ。

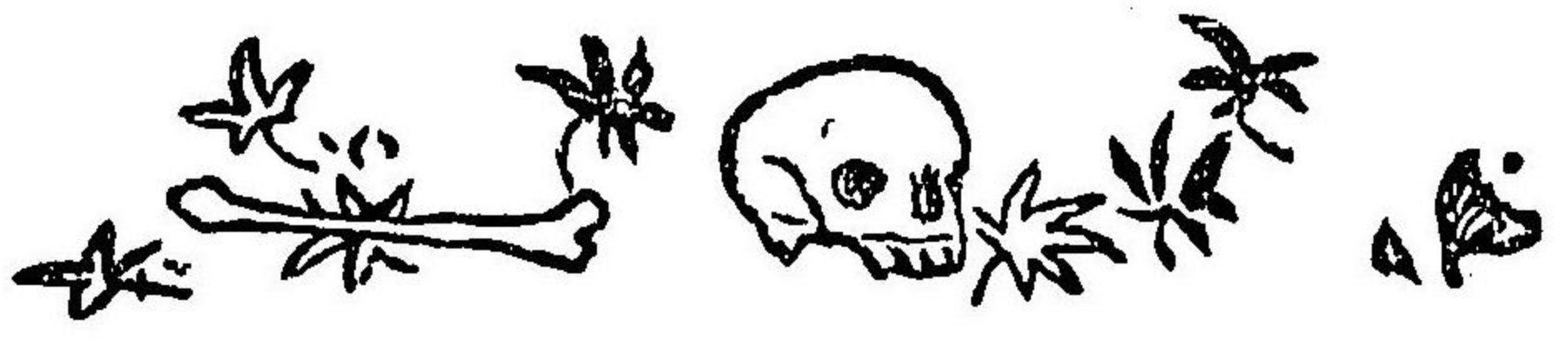
今迄聞えなかつたのが不思議な位だが、何處と
もなく方々に呻聲が聞える。高低のない、何かを
掻くやうな、幅のある丈不思議に悠然した——の
を通り越して、もう如何なとなれと投げ出したや
うな呻聲だ。今迄随分喚聲や呻聲を聞いた事もあ



るが、此様なのを聞いた事がない。朦朧と薄紅い
地面には何も見えないから、呻くのは大地か、そ
れとも出ぬ日の光に照された大空かと怪しまれる。
「四ツエルスト来た」と機關士がいふ。

「彼聲は向ふの方ですのだ」とドクトルは行手
を指す。學生は愕然として徐々此方向き、
「何ですか彼聲は？」 いや、どうも、聴いてをら
れん！」

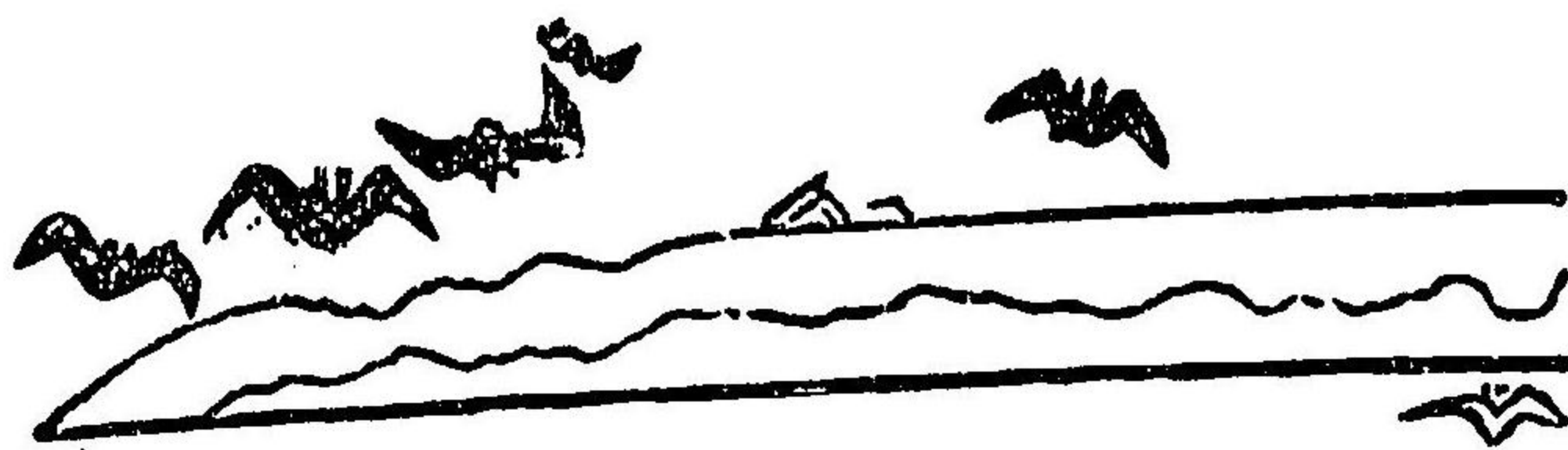
「ま、行かう。」
で、私達は機關車の前に立つて歩いて行つた。
銘々の影が繁がつて長く——線路の上を這つたが、





影は黒くはない、薄朦朧と赤かつた。暗黒な空の
 端に、處々兵火がしんめりと音もさせず鎮まり返
 つて見える、それが映るからだ。行程に例の物凄
 い、何が呻くとも知れぬ、奇怪な呻聲が愈々烈し
 くなり勝つて、血潮に赤い空気が呻くのか、乃至
 天地が呻くのかとばかりに、薄氣味がわるい。浮
 世には關繫なさそうに、奇しく、間斷なく呻く聲
 を聴けば、時としては野中の齋斯、單調で暑苦し
 さうに啼く、夏の野中の齋斯の聲に髣髴たること
 もある。で、段々死骸が澤山になる。ざつと檢め
 ては線路外へ投出したが、皆もう何事にも頓着の

七〇



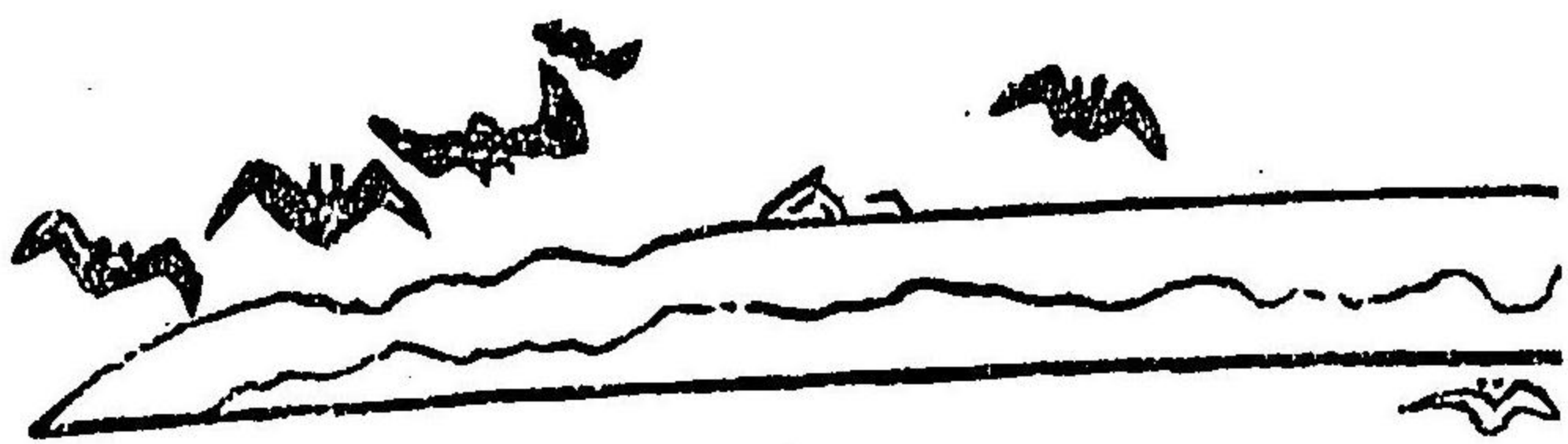
ない、物に動せぬ、頽然とした死骸で、その轉が
 つてゐた跡には、地に吮込まれて血潮が黒く膩ぎ
 つて汚點のやうに見える。初めは數を讀むであら
 が、其中に間違へたから、それなりにして了つた。
 死骸は随分有つた、——夜氣水の如く、其處ら一
 面押なべて呻聲だらけの、氣味の悪い夜にしてか
 ら、餘り有り過る程に有つた。
 「何だあれは？」とドクトルが叫んで、誰を嚇す
 積なのか、拳を固めて揮つて示せて、「一寸——聽
 いて御覽……」
 もう頓て五ウエルストになる。呻聲は愈々判然

七一





と際立つて来て、もう此聲を出す引歪めた口元も眼に見えるやうな心地がする。薄紅い鬨は此世の物とも覺えぬ怪しき底光を含んで眼も綾に迷ふ中へ、私達が恐るゝ看入つた時、殆ど足元の線路の下で、救を呼ぶが如く、泣くが如く、高く呻く聲がする。聲の主の負傷者は直ぐ見付かつたが、手提の光に照し出された其面を見れば、面中が眼ばかりかと思はれる程大きな眼だつた。呻き止んで私達の面や手提を旋次に看る其眼の中には、人影火影を認めて喜んで狂せんとする色の外に、尙ほそれが直ぐ幻と消えやうかと、畏れて狂せんと

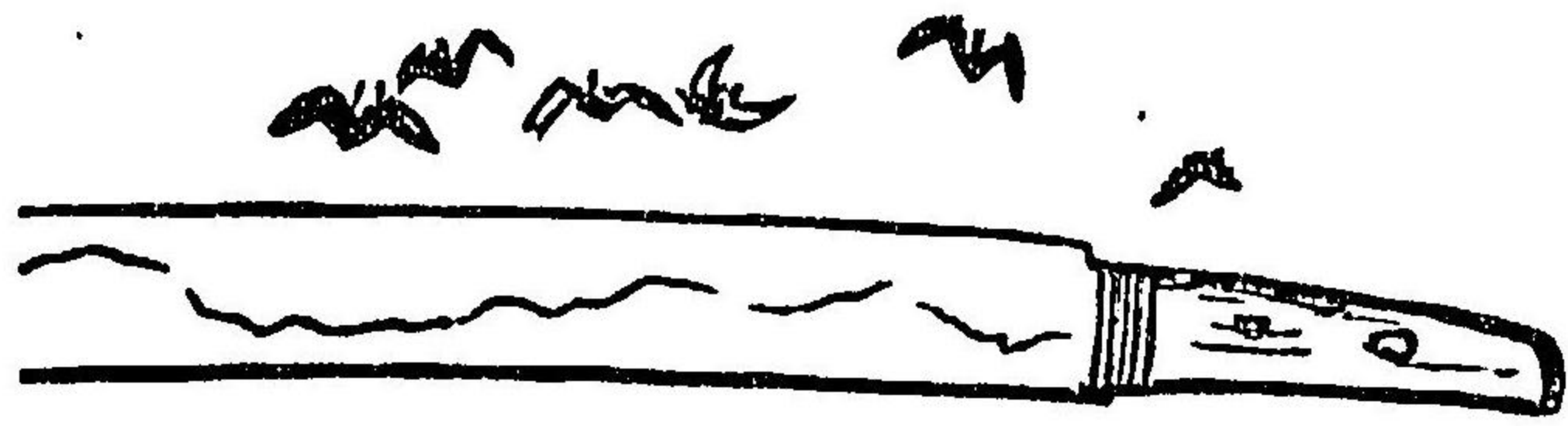


する色も動いてゐた。或は斯う火を睨して屈み掛つた人の姿が、血塗の夢の中にもやゝとなつた事が、既う幾度も有るのかも知れぬ。尙ほ進まんとして、忽ち又二人負傷者に出遭つた。一人は線路の上に倒れてゐて、今一人は溝の中で呻いてゐた。此等を收容する時、ドクトルは怒に身を戦かせて、此方を向き、

「如何です？」

といつて面を反けた。數歩すると、向ふから輕傷者が、片手で片手を支へて、一人で歩いて来た。仰向いて来て私達に衝當りさうだつたから、道を





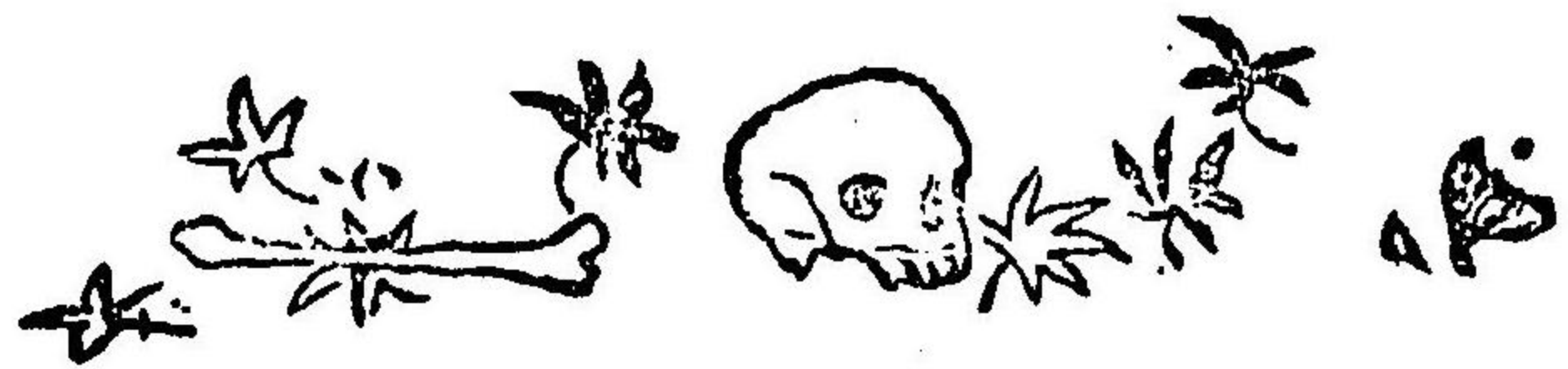
開いて通してやつたが、一向氣が附かぬらしい。恐らく私達の姿が眼へ入らなかつたのであらう。機關車の前でト立止つて直ぐと身を轉開して其横へ出て、今度は車輛に沿って行く。

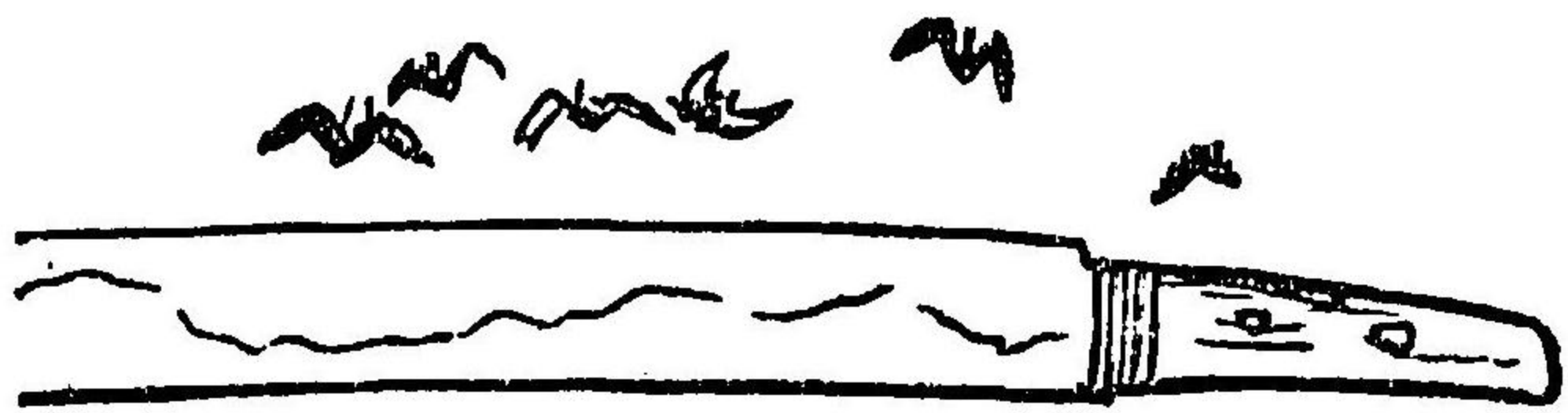
「こら、お前その汽車に乗れ！」とドクトルが呼び掛けたが、返答もしなかつた。

此等を手始めとして、淺ましい姿が頓て線路上にも側にも頻に出遭つて、深々と赤く兵火の照反した野は、魂でも入つたやうに、一面にざわつき出し、大叫喚、號泣、呪咀、呻吟の聲がクワツと起る。隆然と高くなつた黒い物の影が蠢めきの



た打廻る所を見れば、まだ夢ながら籠を出された蟹のやうに、手足を張つて、可怪げな形をして、どたりとして動き得ぬのもあれば、しどろに覺束なく藻掻くのもあつて、どれもく人らしくない。或は黙つて言ひなり次第になるのもある、或は叫き、泣き、悪體吐いて、この夜の血糞く人間の生死に與らぬらしい光景も、かうした深傷を負うたのも、死駭の中に獨り取残されてゐるのも、皆我の所爲でも有るやうに、救はうとする我々を嫉視するものもある。車室にはもう負傷者の容れ場がなく、私達の着てゐる服までグッチョリ血に濡れて、

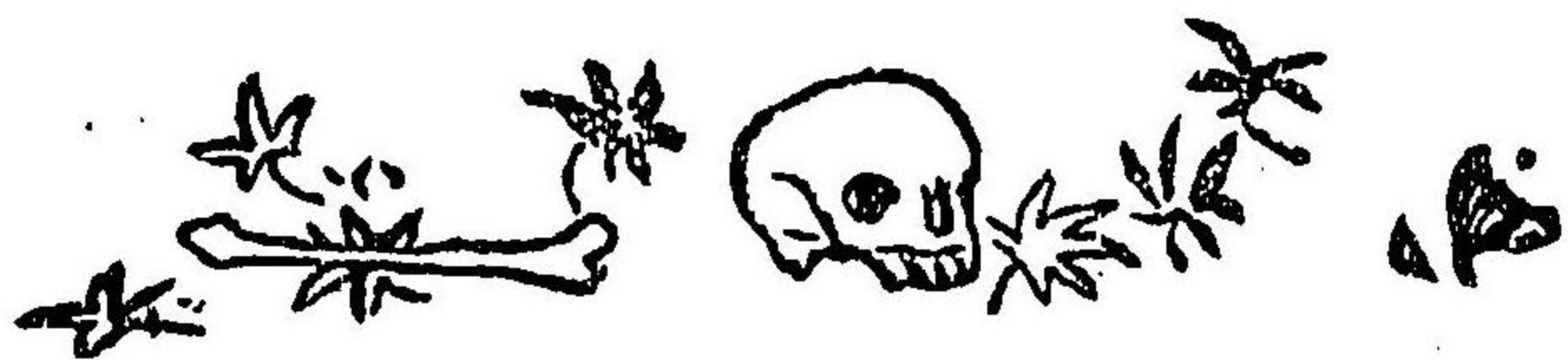


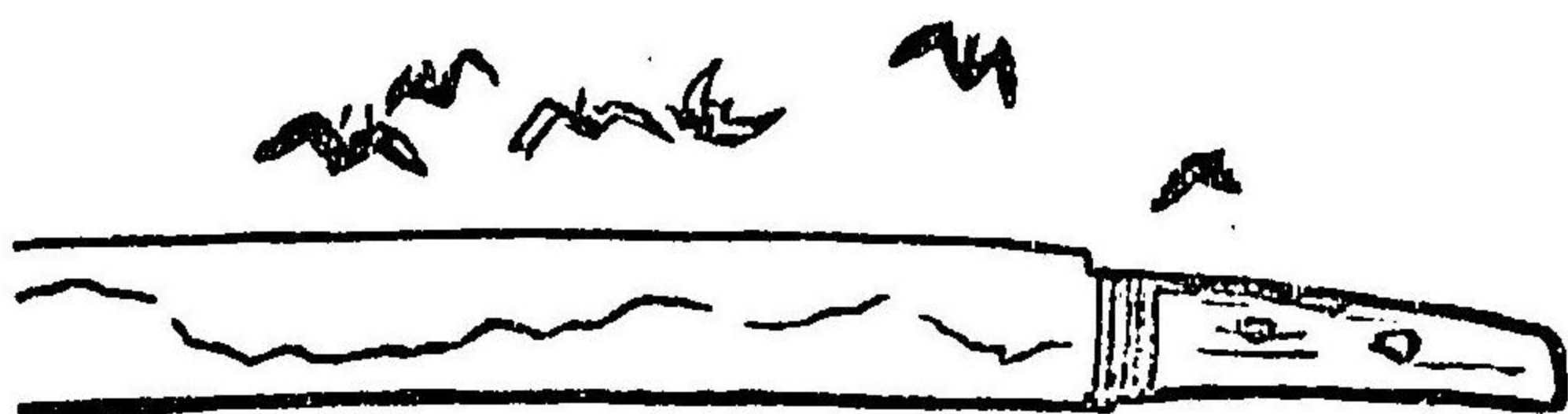


宛然血雨の中に立盡してゐたやうになつたのに、
 まだ負傷者を運んで来て、蘇つたやうに見える野
 は何時までも物凄く蠢めき渡る。
 或者は自分も這ひ寄り、或者はふらくとして
 倒けては起上りく来る。中にも一人殆ど走つて
 来たのがあつた。と、見ると、面はひしやげて、
 一つ残つた眼ばかりが物凄くすさまじい光を湛へ
 湯上りの人のやうに、殆ど一糸をも着けてゐない。
 私を衝退けて、一つ眼でドクトルを探し出し、呀
 といふ間に無手と左手に胸倉を取つて、
 「うぬ：者面打出げるぞ！」



と、かう一つ喚いて置いて、それから小突きな
 がら、悠々と、其辯口汚なく毒づく。
 「貴様の面をグワンとやるのだ。このド畜生め！」
 ドクトルは振放して、ヤツと立向ひ、息を塞ら
 せく罵つた。
 「野郎、軍法會議に掛けるぞ！ 監倉だぞ！ 人
 の職務の邪魔しやがつて：この野郎！ この畜
 生！」
 中へ入つて引分けたが、引分けられても兵は尙
 ほ罵り止まず、久らくは唯、
 「コン畜生！ 者面打出げるぞ！」





とばかり。

私はもう耐へられなくなつたから、一服して休
まうと、片脇へ退いた。手首の血はバサ／＼に乾
いて、黒手袋を穿めたやうに、指もぎこちなく、
マッチやシガレットをつい取落す。斯く喫み出す
と、烟草の烟も平常のやうにもなく變に見えて、
其味も全く異つてゐる。こんな烟草は後にも前に
も喫んだ事がない。其時學生の看護手が側へ來た。
一緒に汽車に乗つて來た彼男だのに、何だか數年
前に逢つた人のやうに思はれて、さて何處で逢つ
たか、憶ひ出せない。學生は直と踵を地に着けて

七八



行進の歩調で歩いて來たが、私の身體越しに何處
ともなく遠くの空を眺めて、

「これだのに皆寝てゐるのだ。」

と何だか落着拂つてゐる。私は自分の事のやう

に憤然となつて、

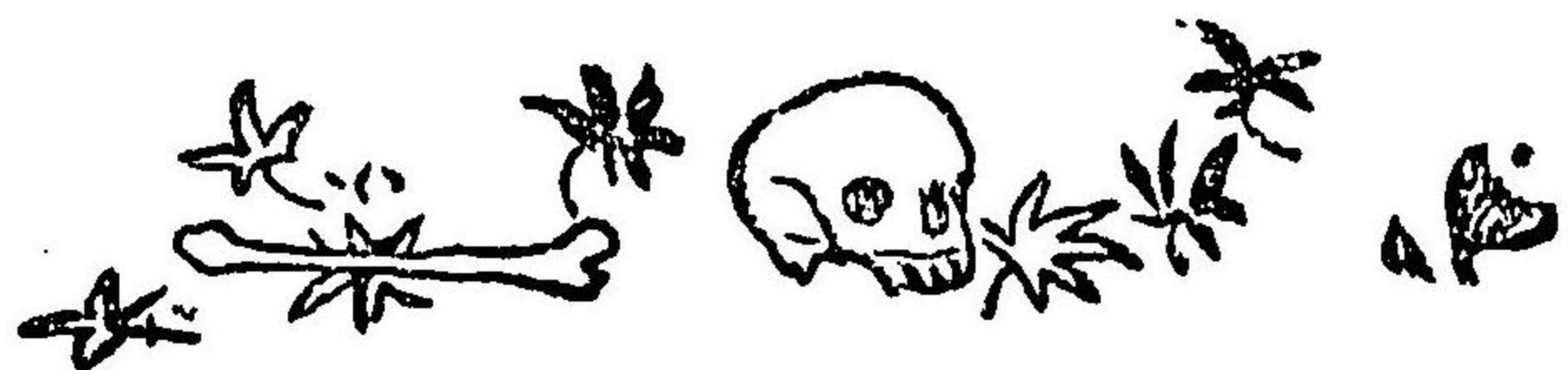
「だつて、君、十日も獅子のやうに奮闘したのだ

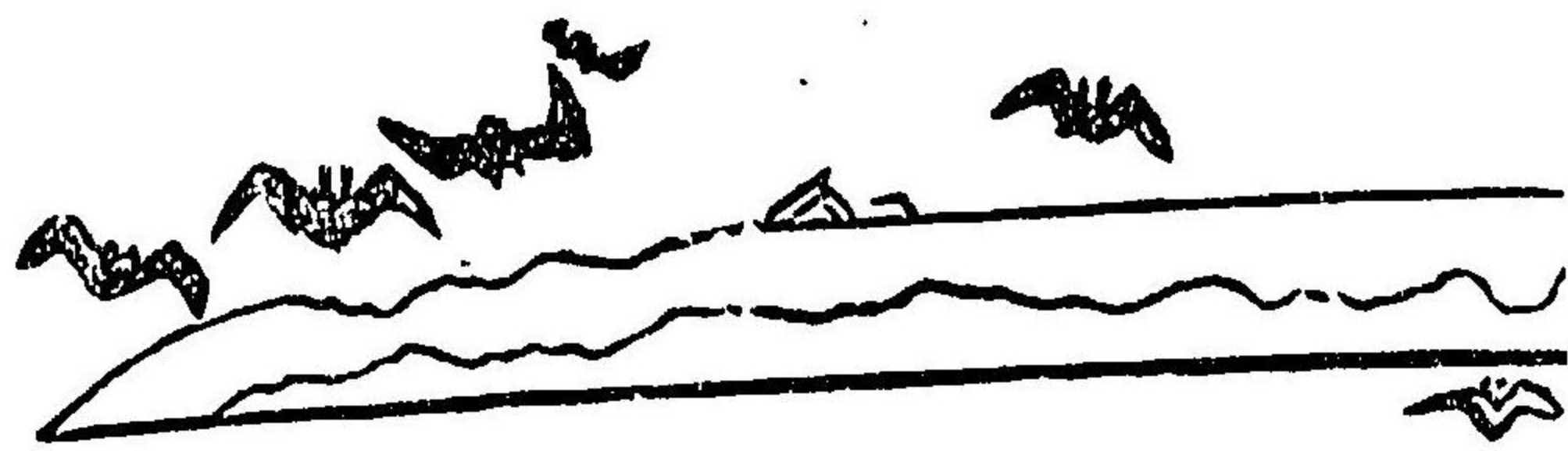
もの、其筈ぢやないか？」

「これだのに皆寝てゐるのだ。」

と學生は私の身體越しに空を眺めながら、反覆
していつて、さて私の面を覗き込むやうにして、
人差指を鼻の先で揮り／＼、矢張膠もなく落着拂

七九





氣でシガレットを左の手に持易へて、指で其創口を觸つて見て、汽車の在る方へ行つた。

「あの學生はピストルで自殺しましたぞ。尤もまだ息はあるやうだが……」

と私がドクトルにいふと、ドクトルは私と我頭に武者振り附いて、唸るやうに、

「馬鹿め……もう汽車は一杯だ。彼處にも今に自殺さうなのが一人居るのだ。私だつて然うだと忌々しさうに叱るやうに言つて、「自殺かねない。全く！だから、貴方は——歩いて行つて貰ひませう。もう載せる餘裕がない。其が不服なら、告



つた調子で、

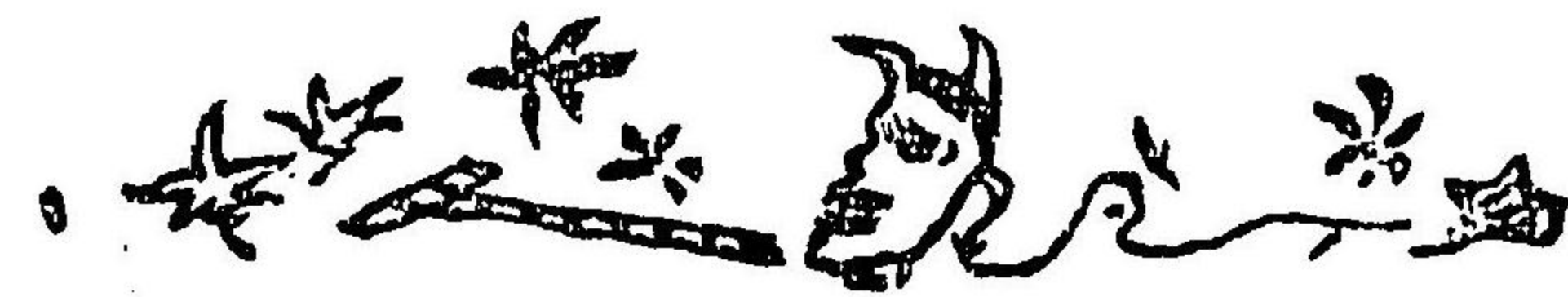
「能く聽いて置きなさい、能く。」

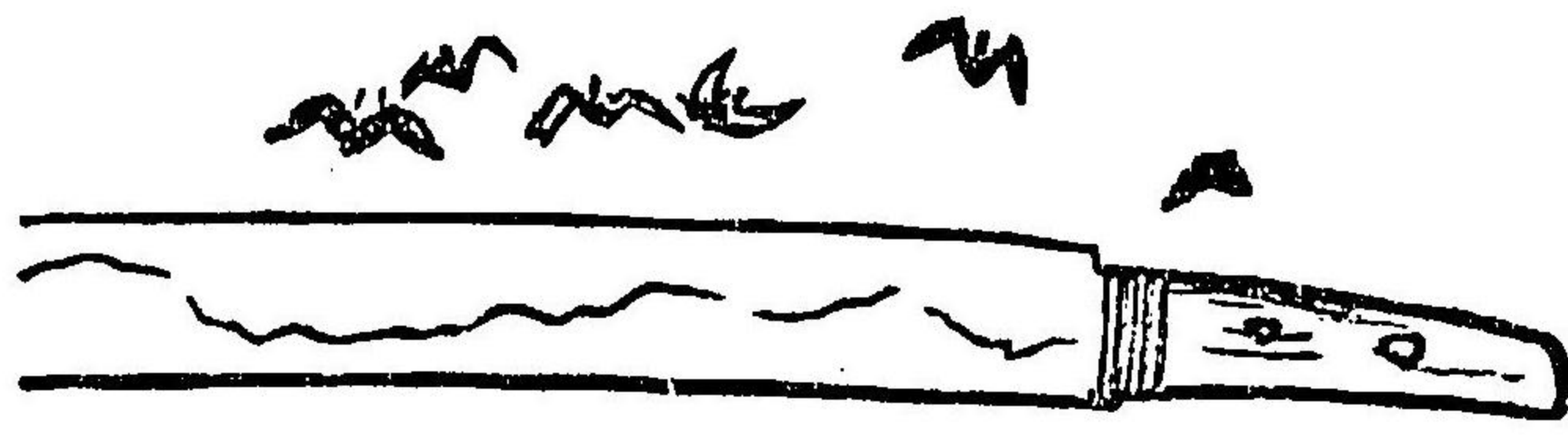
「何を？」

學生は愈々面を覗き込むで、理由ありさうに人差指を揮り、辻褄の合つた話の積らしく、矢張り一つ事をいふ。

「能く聽いて置きなさい、能く。皆にも然う言つて貰ひたいのだ。」

信と私を見据ゑたまふ、も一度人差指を揮つて見せて、ピストルを取出すや、ドンと一發我と我頭へ撃込んだ。けれども私は少しも驚かず、平

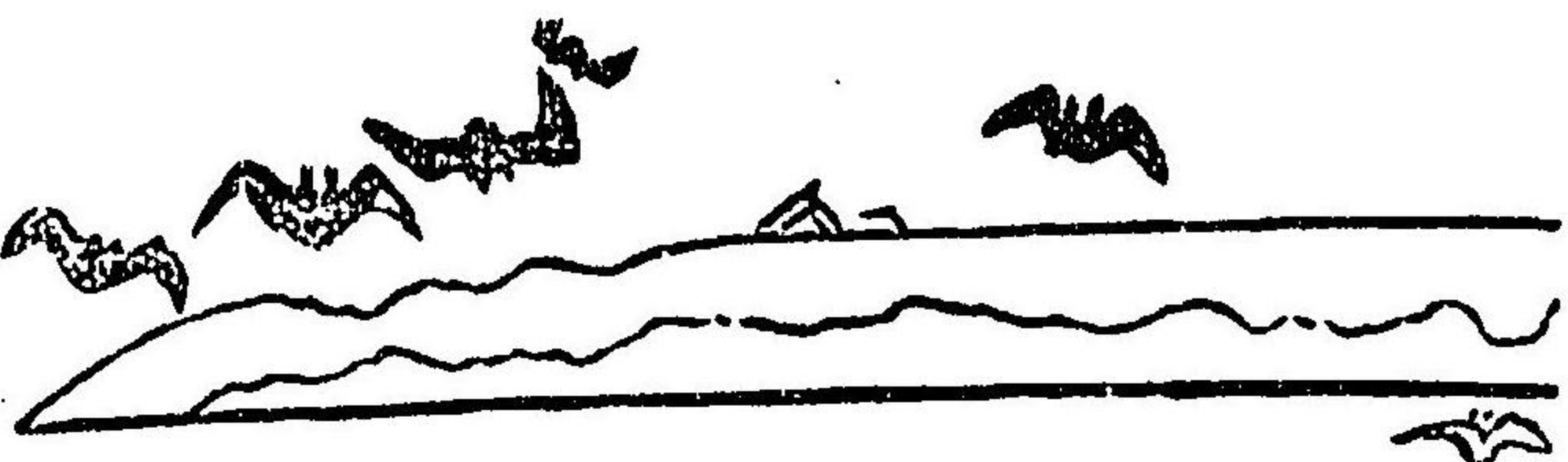
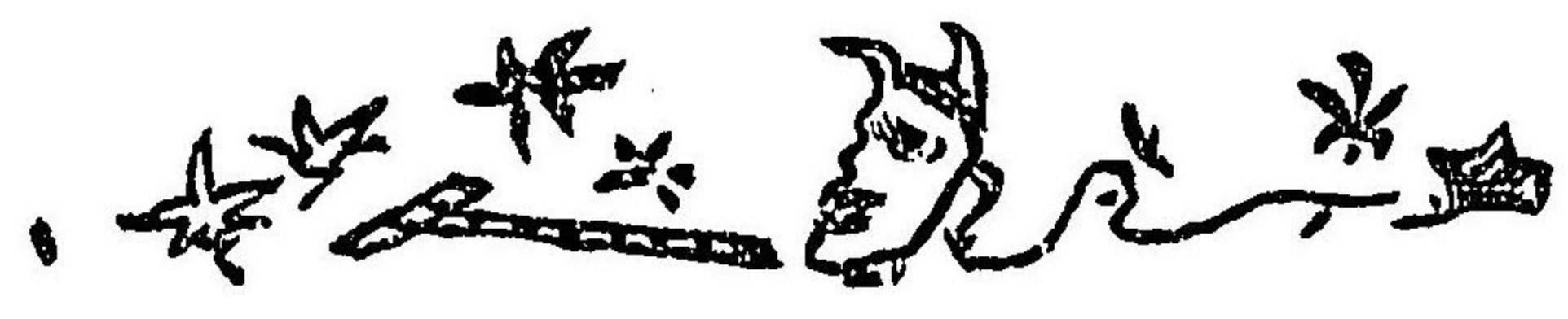




發なさい。」

と喚きく、餘所を向いて了つた。今に自殺さうだといふ男の側へ行つて見たら、それは看護手で矢張學生出らしかつた。立ちながら車輛の羽目へ額を押當て、肩で浪を打たせて泣いてゐる。「泣くな、泣くな」と私は其浪を打つ肩へ手を遣つた。

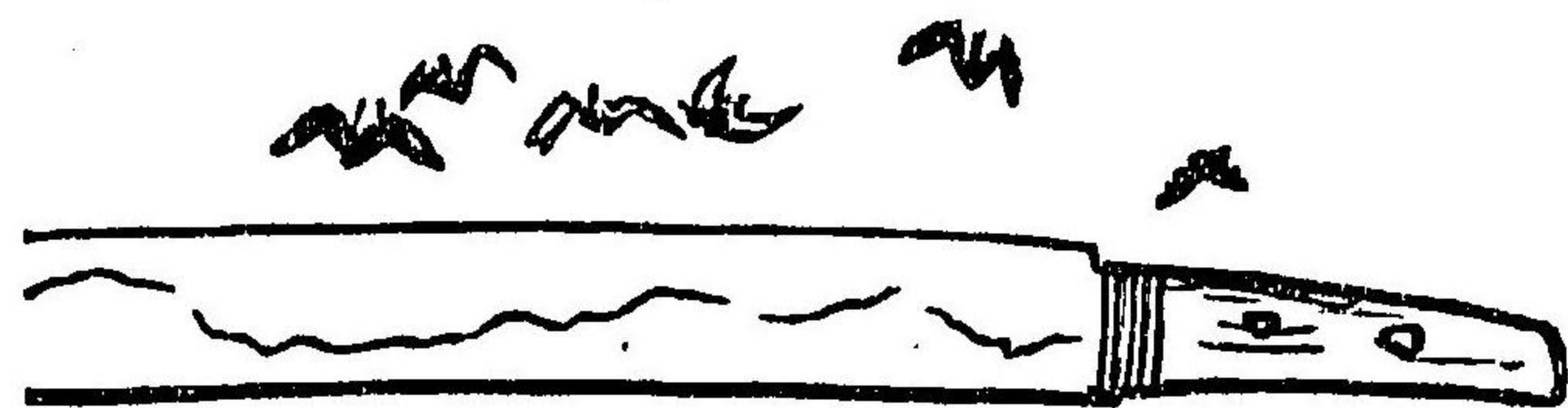
が、振向きもせず、返答もせず、泣いてゐる。看ると、頸窩が自殺した學生のそのやうに若くしく、矢張り無氣味だ。酔漢が汚い物でも吐いてるやうに、意久地なく兩足を踏擴けてゐたが、首



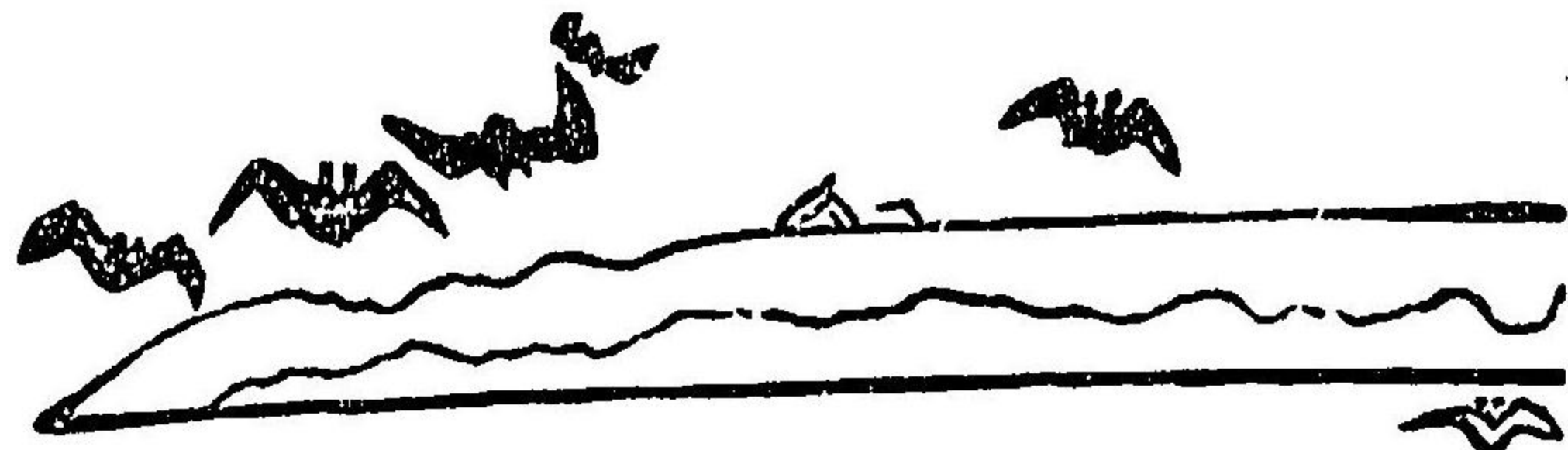
筋の血に塗れてゐたのは、大方手で抑へたからだらう。

「泣くなと言へば！」と私は痲癩聲を振立てた。と、其看護手は跣足と車輛を離れて、投首して、老人のやうに背を圓くし、私達を棄て、置いて、何處ともなく闇黒の中へ行く。何故だか、私も其跟に随いて、汽車を後にして、何處を目的ともなく、久らく二人で歩いて行つた。看護手は泣いてゐるらしかつたが、私も何だか佻しくなつて、泣出し度やうな氣持がする。「一寸待て！」と大聲に言つて私は立止まつた。





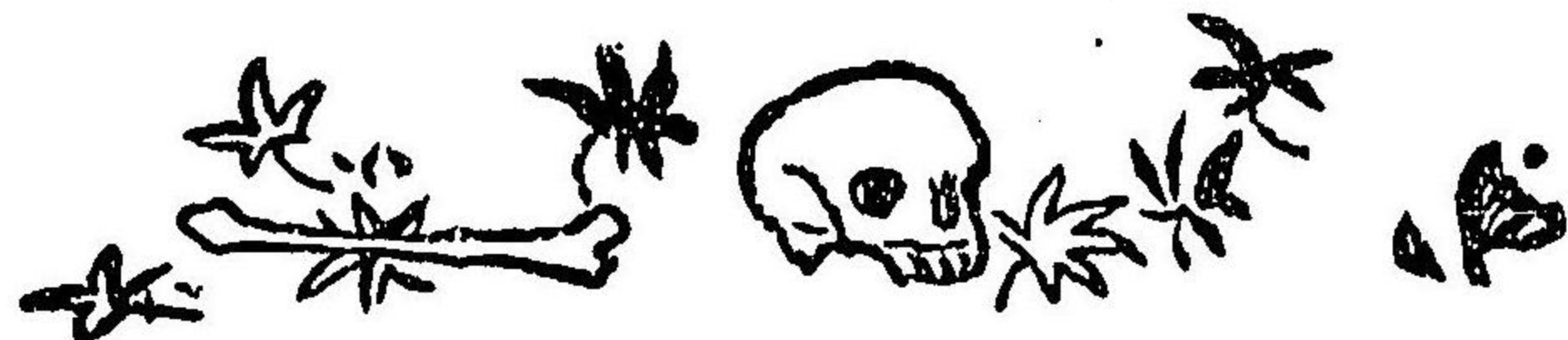
が、看護手は背を回して、重たさうな足取で
行く。肩を窄めて足を引摺りく行く姿は、宛然
の老人だ。聴て明く見えても照りもせぬ薄紅い霞
の中に其姿は消えて、私一人になつて了つた。
左手に遠く朦朧として一連の火影が流れるやう
に過ぎて行く。汽車が戻つて行くのだ。私は死ん
だ者死かゝつた者の中に一人取残されたのだが、
死んだ者死かゝつた者で收容漏になつた者はまだ
何位あつたか知れぬ。近くは寂然としてゴソリと
もいはぬけれど、離れては野に魂の有るやうにザ
ワ〜と蠢めく〜と、さ、一人だから思はれた

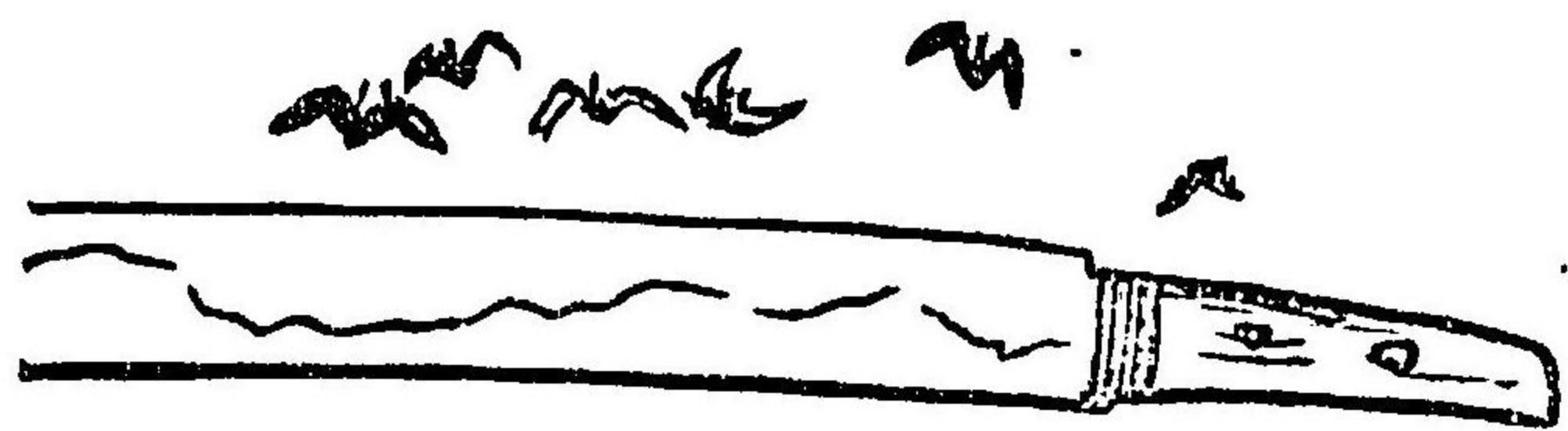


のかも知れぬ。兎も角も呻吟の聲は絶えぬ。子供
の泣くやうな、夥多の小犬が棄てられて凍え死な
むとして啼くやうな、繊細い、便りない聲で地上
一面に擴がつて、之を聴いて居ると、鋭い〜際
限もない氷の針を脳に突徹されて、そろり〜と
抜差されるやうな氣持がして。

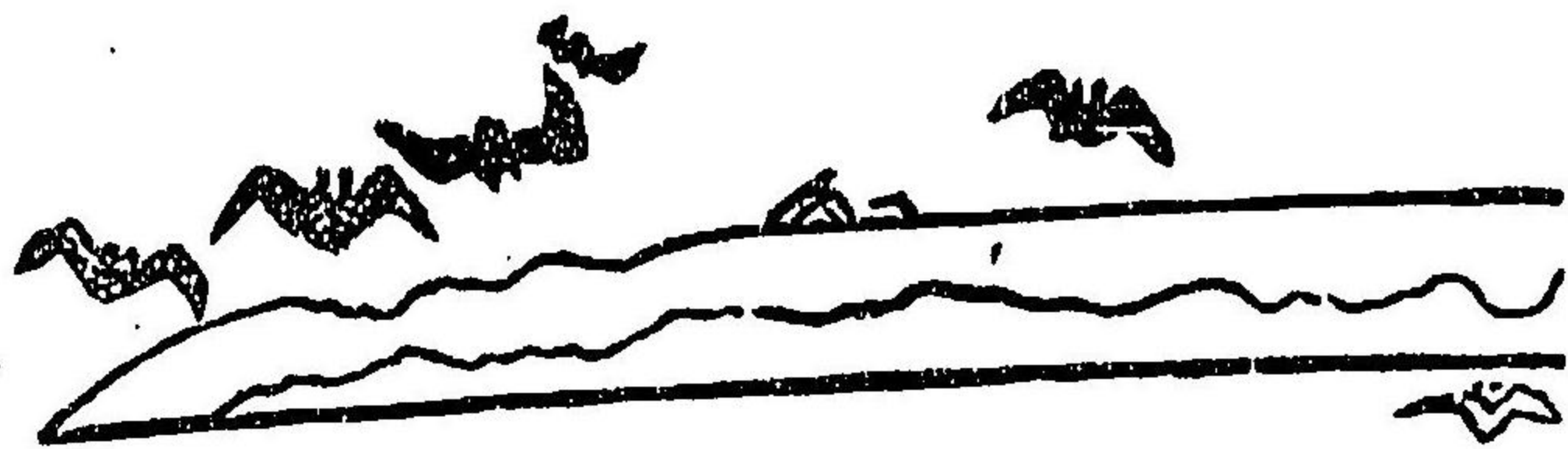
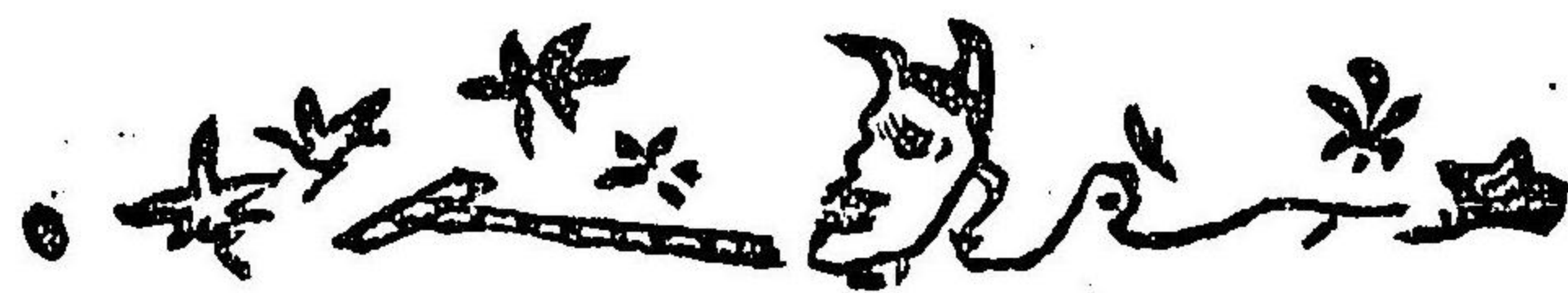
(断篇第六)

それは味方であつた。最後の一月は命令も
計畫も齟齬ひ、敵も味方も行動が紛れ〜て妙な
工合であつたが、然ういふ中でも敵襲のある事は



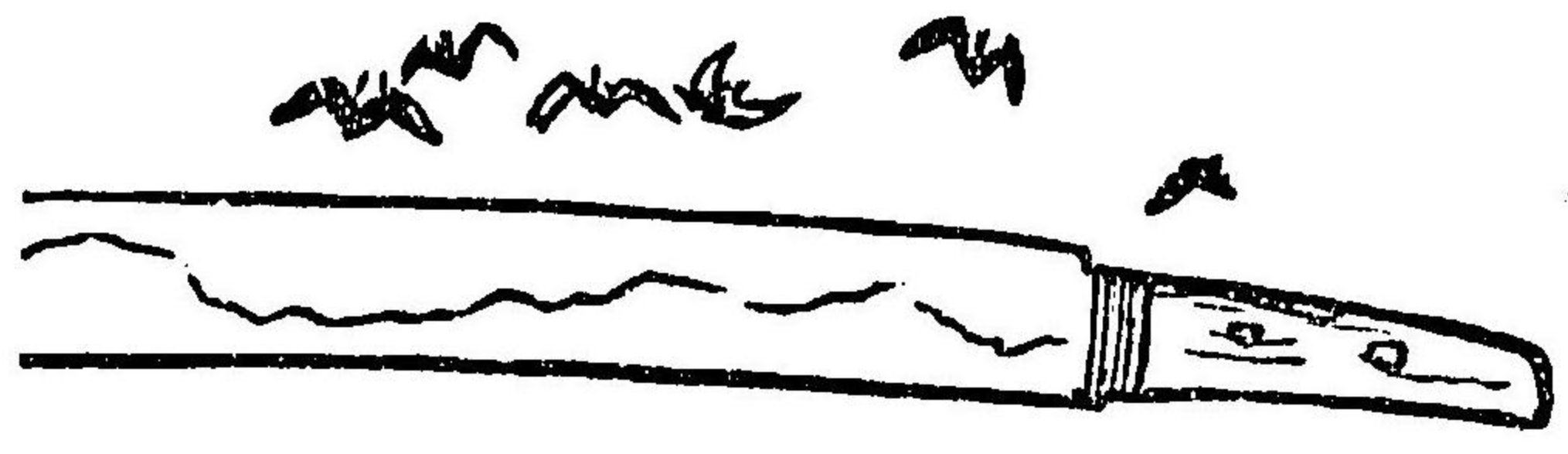


豫期してゐた。敵といふのは即ち第四軍團である。で、味方は既に攻撃準備を終つた時、誰だか雙眼鏡で見ると、味方の制服を着けてゐるのが判然見えると云ひ出して、十分後には其疑ひが霽れ、愈々味方に違ひないとなると、皆ホツとして嬉しく思つた。先方もそれと心附いた體で、悠々と近づいて来る。その落着いた處に、相手も矢張り思掛けぬ邂逅を喜んで微笑してゐる。俤が浮いて見える。敵が発砲した時には、何の事だか暫くは合點が行かずに、榴霰弾や銃丸が霰の如く降り注ぎ



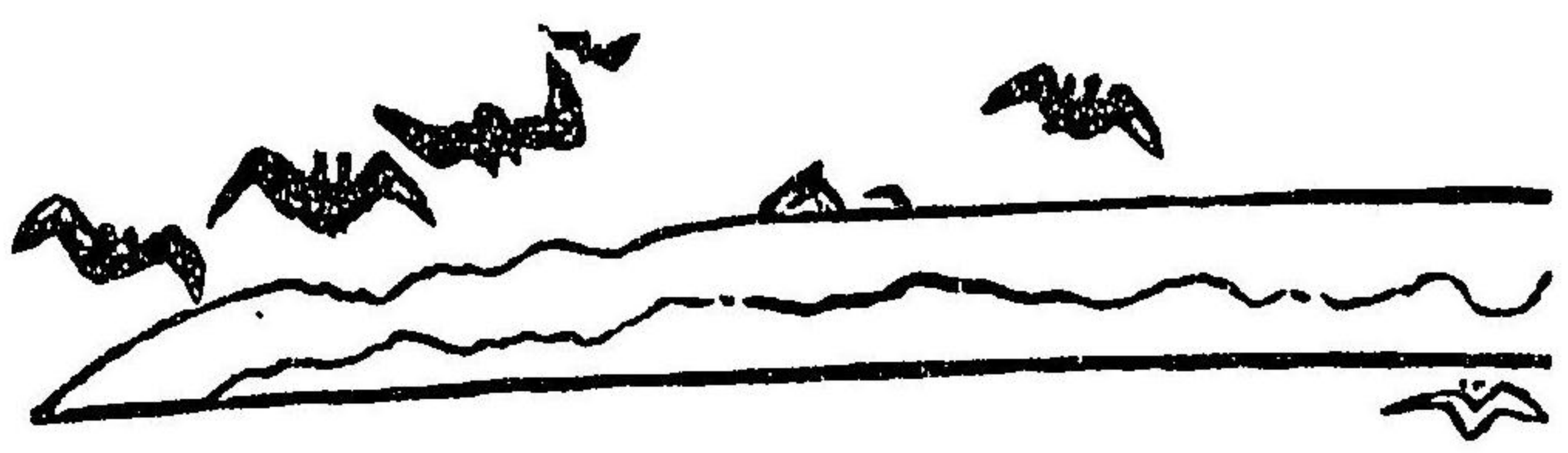
瞬く間に死傷者の山を築く中で、私達は矢張莞爾莞爾してゐた。誰だか敵だと叫ぶ。敵と聞くと、私は能く覺えてゐるが、成程相手は敵で制服も敵の制服、味方のは違ふと、皆氣が附いた。で、直ぐさま應戦する。この變な戦闘が始まつてから、十分も経つた頃であらう、私は兩足を捻れて、氣が附いた時には、もう病舎に居て、手術も済むだ後であつた。戦闘の結果を人に聽いて見ると、皆取留めぬ氣休めばかり言つてゐるが、察する所敗北したに違ひない。それにしても、斯うなれば私はもう後送



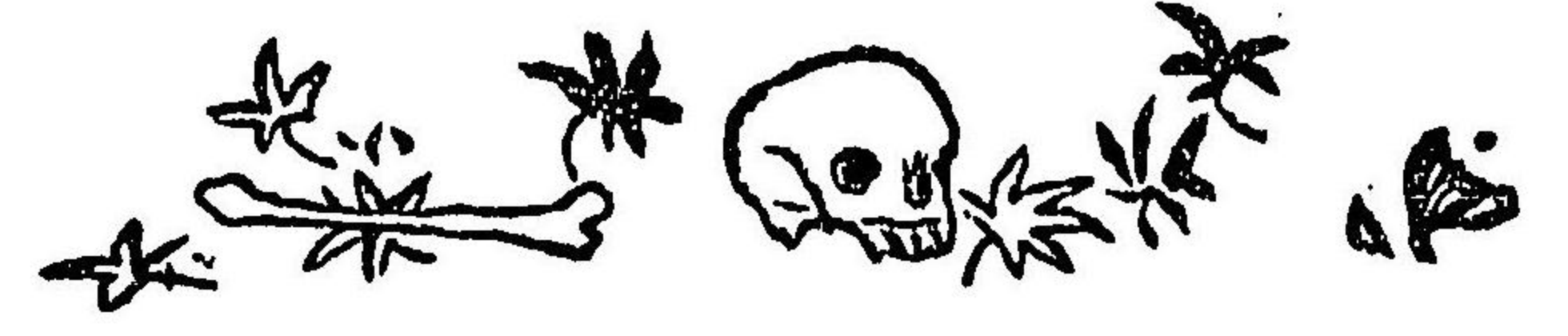


される、兎も角も命を繋ぎ留めた、壽命の有らむ限り長生が出来る、と思ふと、足無しの身にも嬉しかつた。が、一週後に漸く詳しい事が分ると、文胡乱になつて、會て覚えぬ奇異な恐怖を更に心に懐くやうになつた。

矢張り味方であつたらしい。味方が味方の砲で撃出した味方の破裂弾で私は足を挽かれたのだ。如何して此様な間違をしたのか、誰にも分らぬ。何だか妙な事になつて如何してか目が眩むで、同じ軍に屬する二個の聯隊が一ウエルストを隔て、相對して、相手は敵と十分に思込みながら、九一時

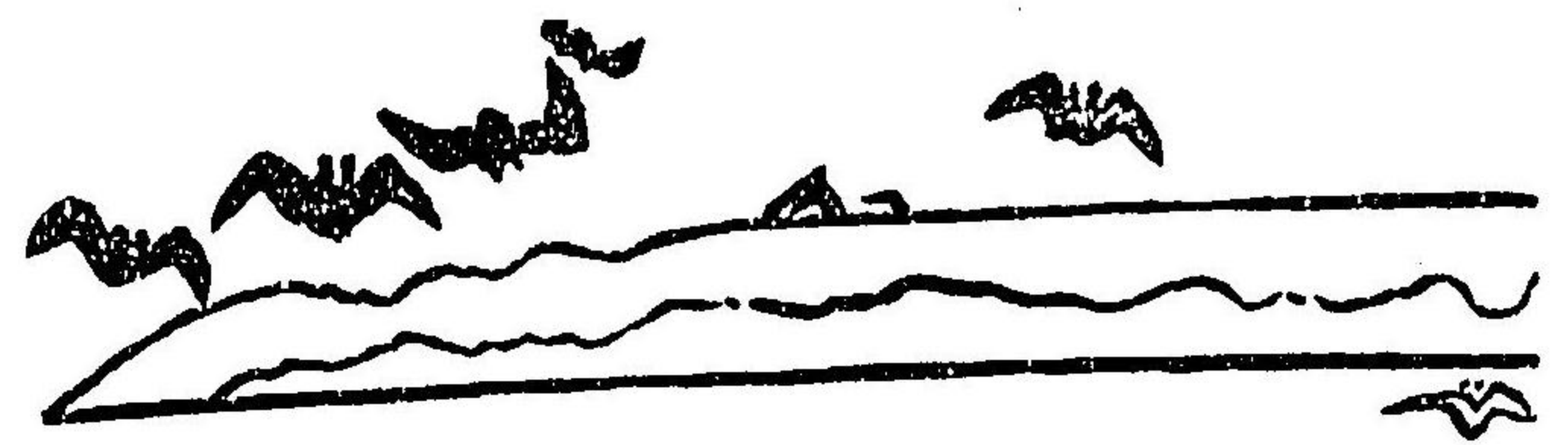


間も同志打してゐたのだ。皆成るだけ其噂をするのを避けて、すれば曖昧の事ばかり言ふ。何よりも不思議なのは、その噂をしても、大抵は今だに同志打とは思つてゐない。いや、寧ろ同志打は認める、唯最初から同志打したのでない、最初は實際敵を相手にしてゐたのだが、全戦線の紛糾つた紛れに、其敵は何處へか消えて、我々は遂に味方の弾丸を被つたのだ、と思つてゐる。中には隠さず然うと明言して、事實だと思ひ、事實らしいと思ふ程の事を列べて、具さに其次第を語る者もある。私も如何して此様な間違が起つたのか、今に



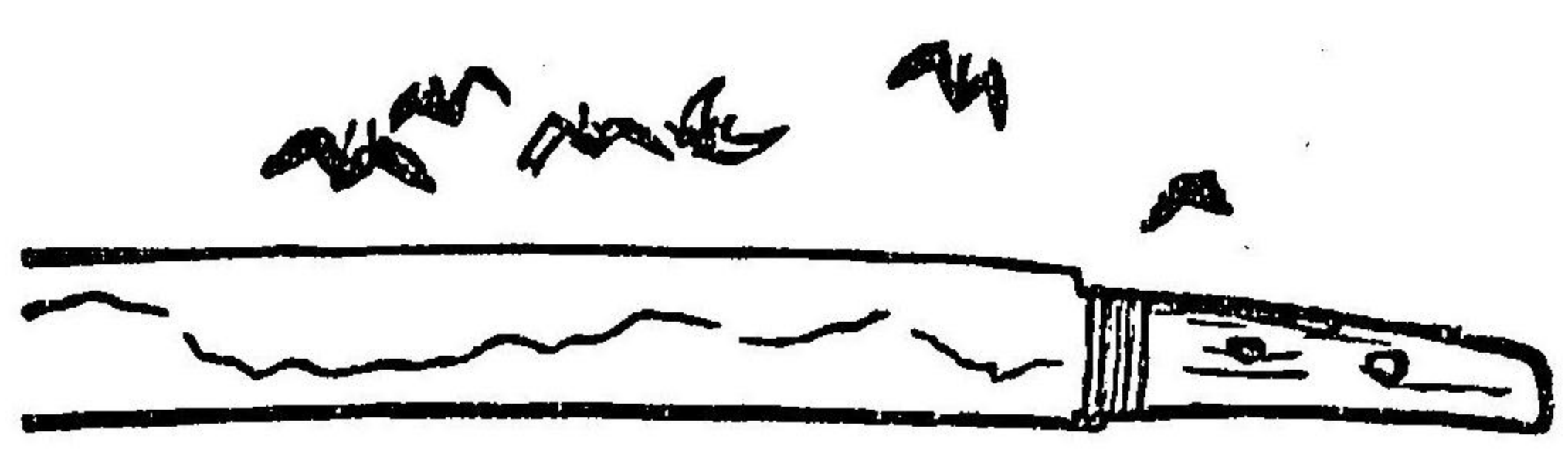


なつてもまだ確乎とした事が言へぬ。最初見た時には我軍の赤線入りの軍服に紛れなかつたのが、其後見たら確に黄線の敵の軍服になつてゐたのだ。唯如何してか間もなく皆此間違を忘れて、眞に敵と闘つたやうに思込んで了つたから、偽る氣もなく其通りを通信に書いて送つた者が多い。それは歸國後に私も讀んで知つてゐる。で、最初は此時で、負傷した我々に向ふと、世間の人の様子が少し妙で、何となく他の負傷者程に同情を寄せて呉れぬらしかつたが、其區別も直き消えて了つた。唯之に類した事が其後も有つたし、又實際敵方にも某



隊と某隊とが夜中同志打をして殆ど全滅したといふ事實も有つて見れば、我々も矢張間違つて同志打したといふに不思議はないと思ふ。私の手術を受けたドクトルはヨードホルムや煙草の煙や石炭酸の香のする、いつ見ても黄味を帯びた白い斑髭の中で莞爾々々してゐる、乾枯びたやうな骨張つた老人であつたが、眼を細くして云ふには、
「貴方は其中後送されやうが、仕合せな事だ。どうも何だか變な鹽梅ですからな。」
「如何してゐす？」



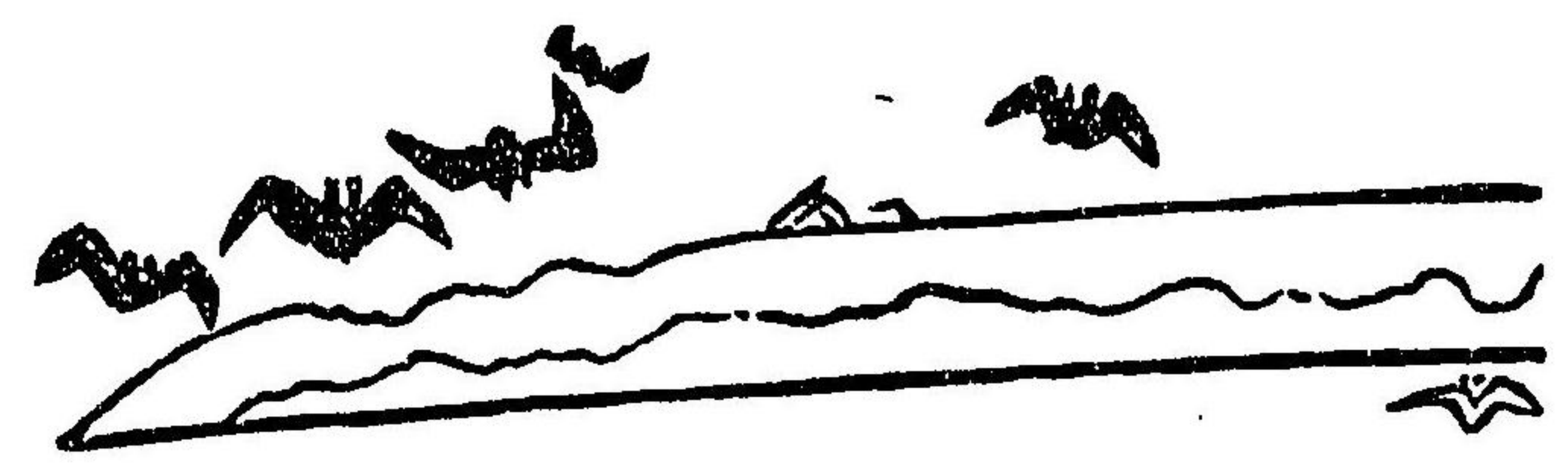


「如何してといふ事もないが、どうも變な鹽梅で
すわい。私達の行つた時分には此様に拗れた事は
なかつた。」

二十餘年前最後の歐洲戦役に従軍した人で、能
く其頃の噂をしては得意になる。が、今度の戦争
は理由が分らぬとか云つて、始終懸念さうな様子
であるのだ。

「どうも變ですわい」と溜息をして、顔を擦めて
烟草の烟の中に雲隠れをしたが、「成らう事なら、
私も歸りたい。」

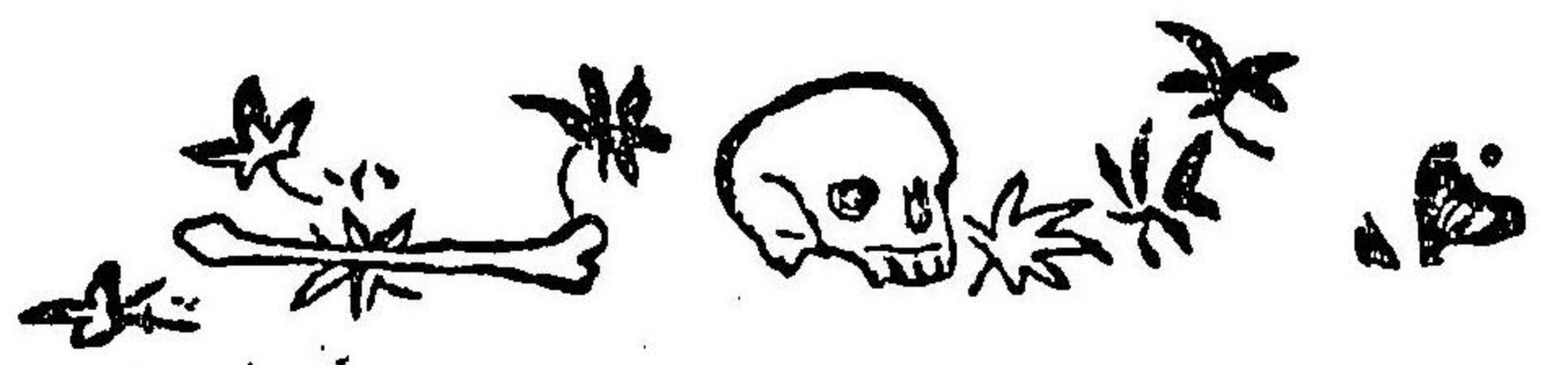
と、人の面を覗き込むやうにして、黄ろい烟脂



だらけの髭越しに、
「ま、見てゐて御覽、今に大變な事になつて、一
人だつて生きちや還れなくなるから。私始め皆討
れる。」

と老眼を私の面近くに据ゑて、此人も矢張りキ
ロトンとする。之を覗ると、百千の建物が一時に
崩れ懸つた程、私は堪らなく恐ろしくなつて、慄
然として、小聲で、

「赤い笑だ。」
此意味の分つたのは此人が始めて、あつた。急
に首肯いて、



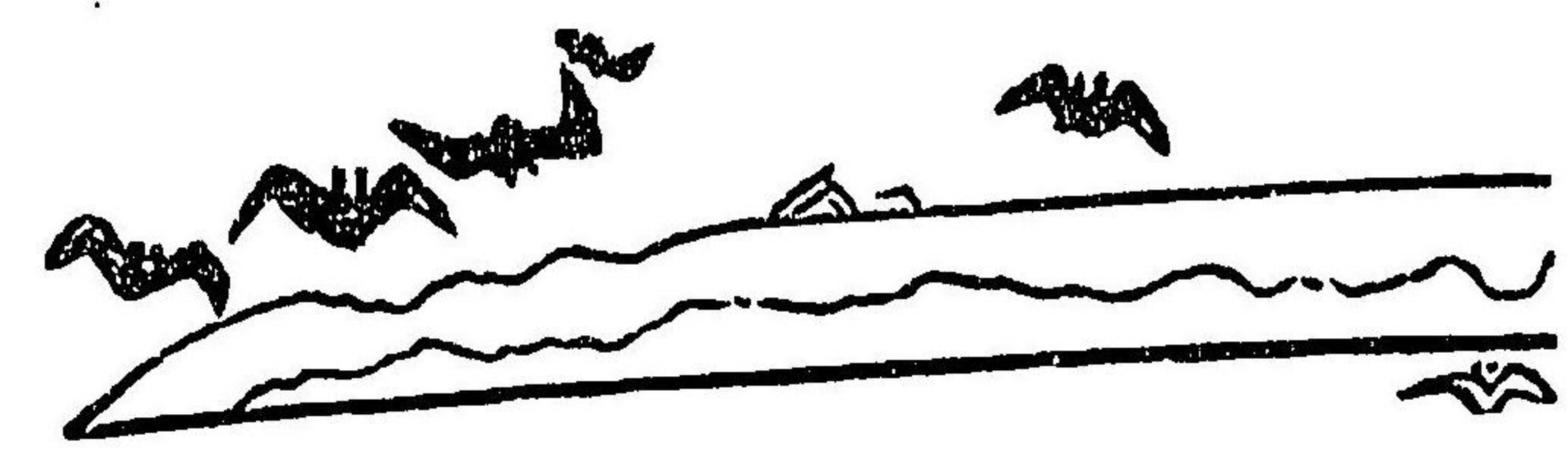


「全くだ。赤い笑だ。」

で、直と私に寄添つて、きよろしくしながら年寄の癖として諒々と囁くのだが、囁く度に先峯まりの半白の頬髯が揺く。

「貴方は直き後送されるのだから、お話するが、何ですか、貴方は瘋癲病院で狂人が喧嘩をするのを見た事が有りますか？ 無い？ 私は有る。喧嘩をする所は矢張無病の人のやうだ。ね、無病の人のやうだ。」

と幾度か理由ありさうに此文句を反覆す。
「で、如何したといふのです？」



と私も矢張恟々しながら聲を竊めて聞くと、如何したといふのでもないが、矢張無病の人のやうだ。」

「赤い笑だ。」

「水を打掛けて引分るのです。」

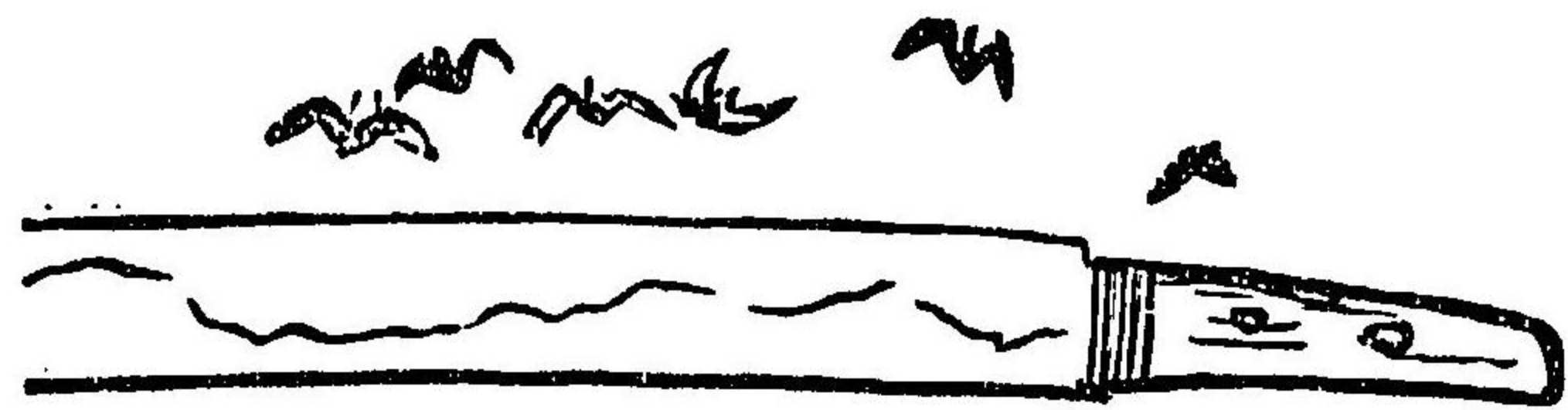
雨に度肝を抜かれた事を憶出して、私は癩に觸つたから、

「貴方は気が狂つたんだ！」

「が、貴方以上ぢやない。要するに、以上ぢやない。」

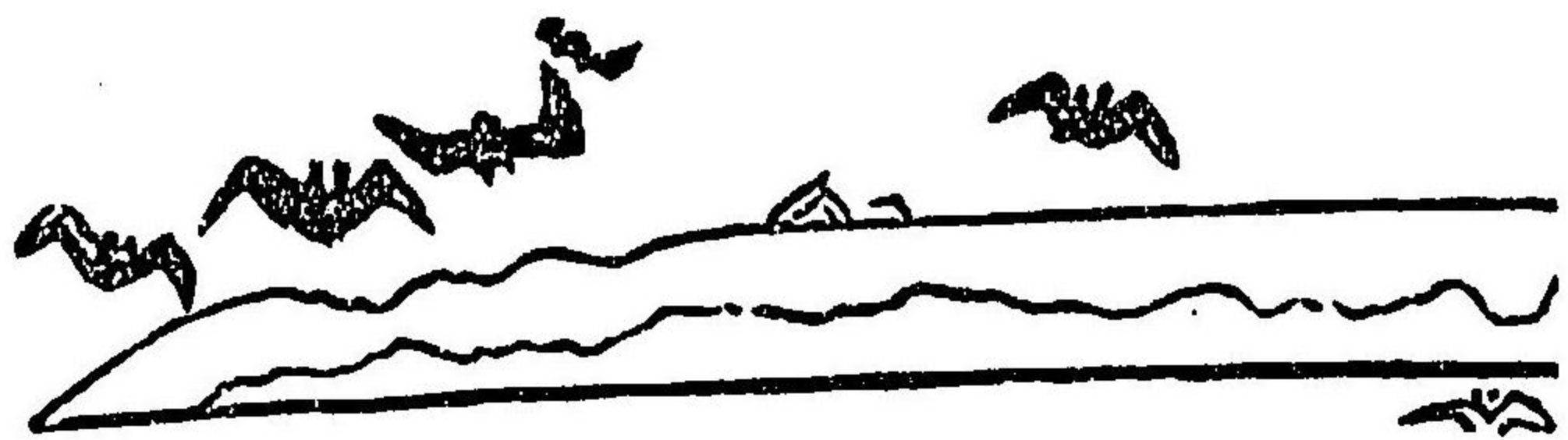
と、尖つた老の膝を抱いて、ヒ、と笑つた。こ





の厭な意外な笑聲の名残を、ばさ／＼に乾いた唇にまだ留めたまゝ、肩越に人の面を尻眼に掛けて、幾度か擦ぐつたい目交をする。何か恐ろしく可笑しな事があるが、それを知つてゐる者は二人切で外には誰も知り手が無いと云つた調子だ。それから魔術師が手品を使ふやうに、大業に高々と手を舉げて、スウと軽く其を卸して、密と二本指で夜着の、切斷しなかつたら私の足の在るべき所を抑へて、

「この意味が分りますか？」
とひそ／＼と聞く。更に又大業に理由有りさう



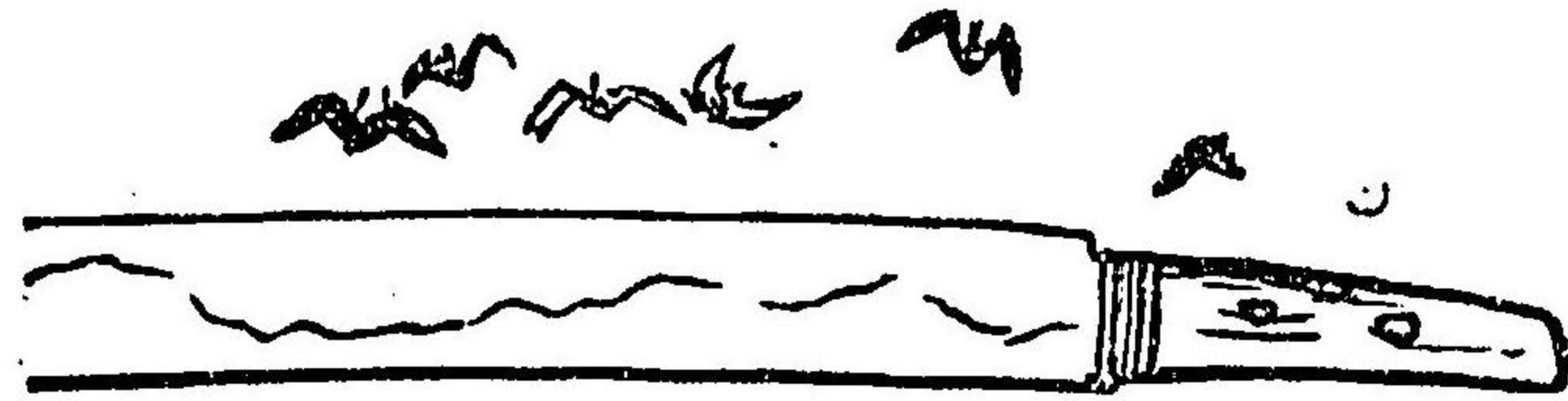
に負傷者が幾側かに分れて寢臺に臥てゐるのを指して、また、

「この意味が説明出来ますか？」
「負傷者でさ。」

「負傷者」と反響のやうに反覆して、「足もない、腕もない、腹には風穴を明けられて、胸を微塵に碎かれて、眼球を抉り取られてゐる——この意味が分つてゐるのですな？ 宜しい。ちや、この意味も分るでせう？」

と手を突いて、年齢に似合はず翻然と身輕に逆立をして、足で釣合を取つてゐる。白の治療服は





捲れて、面は眞紅に充血したが、逆になつた變な
目色で、喰入るやうに凝と私の面を視ながら、辛
と、途切れ〜に。

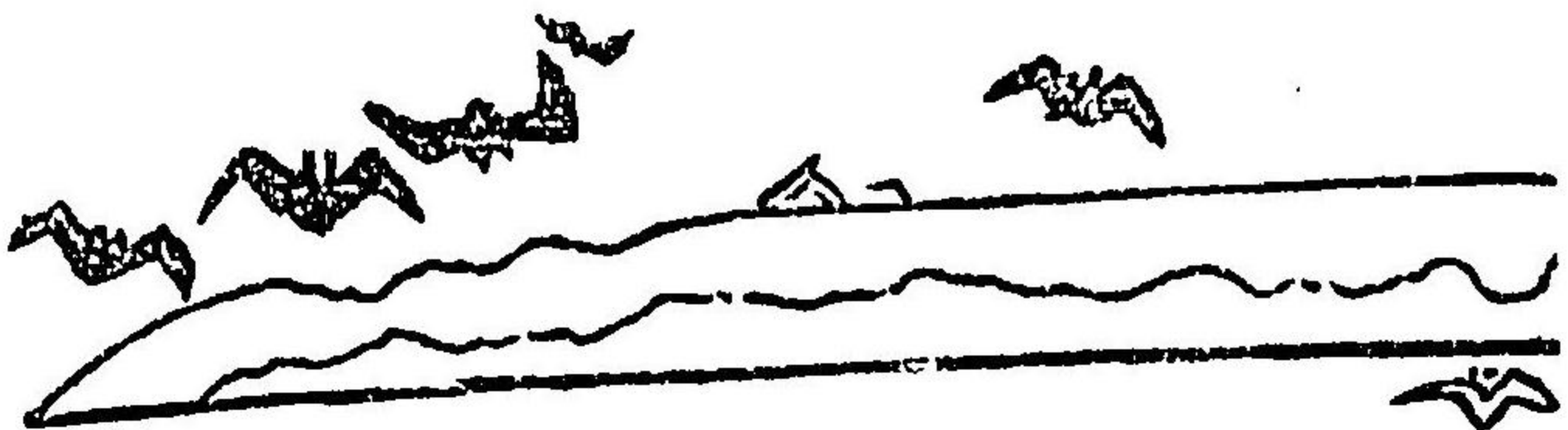
「この意味も：矢張り：分りますか？」

「もう好加減になさい。止さんと、僕は聲を立て
るから。」

と私は怯えた小聲で云つた。

ドクトルは融然と足を卸して、自然の位置に復
し、更に私の寢臺の側に坐つて、フウと息をしな
がら、我一人心得顔に、

「誰にも此意味が分らない。」



「昨日又砲戦が有つたさうですな？」

「有りました。一昨日も有つた」とドクトルは其
通りといふ意を頷いて示せる。

私は鬱々として、

「あゝ、歸りたい！ね、ドクトル、私はもう歸
りたい。到底も此様な處にや居られん。もう私に
や楽しい家庭が有るとも思へなくなりさうだ。」

ドクトルは何か考へて居て返答をしなかつた。

で、私は泣出した。

「あゝ、私には足が無い。彼様に自轉車に乗つた
り、歩いたり、駈けたりするのが好きだつたが、

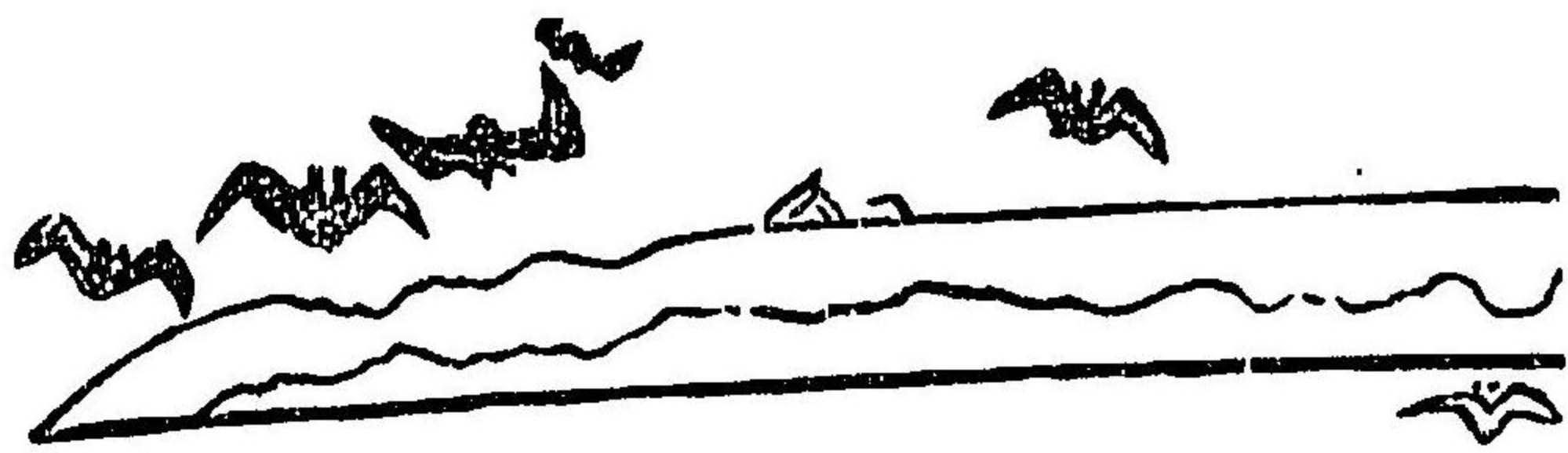




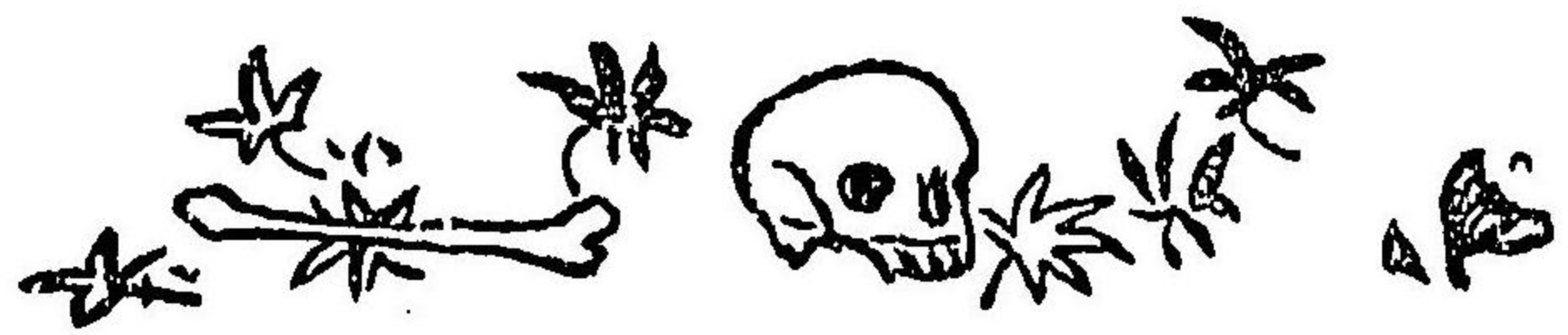
もう足が無い。右の膝へ坊を載つけて揺ぶると、坊は能く笑つたツけが、もう此様なに成つちや：あゝ實に酷い奴等だ！これちや歸つたつて、仕方がない。まだ僅た三十だのに：實に酷い奴等だ！

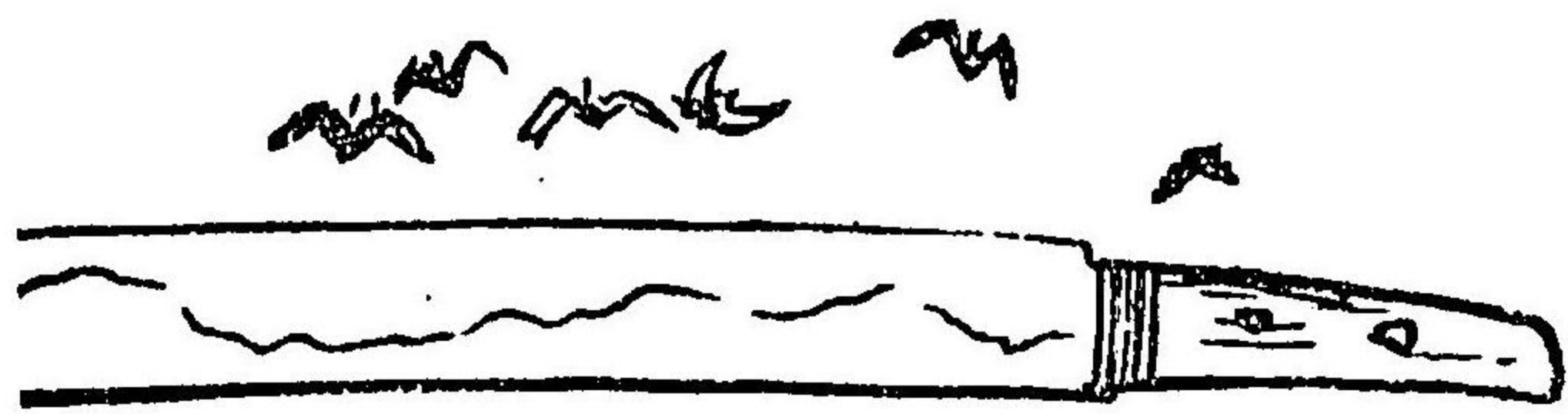
と懐かしい足、早い達者な足を偲んで、私は直泣きに泣いた。誰が人の足を持つて行つた、如何なる権利が有つて持つて行つた！ドクトルは餘所を見ながら、

「斯ういふ事がある。昨日見てゐたら、氣違ひの兵が此方の陣地へ紛れ込んで来た。敵の兵なんで

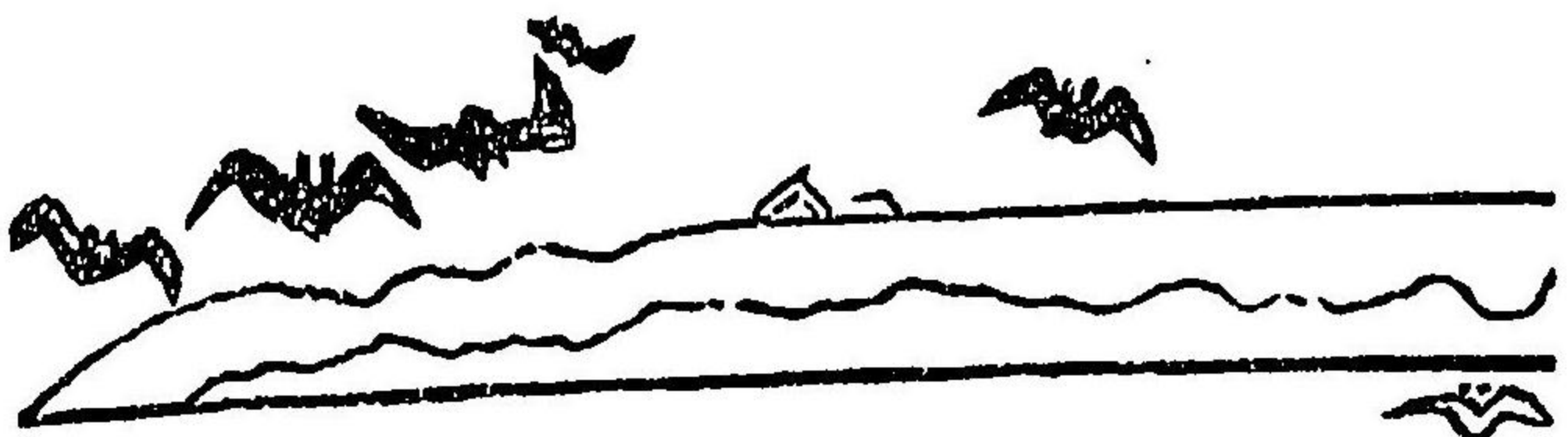


す。殆ど丸裸で、散々打のめされて来た様子で、引掻傷だらけだ。宿無し犬か何ぞのやうにガツ／＼してゐる。頭髪や髯が蓬々と生えて、尤もこれはお互の事だが、野蠻人か、此世開けたての人間か、乃至猿かといつたやうな奴だ。手を揮るやら、身を揉むやら、歌を唱つたり、大聲に喚いたりして、兎角喧嘩を賣りたがる。で、物を喰はしてから、元の野原へ逐返して了つたが、こんな連中は然うでもする外仕方がないですからな。あゝいふ連中だ、毎日毎晩ぼろ／＼した薄氣味の悪い幽霊のやうな風をして、山の中を彷徨き廻るのは。雨風に





曝され放題曝されて、道も無い處を宛もなく往つたり來たりして、手を揮る、笑ふ、喚く、歌ふ。こんなのが二人出遭へば喧嘩をする——それとも出遭つても氣が附かすに行違つて了ふかも知れんが。一體何を喰つて生きてるのか分らん。恐らく何も喰はずに居るのぢやないかと思はれるが、若し何か喰つてゐるなら、死骸だ、——毎晩夜ツビて山で咬合つて唸々吠立てる、あの喰ひ太つた野良犬と一緒になつて、死骸を喰つてるのだ。毎晩、嵐に目を覺した鳥か、醜ない恰好をした蛾のやうに、火に集つて來る。寒さ凌ぎに鎧でも焚けば

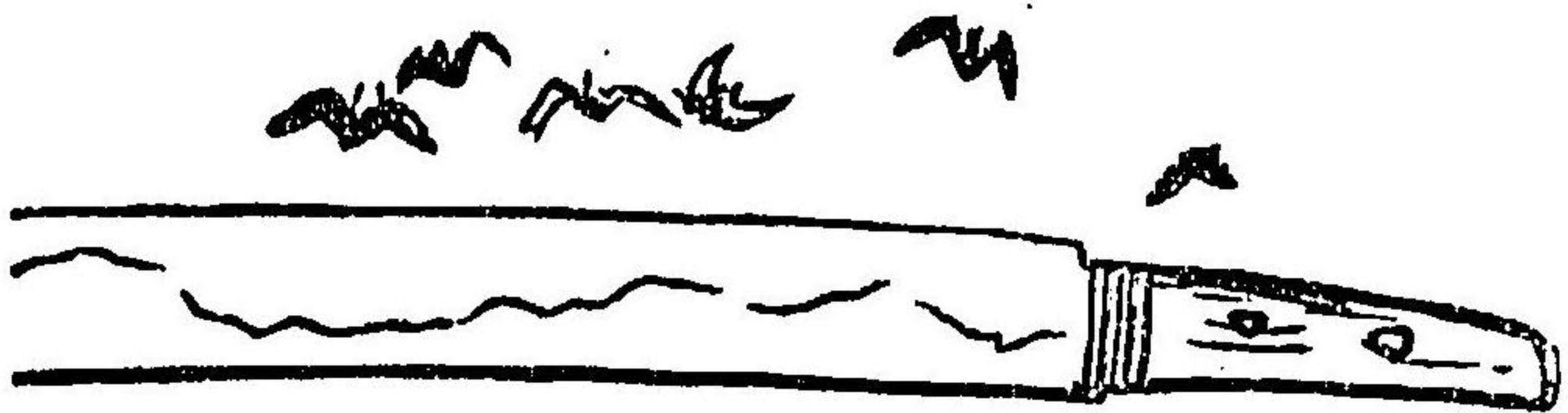


三十分と経たぬ中に、ぼろ／＼した風の、凄い、凍け猿のやうな奴がガヤ／＼と寄つて來る。敵かと思つて其に發砲することもあるが、時としては其奴等が譯も分らん事をワイ／＼いふその聲に脅かされるので、肝癪を起して故意と遣付ける事もある……

「あゝ、歸りたい！」と私は大聲に言つて耳を塞いだが、凄い話が綿を隔て、聞くやうに、物に籠つて隠々と、散々惱まされた脳髓に更に響いて來る。

「かういふ連中は大分居る。或は谷底に落ちたり、



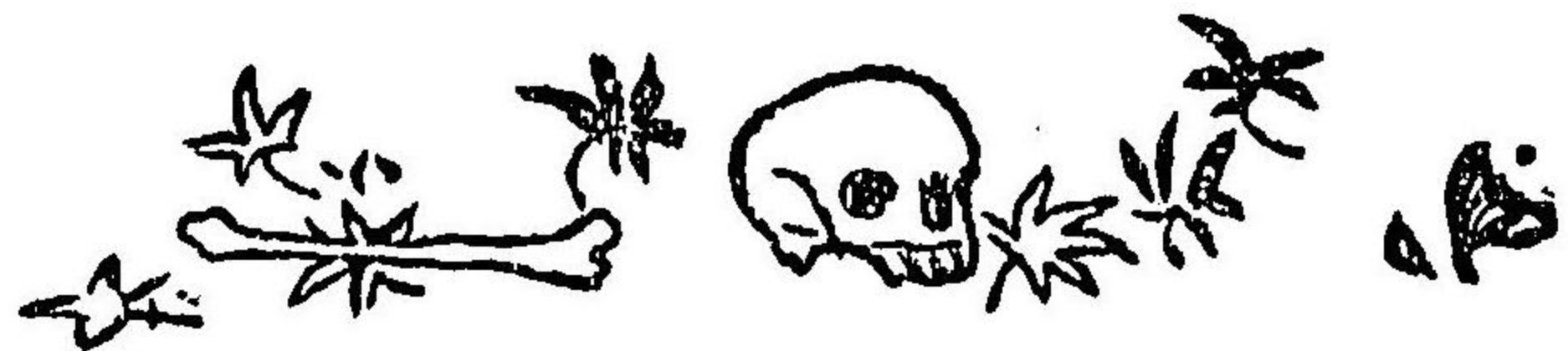


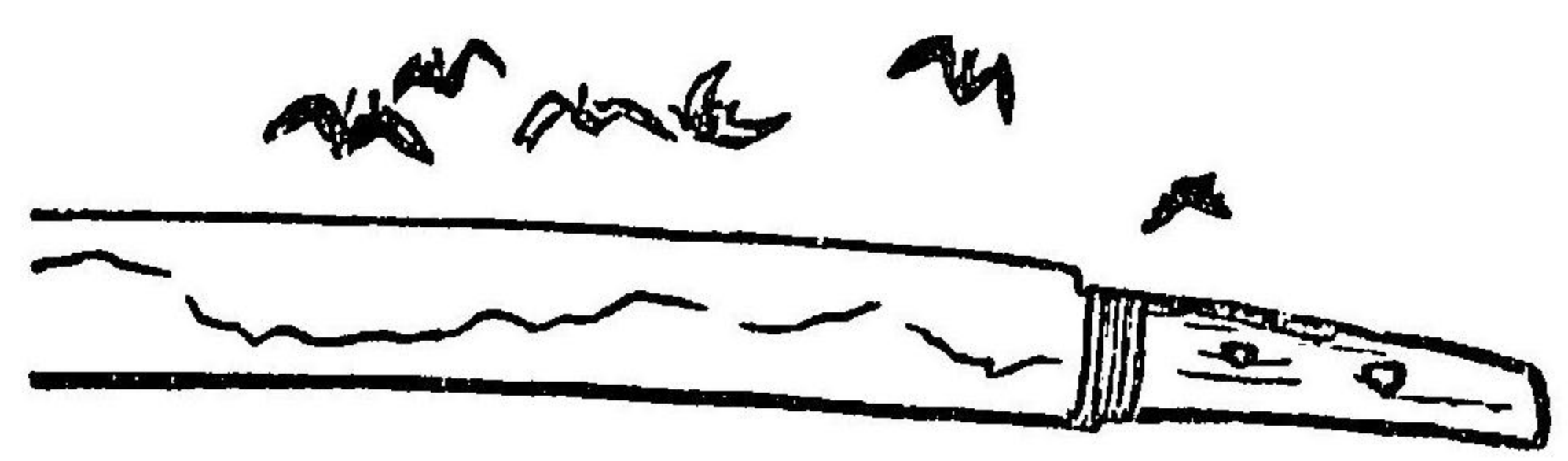
或は正氣の健全な人の爲に設けた狼罪に陥つたり、或は戦場を取残された鐵條網の齒や杭の先に引掛つたりして、一度に何百となく死ぬ。進退に方のある正氣の戦闘に紛れ込むで、いつも先頭に立つて奮闘する所は、如何にも勇士のやうだが、其代り味方に及向ふことも珍らしくない。私は此連中が氣に入つた。私も今は唯氣が違ひかゝつてゐるばかりだから、斯うして坐つて貴方と話をしてゐるのだが、これで全然狂つたとなると、私は野へ出ますな。野へ出て大に叫ぶ。大に叫んで其勇敢な可怕しいといふことを知らぬ武士達を集めて、



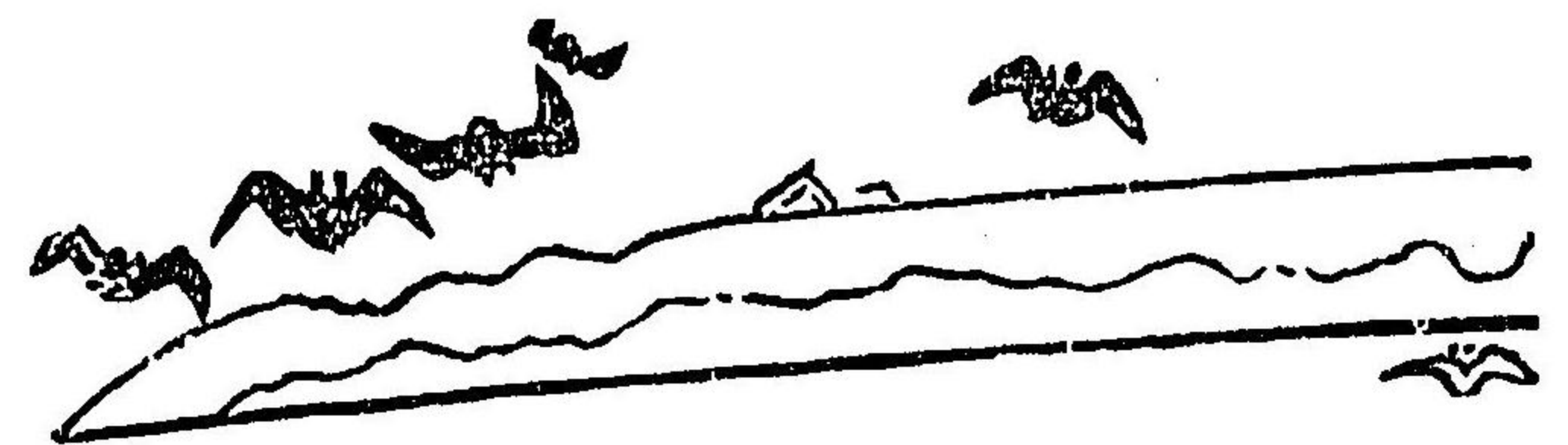
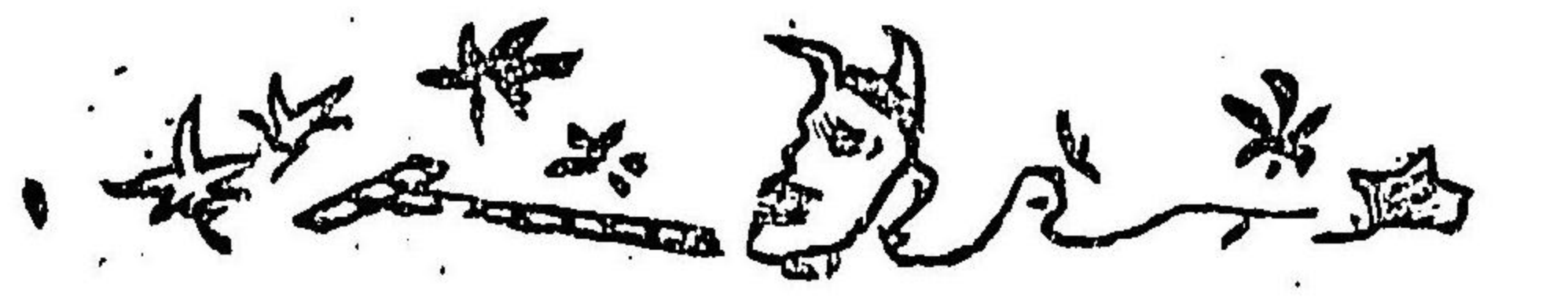
而して全世界に向つて宣戦する。樂隊を先に立てて、軍歌を唱つて、欣々として町や村へ乗込む。我々の足跡到る處盡く真紅になる、總ての物が火輪の如く輪を舞つて師ををどる。生残つた者が馳加つて、我精銳は崩雪のやうに進めば進む程人数が増して、而して遂に此世界を一掃するのだ。何だと？ 人を殺してはならん？ 民家を焚くな？ 掠奪するな？ 誰が其様な事をいふ？

と狂つたドクトルはもう絶叫するのであつた。胸部腹部を撃碎かれた者、眼球を抉り出された者、乃至足を切断された者の、今迄眠つてゐたやうな



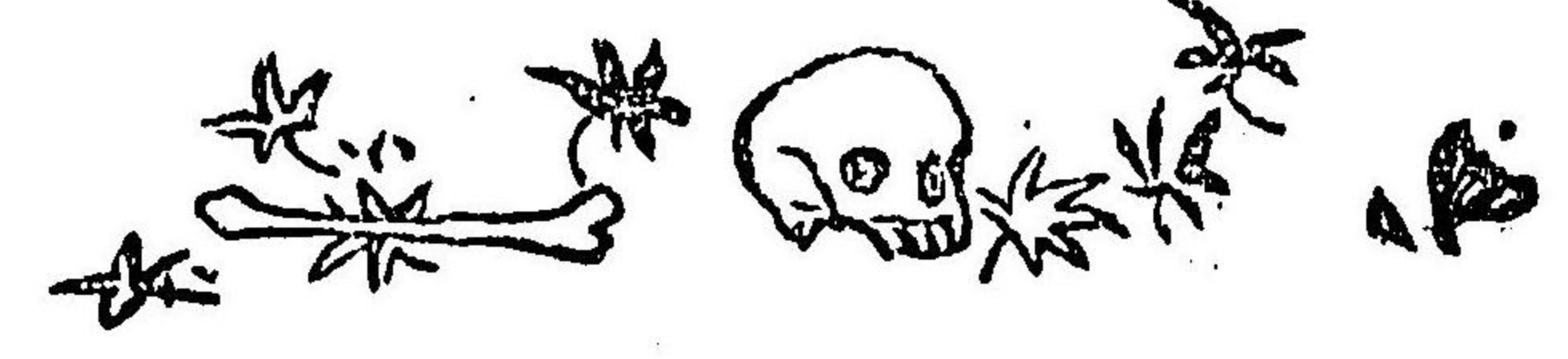


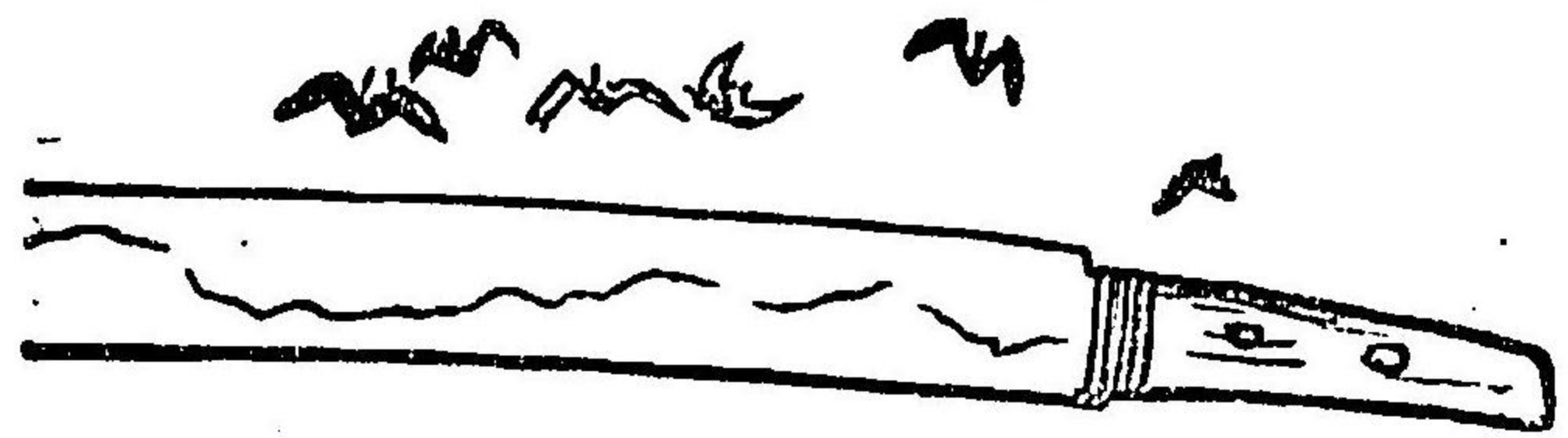
創の傷みが、此絶叫の聲に呼覺されて疼き出す。幅のある、鍋底でも搔くやうな、泣くやうな唸聲が病舎内に充ち渡つて、青い、黄ろい、疲れ切つた、或は眼の無い、或は地獄戻りかと思はれる程痛か形を損じた人の面が八方から此方を向く。此等が呻きつゝ、耳を傾ける外には、開放しの戸口から漠々と此世を掩ふ眞黒な暗黒が窺と内を覗き込む。氣の狂つた老人は両手を伸べて更に絶叫した、「誰が其様な事を言ふ？ 何の、我々は敢て殺す、敢て焚く、掠奪する。我々は屈托の無い愉快な勇士の群だ。敵の建物でも、大學でも、博物館でも、



手當り次第に破壊する。而して其破壊の跡で、火の笑に充ちた浮かれ軍士の我々が踊ををどるのだ。瘋癲病院を我々の本國と稱してからに、まだ氣の狂はぬ奴等を我敵と認め、あべこべに之を狂人と呼ぶのだ。而して百戦百勝の、いつも悦喜満面の英雄の此方が一天萬乗の君として此世界に臨む時、如何にも心ゆくばかりの笑聲が天地の間に轟き渡るのだ！」

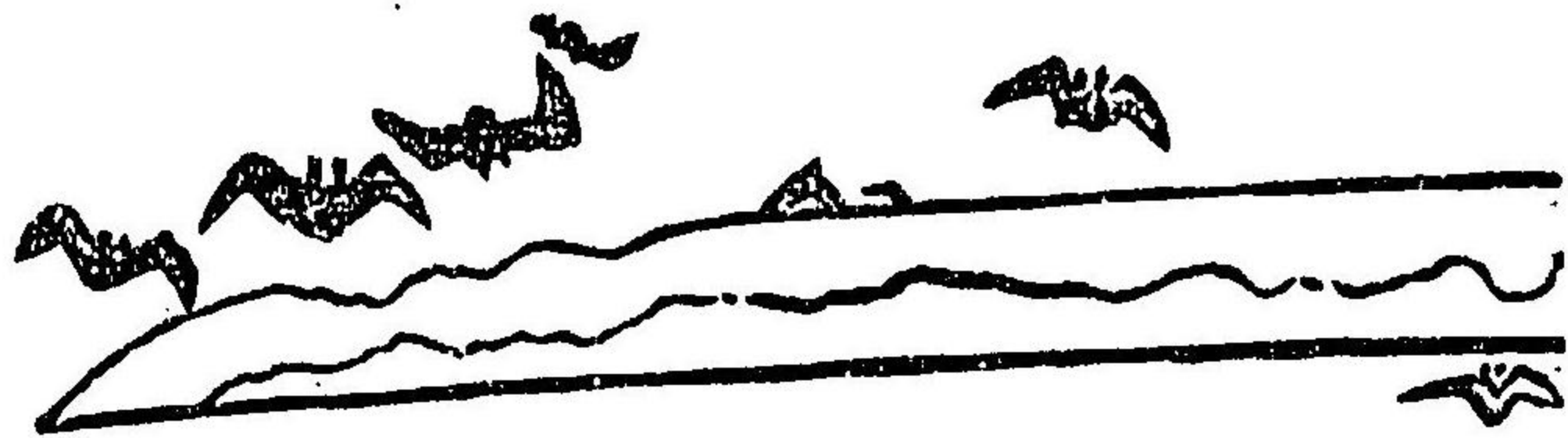
「それが赤い笑だ！」と私は大聲出してドクトルの話を奪つて、「助けて呉れエー！ また赤い笑聲が聞える！」





「諸君！」とドクトルは不具の幽霊が呻聲を揚げてゐるやうな人達に向つて、「諸君！ 頓て我々の世となれば、月も赤くなる、日も赤くなる、毛物の毛も赤い愉快な毛となる。餘り白いと、餘り白いと、それ、その皮を引剝いでやらうといふものだ： 諸君は血を飲むことが有るか？ 血は少し粘々する物だ、少し生温かな物だ、其代り眞紅な物だ。而して血が笑ふと、眞紅な愉快な笑聲が聞える！：

(断篇第七)

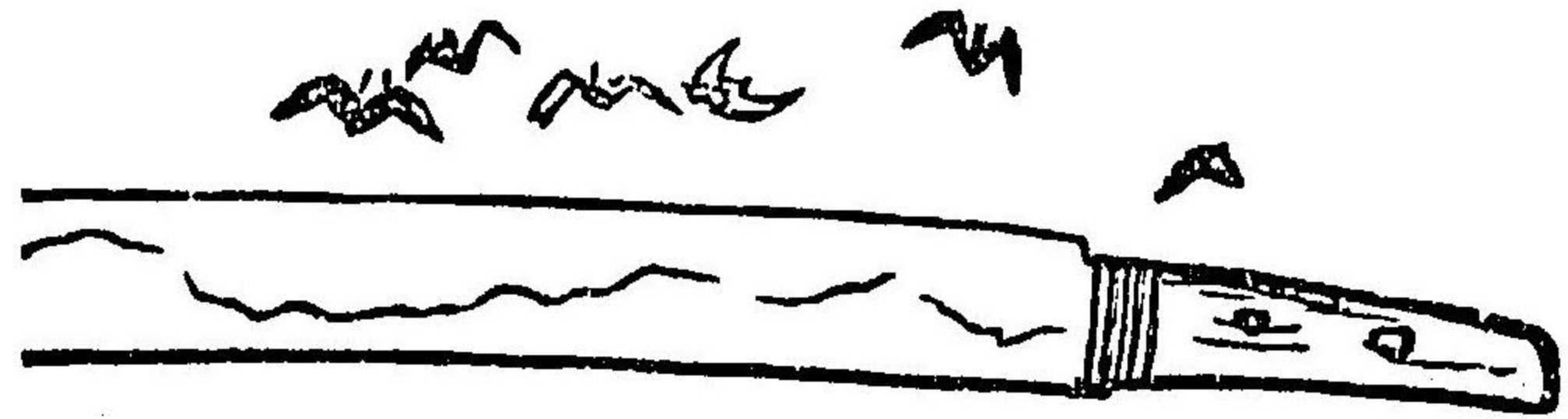


ひどい！ 亂暴な事をする。赤十字は神聖で、世界何れの國民も之に對つて敬意を拂はん者はない。何も兵を載せては居まいし、何の手出しも出ぬ。來ぬ負傷者の乗つた列車といふ事は敵も承知なら、地雷を伏せてある事は警告すべき筈でないか？ 可哀さうに既う皆故郷の夢を見てゐたらうに！

(断篇第八)

：中央に湯沸し、正銘紛れのない湯沸し、それが湯氣を噴く所は機關車のやうだ。ひどい湯氣でランプのホヤまで少し曇つた位で、茶碗も矢張昔



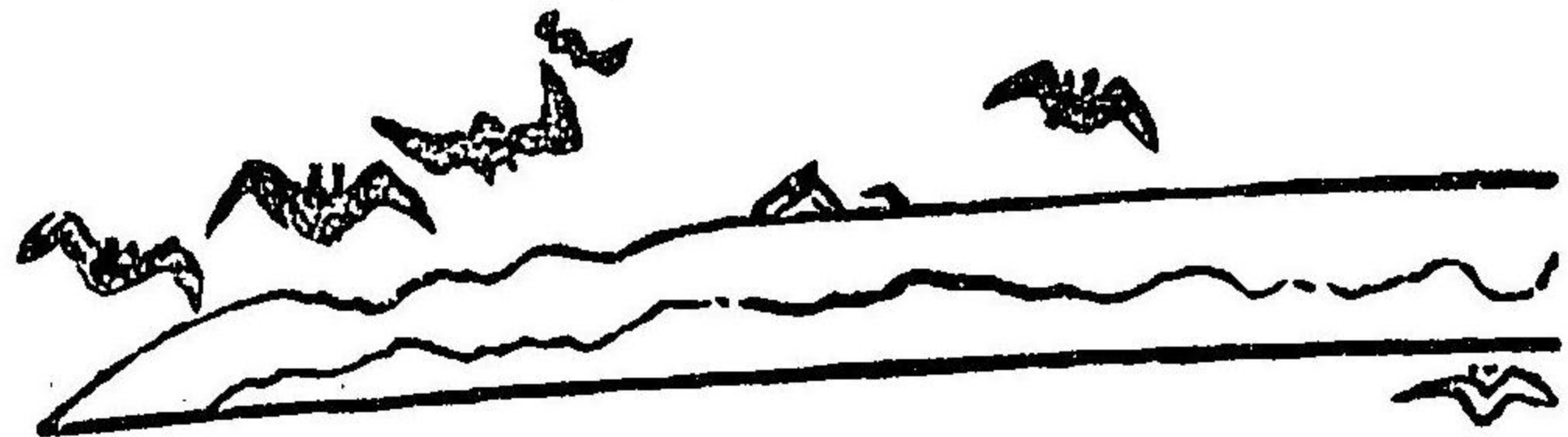


しながらの、外は藍色の、中は白い、中々見事な茶碗で、結婚の時の貰ひ物だ。贈り主は妻の姉妹だが、氣立の好い立派な婦人だ。

「皆まだ満足であるかい？」と奇麗な銀製の匙で茶碗の砂糖を搔廻しながら、私が心元なさうに聞くと、

「あの、一つ壊れましたの」と妻は何氣なく答へた。妻は此時湯沸の龍頭を捻つてゐたが、湯が見事にスウと逃る。

私は高笑をした。
弟が、

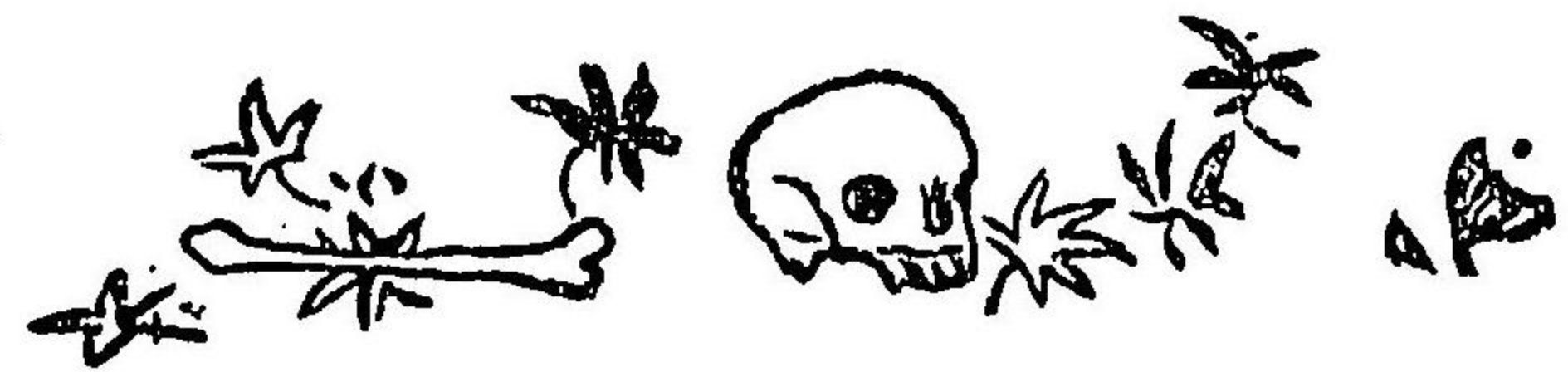


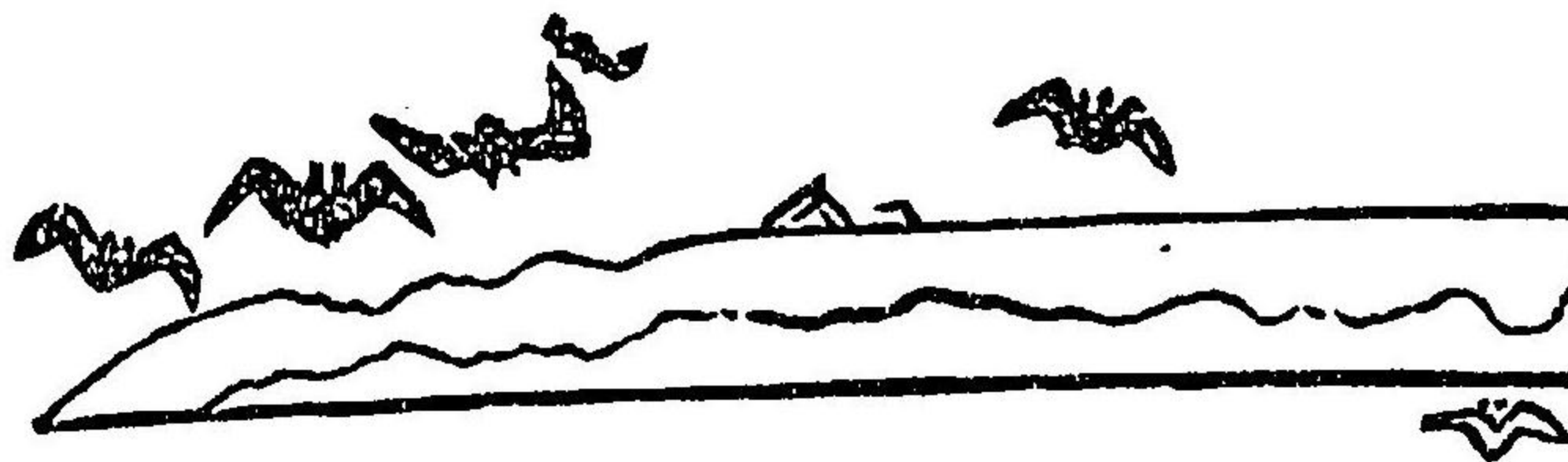
「何が可笑しいのです？」

「なに、何でも無い。それよりか、最う一度書齋へ連れてッて呉れ。何も勇士の爲だ、面倒見て呉れ！留守中樂をしてゐたらうが、もう駄目だぞ。

これからは己がウンと使つてやる。」で、無論常談に、友よ、急がむ、戦に、勇みて敵に急がむ……と歌ひ出した。

皆私の意を悟つて微笑したが、妻だけは俯向いて繻の有る奇麗な布巾で茶碗を拭いてゐた。書齋へ行くと、水色の壁紙や、青い笠を被つたランプや、水差の乗つた小さなテーブルが又目に付く。





水差は少し塵に汚れてゐた。

私は浮立つて、

「あの水差の水を少しし。」

「今飲むだけばかりぢや有りませんか。」

「まあ、好い、注いで呉れ。それから、お前な、

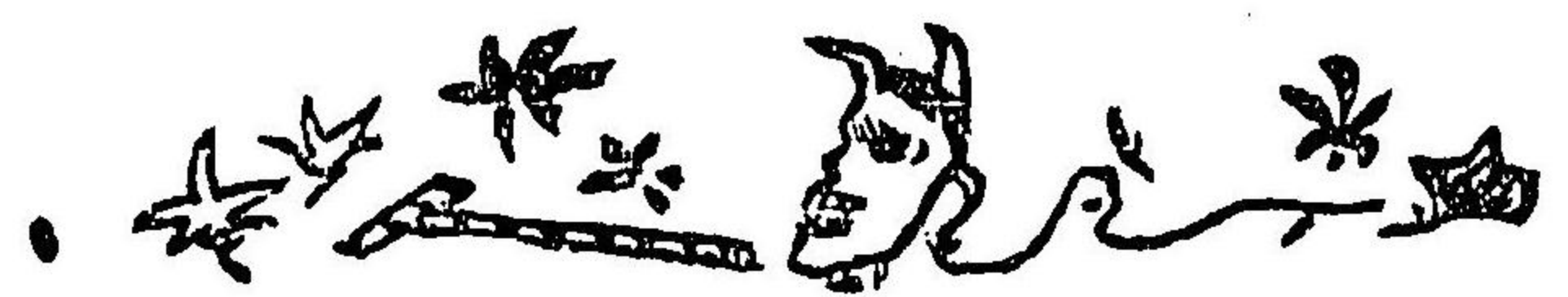
と妻に向つて、「坊を連れて少し次の間へ行つて、

呉れんか。頼む。」

で、私はグビリくと、楽しみながら、水を飲

むだ。次の間には妻と坊が居るのだが、姿は見え

ない。
「もう宜しい。さあ、此方へお出で。だが、もう



晩いのに何故坊は寝ないのだ？」

「お歸ンなすつたのが嬉しいのですよ。坊や、お

父さんの側へお出で。」

しかし坊は泣出して母の裾に隠れた。

「何故坊は泣くのだらう？」と私はうろくと視

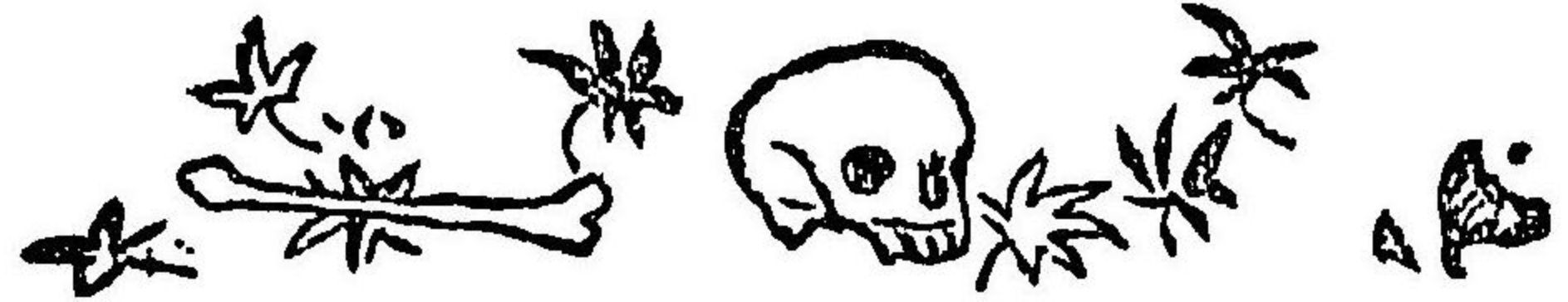
廻して、「一體お前達は何故其様な蒼い面をして黙

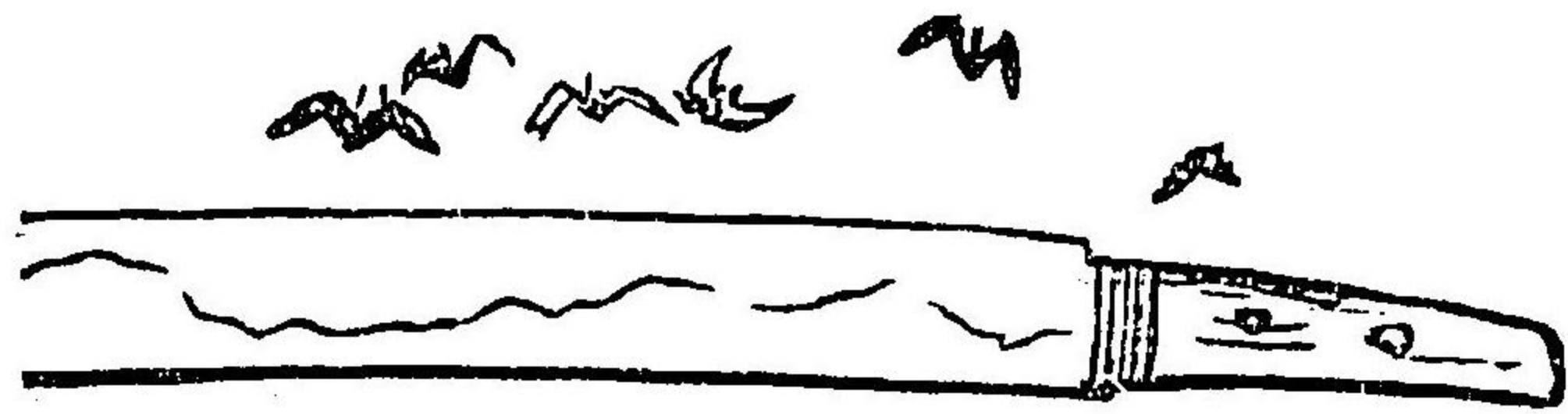
つてるのだ？ 影法師のやうに、始終人の眼には

かり随いて来る……」

弟は高笑をして、
「黙つてやしません。」

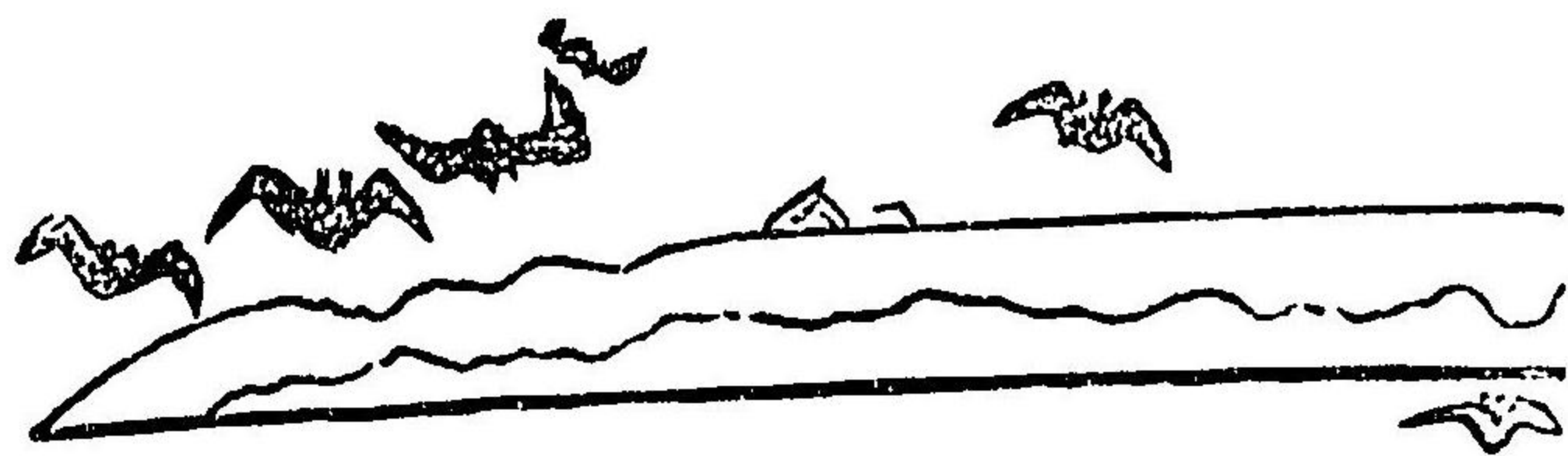
妹も合槌を打つて、





「お饒舌の仕通しよ。」
 「どれ、私はお夜食の仕度に掛らう」と母は倉皇と出て行つた。

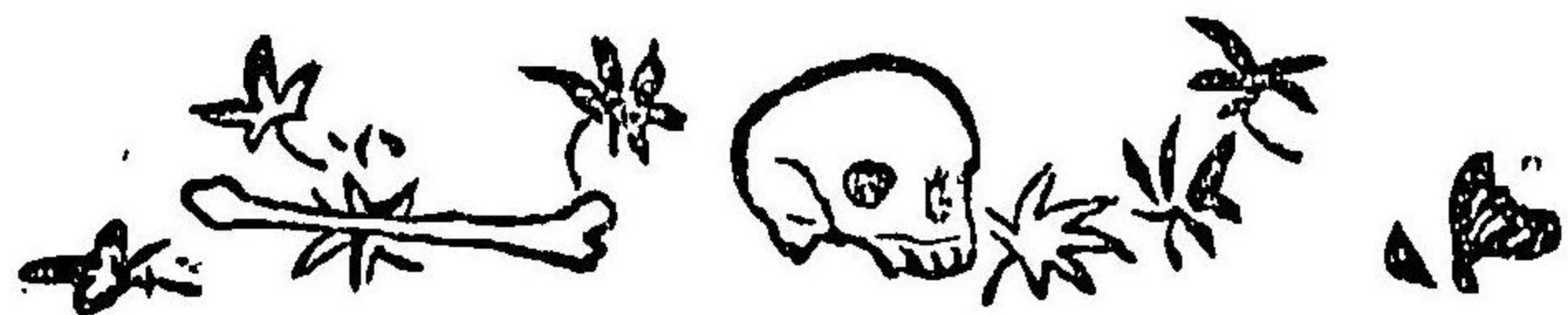
「いや、黙つてゐる」と私はふつと其に相違ないと思込むで、「朝から一言だつてお前達の物を言ふのを聞いた事がない。己ばかり饒舌つたり、笑つたりして喜んでゐるのだ。己が歸つて來ても喜んで呉れんのか？ 何故皆成る丈己の顔を見ぬやうにするのだ？ 己は其様に變つたか？ そりや變りもしたらうが：鏡が一つも見えんぢやないか？ 皆片付けて了つたのか？ 鏡を持つて來て呉れ。」

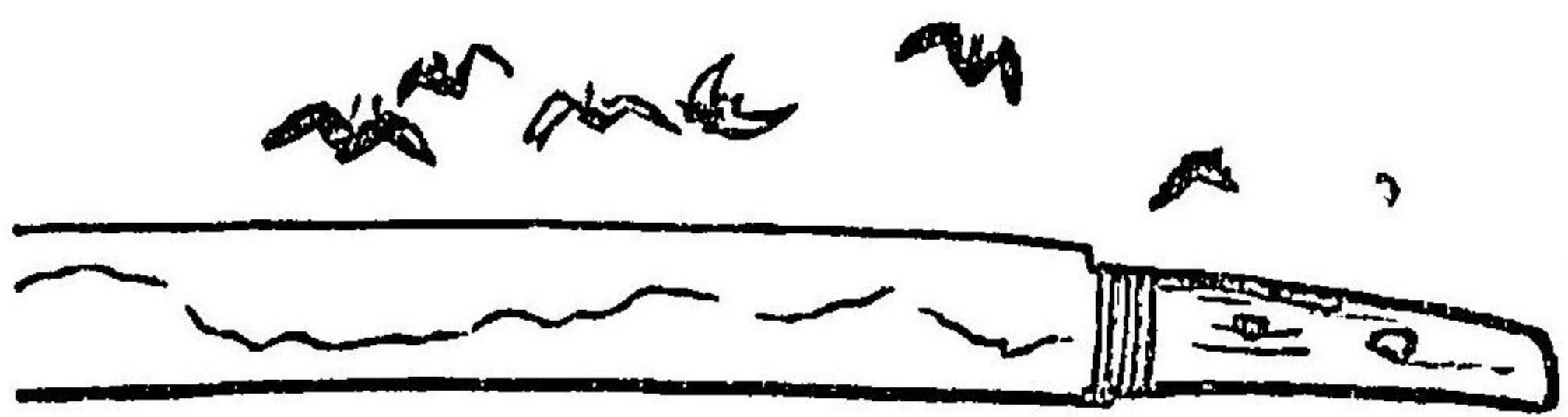


「は、今直ぐ持つて参りますよ」と妻はいつて、出て行つたぎり中々戻らんで、鏡は小間使が持つて來た。面を映して見ると、汽車に乗つてゐた時停車場に居た時の矢張りあの面で、少し老けたやうだが、格別變つた事もない。

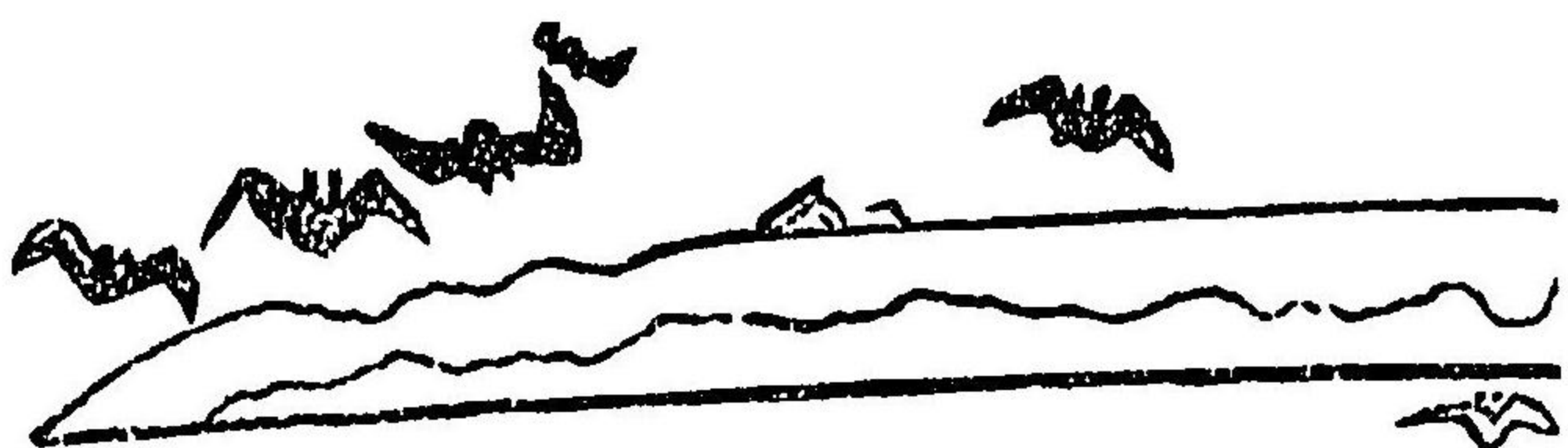
「些とも變つてやせんぢやないか？」
 と澄していふと、傍の者は大層喜んだ。何故だか皆私が大群を立て、氣絶でもしさうに思つてゐたらしい。

妹の笑聲は段々高くなつて、狼狽てゝ出て行つて了つたが、弟は狼狽した様子もなく、落着拂つ

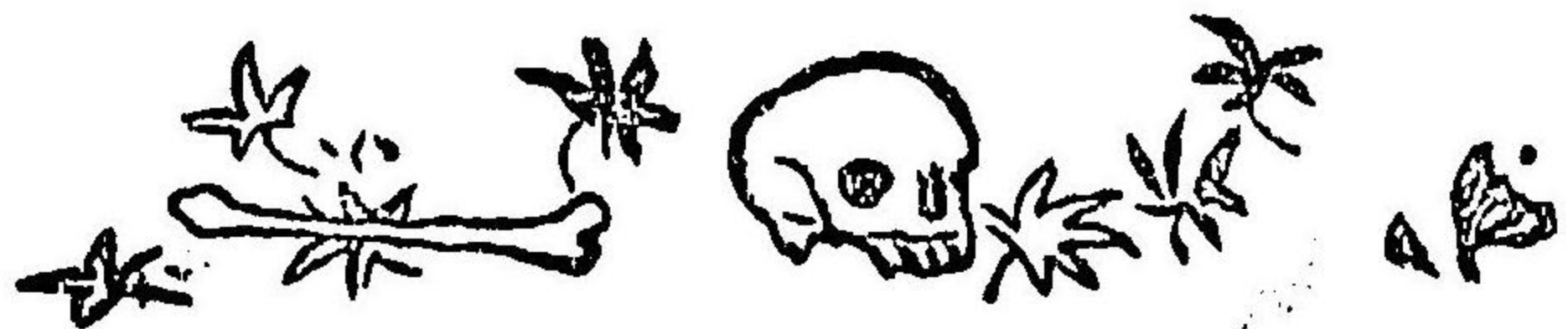




「さう、そんなに變つちやありません。たゞ少し禿
げたばかりで。」
「首が満足に附いてるのが見付け物だと思はなき
やならん」と私は平氣で答へて、「それはさうと、
皆何處へ行つたのだらう——一人起ち二人起ちして。
お前も少し家の中を引張り廻して呉れんか。實
に此椅子は便利だ。全で音がせん。幾ら出した？
己も既う斯うなりや仕方がない、金に糸目を附け
んで此様な義足を買はう、もつと好いのを……や、
自転車か！……」



壁に掛つてゐる。空氣が抜いてあるから、護謨
輪は萎びてゐたが、まだ眞新しだ。後輪の護謨に
少し泥が干乾びて附いてるのは一番最後に乗つた
時の泥だ。弟は黙つて椅子を推すのを止めてゐた。
私には其黙つてゐる意も立止つてゐる意も讀めた
から、不機嫌な面をして、
「己の方の聯隊で生残つた將校は四人外ない。己
は非常に幸運だ！自転車はお前に與らう。明日に
なつたら、お前の部屋へ持つてつとくが好い。」
「さうですか。ちや、貰つときませう」と弟は素
直に言ふ事を聽いて、「さうですとも、兄さんは幸



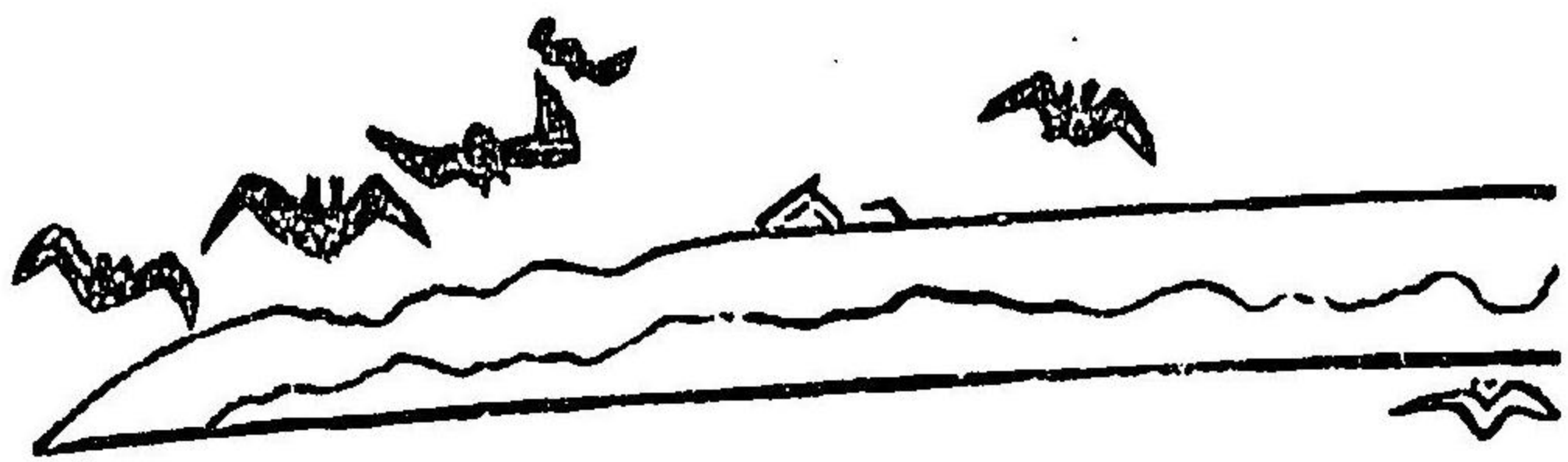


運だ。市内でも人口の半分は忌中の人だそうです
 からな。そりや足は何だけれど……」
 「さうとも。己は郵便配達ぢやなしな。」
 弟はふと立止まつて、

「如何したんです？ 首が大層震へるぢや有りま
 せんか？」

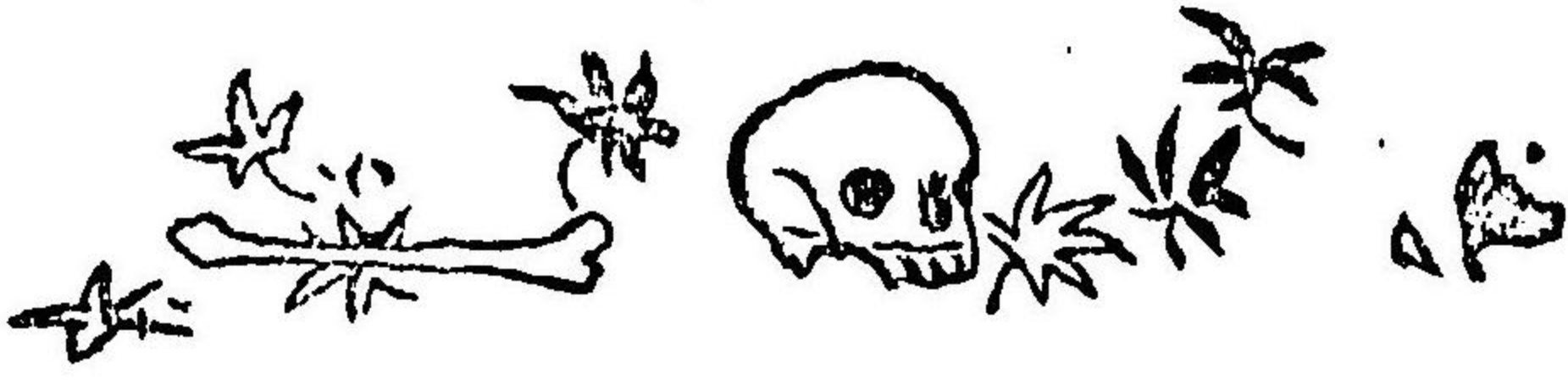
「なに、何でもなし。直き癒つ丁ふ、醫者も然う
 言つてゐた。」

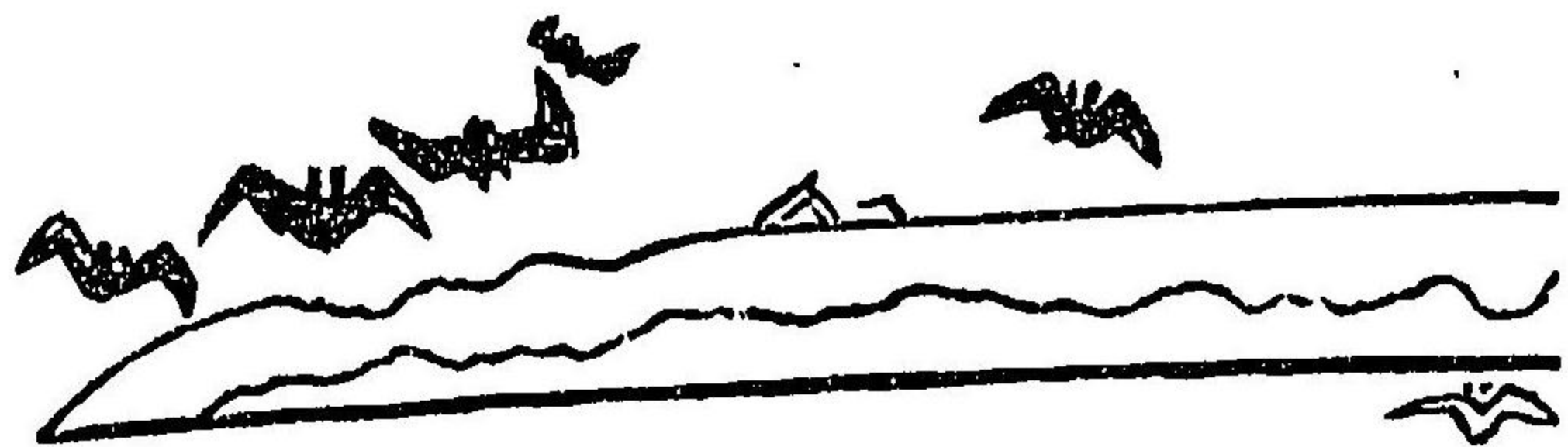
「手も震へますな？」
 「う、手も震へる。なに、直き癒つ丁ふ。まあ、
 推して呉れ。一ツ處に居ると壓きて不好。」



家内の者が皆佛頂面をしてゐるので、私も不愉快
 でならなかつたが、でも床を敷る段になると、
 又嬉しくなつて來た。結構な寢臺だ。四年前結婚
 間際に買った寢臺の上に木式の床を敷つて呉れる。
 滑いシーツを敷いて、それから枕を据ゑて、夜着
 を被ける——その事々しい爲體を見てゐると、可
 笑しくて涙が零れる。

妻に對つて、
 「さ、着物を脱がせて呉れ。それから臥かすのだ。
 あゝ、好い心持だ！」
 「は、只今。」

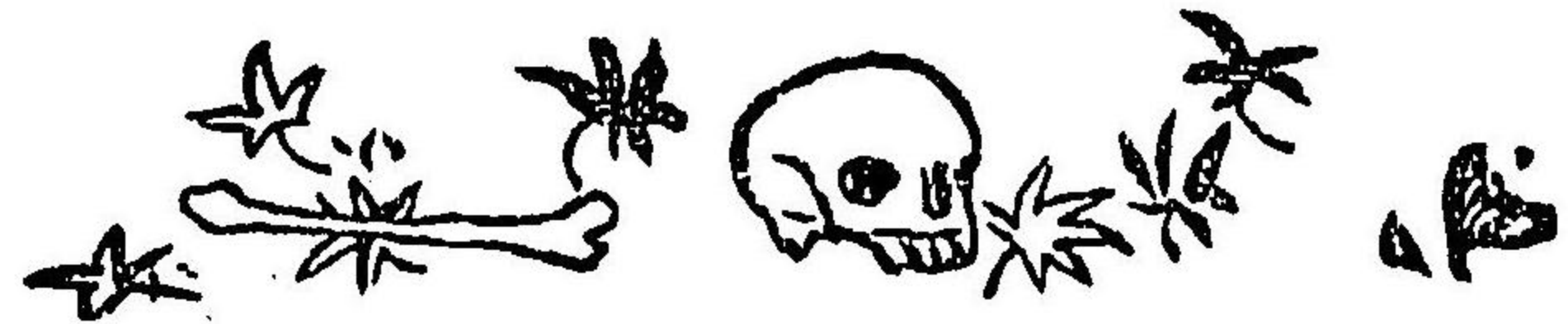




うに身を引いて、又走り付いて、少しばかり残つた腿に接吻しながら、泣きながら、

「あんな満足な身体だつたのに……まだ三十ちや有りませんか。若い立派な方だつたのに、此様なになつて了つて、情けないぢや有りませんか！ 本當に残酷な人達だ。貴方を此様にすれば、何處が好いのでせう？ 何の必要が有つたのでせう？ 優しい貴郎を此様な姿にして了つて……私やもうも情けなくッて……」

此泣聲を聞付けて皆駈けて來た。母も、妹も、乳母も皆駈付けて來て、皆泣いた、何だか言つて、



「早く！」

「は、只今。」

「如何したんだ？」

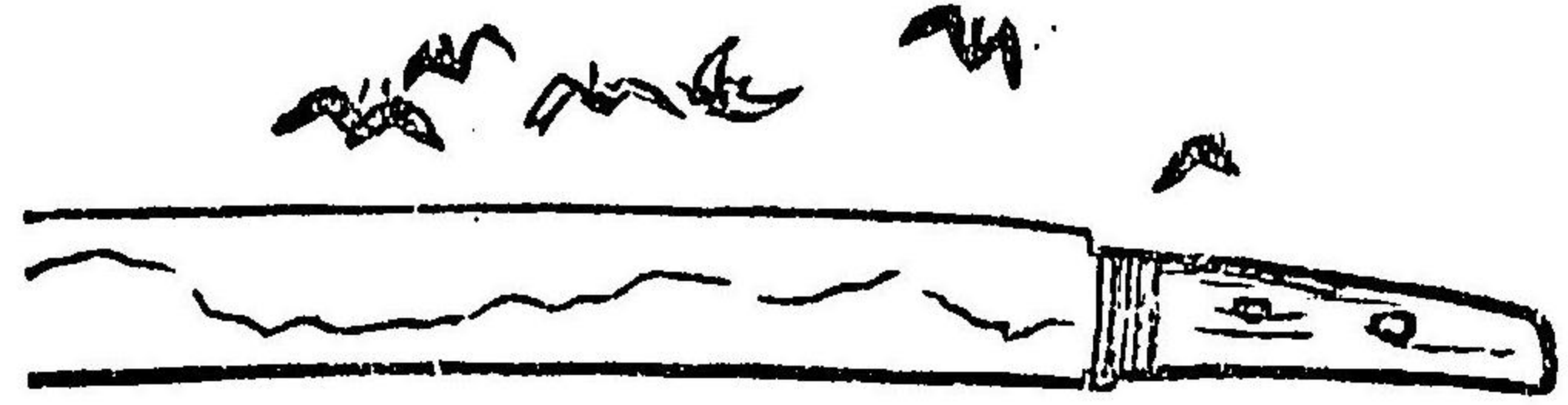
「は、只今。」

妻は私の背後の化粧臺の側に立つてゐた。其方を振向いて見やうとしたけれど、叶はない。と、不意に妻が大きな聲で叫んだ、此様な聲は戦場でなければ出ないといふ程の大きな聲で叫んだ、

「情けないぢや有りませんか！」

而して私に飛付いたまゝ、其處へ倒れて、有もせぬ私の膝へ面を埋めやうとして、慄然としたや





私の足の處に轉がつて、皆大泣きに泣いた。弟は部屋の入口に蒼白い面をして立つてゐたが、是も願をわなく願はせて、金切り聲を振絞つて、

「其様な泣かれると、私も氣違ひになりさうだ
——氣違ひに！」

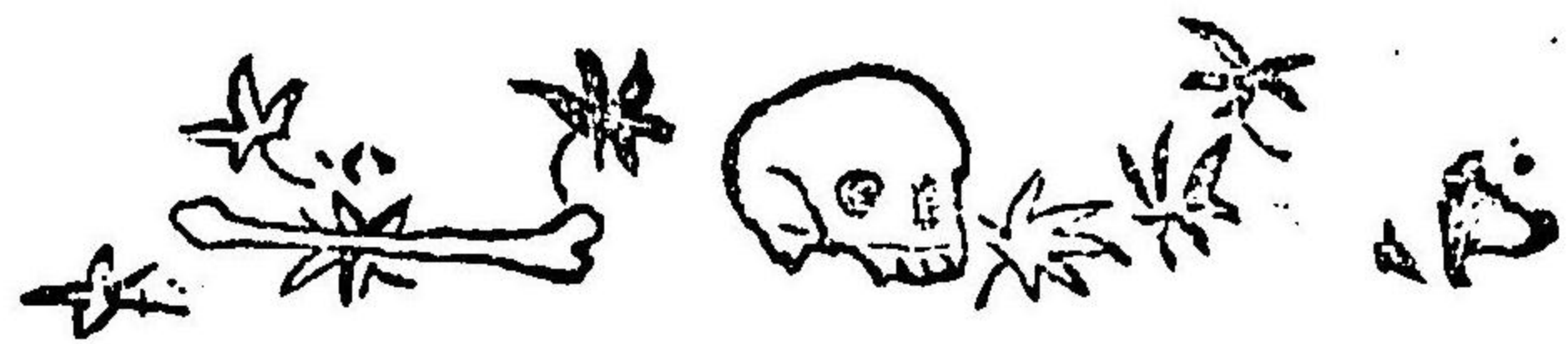
母は母で私の椅子の側にひれ伏してゐたが、もう大きな聲も出ないと見えて、緩かに皺噎れ聲を立て、頭を車輪に打當て、泣いてゐた。で、其處に枕を据ゑて夜着を掛けた清潔な寢臺が見える。四年前結婚間際に買った寢臺だ。

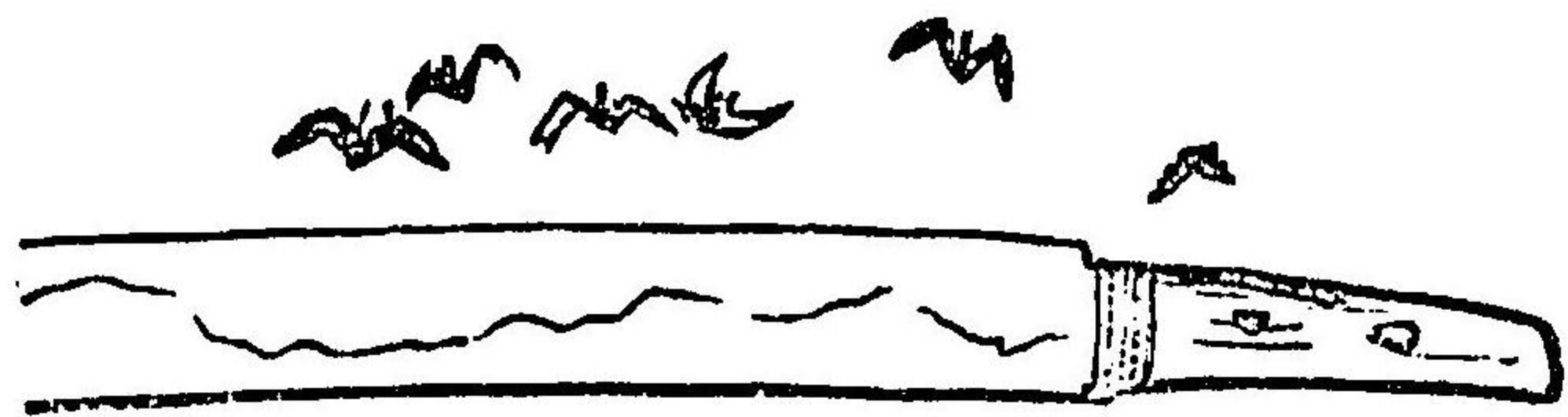


(斷篇第九)

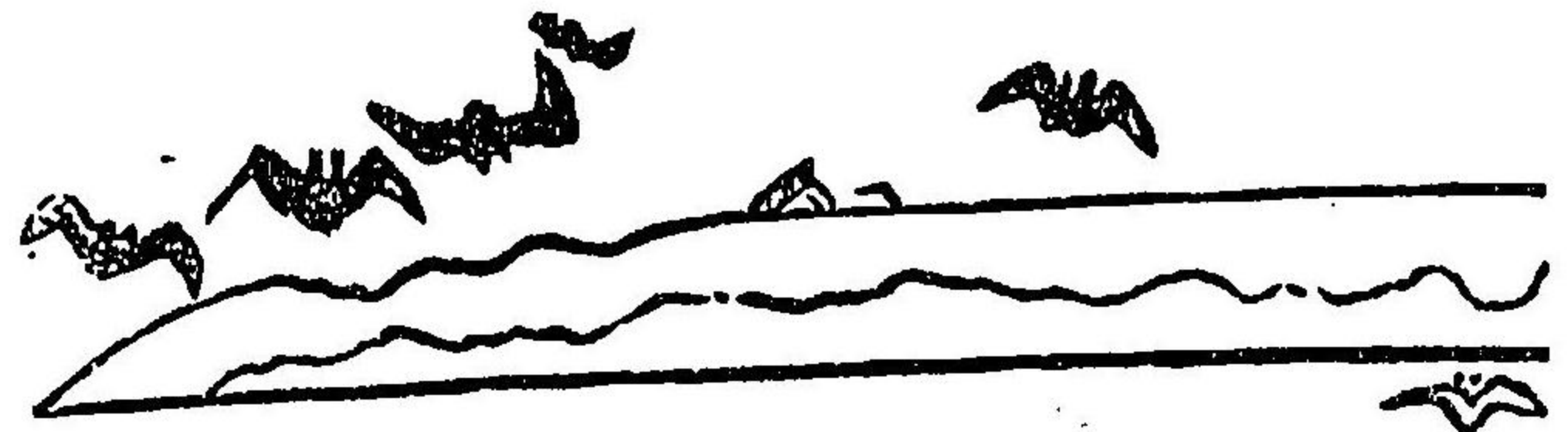
私は湯槽に涵つてゐた。弟は起つたり、居たり。タオルや石鹸を取上げて、近々と近視眼の側へ持つて行つたり、又舊へ戻したりして、狭い部屋の中でまごころしてゐたが、頓て壁に對つて、指先で壁土を弄りながら、

「ま、考へて御覽なさい。数十年數百年の間、慈悲だの、分別だの、論理だのといふ事を教へ込んで、人に意識を興へた以上は、——何はさて措いて、意識を興へた以上はですな、其丈の應報が屹

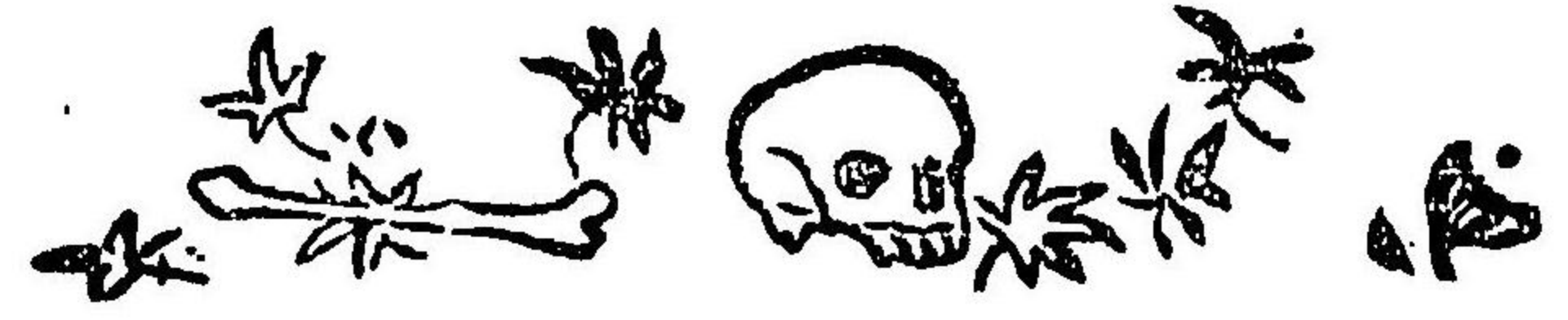


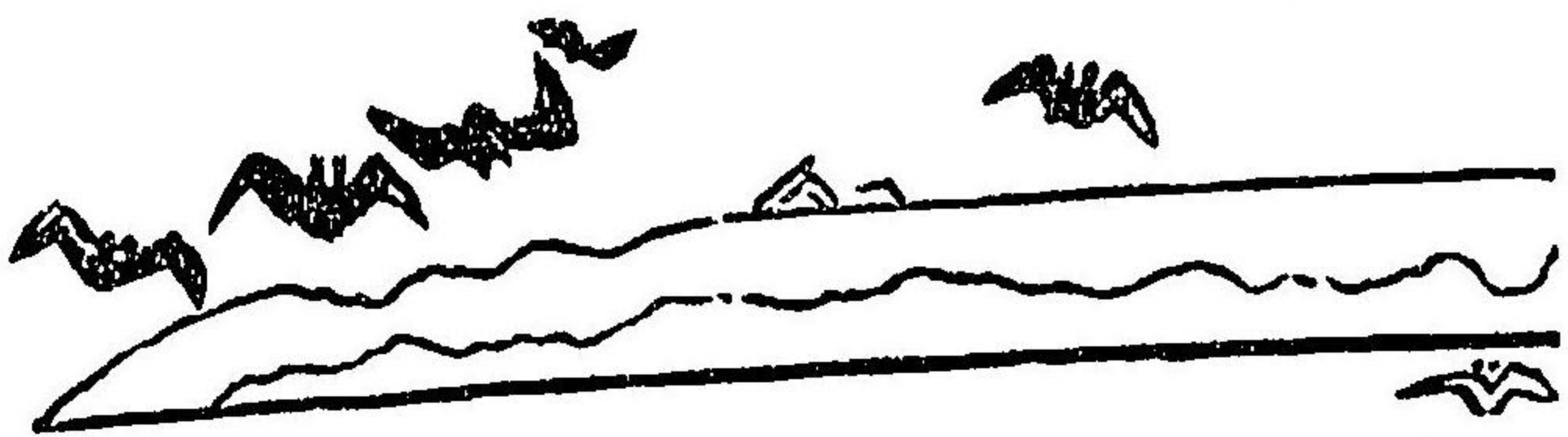


度無けりやならん。そりや残忍になれんではない。無感覺になつて、血を見ても、涙を見ても、人の苦しむのを見ても、平氣でゐるやうに、爲らうとすればなれる。例へば、牛や豚の屠殺者、或種の隣者、或は軍人なぞが其でさ。が、しかし、眞理を認識した者が眞理を棄て、了ふ事が出来るでせうか？ 私は出来んと思ふ。子供の時から動物を苦めるな、情を知れ、と教へられてゐるのです。讀んだ書物といふ書物には皆然う書いてゐるのです。だから今度の戦争に惱まされる人を見ると、私は氣の毒でく耐らない。私は戦争を呪咀



する。が、段々日數の經つに隨れて、人の死ぬのや、苦しむたり血を流したりするのが珍らしくなくなつて來ると、不斷は感覺が鈍つたやうな、道義心が麻痺したやうな鹽梅で、餘程何か強い刺戟でも受けなきや、胸に應へない。が、それでも、戦争其物とは如何しても折合ふ事が出来ん。元來が沒常識の事を理解する——そんな事は私の頭では出来ない。百萬の人が一所に集つて、一々法に依つて進退して命を取合ふ、而して皆同じやうに苦しい思をして、同じやうに不幸な身の上になる、——それに何の意味が有ります？ 全で狂人の所



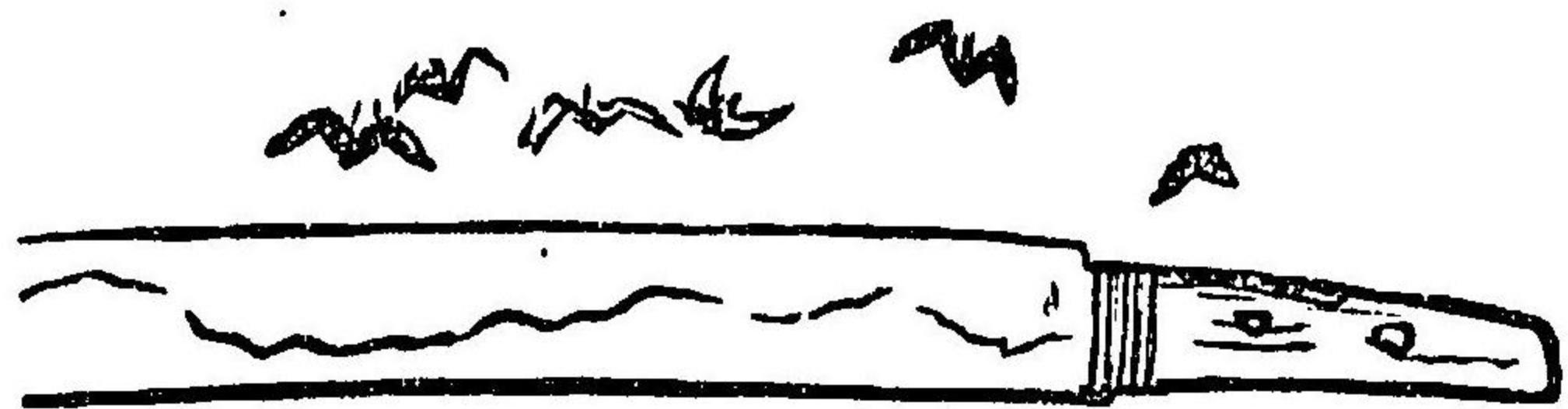
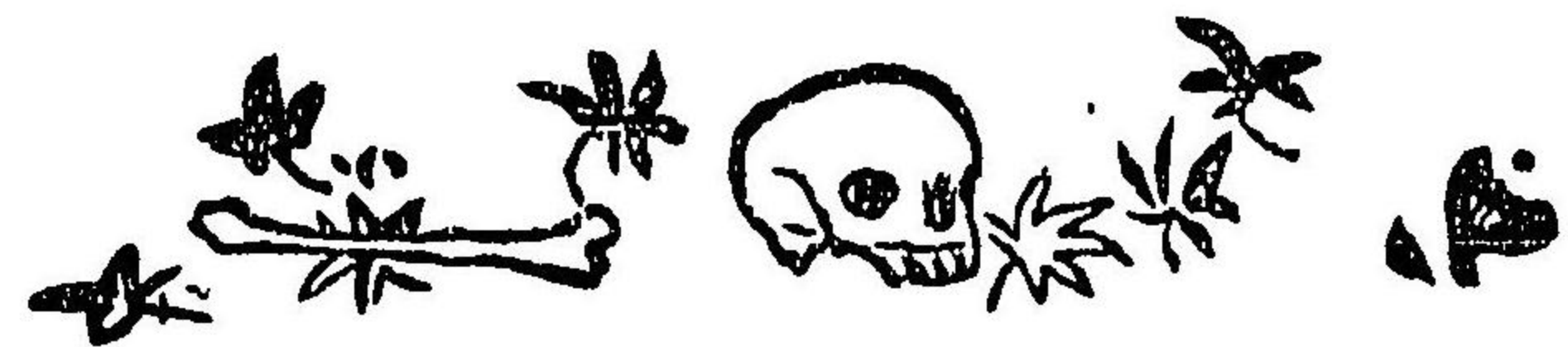


誰か事山を言つて聴かせて呉れると好いのだが、誰一人其の出来る者が無い。兄さんは戦争へ出て實地を目撃して來なすつたんだ。事山を話して下さい。」

「そんな事己は知らん！」

と戲言らしく言つてボシヤリくやつてゐると、弟は悲しさに、

「矢張分らん？ ちや、私はもう誰の力も借りられないのだ。酷いなア！ 私にやもう仕て好い事と悪い事の見界も附かない。——何が分別だやら、無分別だやら、私が今甘へる風で、徐と兄さんの



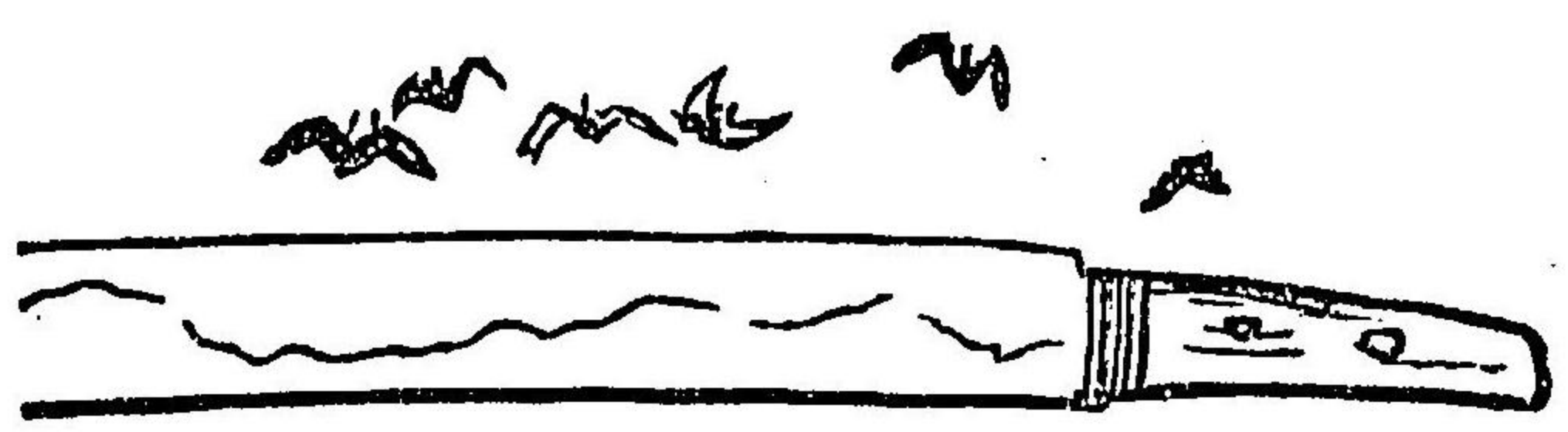
爲ちや有りませんか？」

と弟は此方を振向いて、近視の、少し愛度氣ない眼で、返答でも催促するやうに、凝と私の面を視た。

「赤い笑さ」と私は快活に言つて、ボシヤリくとやつてゐた。

「實はね」と弟は親しらしく冷たい手を私の肩へ載せると、素肌で濡れてゐたので、吃驚したやうに、手を引込めて、「實はね、私はどうも氣違ひになりさうで、心配でならんのです。私には一體如何した事だか、事山が分らん。分らんで、怖ろし





咽喉に手を掛けて、グツと締上げたら、如何だらう？

「馬鹿を言ってる！ 誰が其様な真似をする奴が有るもんか！」

弟は冷たい手を揉むで、微かに笑つて、

「兄さんが彼地に居る頃、私は夜寝ない事が能く有つた、—— 眼が合はないで。すると、變な氣になつて、斧でもつて阿母さんも、妹も、下女も、

犬も、皆叩殺して了はうかと思ふ。無論然う思ふばかりで、其様な事は行る氣遣ひはないが……」

「行られちゃ耐らん」と私な莞爾して、ポシヤリ



ポシヤリとやつてゐると、

「それから又ナイフだ。總て鋭利な見々する物がある」と、危険でならん。若し私がナイフを持つたら、屹度人を斬りさうな氣がする。だつて、若し

鋭利なナイフだつたら、斬りたくなるに不思議はないでせう？」

「尤な次第だ。お前も餘程變物だな。もう少し湯を注して呉れ。」

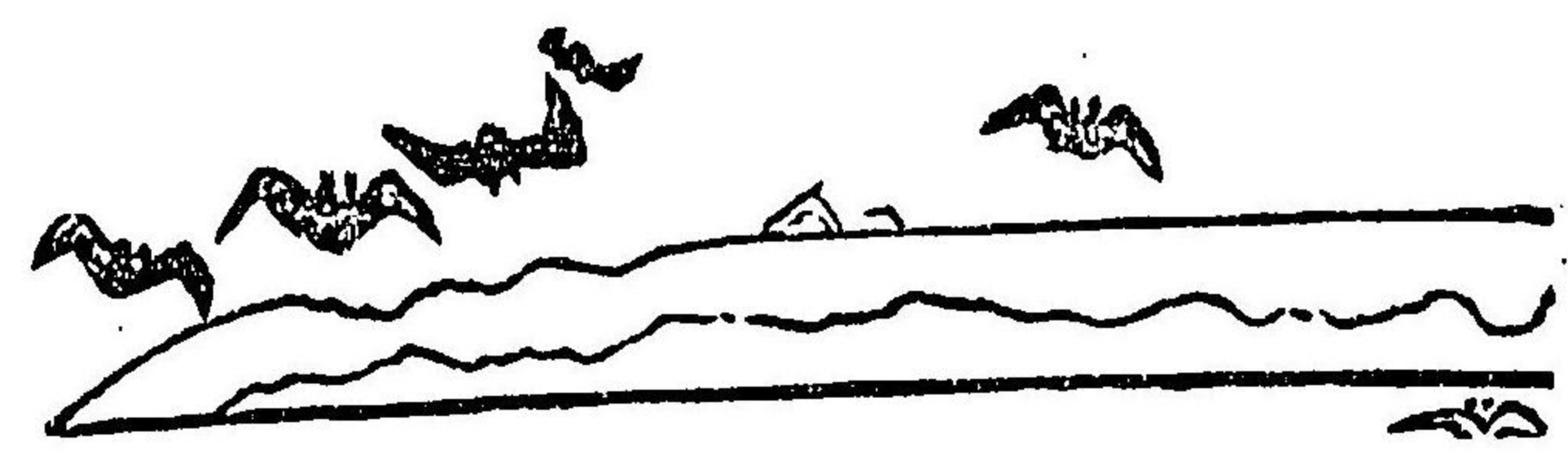
弟は龍頭を捻つて、湯を注してから、また、

「それから又群衆だ。人が大勢集つてると、私は心配でならん。晩に外で大きな聲でもして騒々し

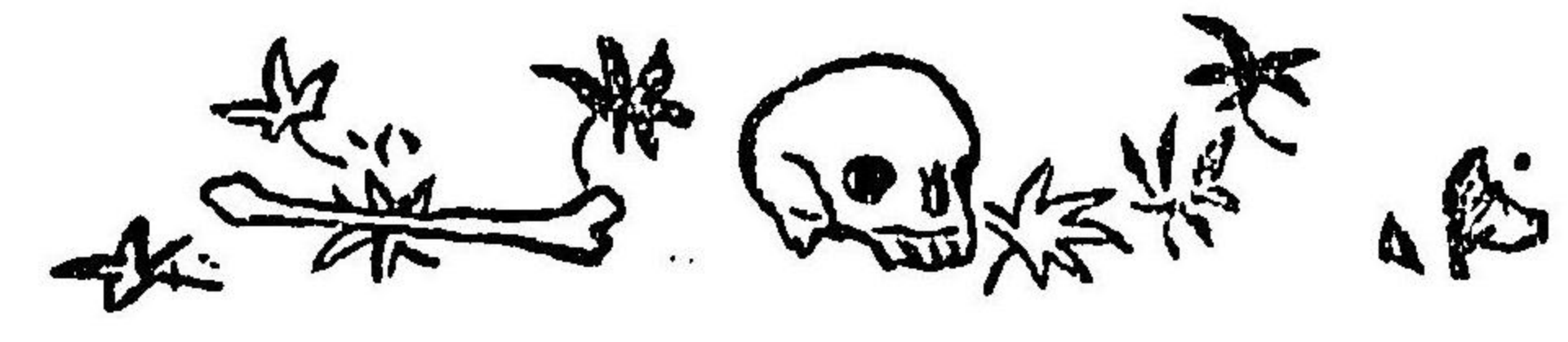




いと、私は愕然として、始まつたのぢやないかと
 思ふ、斬合が。人が二三人立話をしてゐる。話の
 筋が分らないと、今にも其人達が大聲立て、飛
 つて斬合が始まりさうに思はれてならん。それに
 貴兄も御存じだらうが、と仔細ありげに私の耳の
 側へ顔を持つて来て、「新聞を見ると、人殺しの記
 事だらけでせう？ それが皆變な人殺しばかりだ。
 十人十種といふけれど、嘘です。人の良智といふ
 ものは一つで、その良智が段々曇り出したのです。
 まあ、私の頭を觸つて御覽、非常に熱いから。全
 で火のやうだ。けれども此奴が時とすると冷たく



なつて、頭の中が總て凍つたやうな、かじけたや
 うな、怖ろしい、コチくの、氷のやうな物にな
 つて了ふ事も有るのです。私は如何しても氣違ひ
 になりさうだ。笑ひ事ぢやない、本當に氣違ひに
 なりさうだ。もう十五分になりますよ。好加減に
 お出なさらんと……」
 「もう少し。もう一分ばかり。」
 昔のやうに湯槽に涵つて、弟の言ふ事には心を
 留めずに、耳に慣れた其聲を聞きながら、少し緑
 青を吹いた銅の龍頭だの、見慣れた壁の模様だの、
 棚に順好く列べた寫真機械だのと、古い馴染のあ

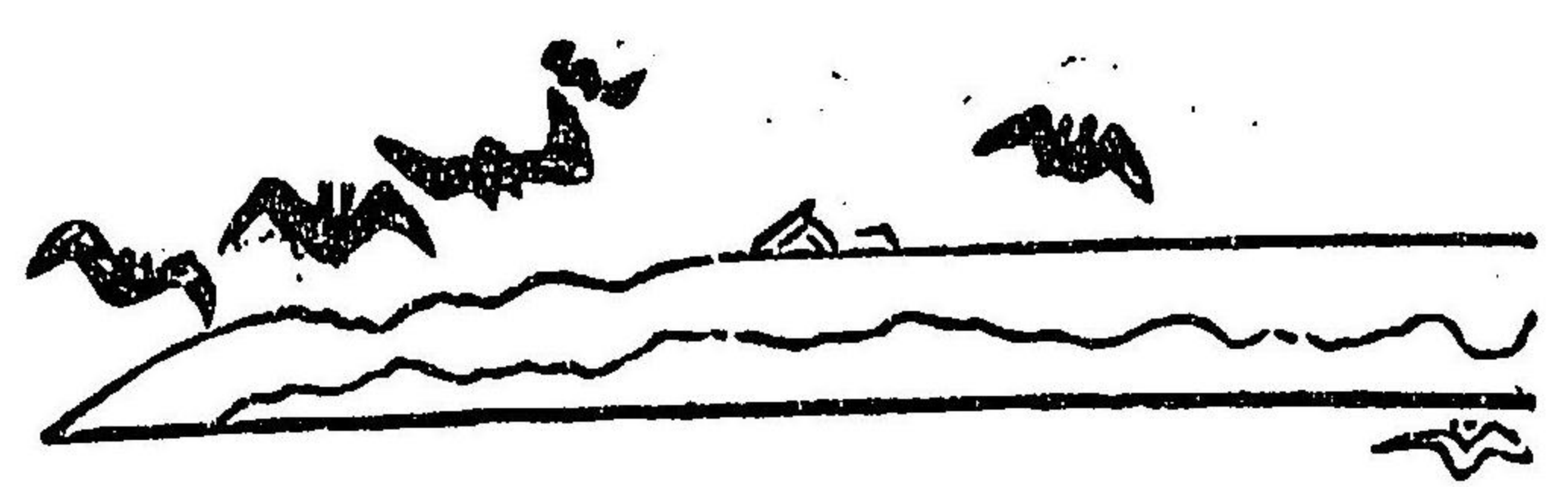




る、有觸れた、平凡の物ばかりだけれど、之を見
てみると、何とも言へず心持が好い。又寫眞研究
を始め、平凡な穩かな景を寫したり、坊の歩く
所や笑ふ所や、悪戯する所を撮つたりする。足無
しでも是なら出来る。文壇の名著や、思想界の新
しい功程や、美や、平和を題目にして文を作るの
だ。

「ほッ、ほッ、ほー！」といつて、私はポシッポ
シッリと行つた。

「如何したんです？」
と弟が吃驚して顔色を變へたから、

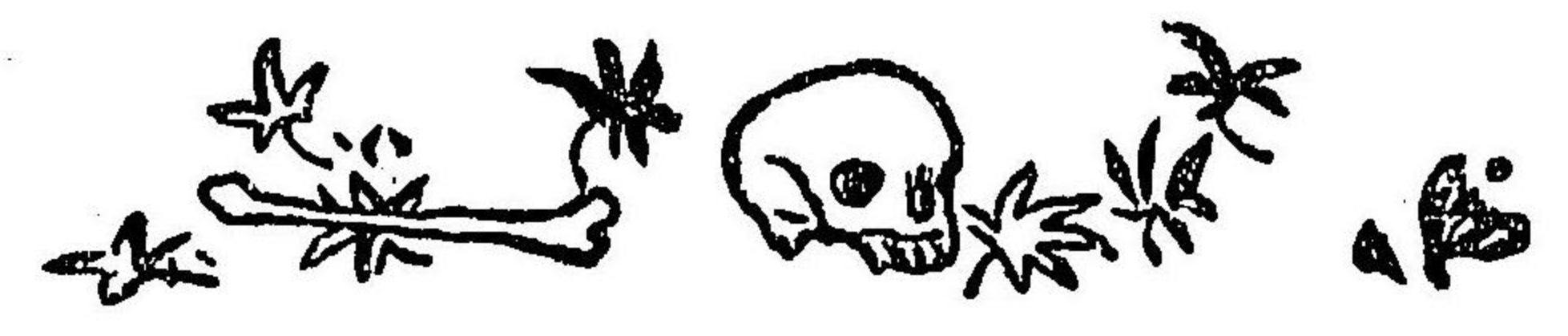


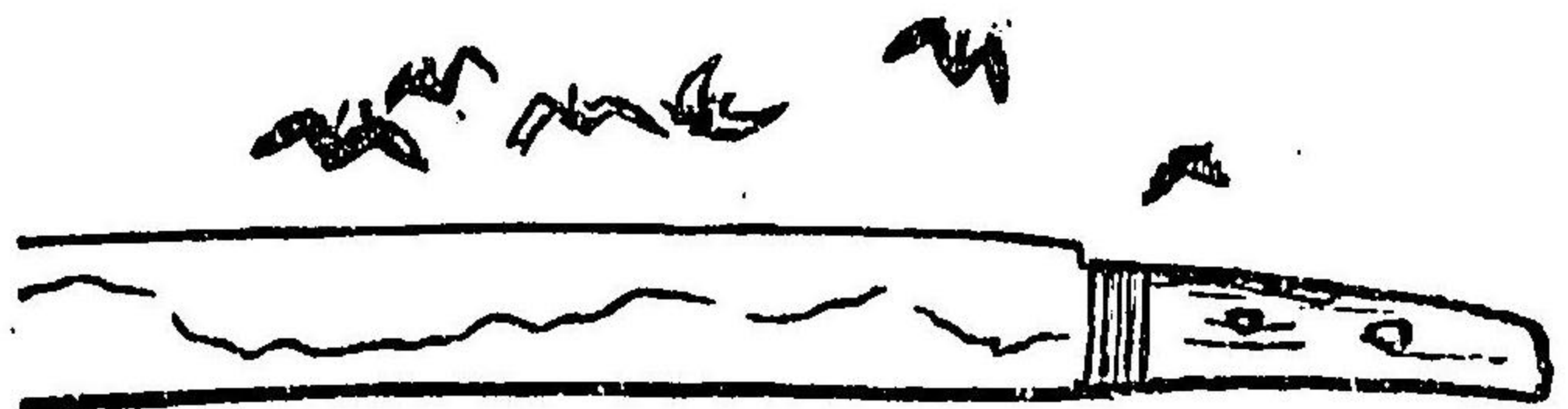
「なに、たい… 家に斯うしてゐるのが愉快だも
んだからね。」

弟は微笑した。その様子が如何にも私を赤兒か
年下の者のやうに思つてゐるらしかつたが、其癖
私より三つ下なのだ。而して自分は大人ぶつて凝
と考込んだ所は、何か年來思惱む一大事でも有り
さうな様子だつた。

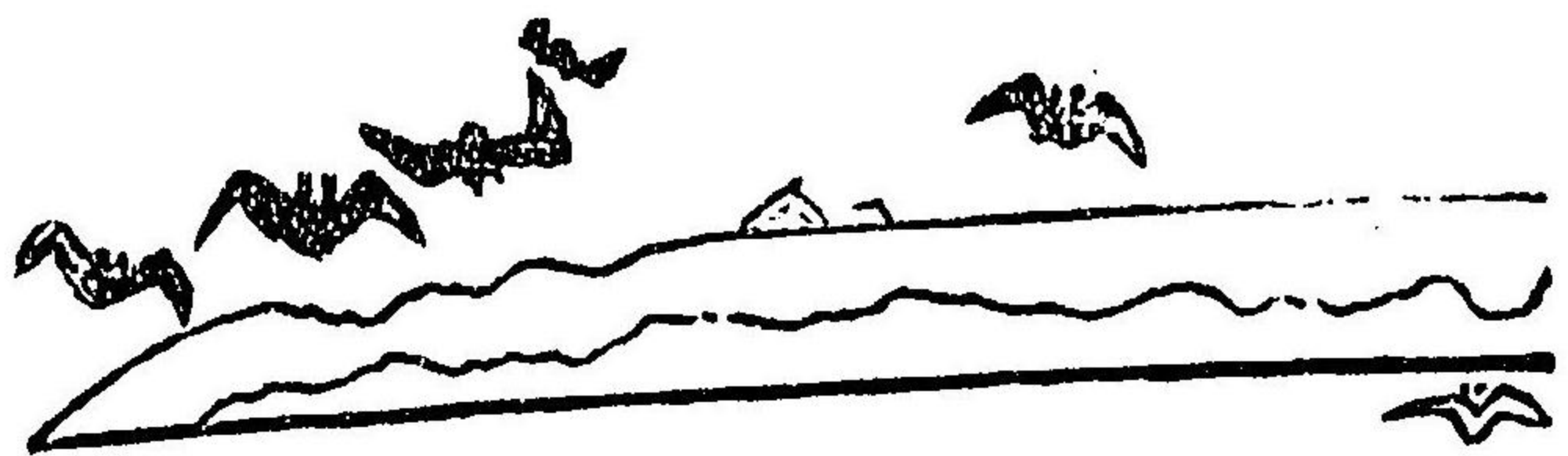
やがて首を竦めて、

「逃げやうにも、逃路がない。毎日殆ど同時刻に
新聞が人の血の通ひを止めて、人間が皆愕然とす
る。其時皆一度に種々な氣持になつて、考へたり、

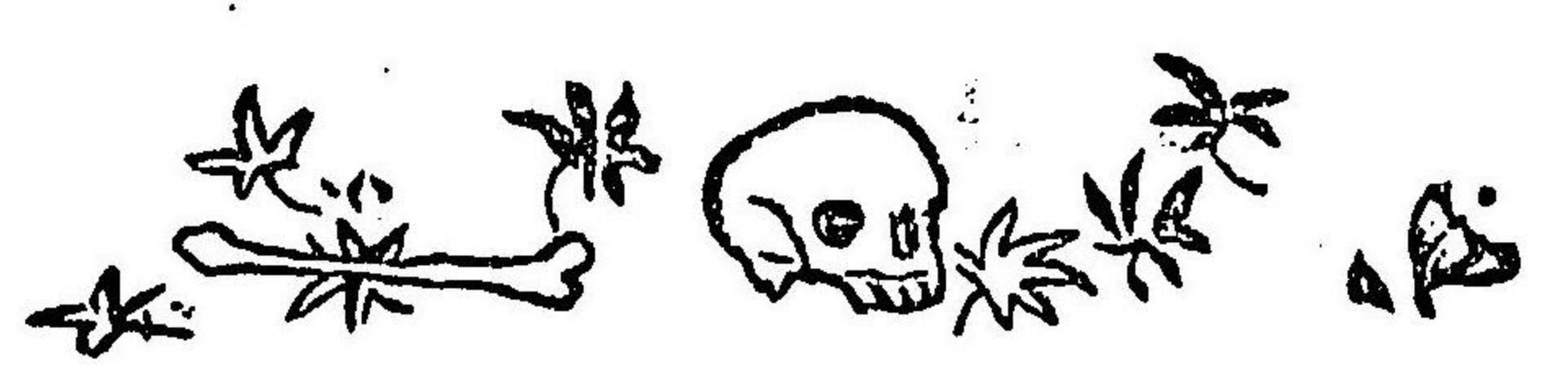


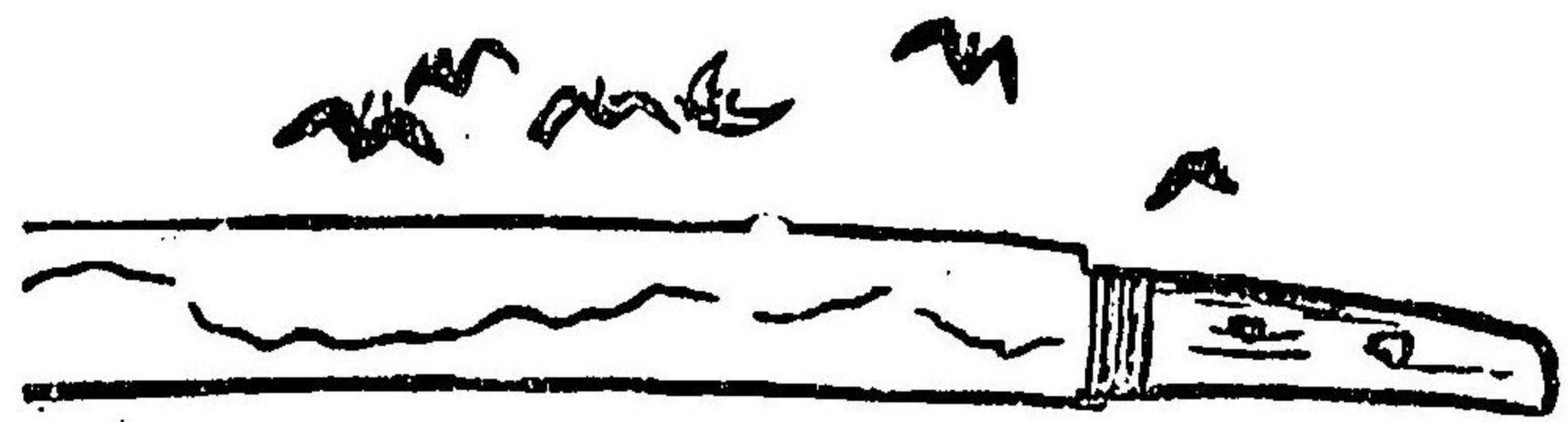


泣いたり、苦しむたり、怖れたりするから、私は
 絶り處がない。全で浪に揉まれる木片か、旋風に
 捲かれた塵といふ身の上になる。尋常一様の凡境
 を離れたくはないが、無理に引離されて、毎朝一
 度は屹度宙に振下つて足の下に眞暗な怖ろしい狂
 氣の淵が洞開する時がある。私は其中に此淵の中へ
 落る、落ちなきやならん理由がある。兄さんはま
 だ能く事情を知らなさいのだ。新聞は讀みな
 さらんし、種々匿して置く事もあるし、——兄さ
 んはまだ能く事情を知らなさいのだ。し
 弟の言つた事は私は戯言にして丁つた。戯言に



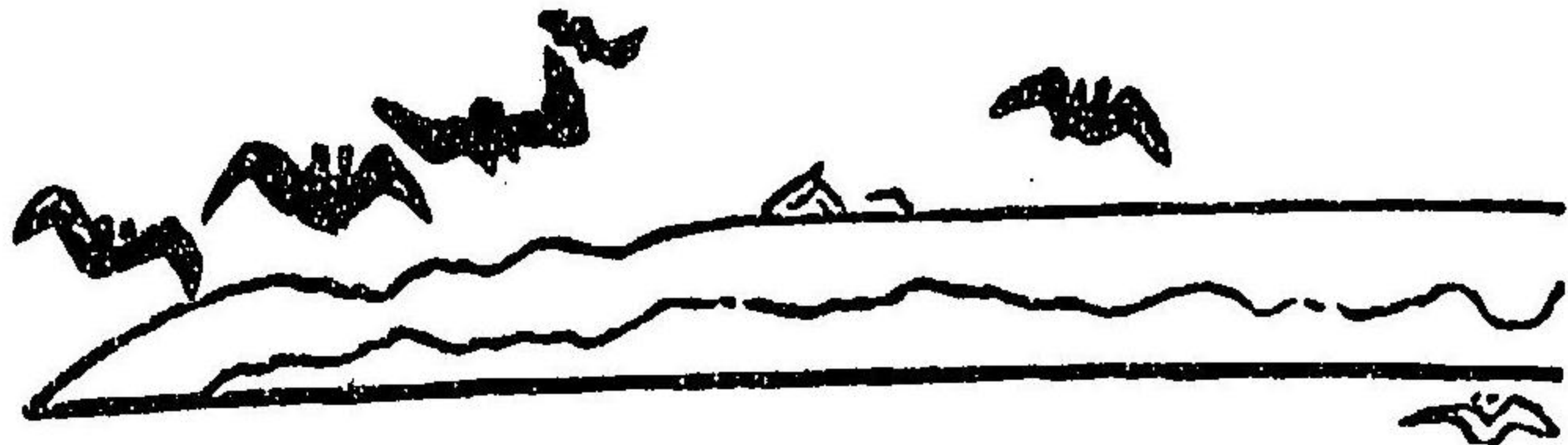
しても、可厭な戯言だが、誰でも氣が狂ふと、戦
 争のやうな氣違沙汰と縁を引く所が出来て来て、
 能く此様な不吉な事を言ひたがるものだから、私
 は戯言にして丁つた。湯に涵つてボシヤリ〜行つ
 てる此時には、戦場で目撃した事は總て忘れた
 やうになつてゐたのだ。
 「いや、匿すなら、匿して置くが好いが、——し
 かしもう出やう」と何心なく私が言つたので、弟
 は微笑して、下男を召んで、二人して私を湯から
 出して着物を被せて呉れた。で、香氣の高い茶を
 私のと極めて線入りのコップで飲むで、なんの、





足がなくても、生きてゐられる、と思つた。茶が
 濟むでから、書齋へ連れて行つて貰つて、机に向
 つて、仕事に掛る用意をした。

戦争前迄は或雑誌で外國文學の評論を受持つて
 ゐたから、今も手近に黄、青、藍色、種々の表紙
 の附いた、懐かしい、清潔な書物が山と積んであ
 る。嬉しさも嬉しい、何とも言へず樂しみで、直
 ぐに讀む氣になれなかつたから、書物を細げては、
 徐と撫でゝゐた。其時私の面には微笑が漾つた。
 屹度馬鹿氣な微笑だつたらうが、引込める事が出
 來ないで、活字や、唐草や、簡素した、少しも俗

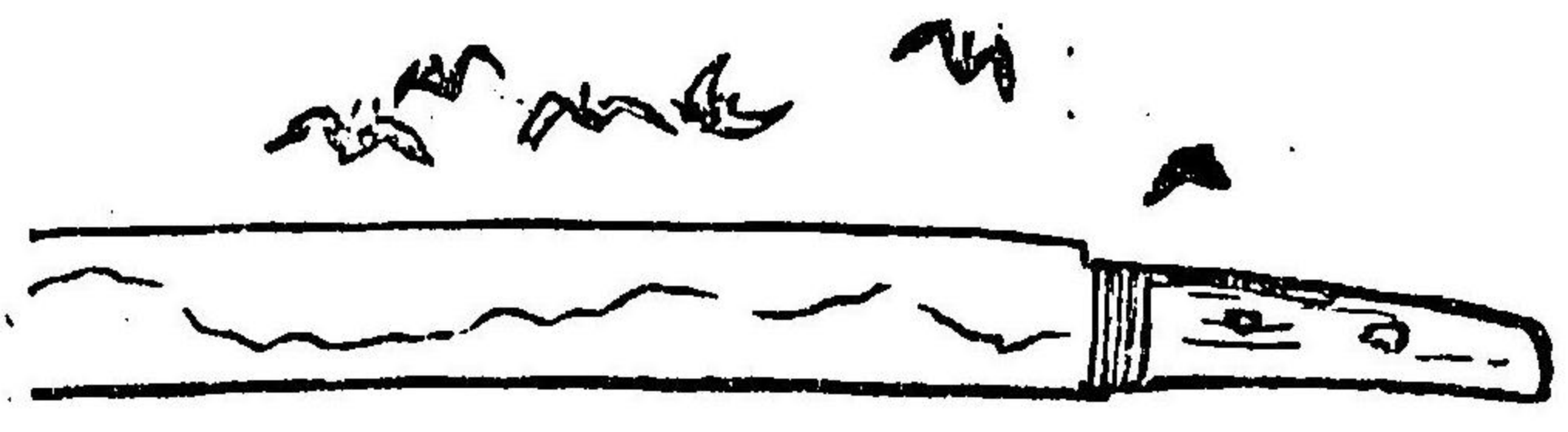


氣のない、見事な挿繪などを眺めてゐた。皆非常
 に工夫を凝したもので趣味がある。例へば、この
 文字など、簡單で、恰好が好くて、巧みに出來て
 ゐる。線と線とが絡み合つた處に調和があつて、
 看る者の心に語る所が多い。之を案じ出すには、
 幾干の人が刻苦して、研究して、何程才能、趣味
 を籠めてあるか、分らん。

「さあ、仕事しなさい」と私は眞面目になつて言
 つた。我仕事ながら疎かには思へぬ。

で、ペンを取上げて題を書かうとすると、手が
 糸で括つた蛙のやうに、紙の上を跳ね廻る。ペン



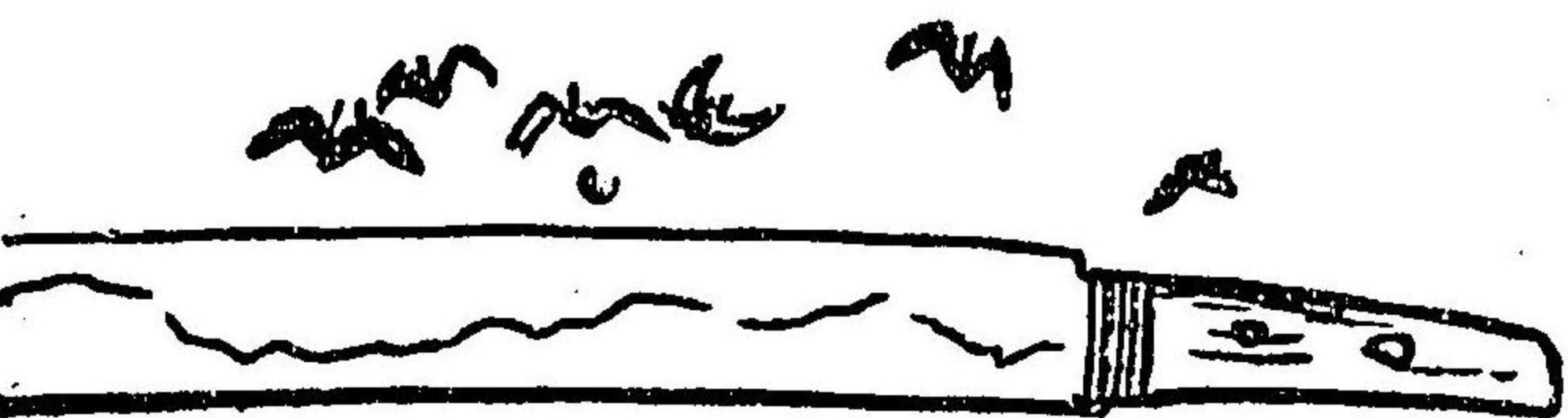


が紙に突掛つて、バリ／＼といつて、跳反つて、止度なく横へ逸れて、筆散したやうな、曲りくねつた、えたいの分らぬ、醜い線が出来て了ふ。私は聲も立てず、動きもせず、一大事の直と身に逼るを覺えて、冷りとして息を塞めてゐると、手は晃々と明るい紙の上を躍つて、指が一本々々わなわなと顫へる。その顫へる處に、便りない、物狂ほしい恐怖心が活きて躍つてゐる。どうやら指だけがまだ戰場に居残つて、空に映る火影や血糊を見て、言語に絶えた疼みを呻き叫ぶその聲を聴いてゐるやうだ。指は私の體を離れて、魂が籠り、



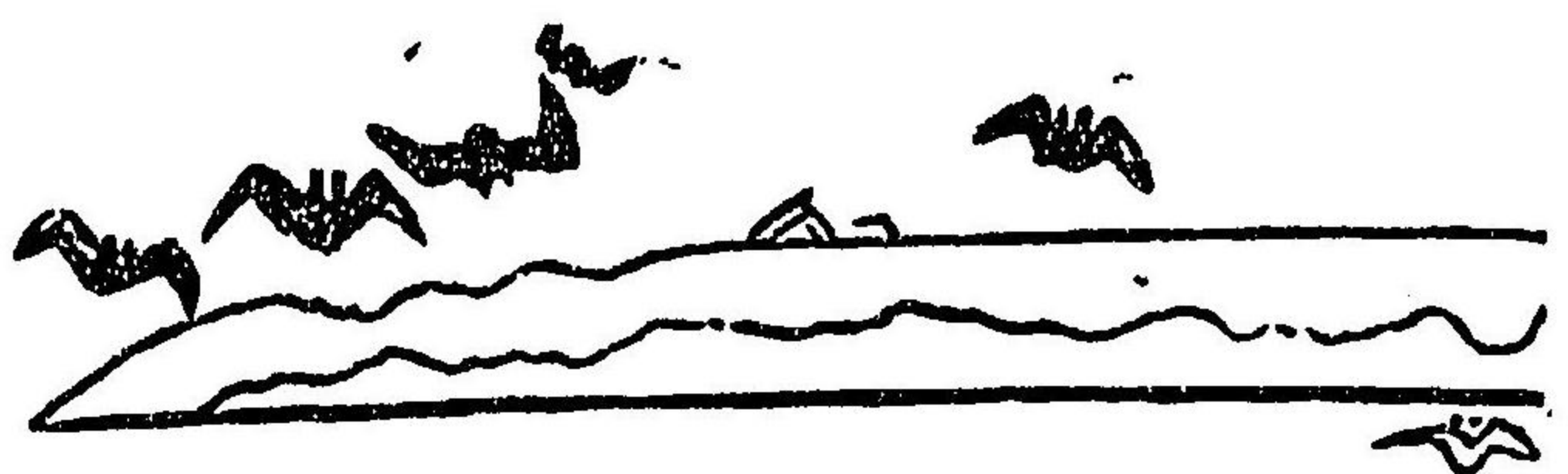
耳となり、眼となつたのだ。聲をも揚げ得ず、動くこともせず、私は冷たくなつて、晃々と深い白紙の上を指が躍廻るのを眺めてゐた。寂然としてゐる。家内の者は私が仕事をしてゐると思ふから、物音させては邪魔にならうと、戸は皆閉切つてゐる。動くことも叶はぬ私は獨り室内に居て、大人しく手の顫へるのを眺めてゐた。「なに、何でもない」と私は大聲に言つた。書齋の掛離れて寂然とした中で、聲は皺噎れて厭に響渡る。狂人の聲のやうだ。「なに、何でもない。文句を口授すりや好い。ミルトンも復樂園を書い





た時にや、盲人だつたと云ふ。己はまだ物を考へる事は出来る。これが何よりだ。これさへ叶へば、文句はない。」

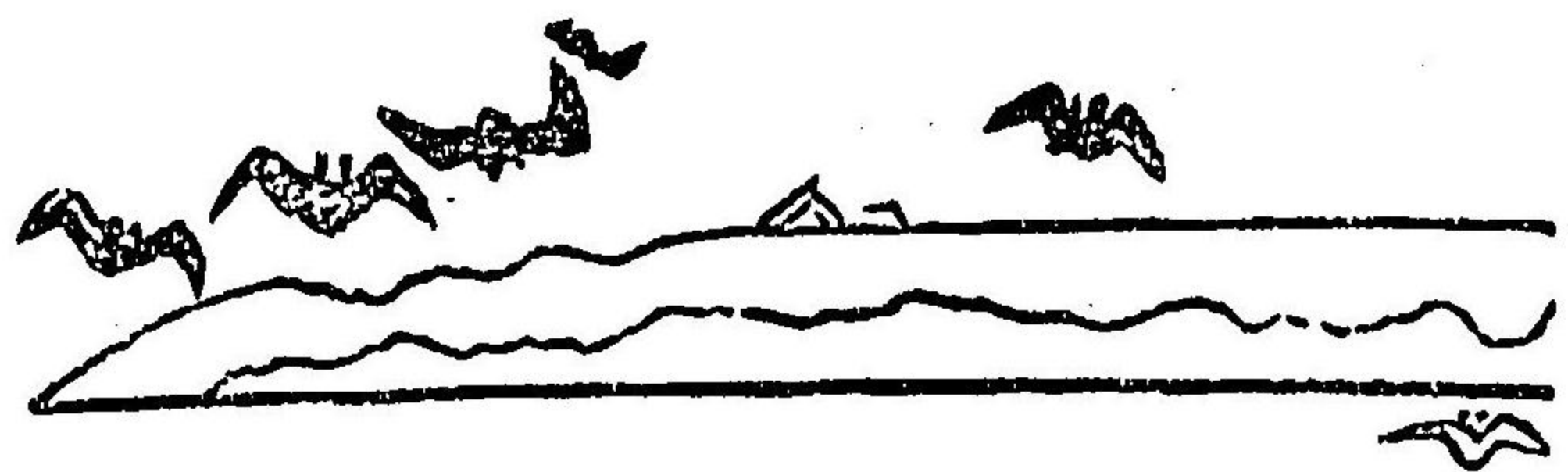
で、盲目のミルトンの事を意味の深い長い文句に仕立て、見やうとしたが、言葉が紛糾つて、締め利かぬ活字のやうに、ほろ／＼と零れ落ちて、漸く文句の末になつたと思ふ頃には、もう始の方を忘れてゐる。其時如何して此様な事になつたのか、何故ミルトンとかいふ人の事を變な無意味な文句に仕立てやうとしてゐるのか、憶出さうとして見たが、憶出せなかつた。



「復樂園々々々」と反覆して見たが、何の事だか、分らない。

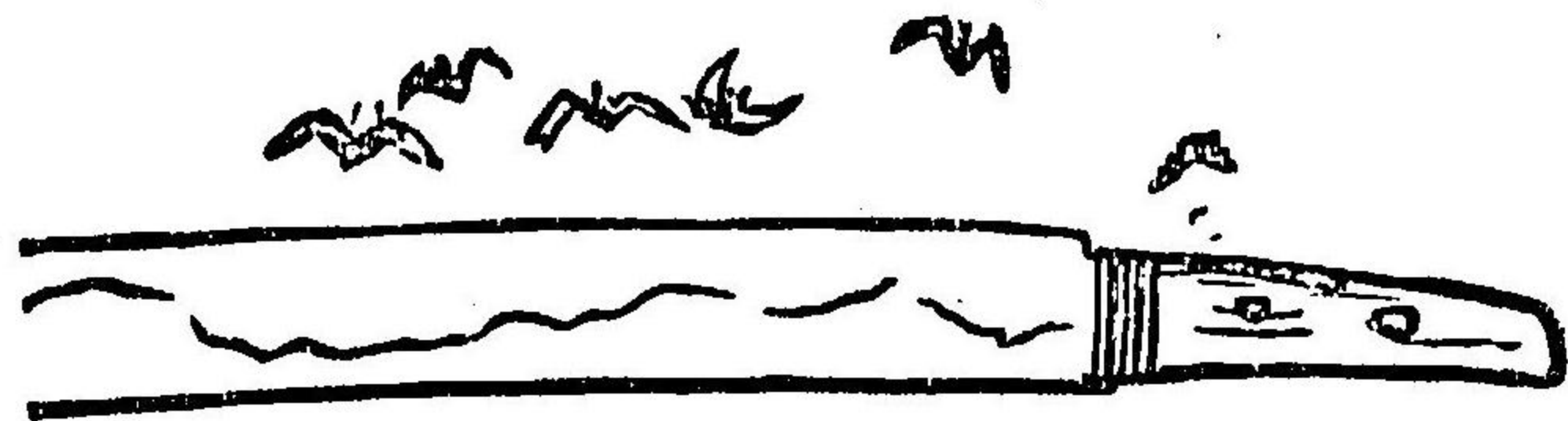
そこで考へて見ると、私は一體能く物忘れをするやうになつた。妙に放心してゐて、見識つた人の面をも見違へる。尋常の話をしてゐてさへ言葉が見付からんで、時とすると言葉は覺えてゐても、どうしても意味の分らん事もある。頓て今日一日の事が瞭然胸に浮んで來たが、何だか妙な、短かい、ぶつりと切れた、私の足のやうな一日で、加之も處々ポカンと穴の開いた變な處がある。これは長いこと意識の消えてゐた、或は無感覺であつ





居心が好くて、觀念をも誘へば、作意を催す便りともなる。あゝ、皆己の事を思つて、呉れると、私は染々嬉しく思つた。

で、感興、神來の感興が湧いて來た。頭の中で燦と日が照出して、創造の力を載せた熱い光を世界の上に落す時、花が散り、歌が散る。花に歌だ。私は徹夜ペンを描かなかつたが、疲れを覺えなかつた。雄大な神來の感興の翫を鼓して、縦横無碍に翔廻つて、文を作つた。天地間の一大文章だ、千歳不磨の文章だ。花が散り、歌が散る。花に歌だ。



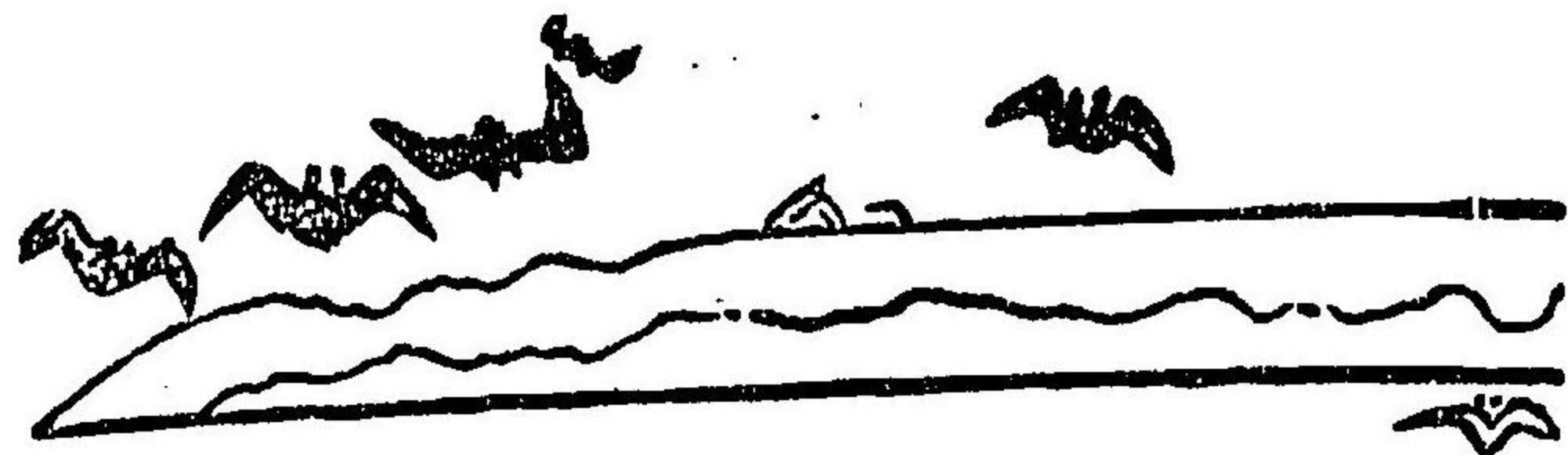
た間だから、其時の事を憶出さうとしても、何一つ憶出せない。

妻を呼ばうと思へば、名を忘れてゐる。それを又不思議とも何とも思はない。窃と小声で言つて見た、

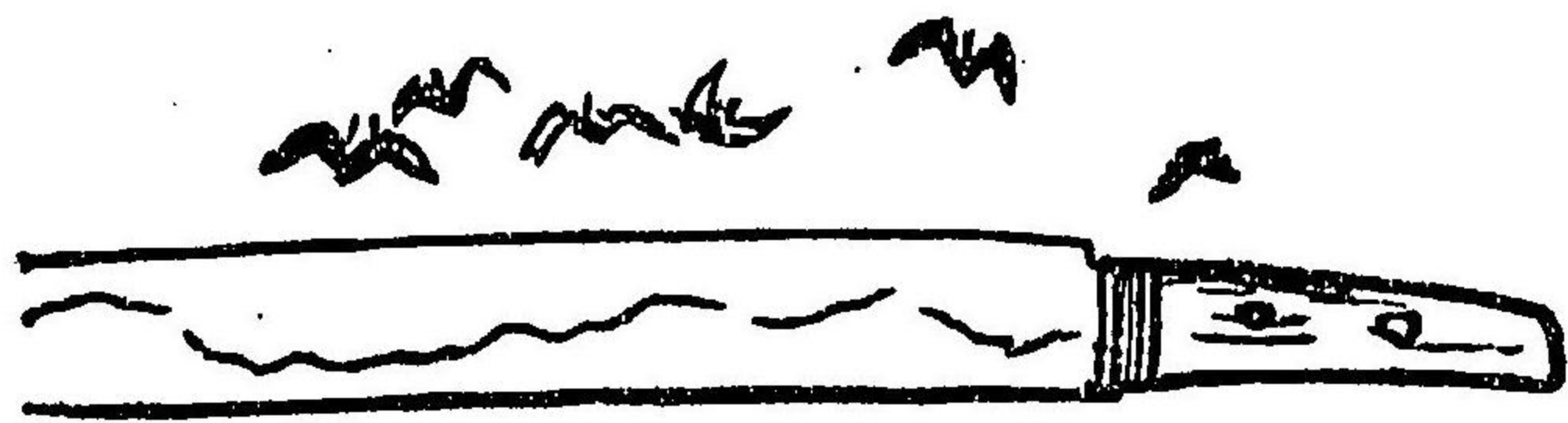
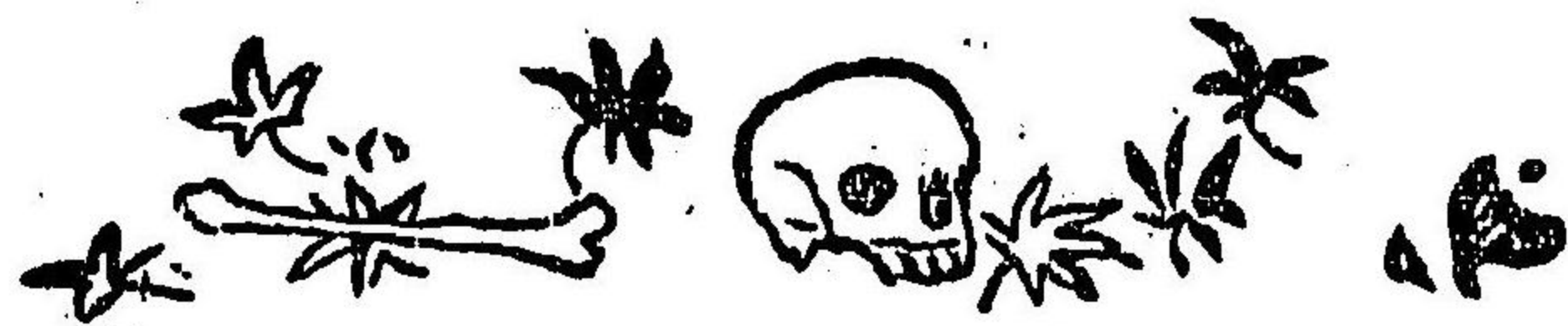
「細君！」

落着の悪い、此様な場合に用ひた事のない此言葉が低く響いて、返答をも待たんで、消えて了ふ。寂然としてゐる。家内の者は心なく物音をさせて私の仕事の邪魔をすまいとしてゐるのだ。寂然としてゐる。如何にも學者の書齋らしい。静かだ。





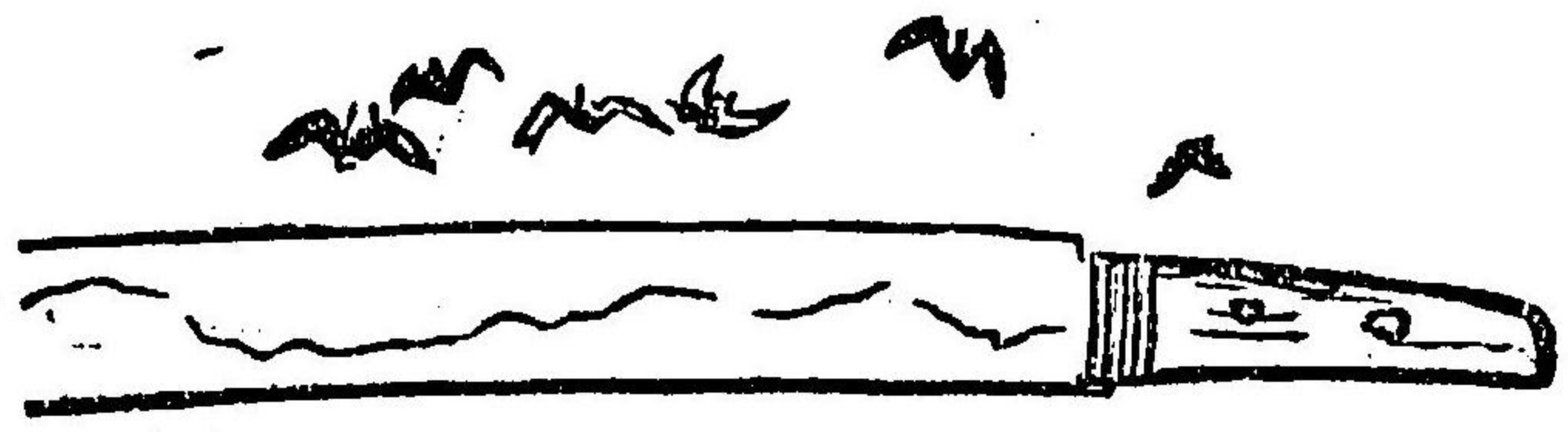
睡もしない。催眠劑を多量に服ませて、やつと二
 度幾時間か床に就かせた事があるばかりで、それ
 からはもう薬もその製作の狂熱を抑へる力を失つ
 た。當人の望に任せて、終口窓の帷を引いたまゝ、
 ランプは點しばなしで、夜らしく見せかけた中で、
 兄はシガレットを煙らしくゆらし、書いてゐた。
 傍から見るとは、頗る自得の體であつた。健康の人
 にも此程の興の乗つた面を私はまだ見た事がない。
 豫言者か大詩人といふ面相であつた。甚く窶れて、
 死人か行者のやうに、蠟色の透徹つた肌になり、
 頭も全く白くなつて、この物狂ほしい仕事を始め



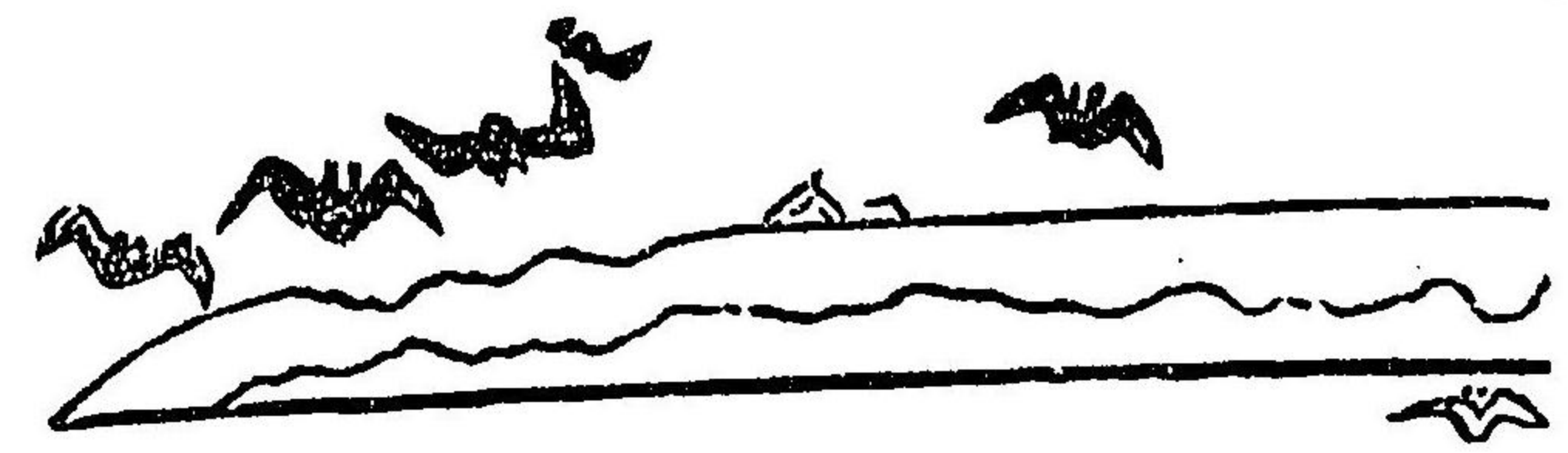
(後篇、断篇第十)

兄は幸ひ前週金曜日世を去つた。反覆して
 いふが、これは兄の爲には大なる幸福である。總
 身のわななくと震へる、亂心した、足無しの不具
 者が製作の熱に浮されてゐる處は無氣味も無氣味
 だつたが、慘澹でもあつた。其夜から九二ヶ月、
 絶食で椅子に掛けたまゝ書通してゐた。少しでも
 机から引離せば、泣いて罵る。乾いたペンで紙
 の上を搔廻しては、一枚々々撥退けるその迅さは
 目を驚かすばかりで、書いて書いて書き捲くる。一



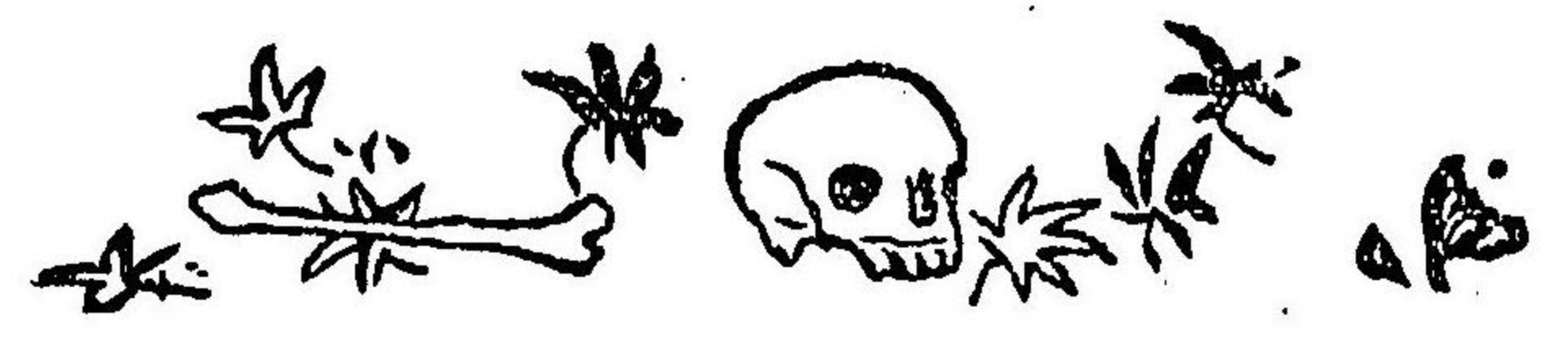


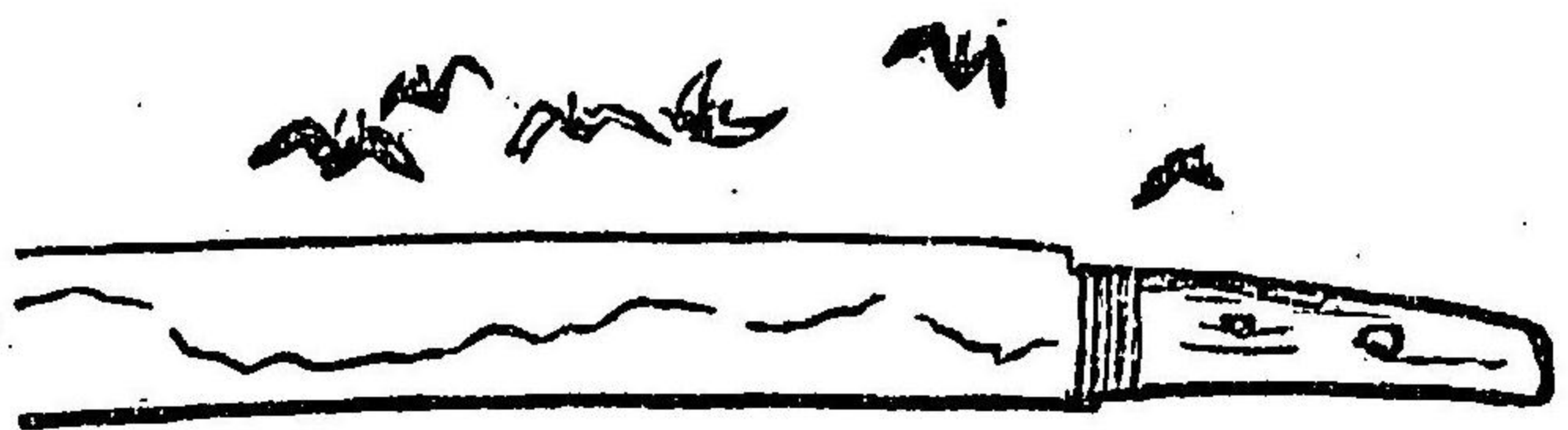
た時は、まだく若かつたが、之を終る頃には、既に老翁になつてゐた。時としては例になく急いで書く時がある。すると、ペンが紙に突掛つて折れるけれど、氣が附かない。かういふ時には、手も着けられぬので、若し誤つて一寸でも働けば、發作が起つて、泣くやら、笑ふやらする。滅多にはないが、時には暫らく心に掛る雲もないやうに、快げに打寛ろいで、機嫌よく私と話をすることもある。いつも其時は屹度、お前は誰だ、名を何といふ、文學を始めてからもう餘程になるか、と聞く。それが済むと、今度は、自分は記憶力を失つて、



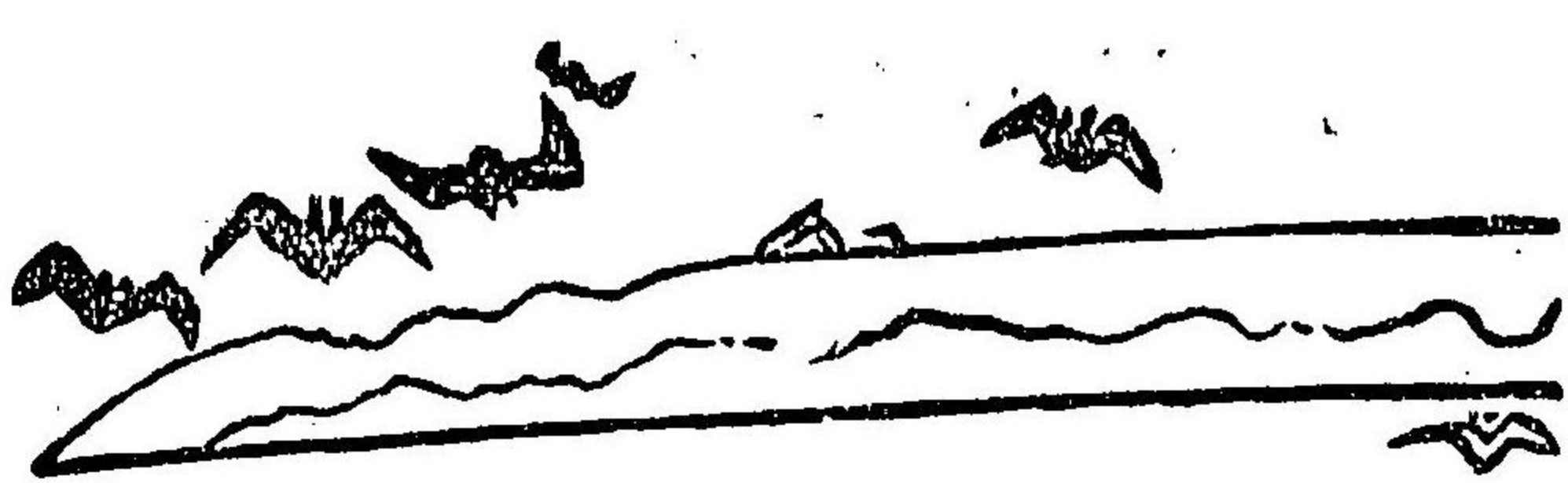
もう仕事が出来ぬかと思つて、滑稽にも吃驚したが、さう思ふ下から直ぐに花や歌を題に、千古の大作に掛つて、この馬鹿らしい取越苦勞を立派に根底から覆へしたといふ話になつて、いつも極り切つた文句で、體を下して其事を話して聞かせる。「無論私は今の人に認められやうとは思はん」と何も書いてない白紙の山に震へる手を載せて昂然とはするが、さりとて敢て激した様子はなく、が、未來だ、——未來では私の理想が認められる時もある。」

戦争の事は一度も言出した事がない。妻や子供



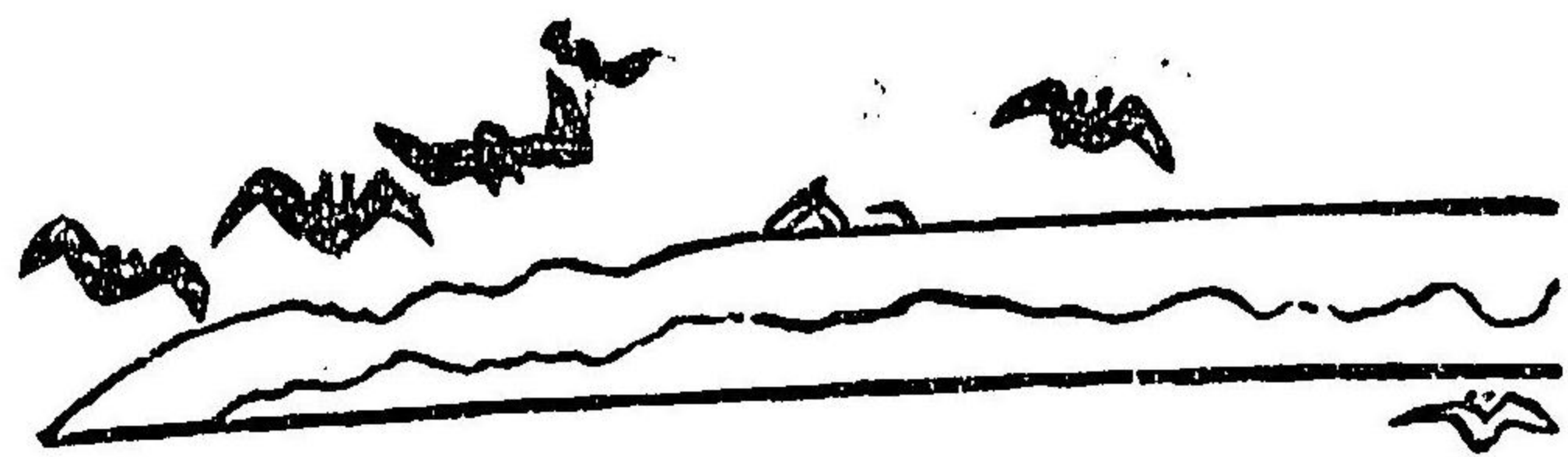


の事も其通り。果しのない、幻のやうな仕事に全く魂を打込んで了つて、此より外には眼中に何も無いやうに思はれた。側で歩いてても、話をしても、一向気が附かぬらしく、いつも感興に乗つて一心不乱になつた面をして、些との間も其面相を改めない。皆眠入つてゐる夜の寂然とした中で、兄一人果しのない狂亂の糸を撚つて倦むことを知らぬその様子は慄然とする程で、私と母との外には、側へ行き得る者もなかつた。或時私は偶然本當に何か書くかと思つて、乾いたペンの代りに鉛筆を宛がつて見た事があつたが、紙に歿つた筆の跡を



見れば、矢張只のむしつたやうな、曲りくねつた、えたいの分らぬ、醜い線であつた。息の絶えたのは夜で、矢張執筆中であつた。私は兄の心持を能く知つてゐたから、氣が狂れたのに格別驚きもしなかつた。甚く文筆を戀しがつてゐたのは、まだ戦地からの手紙にも微見えてゐた事で、歸つてからも其が即ち命であつたが、この願と、苦み抜いた、疲れ果てた、甲斐ない脳と撞着しては、破滅を來すべき運命であつた。私は兄が此晩に運盡きて死ぬまでの心持を次第を遂うて可なり精確に記し得たと思ふ。兎も角も爰に私が





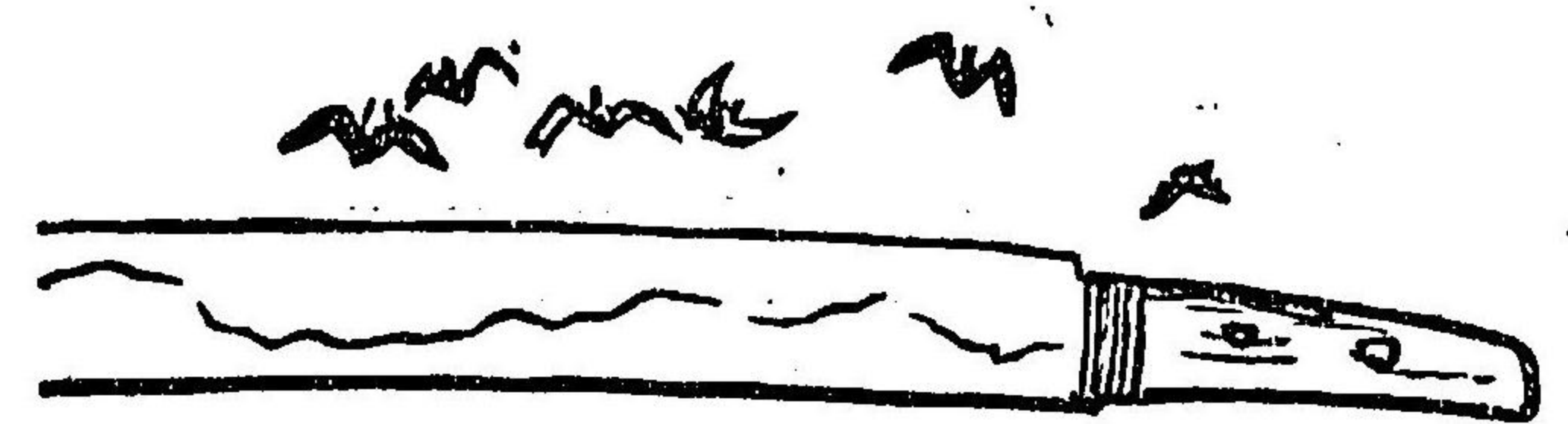
大尉兄の氣に入つてゐた。召使共には皆暇を遣つて了つたから、毎朝隣家の門番が煖爐を焚付けに來るばかりで、跡は私一人きりだ。宛然二重窓の隙間へ締込められた蠅のやうに、狂廻つては隔ての變な物で鼻を衝く。透徹つて見えるけれど、これが中々破れない。如何しても此家を逃出されぬやうな氣がする、然う思はれる。かう一人になつてみると、戦争の事が氣になつて、片時も忘れられん。解けぬ謎か、肉で包めぬ靈というやうに、それが目前に控へてゐる。これに種々の形を賦けて見る。或は馬に跨つた目の無い骸骨と見、或は



戦争について記した所は、死んだ兄の話に材を取つたので、話は大抵辻褄が合はないで紛らはしかつたけれど、唯或時或折の光景は深く腦に染みて消えなかつたと見えて、殆ど話の儘を書取れば、それで事足つた。

私は兄を愛してゐた。兄の死は石の如く私の心に横はつて、その死の無意味な事が腦を壓して苦しい。かねて蜘蛛の巢のやうに頭を包む不思議な物のある上に、更に輪を掛けて締付けられるやうだ。家族は皆田舎の親戚の處へ行つて了つて私一人家に残つてゐたが、此家は小さな一軒建で、





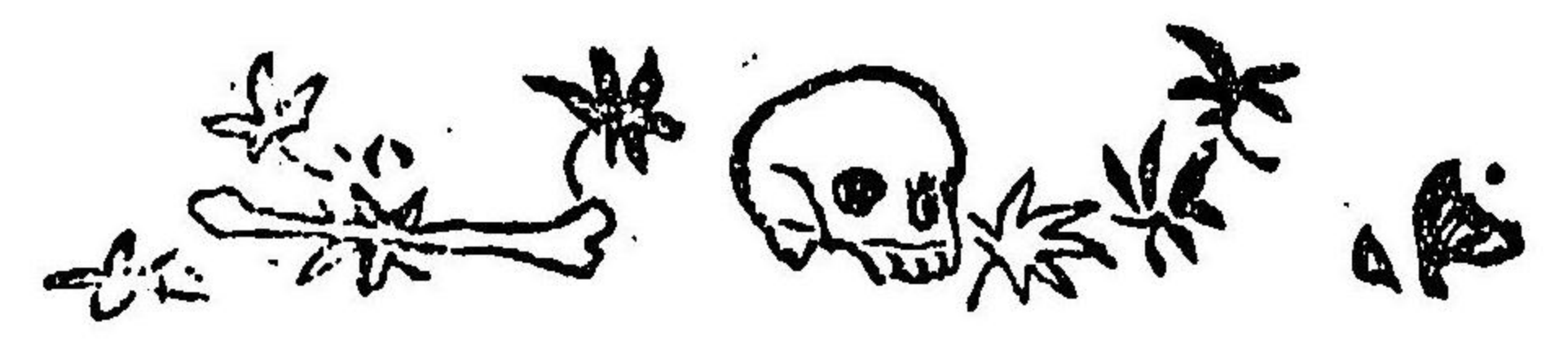
雨雲の中から湧いて出て、穹と大地を包むおぼろげな影と見るが、どう見ても私の掛けた問の答にはならないで、絶えず胸を鎖す冷たい鈍い恐怖の念は汲むでもく汲み盡されぬ。

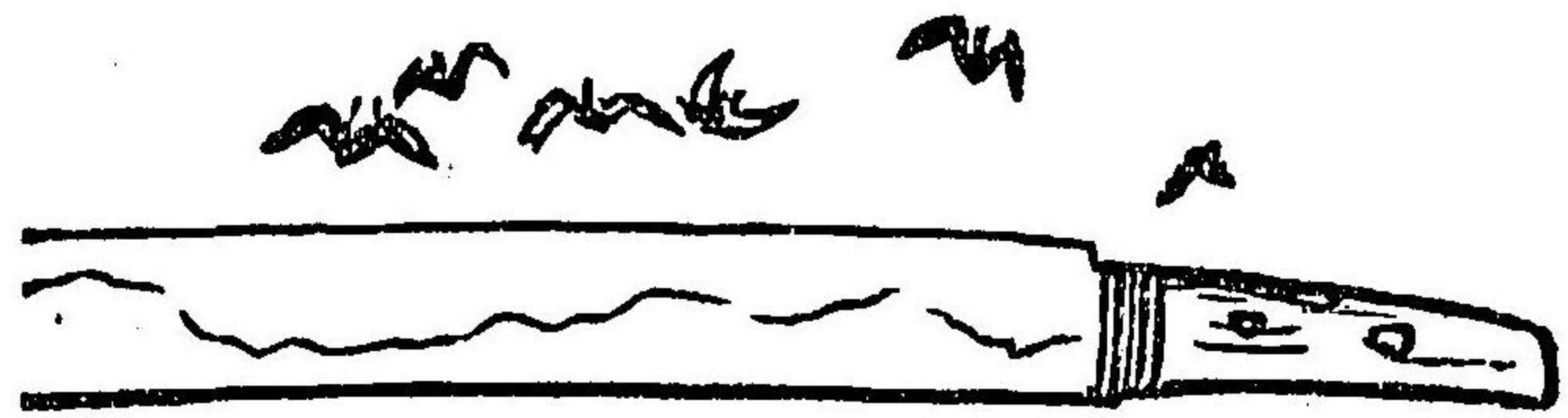
私は戦争といふものゝ意味がわからぬ。これでは矢張兄のやうに、乃至戦地から後送せられて来る多くの人のやうに、氣迷にならねばなるまいが、それはさう怖ろしいとも思はぬ。私が本心を失ふのは、番兵が勤務に瘵れるやうなもので、名譽の事だと思ふ。たゞ、しかし、じりりと弛みなく狂氣になつて行くのが辛い、何か大きな物が深い



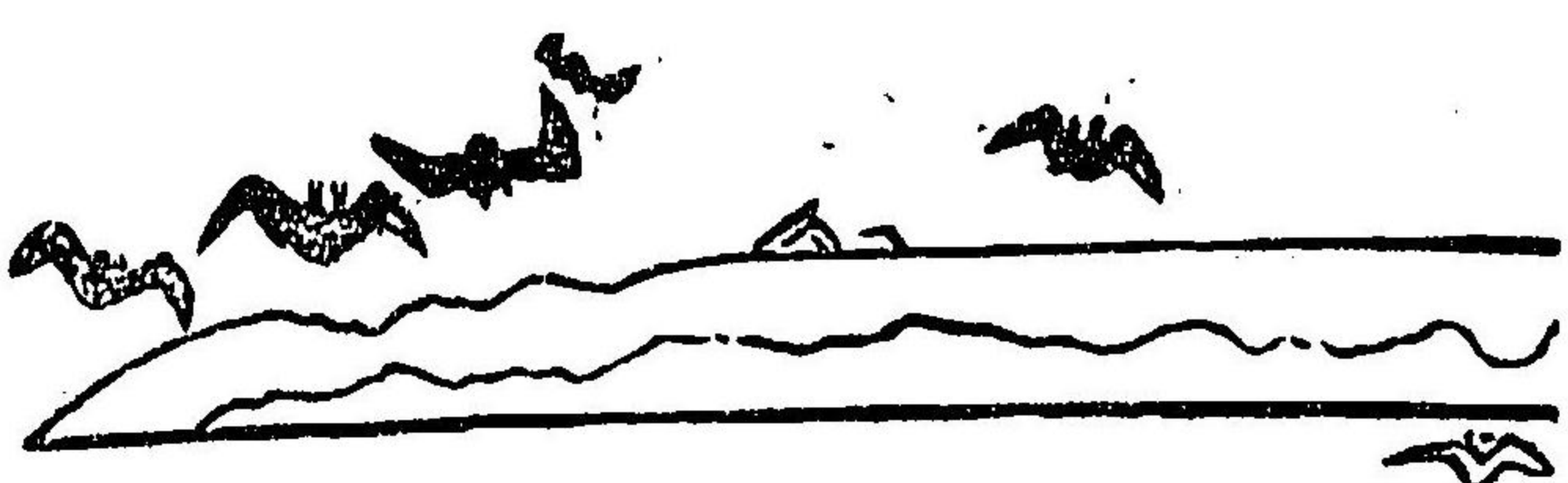
淵に陥るやうな刹那の氣持が辛い、腸を穿る想念の耐へぬ痛みを抱くのが辛い：私の心は黙して了つた、絶入つて、もう新しい生命を得る事も出来ぬ。しかし想念はまだ生きてゐる、まだ腕いてゐる、曾てはサムソンの如く強かつたのが、今は小兒のやうに繊弱くて便りない。私は私の哀れな想念が傷ましい。時々鐵輪の轡を締付ける苦痛に堪へぬ時には、町の、廣小路の、人通りの多い處へ慕然に駈出して行つて、大聲に呼はつてみたくなる、

「只た今戦争を止めろ！ 止めんと……」





止めんと、如何する？ 世に人間の惑を解くべき言葉が有るか？ かういへば、あゝと、同じ様に壯語して、癡言も言へば言へる。或は人間の前に跪いて泣いたら？ 數十萬の人の泣聲が世を撼つても、何の効もないでないか？ 或は人間の前で自殺して見せたら？ 自殺。毎日数千といふ人が命を殞しても、何の効もないでないか？ かうして自分の力では奈何ともすることが出来ぬと思ふと、私は氣が坐ろになる、——呪ふ所の戦争に感れて、其狂味を帯びて来る。兄の語のドクトルのやうに、妻子珍寶諸共に人間の栖家を焚

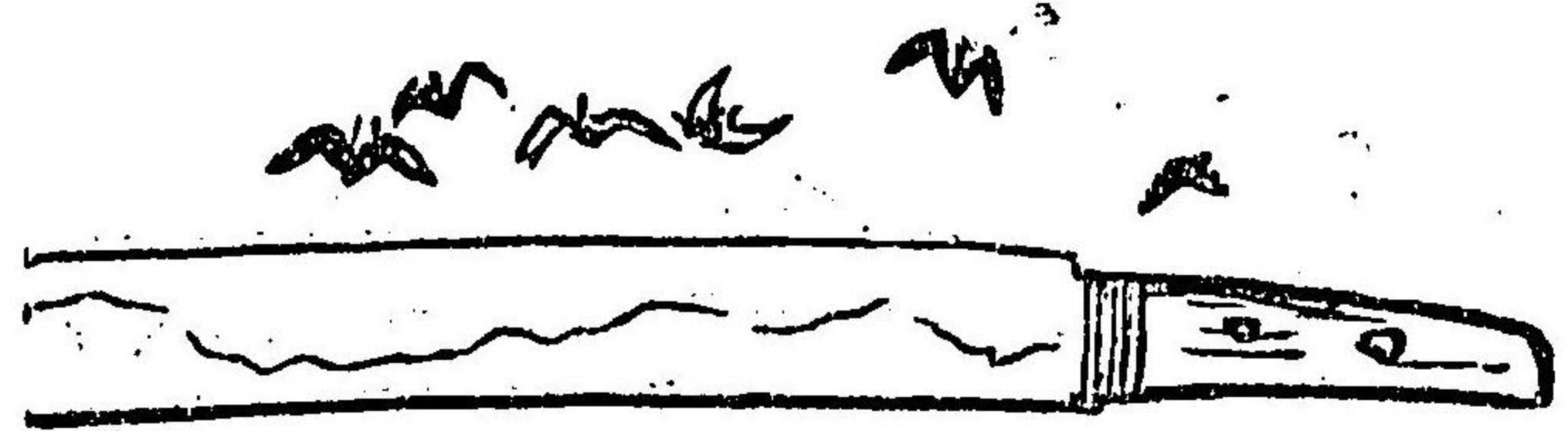


きたくなる、その飲む所の水に毒を投じたくなる、所有死人を棺から引出して亡骸を汚れた人の寢臺の上に抛付けたくなる。汝等人間、妻を抱き情婦を抱いて眠る如くに、死骸を抱いて睡り去れ！ あゝ、悪魔になりたい！ 地獄の慘たる有様を此世に寫して、人間に見せ付けて遣りたい。人間の夢を司つて、人の親が笑顔をして眠らむとしては、其子に十字を切掛ける時、真黒な姿をして其面前にヌツクと立つてやりたい…… 私はどうしても氣が狂ふ。たゞ、狂ふなら、早く狂へ、——一刻も早く狂へ……



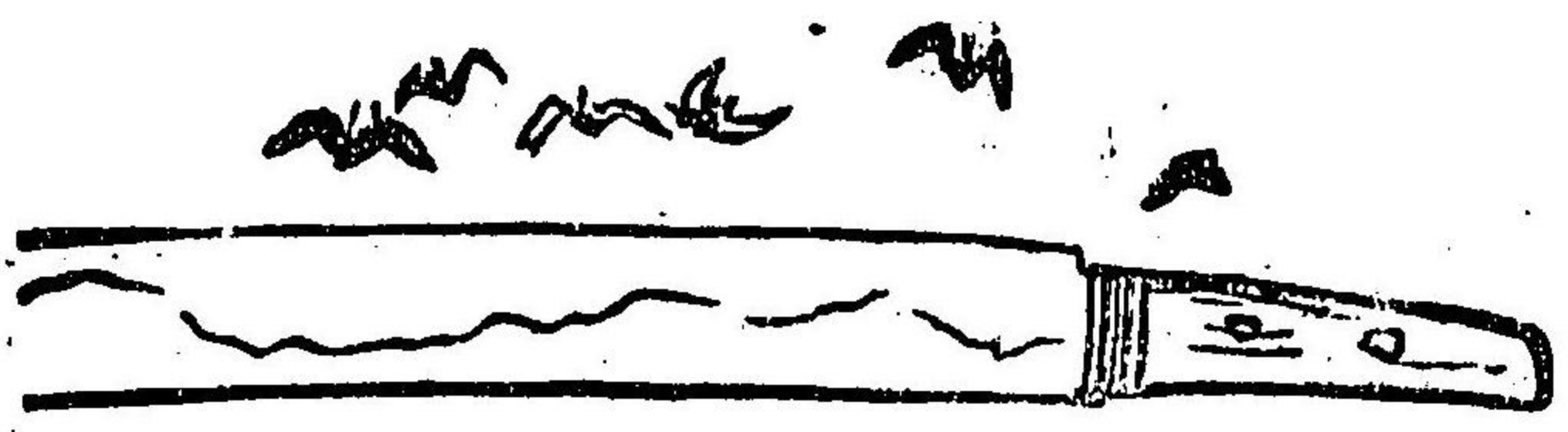
(断篇第十一)

：俘虜で、恟々とした、震へてゐる一團の人だ。
之を車室から引出した時、見物は唸つた。短か
い脆弱い鎖で繋いだ、大きな、意地の悪い犬の如
く唸つた。唸つてから、黙つて肩で息をしてゐる
と、俘虜達は手を衣袋へ入れ、白い歯を見せて媚
びるやうな微笑しながら、眸と目白押に押塊まっ
て行く。それを見ると、今にも背後から長い棒で
脇の處をビシヤリと打られるといふ人の足取だ。
が、中で一人落着いて、微笑ともせず、險相な面



をして行く者がある。私と目を視合せた時、其黒
い目の中に公然の衣着せぬ媚嫉が讀めた。此男は
私を卑しんでゐて、此奴何を爲るか知れたもので
ない、と思つてゐたに違ひない。若し私が獲物も
持たぬ此男を斬らうとしたら、必ず聲をも立てず、
手向ひも辯解もしなかつたらう。私は何をするか
知れた物でない、と思つてゐたに違ひない。
も一度此男と眼を視合せたくなつて、見物と共に
駈出して行つた。俘虜達が收容所へ入る時、願
が叶つて、其男が先あ身を開いて戦友を皆通して
から、自分も内へ入らうとして、と又私の面を視





た。黒い、大きな、瞳の散つた眼に、無限の恐怖と狂氣とを浮べて、如何にも苦しうで、之を見れば世に是程の不幸ない心持になつてゐる人は有るまいと思はれた。

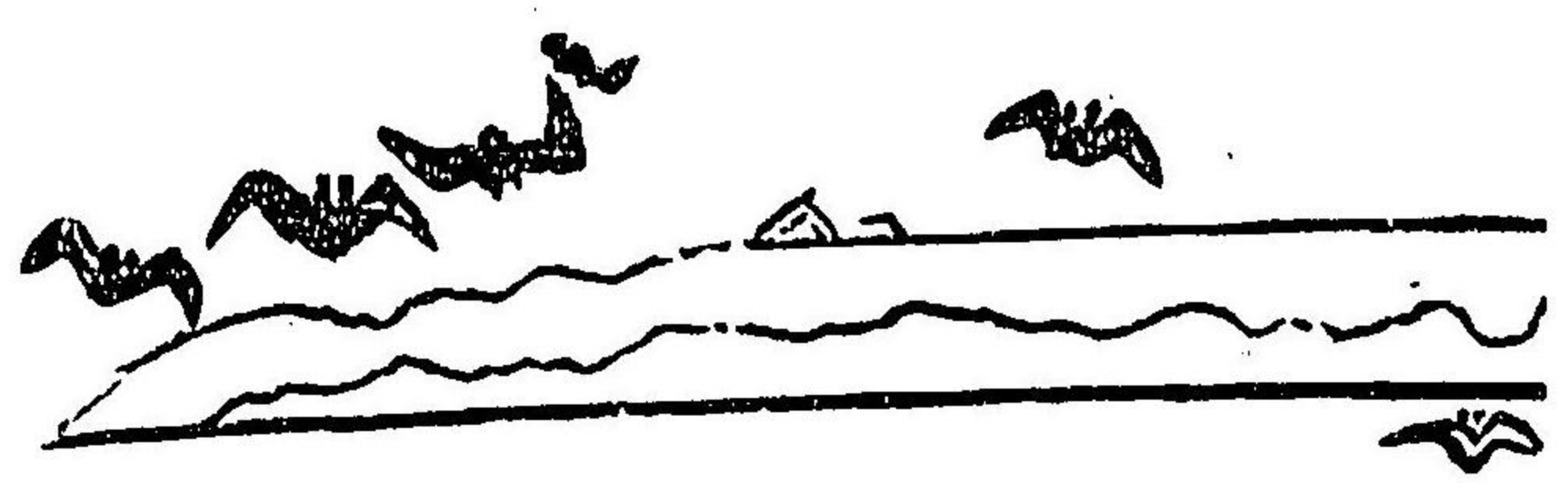
「あれは何者です、あの變な眼付をしてゐる男は？」

と護送の兵士に尋ねて見ると、
「士官です。狂人なんです。あゝいふのは澤山有り

ます。」

「名前は？」

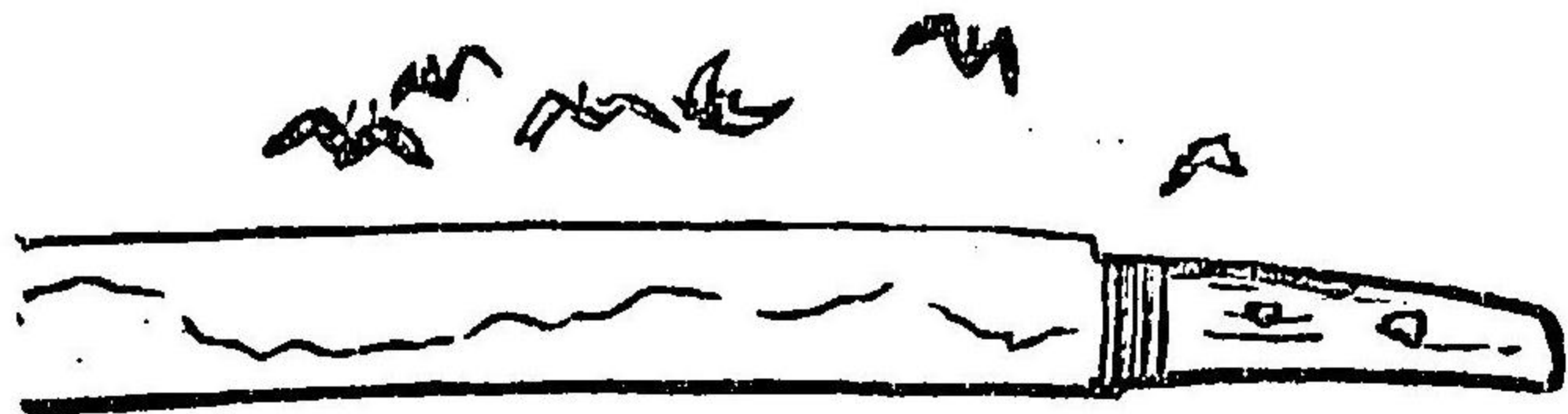
「黙つてゝ名前を言はんのです。外の俘虜も知ら



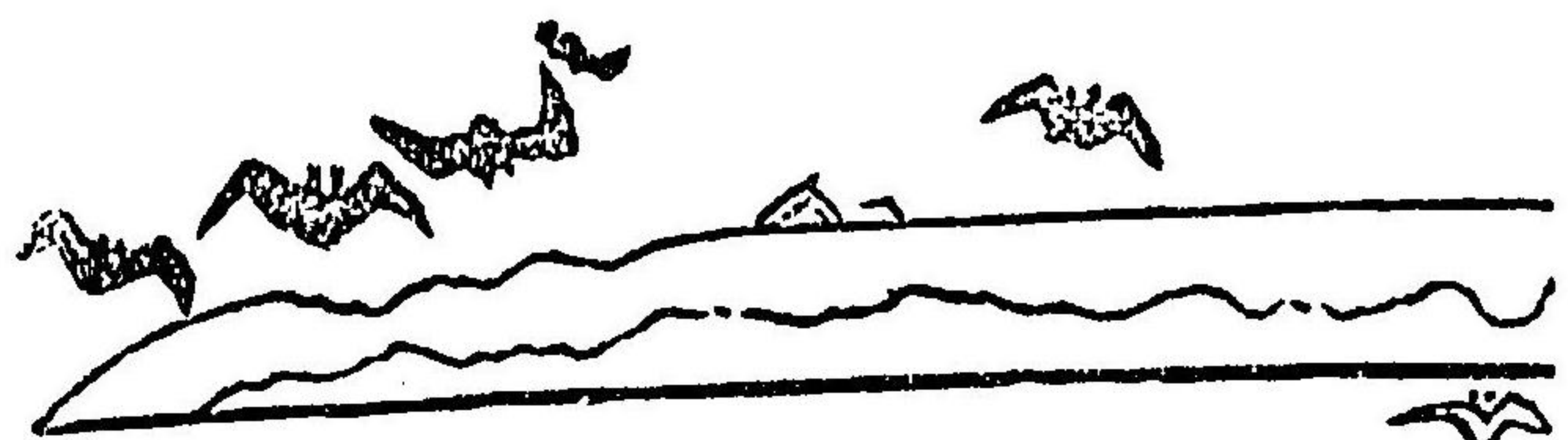
んといふから、大方餘所のが紛れ込んで來たんでせう。もう一度首を縊らうとしたのを助けた事があるんで、や、どうも手が附けられない！……と兵士はその手の附けられないといふ事を手眞似でして見せて、兵の内へ隠れて了つた。

で、かう晩になつてから、此俘虜の事を考へて見ると、あゝして獨り敵中に居る。如何な目に遭はされるかも知れない、と思つてゐる。味方は居ても、知つた面は一人もない。黙つて、浮世の際の明くの辛抱強く待つてゐるのだが、それにしても如何も狂人とは思へぬ。臆病でもなさうだ。





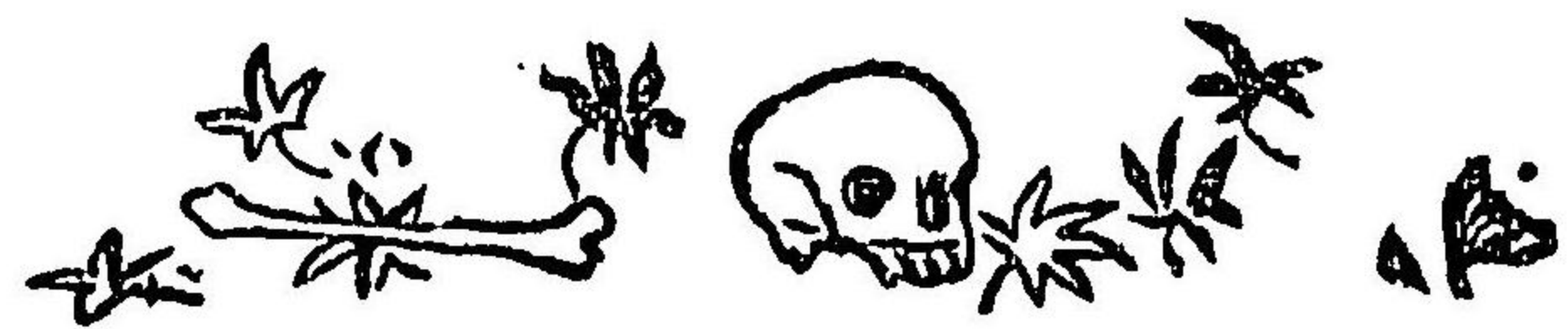
皆魂が身に添はずぶる／＼物である中で、獨り昂然としてゐる。恐らく其仲間をも仲間と思つてゐまい。如何な心持であるだらう？ 死に臨むで名を言ふまいといふ、その絶望の深さは測り知られぬ。名を言つたとして何の益がある？ 今は是迄の命と覺悟して、人間の眞價を覺つた身には、周圍で如何なに騒いだとして、喚いたとして、又威嚇したとて、眼中にもう人間はない、敵もなければ、味方もない、——といつた氣になつてゐるのだらう。此男の身の上を聞かしてみたら、一度に數萬の戦死者を出した此頃の怖ろしい戦闘の時、捕虜にな

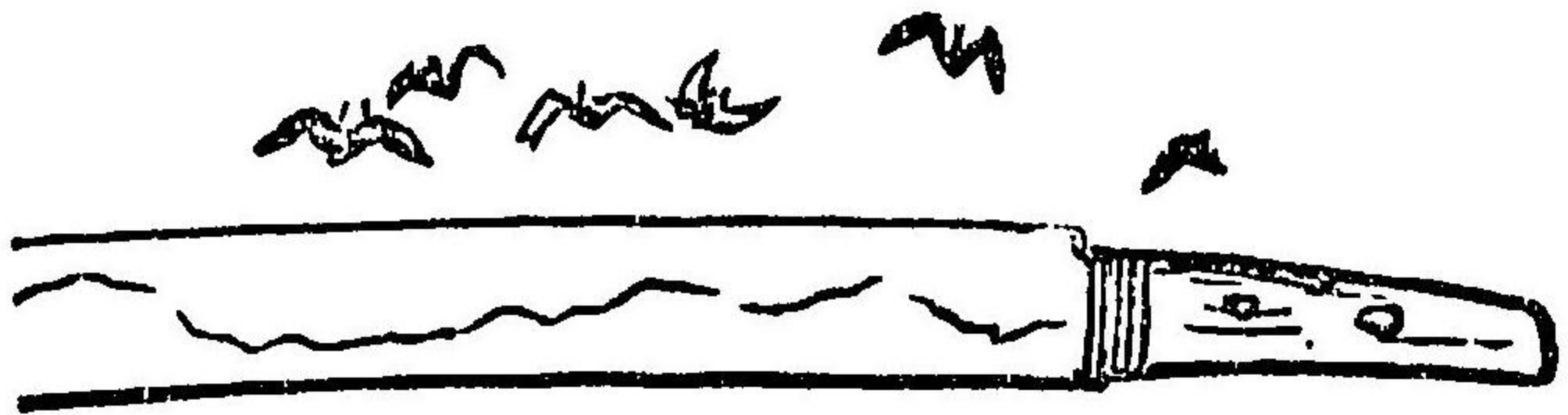


つたので、捕虜になる時、抵抗しなかつたと云ふ。何故か武器を持つてゐなかつたのを、それとは氣が附かずに一兵卒が劍を揮つて斬付けると、起上りもせず、手を戟にして攔りもしなかつたが、創は浅かつた。創の浅かつたのは、此男の身にしたら、生憎な事だつた。しかし全く狂人でないとも云へぬ。護送の兵士もさういつたが、かういふのは澤山有るさうな：

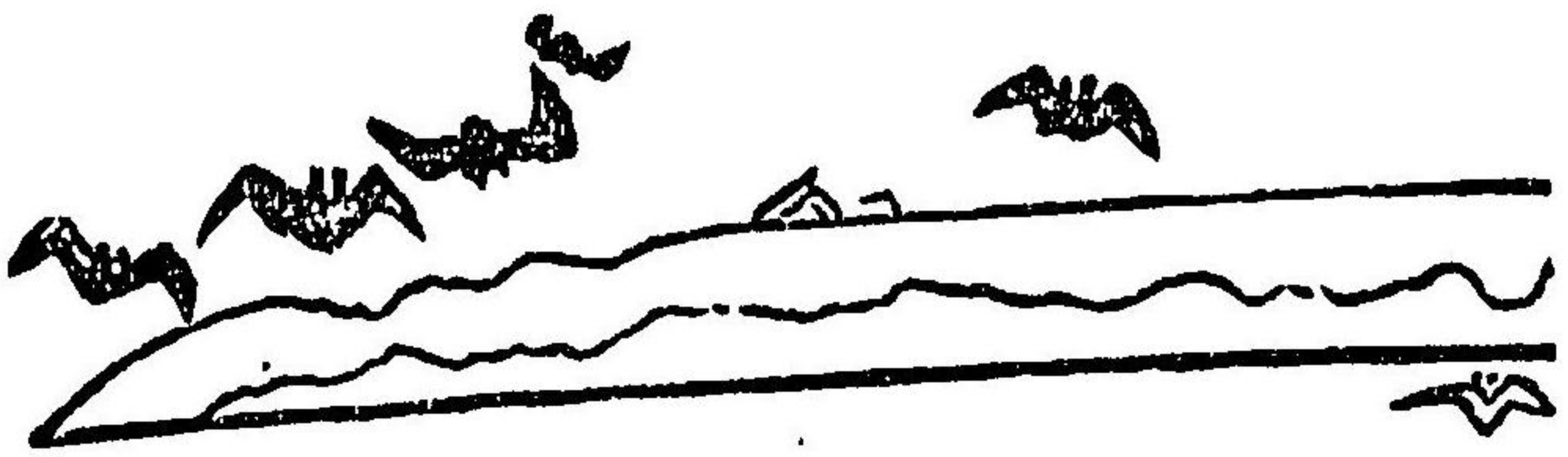
(断篇第十二)

……そろ／＼始まつた。昨夜兄の書齋へ入ると、



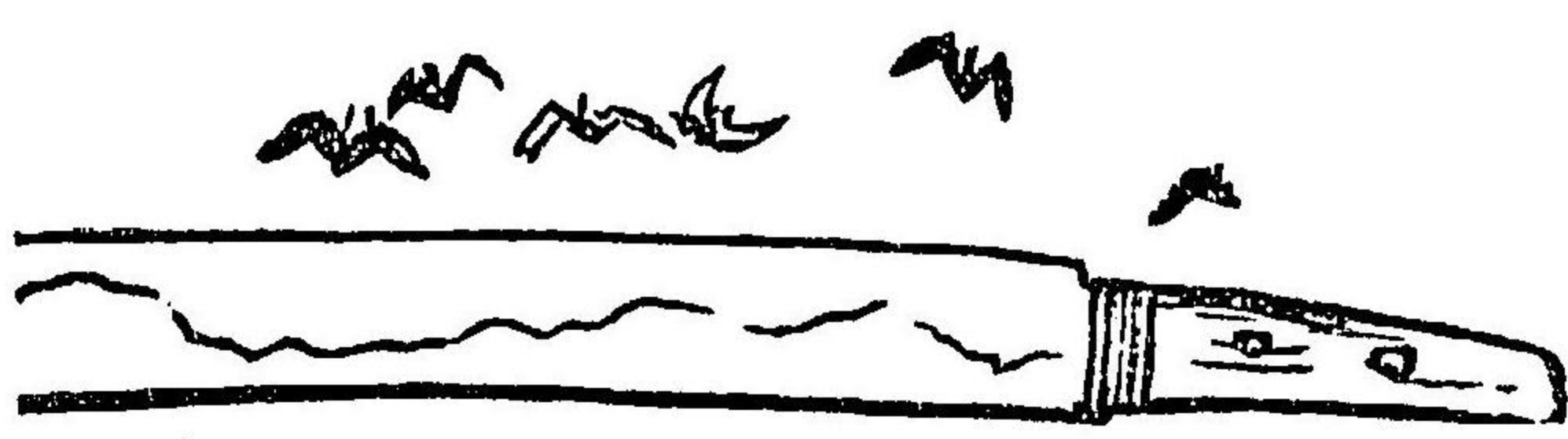


兄が安樂椅子に憑れて、書物に埋つた机に對つてゐる。手燭に火を點けると、幻は直ぐ消えて了つたが、久らくは其安樂椅子には凭る氣になれなかつた。初の中は恐ろしかつた、——ガランとした室内に、何か絶えずさらくといふ音や、ぱちくと物の爆る音がして薄無味悪かつたが、而し兄なら他人には勝だと思ふと、寧ろ居心が好くなつた。が、それでも此晩は徹宵椅子を離れなかつた。離れたら、直ぐ兄が掛けさうに思はれて。室を出る時は、背後を向かずに、急いで出た。家中に燈火を點けたものか——いや、それにも及ぶまい



か？ 燈火で何か見えたら、尙ほ無氣味だらう。此儘だと、まだ多少の疑を存して置く事も出来る。今日手燭を持つて部屋へ入つたら、椅子には誰も掛けて居なかつた。してみると、昨夜は唯影がちらりとしたばかりで有つたのだ。又停車場へ行つてみると、——もう此頃では毎朝行く事にしてゐるのだが、行つてみると、味方の癡癡患者ばかりを載せた車輛がある。戸も聞けずに別の線路へ移して了つたが、それでも窓から幾人かの面が見えた。皆怖ろしい面であつた。殊に一人の患者の面は法外に間が延びて、レモンのやうに黄ろく、

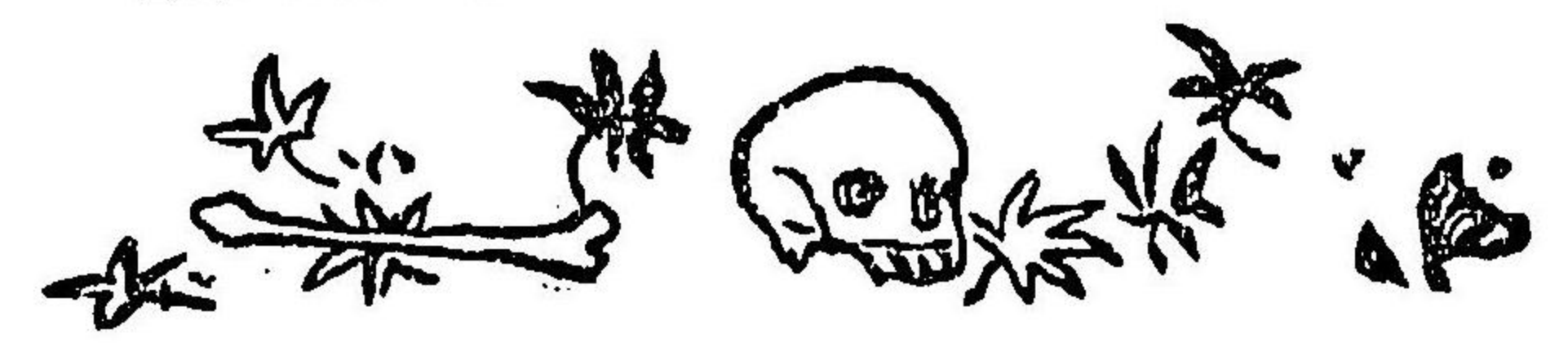


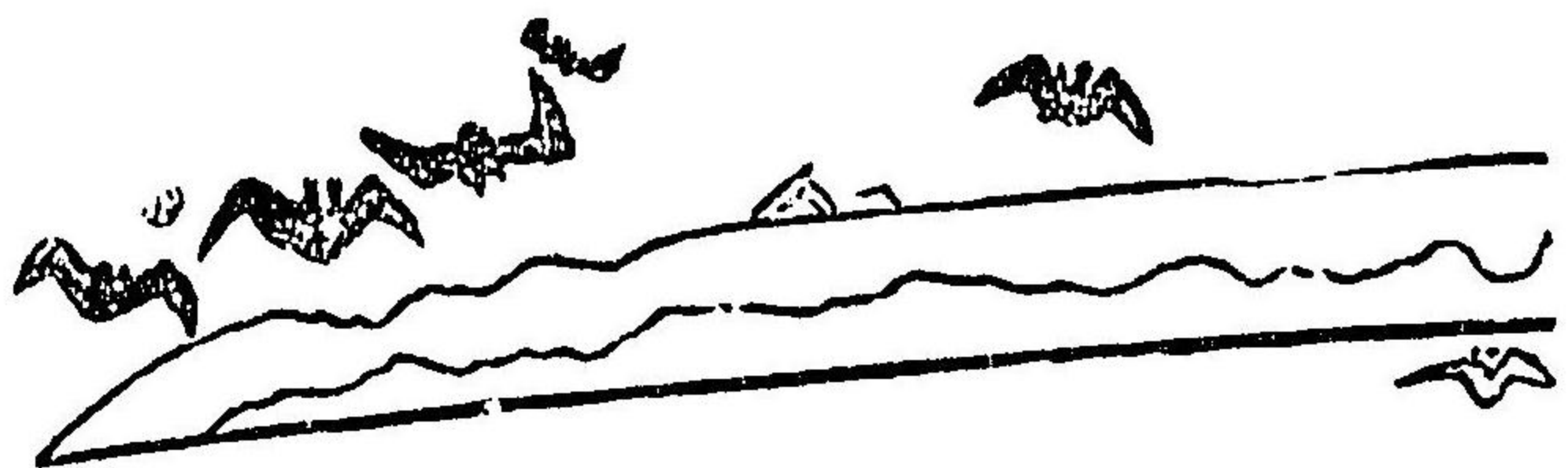


明放しの眞黒な口に据つた眼と、どう見ても「無残」を面に刻むだやうな面で、私は之に眼を奪はれて了つた程だつたが、直と私と眞向ひに向き合つて、凝と首を据ゑて、其儘眉一つ動かさず、目じろぎもせず、動き出す汽車と共に行過ぎて了つた。これが停車場で仕合、若し家のあの暗い戸口で此面が見えたら、私は到底も堪へ切れなかつたらうと思ふ。聞いて見たら、後送された瘋癲患者は廿二名だつたと云ふ。愈々流行するものと見える。新聞では一向噂もせぬが、市内でも徐々其崩が見えるやうだ。礎と戸を締切つた眞黒な馬車

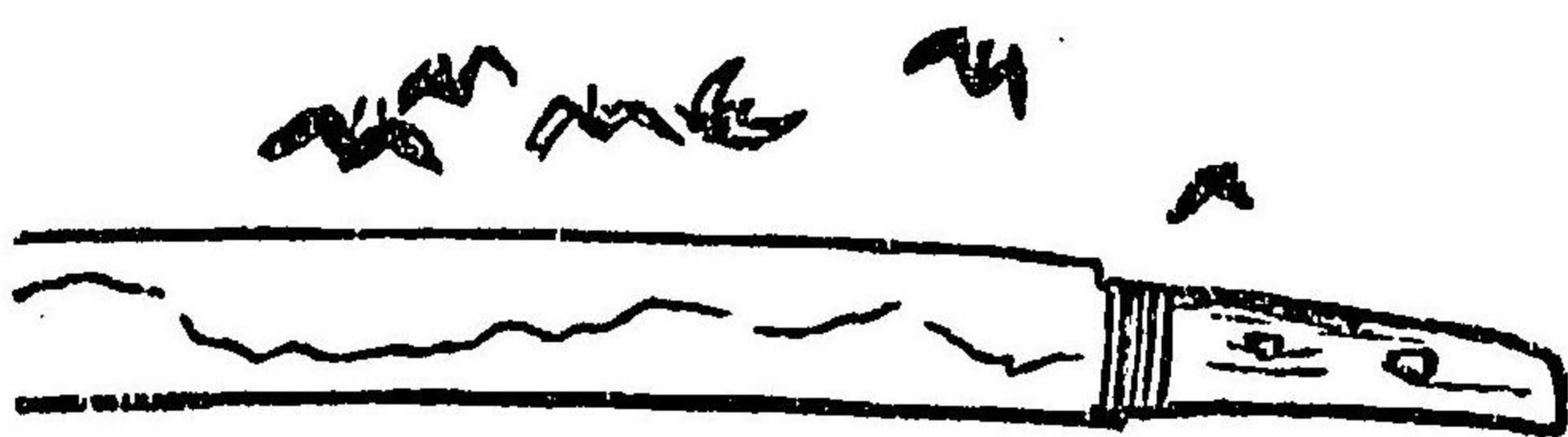


を折々見かける。今日一日に彼方此方で六臺も見掛けたが、大方私も今に彼に乗る事であらう。新聞紙は毎日軍隊輸送の必要を説く。更に血を流す必要があると云ふ。如何いふ譯だか、私は愈々分らない。昨日奇怪千萬な論文を讀んだ。その説に、國民中にも軍事探偵、賣國奴、謀叛人が澤山有るから、銘々戒心して十分に注意しなければならんが、國民の公憤に照されては、此極悪人等も遂に其跡を晦ますことは出来まいとあつた。此極悪人等とは如何な人達の事で、如何な悪事を働いたのだらう？ 停車場を出て電車に乗つたら、



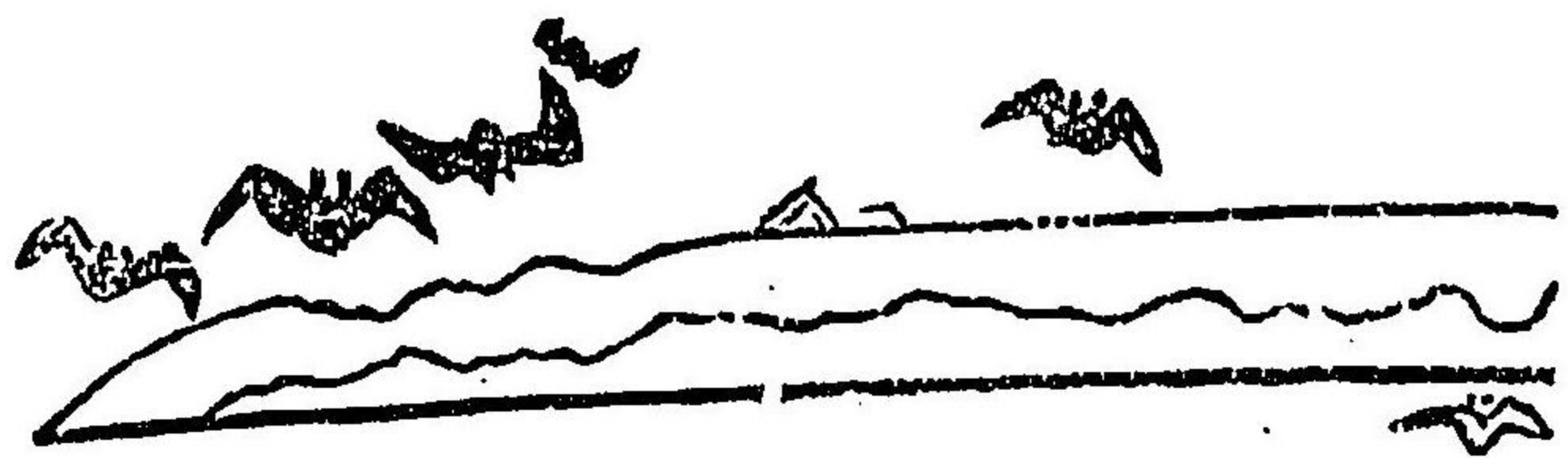


むで人の目を遮り、實に世界の破滅が近づいたやうに段々思はれて来る。兄が見たといふ赤い笑が是れだ。かなたの血みどろの赤黒くなつた野から、狂亂の風が吹いて来て、太氣の中にその冷たい氣息の傳はるを覺える。私は屈強な男だ、病で身體を壊した爲に腦髓が溶けて来たのではないが、病毒が傳染して私の心の半はもう私の自由にならぬ。これはベストより悪い、ベストより怖ろしい。ベストなら、まだ何處へか躲れる法もある、何かしら豫防法を施す事も出来るが、遠近もなく、障隔もなく、何處へでも徹る思想には躲れる道がない

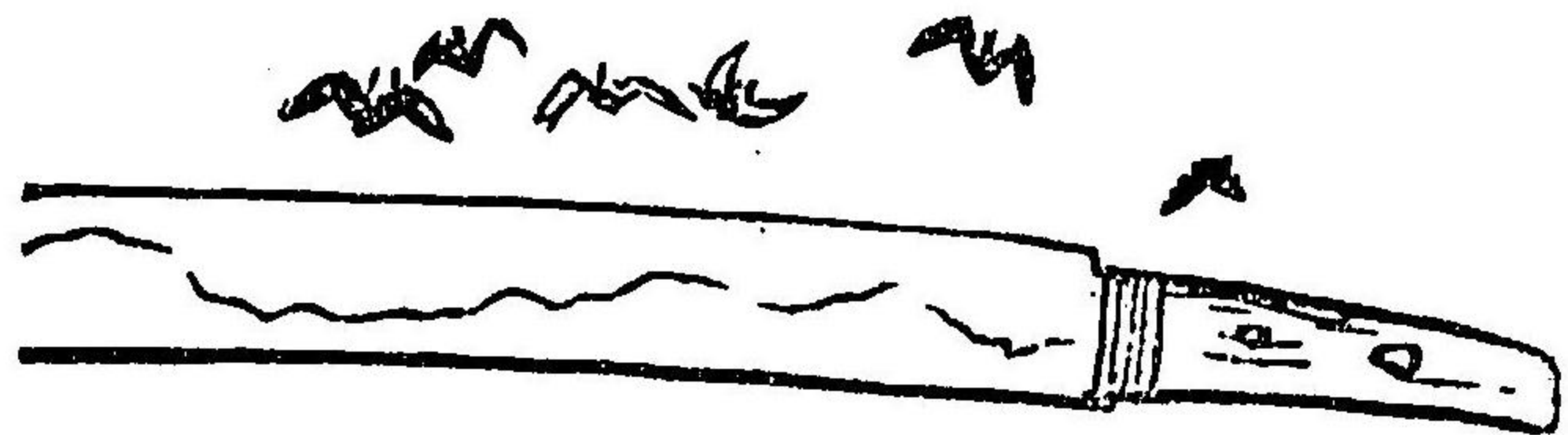


車中で變な話を聞いた。大方其極悪人達の噂をしてゐたのだらう。「さういふ奴等は裁判も何も有つたものぢやない、卒然絞罪に處しつ了ふが好いのです」と一人が言つて、胡亂さうに皆を視廻した序に、私の面をも瞥りと視て、「謀叛人は絞殺るに限る。」
「用捨なくな」と今一人が合槌を打つて、「もう散用捨して遣つてますからな。」
私は電車を飛降りて了つた。皆戦争には泣かされてゐる、彼人達も矢張然うだらうに、——これは又如何した事だ？ 如何やら絳い霧が大地を包





その百姓は六人で、丸込めした銃を掲げた兵が三人で護送して行く。皆知何にも百姓じみた、粗末な、野蠻人に髣髴たる、原始的の服装で、宛然粘土で捏ちたやうな別種の面をして、髪のも髣髴もくしやくくと塊まつて寧ろ毛物の毛のやうで、それが富み榮ゆる市街を、紀律の正しい兵士に護送せられて行く所は、古の奴隸を面りに見るやうだ。皆戦地へ召集せられて行くので、銃剣には敵し得ず、屠所へ引かれる牛のやうに、罪の無い面をしてキョトンとして行く。最先に行くのは頬鬚も生えぬ、脊の高い若者で、鷲鳥のやうなひよる



ではないか？
晝はまだ凌げるが、夜になると、私も人並に夢の奴になつて了ふ、——その夢が又怖ろしい狂氣染みた夢で：

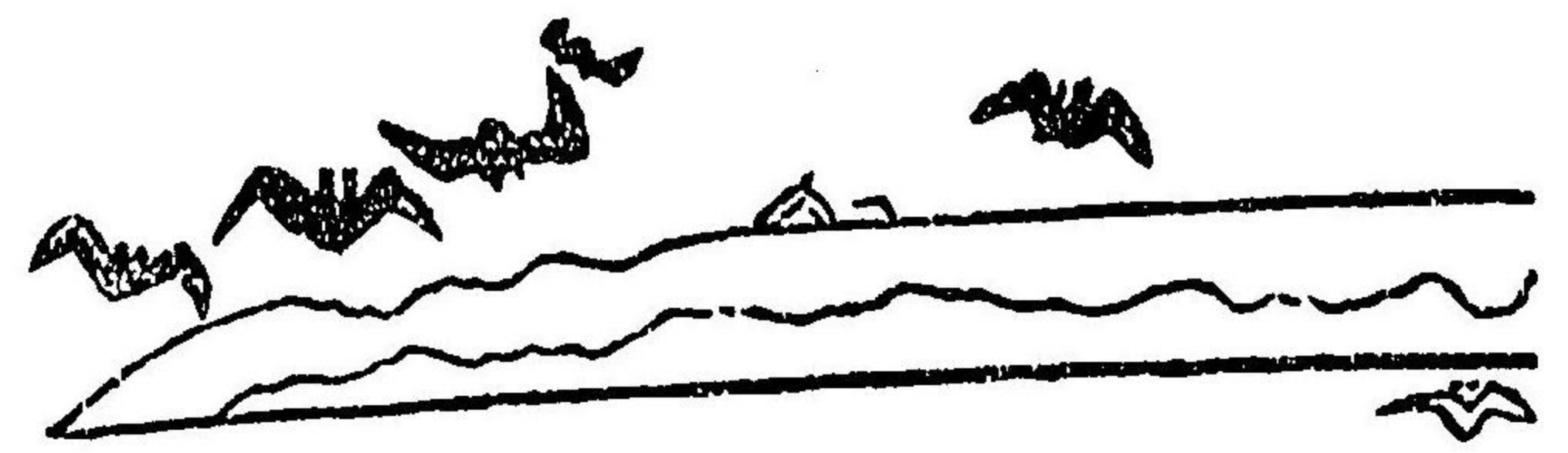
(断篇第十三)

到る處私闘が行はれて、無意味に夥しく血を流す。聊かの衝動にも直ぐ無法な腕力沙汰になつて、ナイフや石塊や棍棒が閃き、相手構はず手當り次第に打殺す。鮮血が兎角進りたがつて、何の苦もなく滾々と流れる。

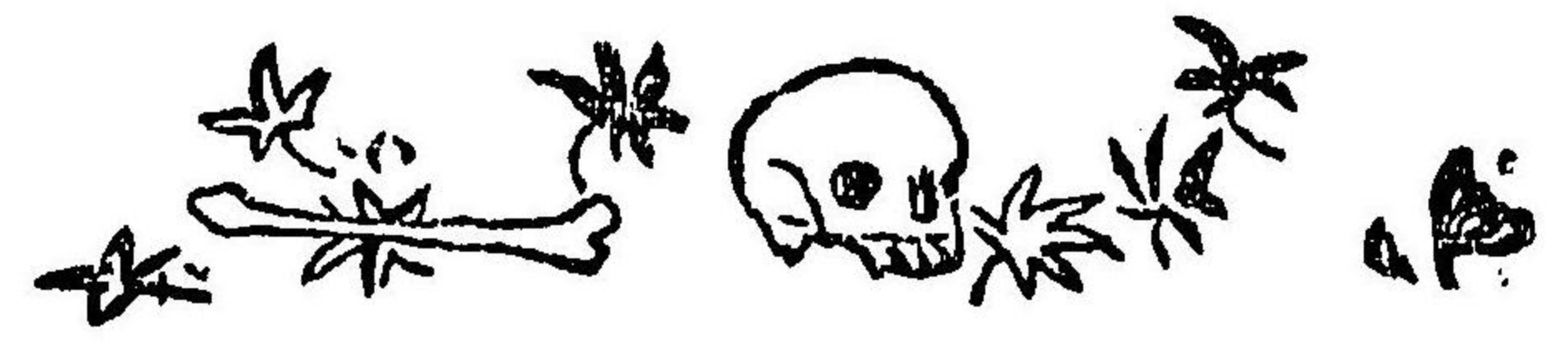


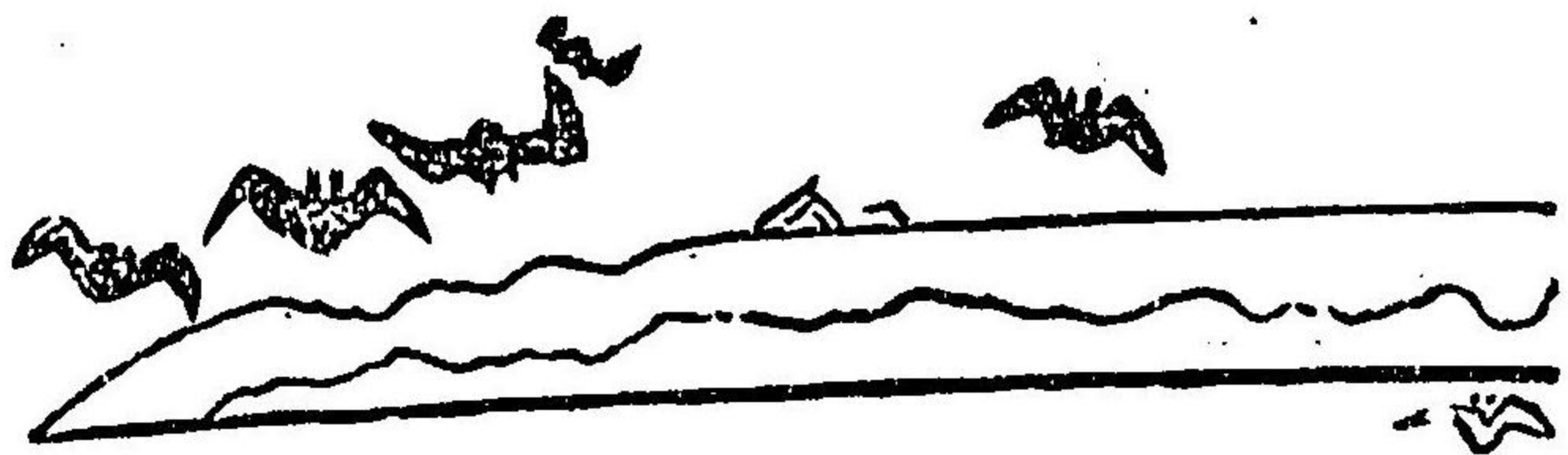


長い頸へ、小さな頭を据ゑてゐる。枯枝のやうな
 身體を前屈みにして、凝然と足元を睥視めた目色
 は地中へ喰入りさうだ。殿に行くのは脊の低い、
 髯だらけの、年配の男だつたが、もう反抗する氣
 力もないらしく、思慮のない目色をして、地が足
 に汲付くのか、喰付くのか、兎角離れかねて、烈
 風に向つたやうに、身を反して行く。一步を移す
 にも、兵士に背後から銃の臺尻で小突かれて、幸
 と片足を引離し、わななくしながら踏出すけれど、
 片足は地に附着いてゐて中々離れない。兵士も厭
 な面をして不機嫌さうだ。もう長いこと斯うして



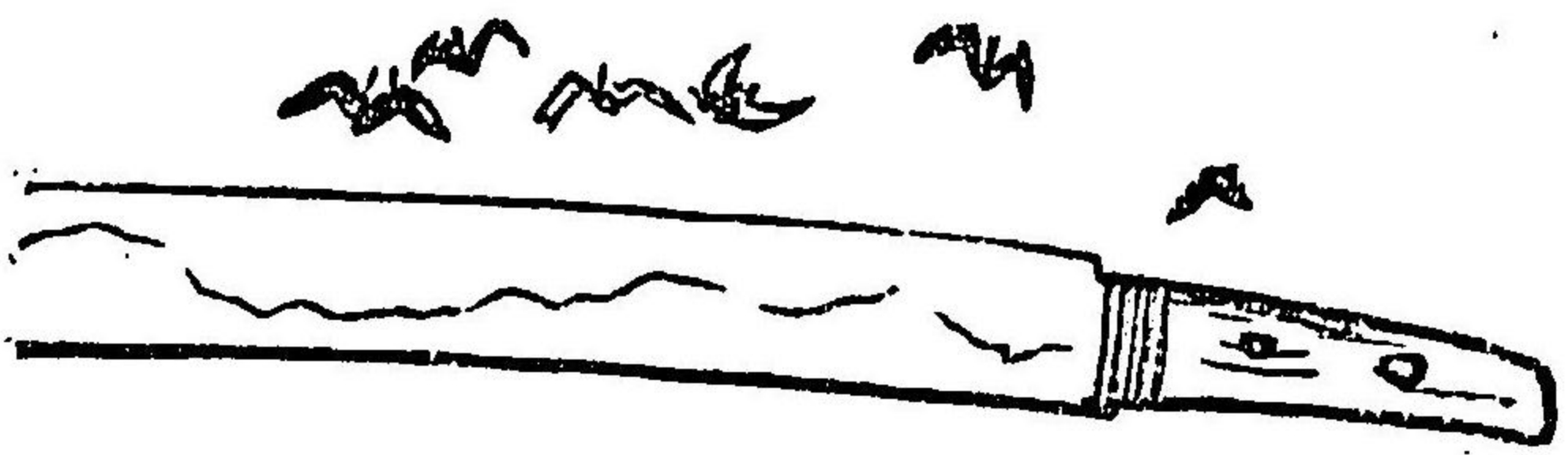
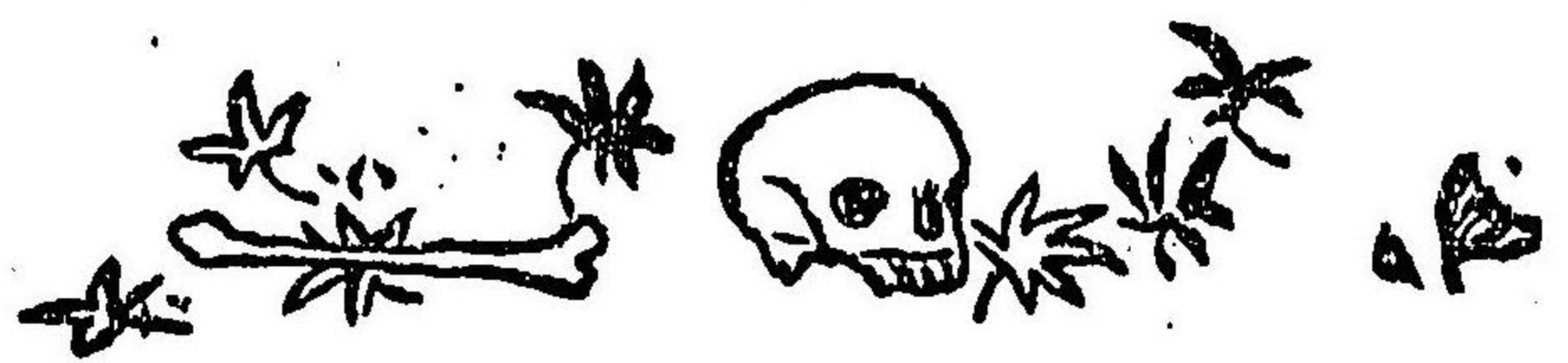
行くらしく、銃を擔げた振にも、田舎漢らしく内
 輪に思ひくに歩く足取りにも、困憊して萬事を
 抛遣りにしてゐる處がある。意味もなく、思切り
 悪く、黙つて百姓等が反抗するので、紀律で固ま
 った頭も深となり、何處へ何の爲に行くのか、も
 う分らなくなつたといふ様子だ。
 「何處へ連れて行くのです？」と私が一番端の兵
 に聞くと、その兵は愕然として私の面を見た。ギ
 ロリとした鋭い目色で視られた時には、正しく銃
 剣を突付けられて、その切先が胸へグサと刺さつ
 たやうな氣持がした。





「側へ寄つちや不好い！ 退け！ 退かん！」
 例の年配の男が此瞬間の隙に乗じて逃出した。
 チョコ／＼と小走りに走つて、路端の柵の根方へ、
 隠れる積なのか、蹲んだ。眞の動物でも此様な呆
 けた狂人染みた事はすまい。兵は大に怒つた。つ
 か／＼と側へ行つて屈むと、銃を左手に持易へる
 や、右手で何か柔かい平たい物を打つ音がビシャ
 リとした。又ビシャリといふ。人が環集つて来る。
 笑ふ聲や喚く聲がする……

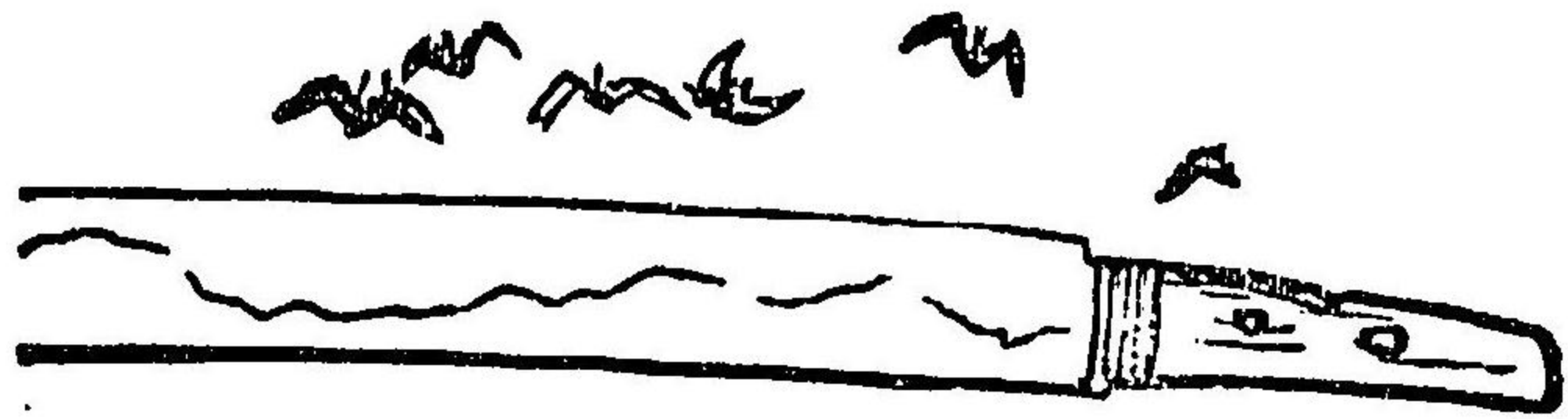
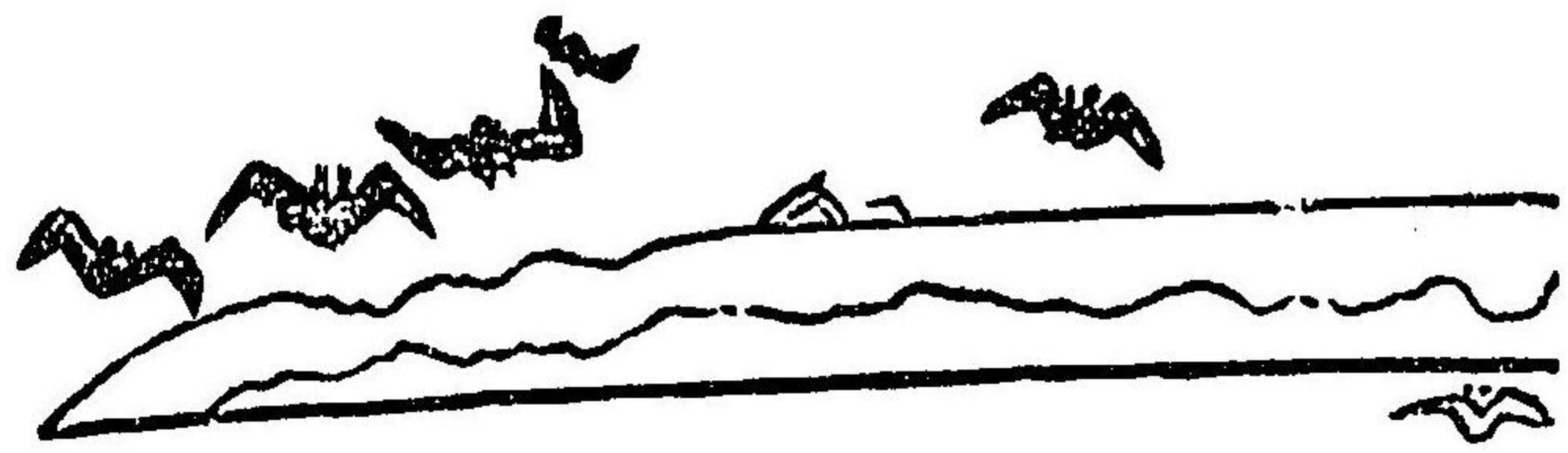
……土間の十一に居た。右左から誰の腕だかに直
 と身を挟まれながら、周囲を見廻はすと、ズツと
 向ふまで一面に凝と据ゑた人の首が薄暗い中に列
 んでゐるのが、舞臺の火影を受けて微と赤く見え
 る。かうした狭い處に此様に人が詰まつてゐるの
 を見てゐると、次第に怖ろしくなつて来る。皆黙
 つて舞臺の臺詞を聴いてゐる、——或は何か餘所
 事を考へてゐるのかも知れぬが、多人數なので、
 黙つてゐても、俳優の大きな聲よりも能く聞える。
 咳をする、涕を拭む、衣摺の音に足を踏易へる音
 がする。深い荒い息氣遣ひの音さへ判然聞えたが、



「側へ寄つちや不好い！ 退け！ 退かん！」
 例の年配の男が此瞬間の隙に乗じて逃出した。
 チョコ／＼と小走りに走つて、路端の柵の根方へ、
 隠れる積なのか、蹲んだ。眞の動物でも此様な呆
 けた狂人染みた事はすまい。兵は大に怒つた。つ
 か／＼と側へ行つて屈むと、銃を左手に持易へる
 や、右手で何か柔かい平たい物を打つ音がビシャ
 リとした。又ビシャリといふ。人が環集つて来る。
 笑ふ聲や喚く聲がする……

(斷篇第十四)





此息氣遣ひの爲に空氣は生温くなるのだ。かうしてゐる人が皆死人になる時にはなる、皆の頭も狂つてゐる、——と思ふと、身の毛が彌堅つ。丁寧に梳した頭を白い堅いカラーの上に確と据ゑて鳴を鎮りてゐる處に、狂氣の暴風雨が今にも吹起りさうな氣味がある。

随分の人数だつたが、これが皆怖ろしい人達で、加之も私の居る處から出口迄は餘程ある、——と思ふと、指の先まで冷たくなつた。皆落着いてゐるけれど、若し大聲に、「火事だ！」といつたら……と思ふと、慄然とする。薄氣味が悪いけれど、

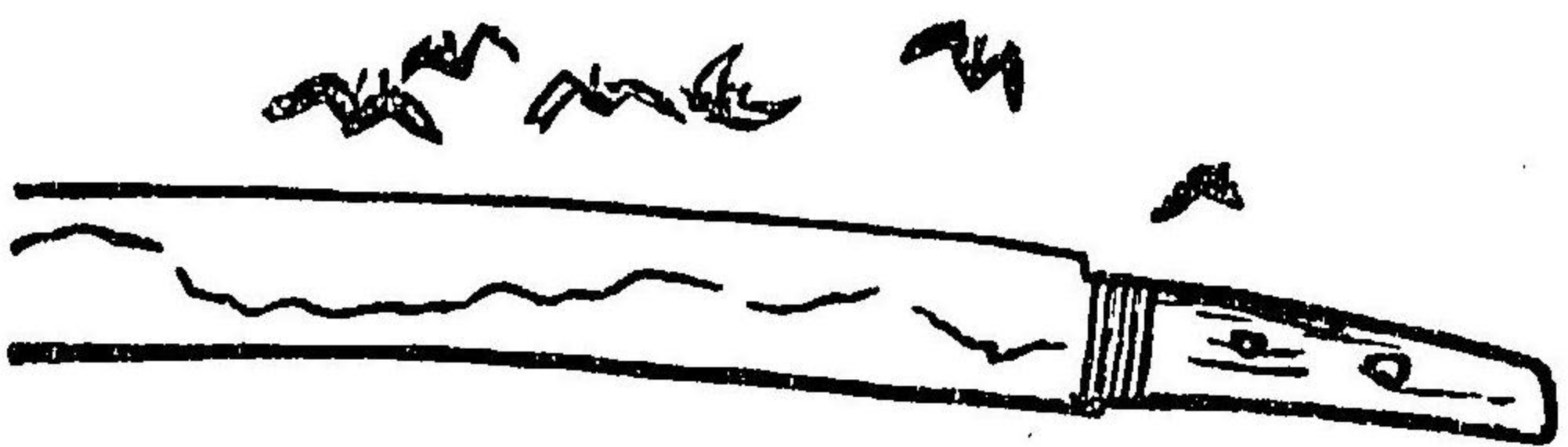


何だか切りに然う言つて見たくて耐らなくなる。今でも其時の事を憶出すと、指の先迄冷たくなつて冷汗が出る。言はうと思へば、言へん事はない。起上つて、背後を振向いて、大聲に斯ういふのだ、

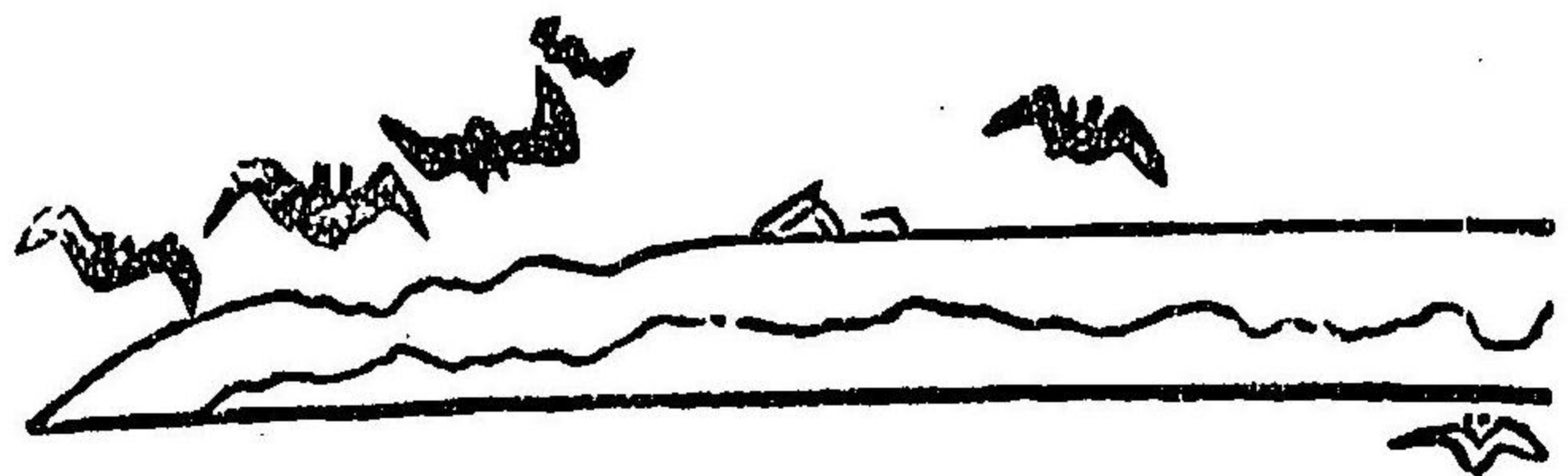
「火事だッ！ 逃げろく、火事だッ！」

さうしたら、今は那麽落着いてゐる手足に急に狂氣が取付いて慄ひ出す。皆躍り上り、叫び出し、畜生のやうに、哮り立つて、妻や姉妹や母親の居るのも忘れて、不意に盲目になつたやうに、彼方此方と彷徨し、氣も坐ろになり、果は香水の馨の



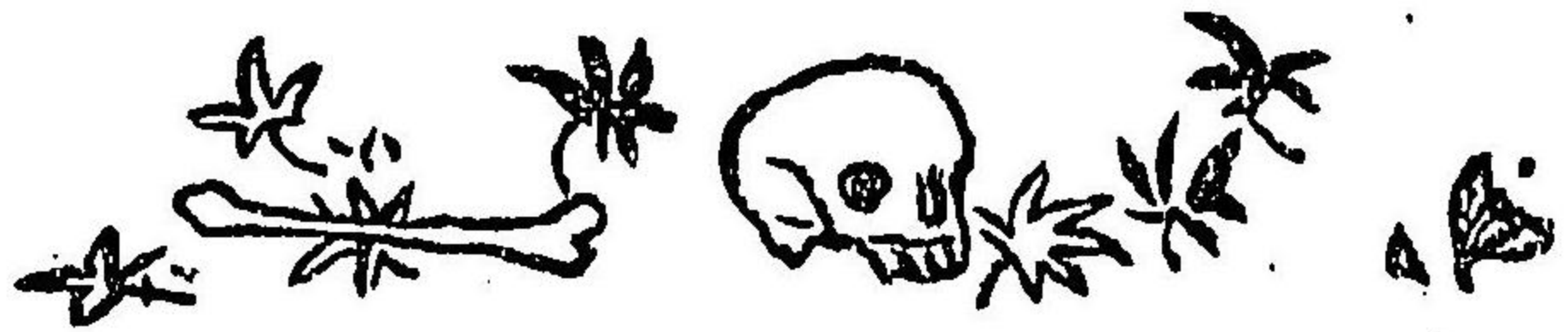


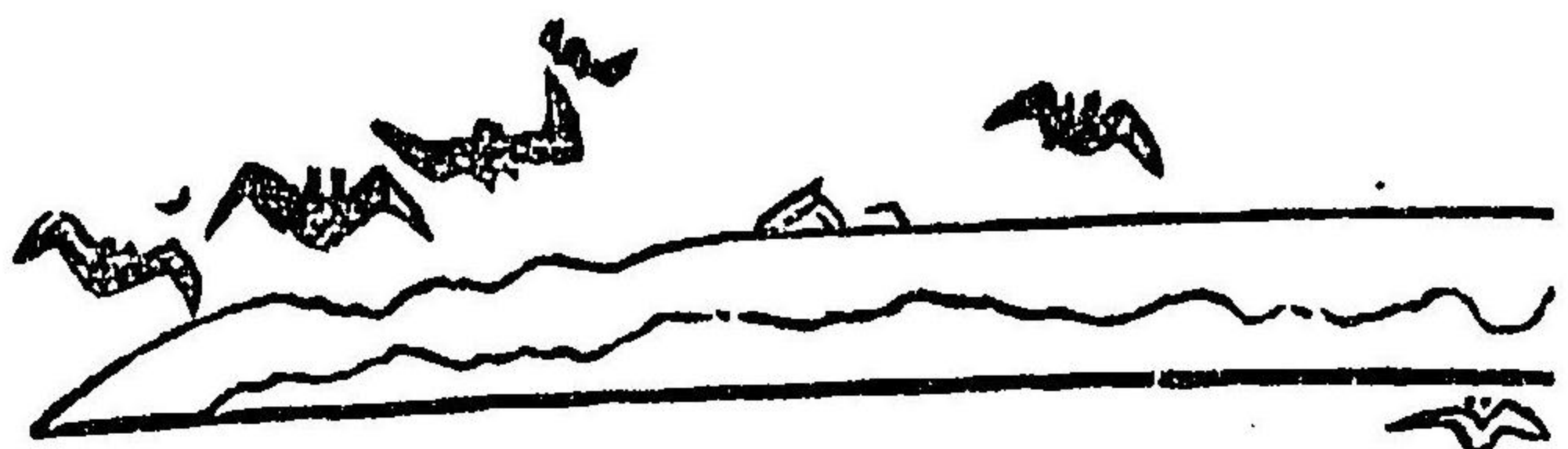
高いあの白い手で互の咽喉を締出す。燦と場内を
明るくして、誰だか眞蒼な面をした者が舞臺から
何でも有りません、火事でも何でも有りませんと
呼はると、戦くやうに断續した樂聲が思切つて花
やかに起るけれど、もう其様な物に耳を假す者は
ない。ドタバタと互の咽喉を締め合ひ、或は婦人
の頭を打つ、手数を掛けて巧みに結上げた髪をボ
カくと打つ。互に耳を引攬り、鼻を喰俵く。衣
服も何も引裂れて赤裸になるけれど、氣が狂つて
ゐるから、恥を恥とも思はない。平生は吾神と崇
める、泪脆い、優しい、美しい婦人達が泣聲立て



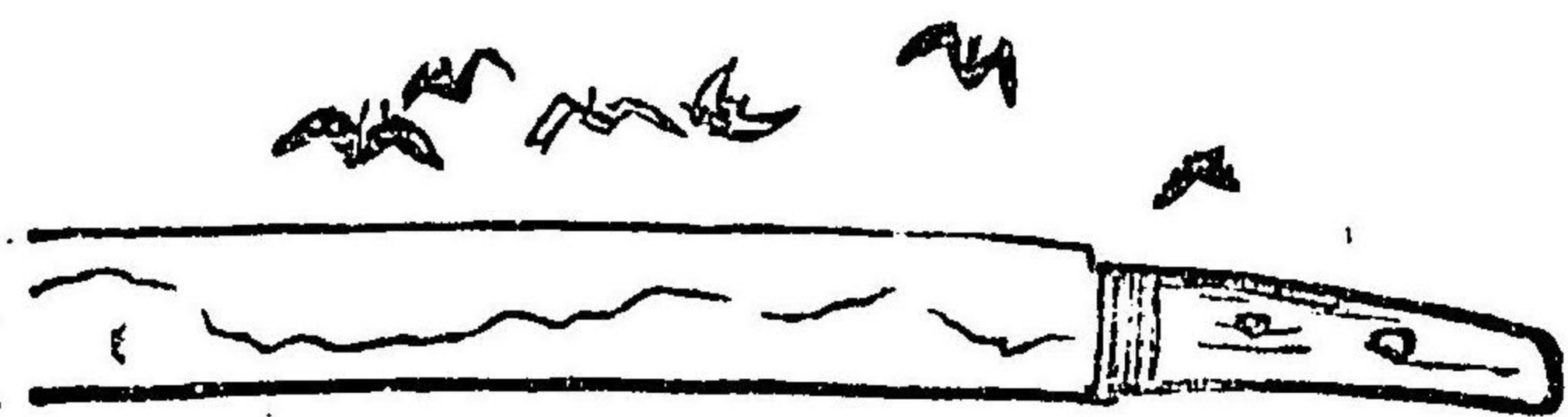
て、足元に便りない身を悶え、かねての男氣を頼
みにして膝に絶付くのに、その美しい面を舉げた
所を忌々しさうに撲曲げて、自分は出口へ出やう
と焦心る。男はいつでも人殺しを行ひかねぬ。そ
の長閑に上品めかしてゐるのは、食に飽いた動物
が命に懸る大事もないと安心して落着いてゐるの
に過ぎぬ。

で、見物の半分は死骸になつて、ぼろくした
服装の人達が一塊り、出口の處にわなくと、畜
生が恥を搔いたやうな面をして慄へながら、苦笑
をしてゐる時、私が舞臺へ出て、斯ういつて笑つ





と其人が胡亂さうに聞く。
 「静かに」と私は唇ばかりを動かして呶く。
 「甚くキナ臭いでせう？ 火事ですせ。」
 者奴中々の氣丈者で分別の有る奴と見えて、聲
 は立てなかつた。さつと顔色を變へると、牛の勝
 腕程な大きな眼球が飛出して頬へ振ら垂る程にな
 ったけれど、それでも聲は立てなかつた。そつと
 起上つて、私には禮も言はずに、わくくして踏
 跟けながら、それでも急かずに出口の方へ行く。
 此中で逃出して命を助かる價値の有るのは自分ば
 かりと已惚れて、他の者が火事に氣が附いてその



てやるのだ。
 「みんな私の兄を殺した報だと思ひなさい。」
 ね、かういつて笑つてやるのだ、
 「みんな私の兄を殺した報だと思ひなさい。」
 何か大聲で私が獨言を言つたと見えて、此時右
 隣りの人が忌々しさうに身動きをして、
 「シッ！ 邪魔になつて聞えやしない。」
 私は氣が浮々する。申戯けて見たくて堪らない。
 事有りげな、生真面目な面を作つて、其方へ持つ
 て行くと、
 「何です？ 何故其様に人の面を視るのです？」



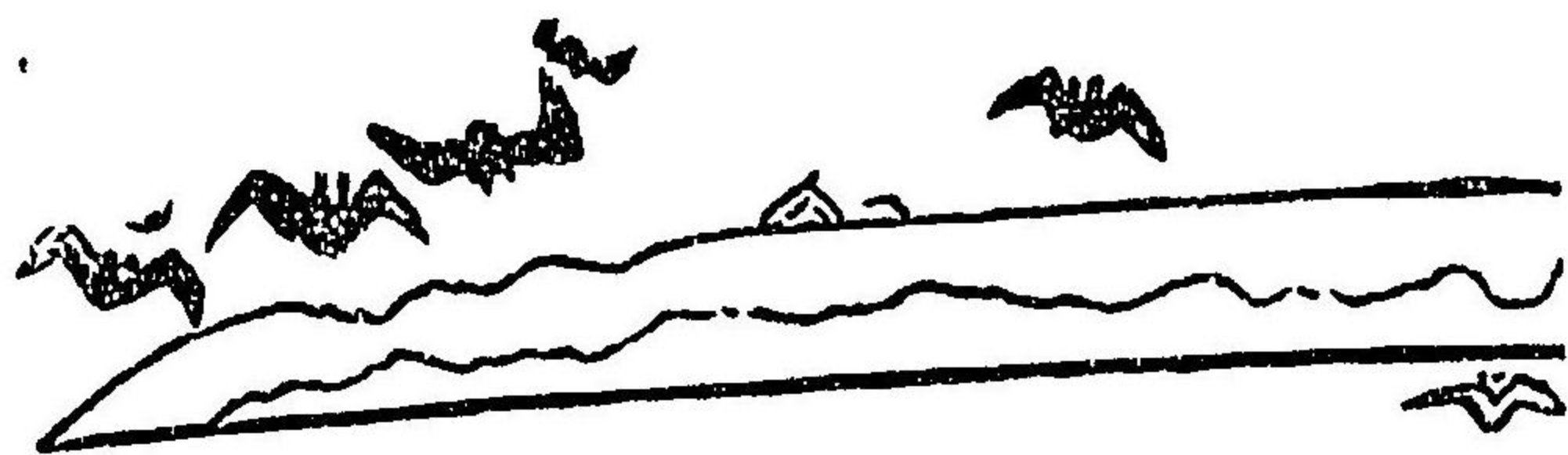
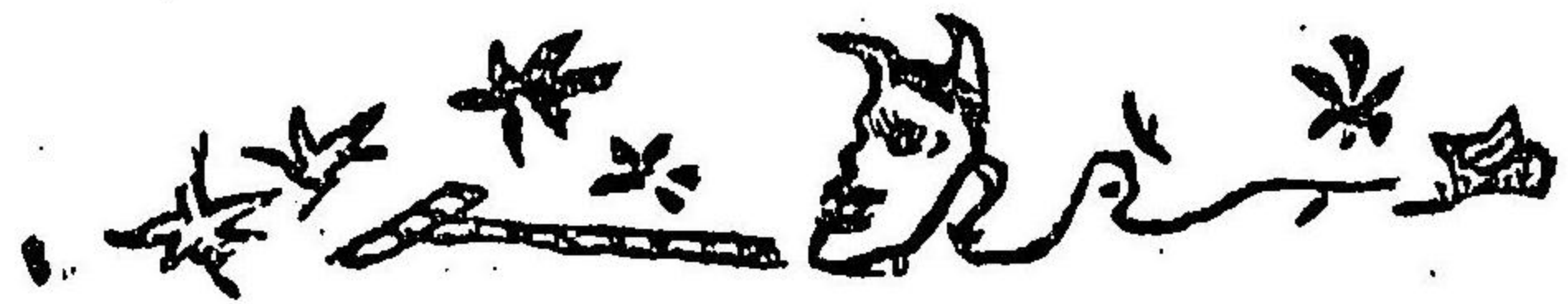


逃路を塞ぐを恐れてゐたらしい。

私は氣色が悪くなつて来たから、矢張芝居を出て了つた。此處で正體を顯はすのはまだ早いとも思つたので、外へ出て戦地の方角を眺めてみると、空は森として、火影の黄に映る夜の雲が長閑に徐かに濛つてゐる。空も町も餘り閑かなのに欺されて、「皆夢で、戦争も何も有るんぢやないのかも知れん」と私は思つた。

が、山角から子供が飛出して、何だか嬉しうに大聲で、

「そーら滅茶苦茶な大戦争！ 大變な討死だー！



電報買つてお呉んな。今夜の電報だせ。」

街燈の火影で讀むで見ると、戦死四千とある。芝居の見物だつて千以上は無かつたらう。家へ歸る途々も、四千の死骸くと、始終其事ばかりを思つてゐた。

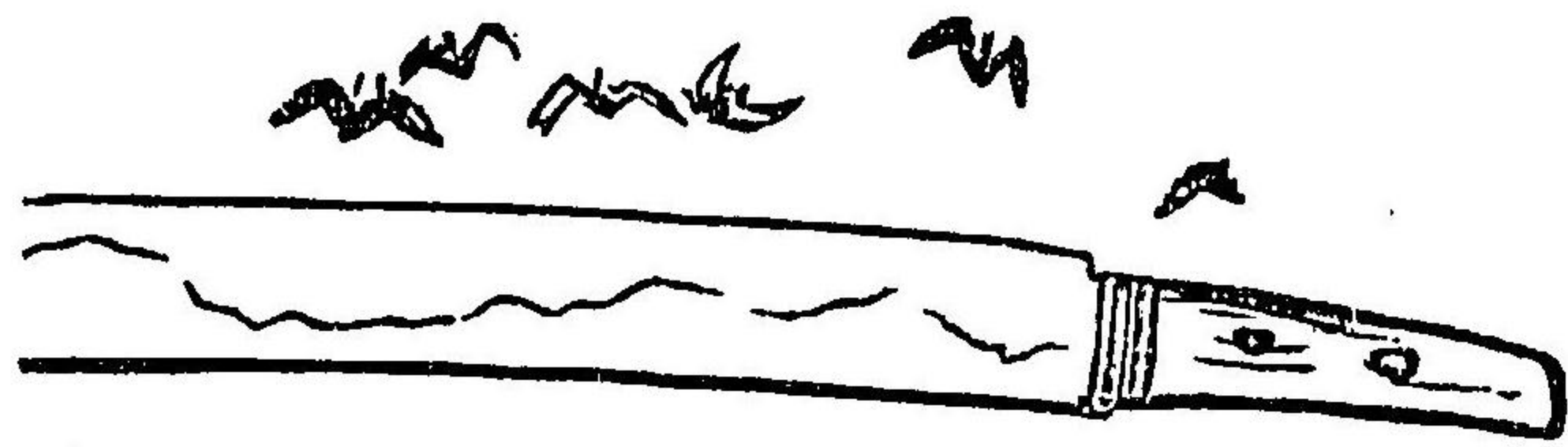
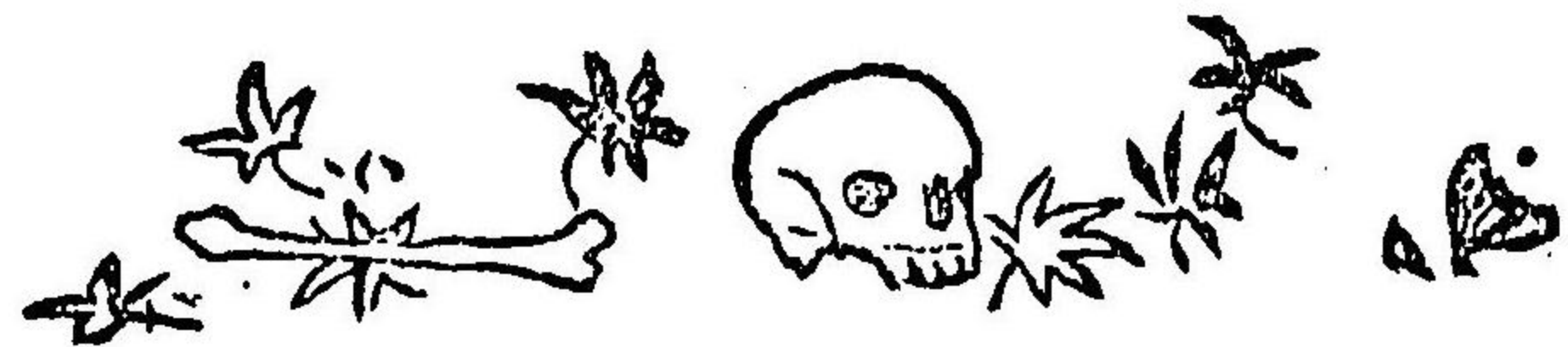
かうなると、ガランとした家へ入るのが氣味が悪い。鍵を孔に押入れて、何も言はぬ平らな戸を眺めたばかりで、もう人も住まぬ眞暗な部屋々々が残らず心に浮ぶ。今其中をキョロ／＼しながら帽子を冠つた者が一人通る所だ。不知案内の通路ではないけれど、まだ梯子段を登る時から、マッ





然蓋の骨を剥がれて、脳が覆ふ物もなく露出しになつたやうに、物狂ほしい血癩い今日此頃の惨たらしさを、吸はせられる儘に吸ひ込んで飽くことを知らぬ。縮んで寝れば、身はニアルシを塞ぐに過ぎぬけれど、心は世界をも包む。所有人の目で観、所有人の耳で聴き、戦死者と共に死に、負傷して置去りにされた者と共に泣き悲しみ、人の流す血に私も痛みを感じて慄む。無い物までも有るやうに、遠い物さへ近く顯然と見えて、曝した脳の苦痛に際限がない。

子供々々、小さな子供、まだ罪を知らぬ子供。

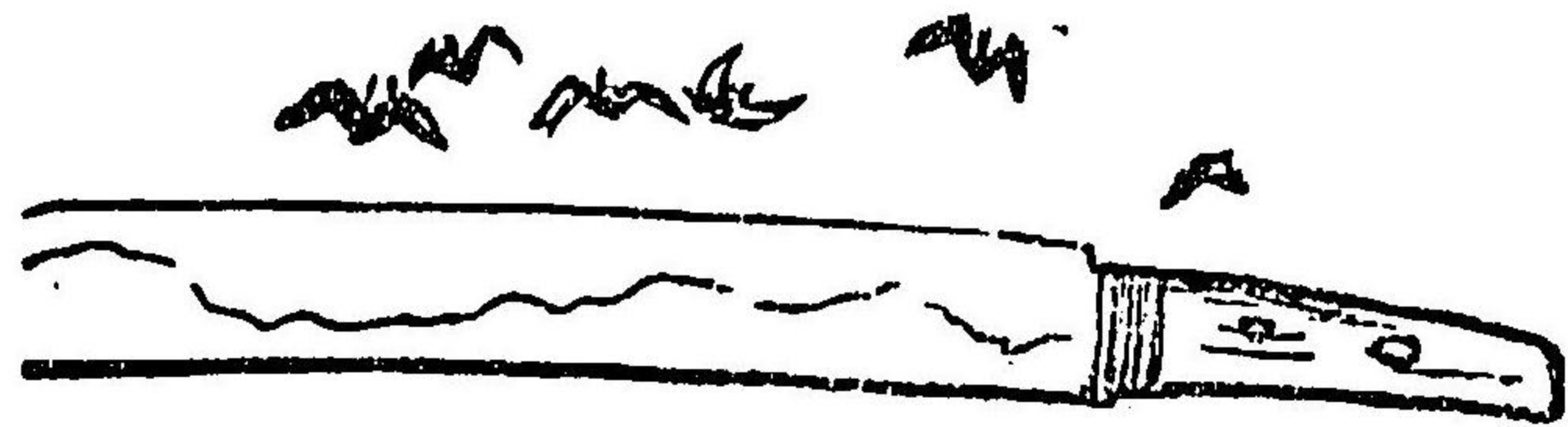
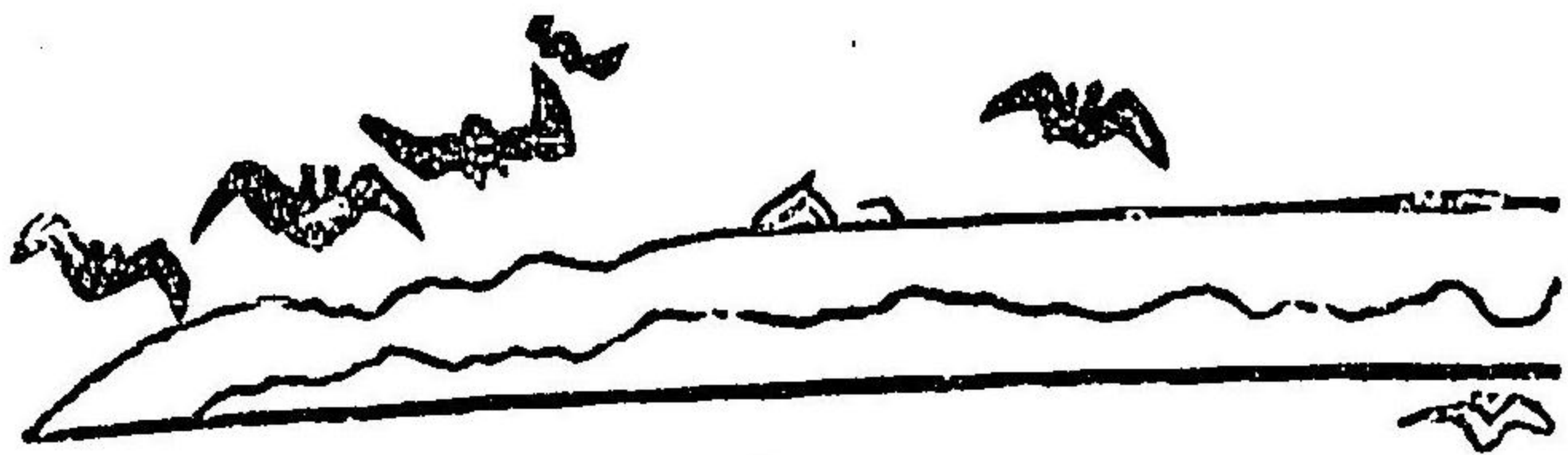


チを擦つて、手燭を見付ける迄、點し續けてゐた。兄の書齋へはもう行かぬ。書齋は在形の儘全然直と締切つて、錠が卸してある。私は食堂へ引越してゐたが、今夜も其食堂に寝るのだ。食堂の方が居心が好い。話聲や、笑聲や、食器の鳴る賑かな音がまだ太氣中に籠つて居さうに思はれる。時々乾いたペン先のさらさらくと紙上を走る音が判然聞える事もある。寢臺へ横になると：

(斷篇第十五)

：恐にも附かぬ夢だけれど、怖ろしい夢だ。宛





その子供等が町中で戦争ごっこをして、逐ひつ
逐はれつしてゐる中に、誰だか細い稚ない聲でも
う泣く者がある。私は怖ろしさも怖ろしく、厭な
厭な氣持になつて、何か胸が躍るやうに覺えた。
家へ歸れば、夜になつて、夜火事のやうに炎える
夢に、このいたいげな罪の無い子供等が、小さな
人殺ろしの悪黨の群になつたと見た。

何だか眞赤な太い火焰を擧げて物凄く燃える烟
の中に、首は大人の、加之も悪黨らしく、胴は不
具の子供の變化らしい物が蠢めく。山羊の子が戯
れるやうに、身軽くピロン／＼跳廻つてゐる癖に、



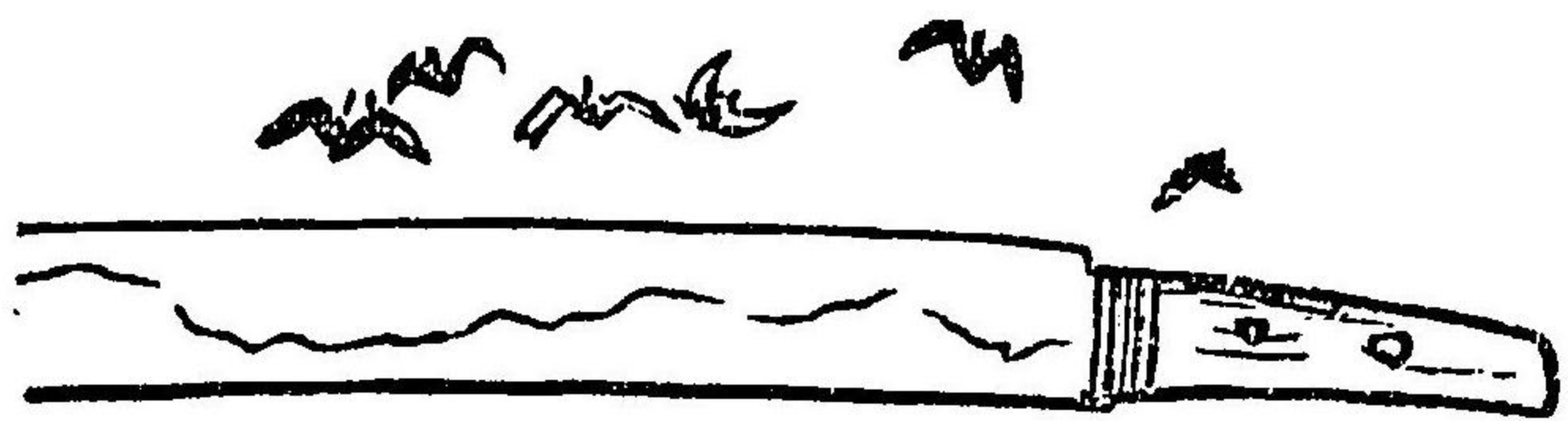
病人のやうな苦しさうな息氣遣ひをする。墓か蛙

のそれに似た口を、バクリと開いては顔かせ、裸
身の透徹るやうな皮越しに赤い血の流れるのが見
えて、その子供等は遊び戯れながら、討ちつ討た
れつする。小さくて何處へでも潜り込むから、此
程無氣味な物を私は會て見た事がない。

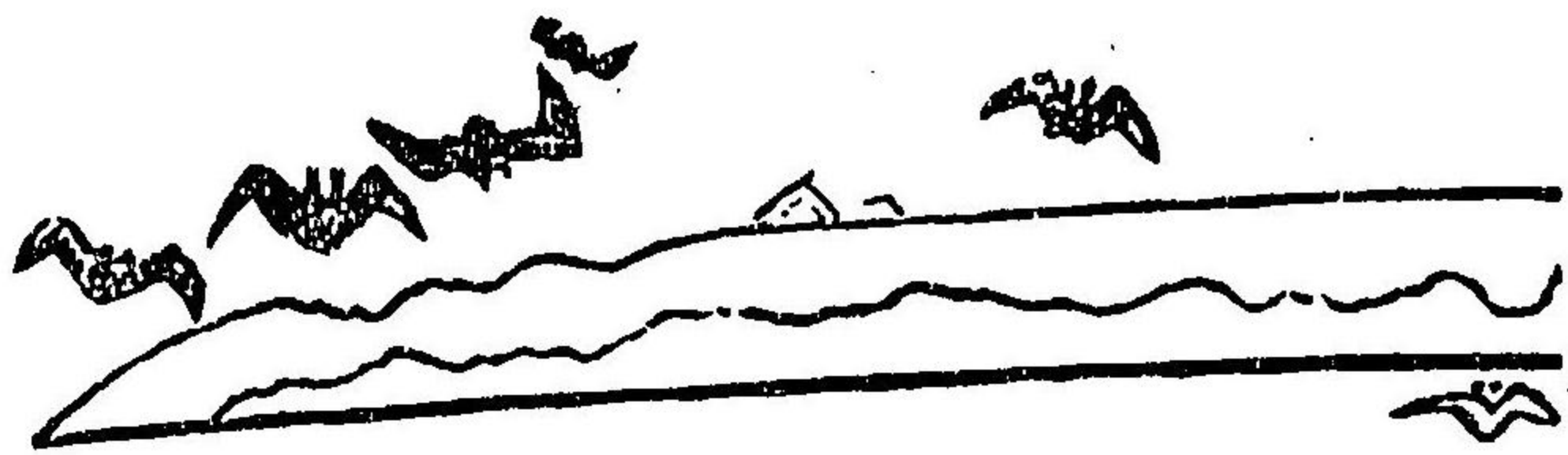
私が窓から覗いてゐるのを、小さい一人が認め
るや、莞爾して、内へ入りたさうな目色をしたが
ら、

「其處へ行くよ。」
「來たら取殺すだらう？」



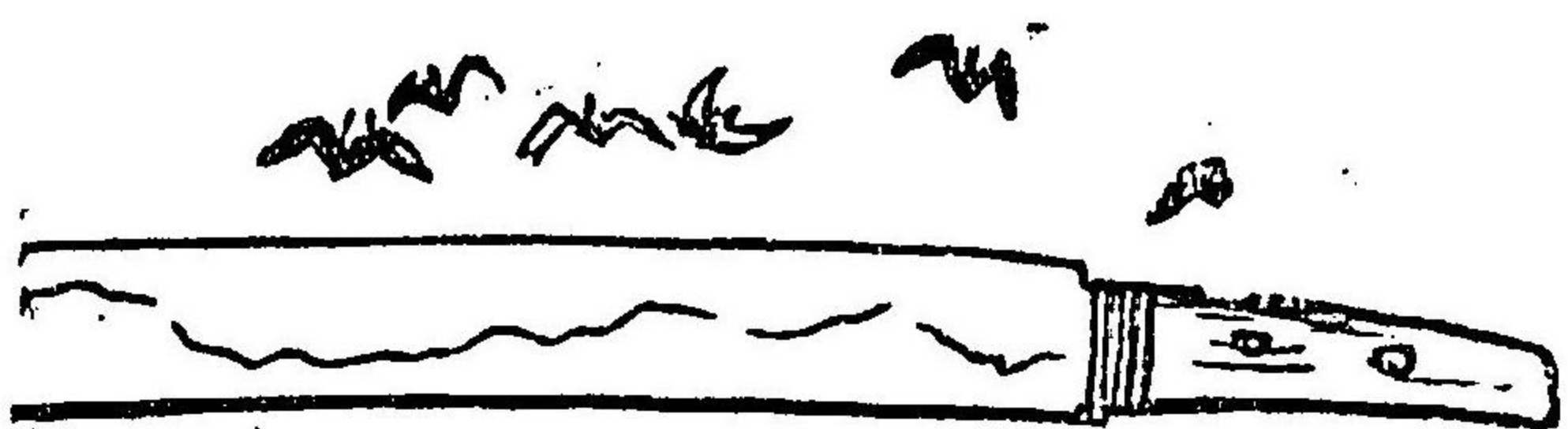


「其處へ行くよ。」
忽ち諷と顔色を變へて、白壁を攀登る所は宛然
鼠だ、餓えた鼠だ。落ちてサ、と鳴く、又ちよこ
ちよこと壁を走る。その變化の烈しいこと、遊だ
しいこと、見る眼も迷ふばかりだ。
戸の下からなら、潜り込める、——と思つて私
が慄然とすると、さう思ふ人の心を読むやうに、
鼠は身を細長くして、尻尾の先をひらめかしなが
ら、表口の戸の下の暗い隙間へ潜り込む。私が夜
着を被つて隠れてゐると、小さな奴が小さな素足
の音を偷みく、暗い部屋々々を尋ね廻る音がす

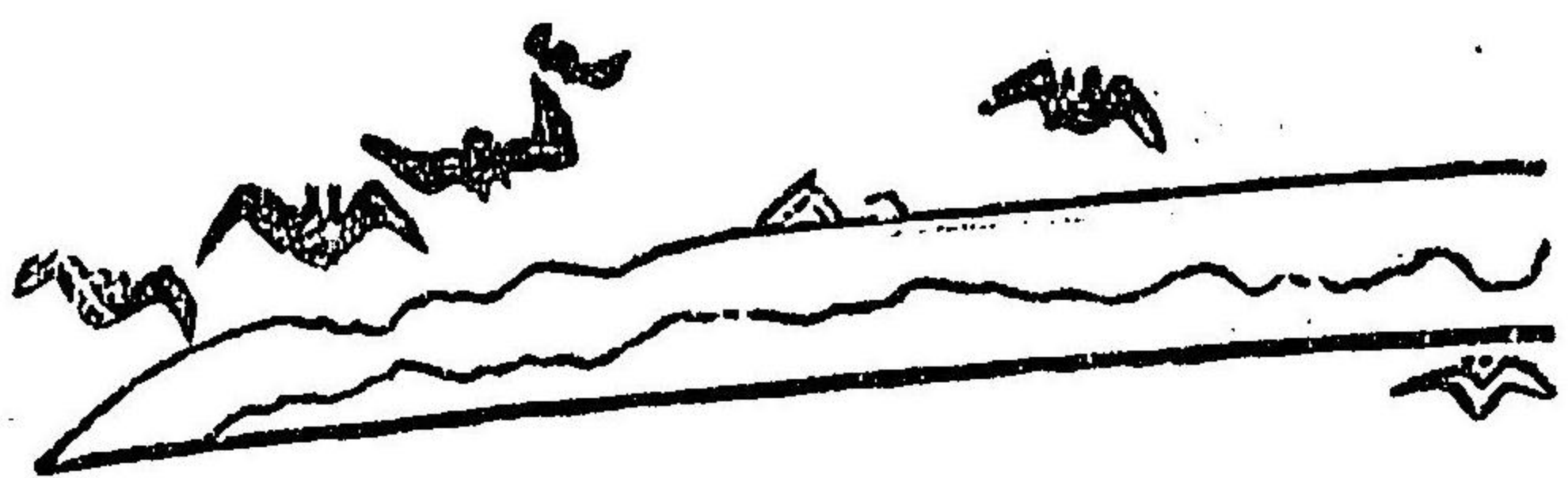


る。そろりくと、踏躑ひがちに、私の部屋へ忍
び寄つて、遂に中へ這入つて来たが、それぎり久
らくはガサともゴソとも言はないから、寢臺の側
に何が居やうとも思へぬ。忽ち誰だか小さな手で
夜着の端を捲くる者がある。室内の冷たい氣がヒ
ヤリと面に觸れ、胸に觸れる。私はしかと夜着を
抑へてゐたが、夜着は止度なく其處ら中から剝れ
て、足が水へでも涵つたやうに、急に冷たくなる。
頓て兩足とも冷たい暗い部屋の中に便りなく横は
れば、鼠はそれを眺めてゐる。
壁一重隔て、庭で犬の啼聲がして、ト罷むと、

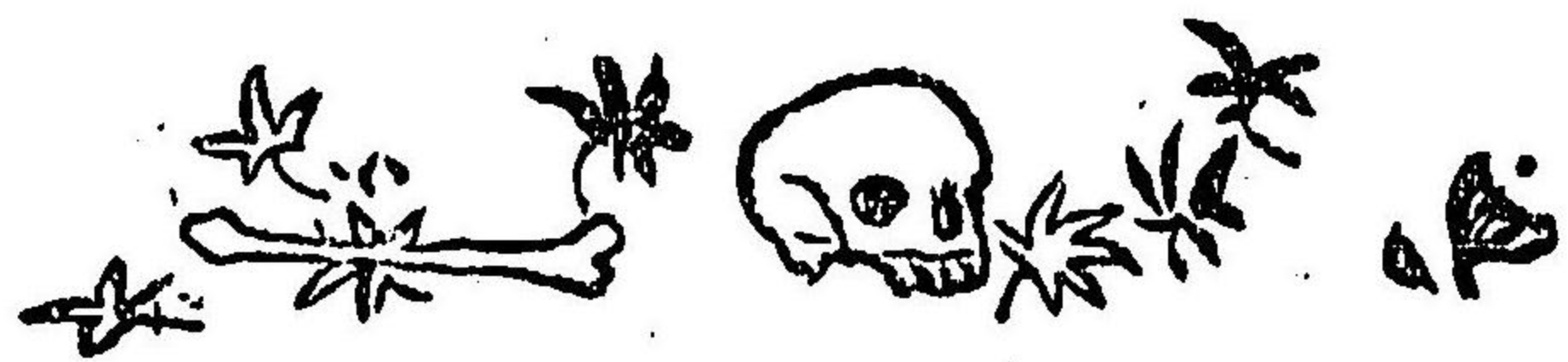


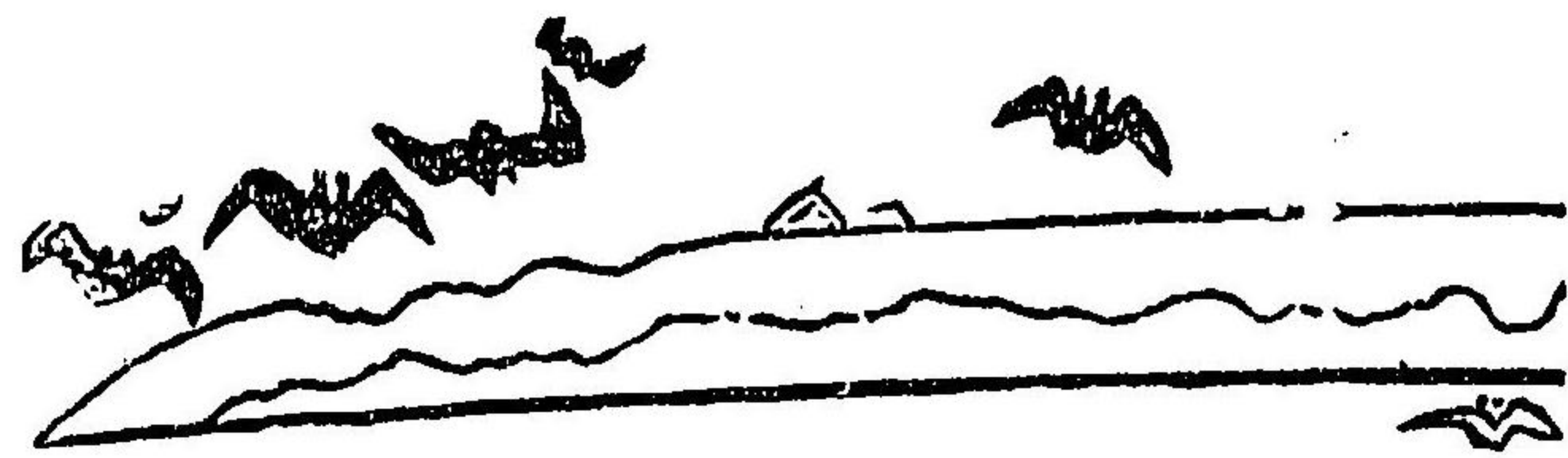


鎖のちやら〜といふ音がして、犬は小舎へ潜り込むだやうだ。鼠は黙つて私の素足を眺めてゐる。それが側に居るのは自ら知れる。堪らなく怖ろしくて、死神に抱寄せられたやうに、身體が凍み、石の墓か何ぞのやうに、寂と動かなくなるにつけても、それは知れるが、若し大聲を立てる事が出来たら、私は此市どころか、世界中を呼ぶしたかも知れん。只聲が途中で立消えをして出て來ぬので、大人しく凝然としてゐたが、小さい冷たい手先がむづくと身體中を這廻つて、咽喉元へ廻る。

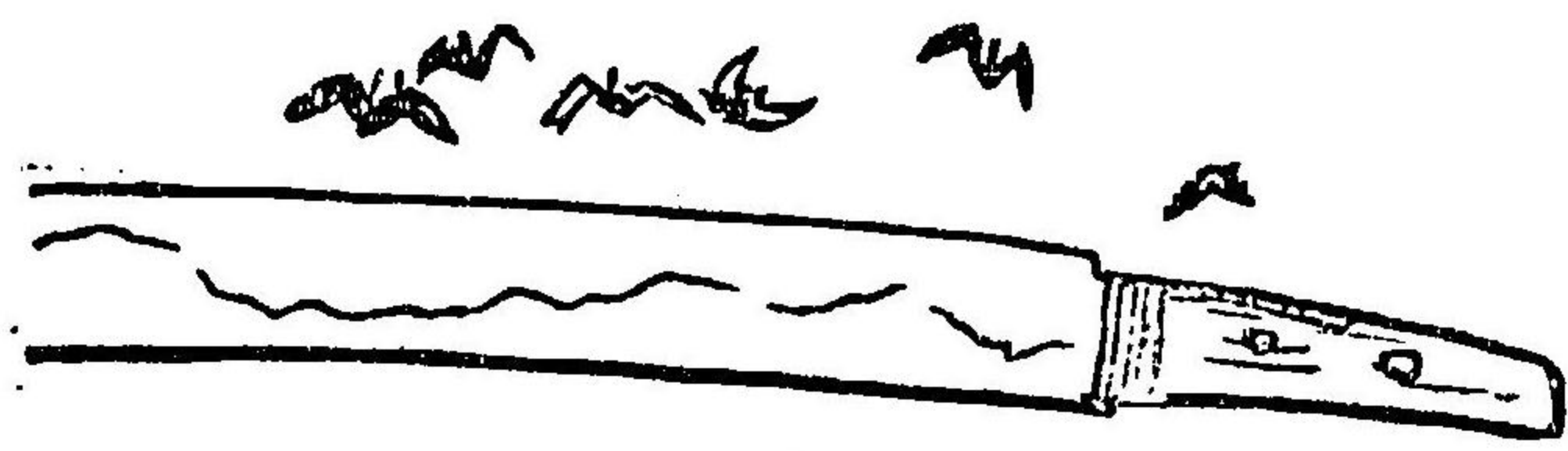
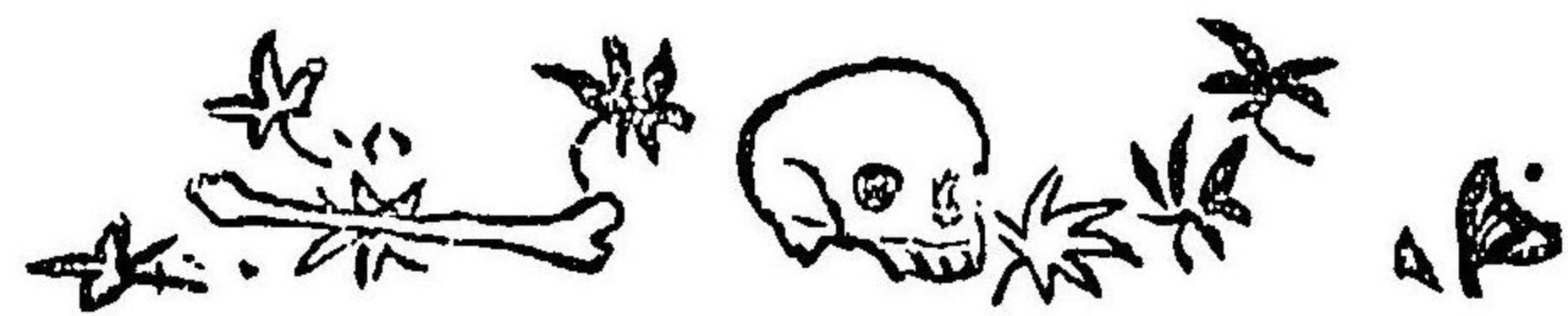


「堪らん！」と片息になつて、喚いて瞬く間に目を覺す。夜は深々として靈あるが如く、暗くても能く見えたが、私は又眠入つたらしかつた。「何も心配する事はないよ」と兄が寢臺の端に腰を卸した。亡者でも重たくて、寢臺がギシ〜といふ。「何も心配する事はない。皆夢だ。咽喉を締められるやうな氣がするので、お前は實は誰も居ない眞暗な部屋でグッスリ寝込んでゐるのだ。ね、私は書齋で書いてゐるのだ。何を書いてゐるのか一向知らんもんだから、お前方は私を狂人扱ひにして失禮な眞似をしてゐるけれど、もう斯うなりや打明



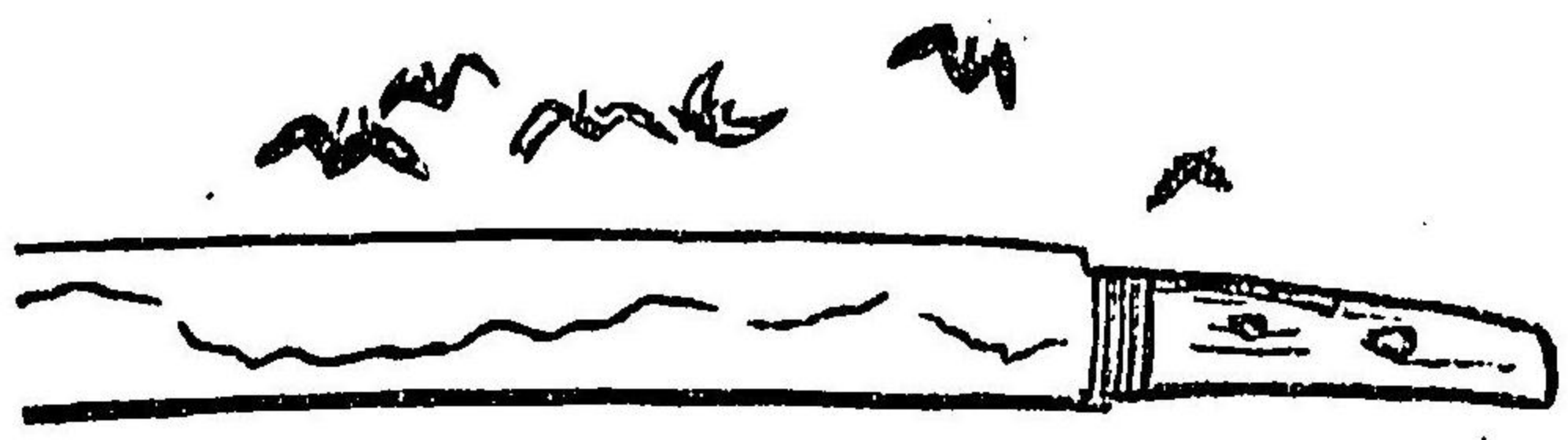


「見えます。今笑つてます。」
 「地球の脳髓がえらい事になつて了つたから、御
 覧。真紅なところは血の粥とでも謂ひさうだ。滅
 茶々々になつて了つた。」
 「何か喚いてる。」
 「痛いのだ。もう花も歌もないからな。さあ、己
 がお前の上へ乗つかるぞ！」
 「乗つかつちや、重たい、氣味も悪い。」
 「死んだ者なら、生きてる者の上に乗かるべき筈
 だ。温かいだらう？」
 「温かです。」
 「好い心持か？」
 「死にさうだ。」



「お前に見えるか？」
 「何やら大きな真紅な血だらけの物が私の上に覆
 さつて、齒のない口元でゲタリと笑つてゐる。」
 「これが赤い笑だ。地球が狂氣になると、かうい
 ふ笑方をするものだ。お前知つてるだらう、地球
 の氣の違つた事は？　もう花も歌もなくなつて、
 地球は圓い、滑こい、真紅な、皮を剥いた頭のや
 うな物になつて了つた。見えるか？」
 「見えます。今笑つてます。」
 「地球の脳髓がえらい事になつて了つたから、御
 覧。真紅なところは血の粥とでも謂ひさうだ。滅
 茶々々になつて了つた。」
 「何か喚いてる。」
 「痛いのだ。もう花も歌もないからな。さあ、己
 がお前の上へ乗つかるぞ！」
 「乗つかつちや、重たい、氣味も悪い。」
 「死んだ者なら、生きてる者の上に乗かるべき筈
 だ。温かいだらう？」
 「温かです。」
 「好い心持か？」
 「死にさうだ。」

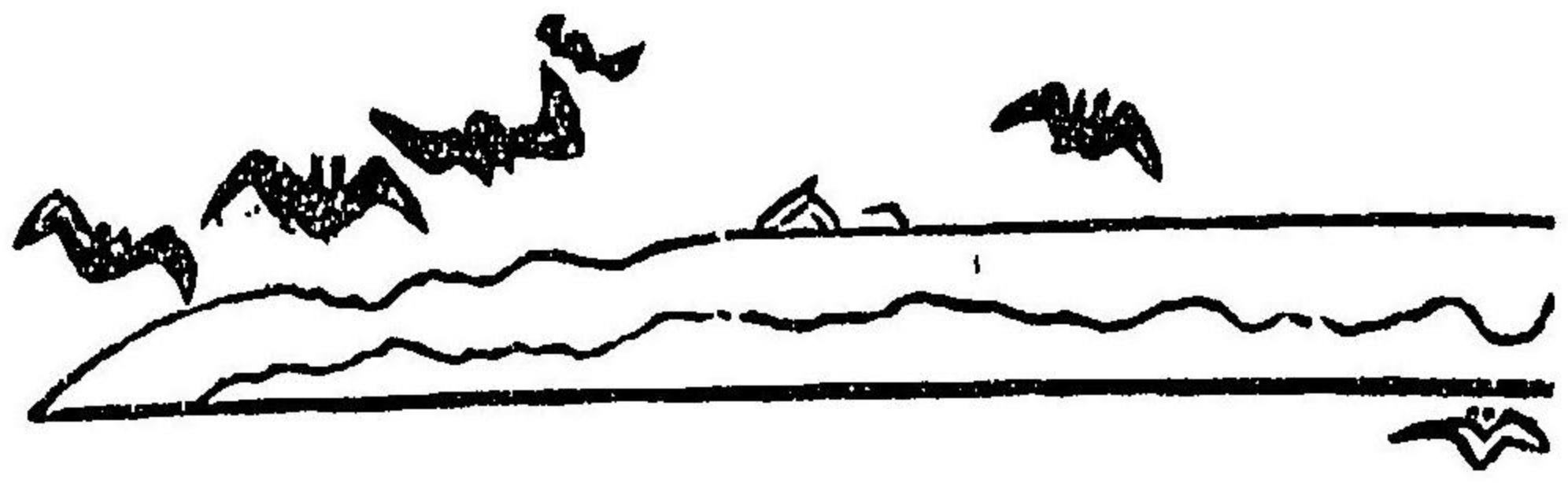




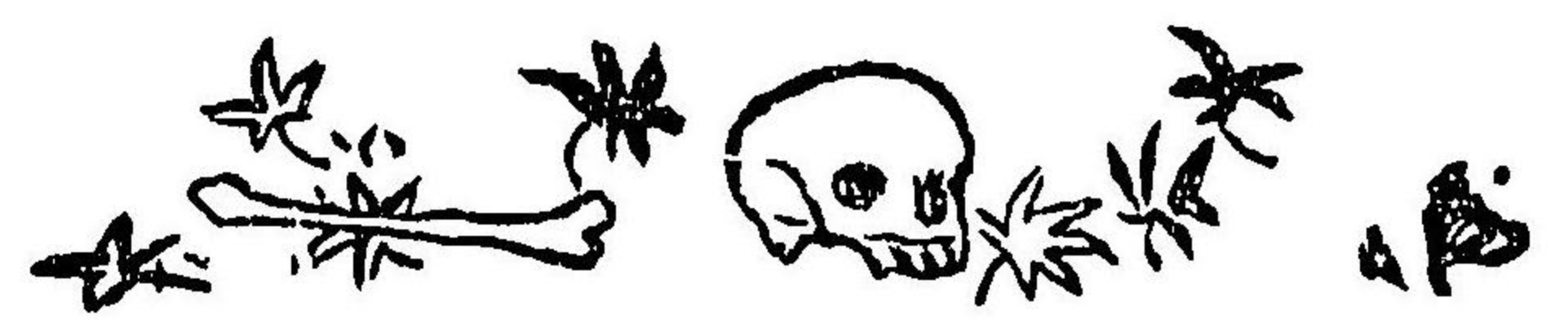
「目を覺してワッといへ。目を覺してワッと。己はもう行く……」

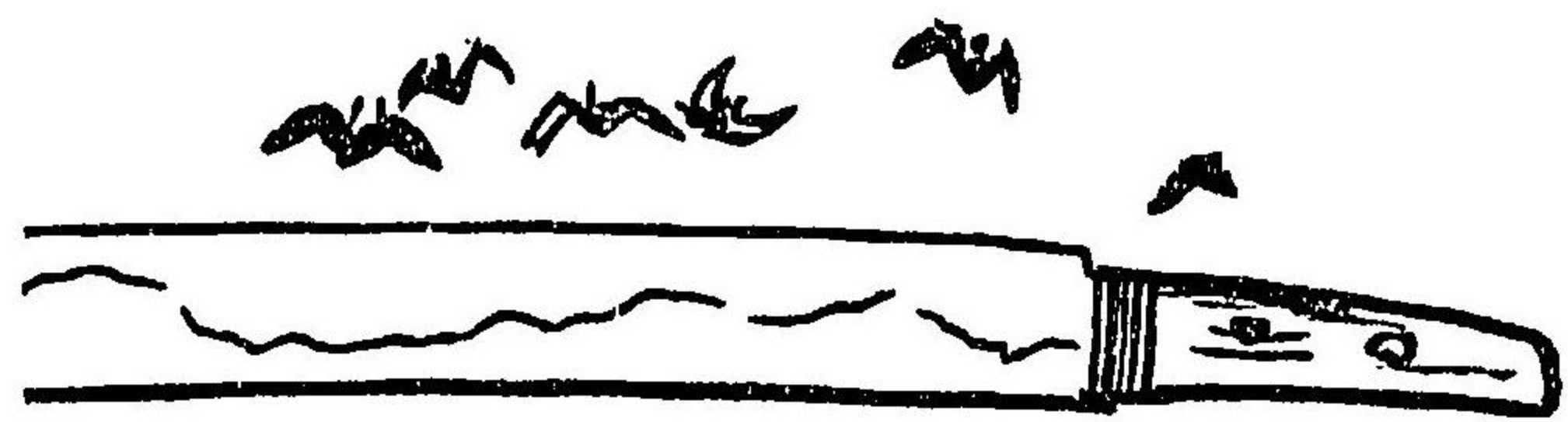
(断篇第十六)

戦闘が始まつてから、もう八日目になる。過去の金曜に始まつて、土曜、日曜、月曜、火曜、水曜、木曜と過ぎて、又金曜が来て其も過ぎたが、まだ戦闘は止まぬ。兩軍の兵數十萬、それが相對して一步も退かずに、凄まじい音を立て、息氣をも續がず破裂弾を打ち合ふので、刻々に生人が死人になつて行く。段々漸々と絶えず空氣を撼る



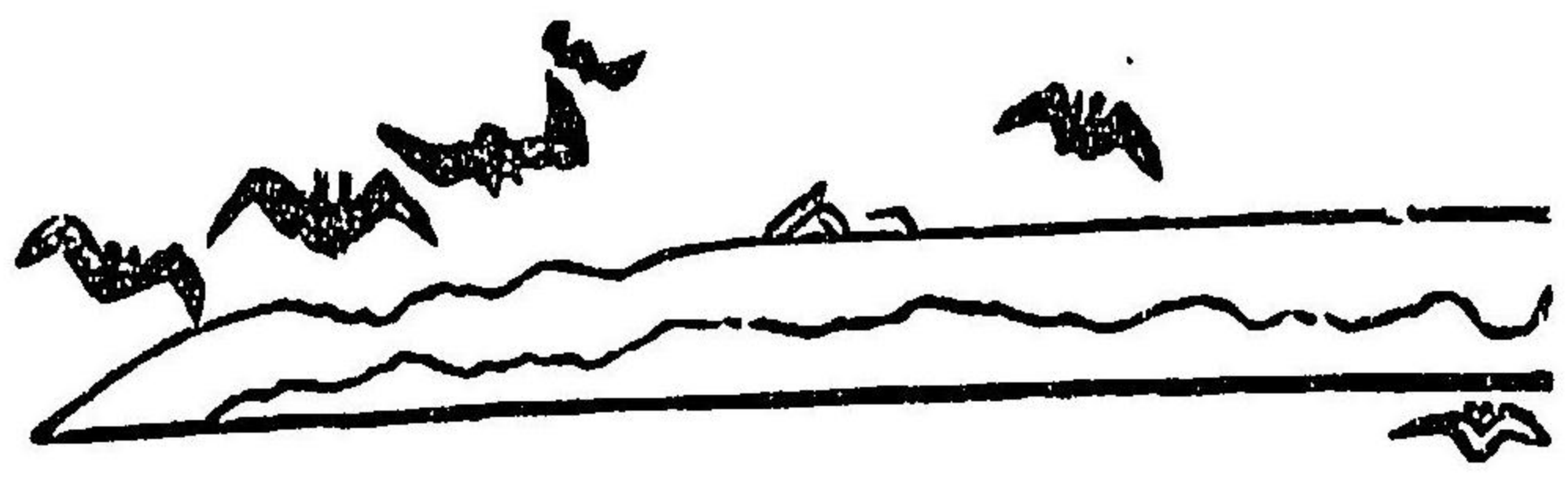
其砲聲に、空も動搖んで眞黒な夕立雲を呼び、雷轟は頭の上で嘖めくけれど、敵も味方も此處を先途と討ちつ討たれつしてゐる。人は三晝夜眠らんと、病を得て物も覚えぬやうになるといふのに、況して是はもう一週間も眠らずに居るのだから、皆狂氣になつてゐる。であるから、苦しいとも思はない、退かうともしない、一人残らず討死して了ふ迄は、奮闘せんとするのだ。風聞に據ると、某隊では彈藥が盡きて、石を投げ合ひ、拳で殴ち合ひ、犬のやうに咬み合つたと云ふ。若し此戦闘の参加者で生還する者があつたら、狼のやうに牙





が生えてゐやうも知れぬが、恐らく生還者は有るまい、皆狂つてゐるから、一人残らず討死して了はう。皆狂つてゐる。頭の中が顛倒して何も分らなくなつて居るから、若し急にグルッと方向を變へさせられたら、敵と思つて味方に發砲しかねまいと思はれる。

奇怪な噂がある：奇怪な噂で、怖ろしくもあるし、只だ事でないと思はれたから、皆蒼くなつて、ひそくと叫ぶ。あゝ、兄に聞かせたい、皆赤い笑の噂だ。聞けば、幻しの部隊が現はれたと云ふ。いづれも何から何迄生人と些とも違はぬ



亡者の集團だ。夜は狂つた人達が震時の夢を結ぶ時、晝は晴れた日も黄泉と曇る戦の真最中に、忽然と現はれて、幻しの砲で發砲して、怪しの砲聲に空を撼ると、生きてはゐるが、氣の狂つた人達が、事の不意なのに度を失つて、死物狂ひに其幻しの敵と戦ひ、怖れて取逆上せて、一瞬の間に白髪になり、紛々と死んで行く。幻しの敵は忽然として現はれて、又忽然として消え失せる。と、寂然となつた跡を見れば、散々に形の害はれたまだ生々しい死骸が、狼藉と地上に横つてゐる。敵は果して何者だつたらう？ 敵の果して何者だつた

